

森蘊研究成果報告書

昭和の作庭記

—— 森蘊の業績と日本庭園史の作成

本研究報告は日本学術振興会の科学研究助成事業の
助成を受けたものです。

〔若手研究（B） 課題番号17K18447〕

森 蘊

Osamu MORI

昭和の作庭記——森蘊の業績と日本庭園史の作成

「森蘊先生の業績」 村岡 正 iv

30年後に「森蘊先生の業績」を読む——まえがきにかえて マレス・エマニュエル ix

〔第1部〕 森蘊の業績を分析する——研究会 1

開会挨拶——祖父森蘊と私 森 有史 2

日本近現代の歴史的庭園の調査・保存・修理を巡る状況から森蘊の業績を考える

栗野 隆 4

森蘊の庭園測量図 飛田範夫 26

森蘊の奈文研時代 高橋知奈津 47

森蘊における建築と庭園の結びつきの視点 田中栄治 75

森蘊の庭——復元整備と作庭の間 マレス・エマニュエル 93

〔第2部〕 森蘊の業績を振り返る——総合討議 119

飛田範夫／牧岡一生／仲 隆裕／田中栄治／栗野 隆／高橋知奈津／マレス・エマニュエル

〔第3部〕 森蘊の足跡を辿る——インタビュー 141

聞き手：マレス・エマニュエル

研究者・作庭家：龍居竹之助 142／中村 一 146／作庭家：徳村盛市〔円成寺〕
154／山中 功〔1〕〔旧柳生陣屋跡〕 160,〔2〕〔松尾寺本坊〕 167／古川三盛〔1〕〔矢田
寺大門坊露地〕 172,〔2〕〔延命寺〕 177／牧岡一生〔1〕〔榎原神宮文華殿〕 184,〔2〕
〔森蘊庭園研究室（旧宅）〕 189／庭の持ち主：橋本聖圓〔東大寺龍藏院〕 194／上
田霊城〔延命寺〕 204／岩井浅二〔岩井邸〕 210／若原昌子・邦弘〔若原邸〕 216

〔第4部〕 森蘊の生涯——年表 219

あとがき マレス・エマニュエル 235

「森蘊先生の業績」

庭園文化研究所長 村岡正

*村岡正（1989）「森蘊先生の業績」『古代文化 第41巻第10号』
財団法人古代学協会 58-60頁より抜粋

昭和63年12月14日の夜おそく、森蘊先生が天理市の天理よろづ相談所病院で急逝された。前年の11月20日、平泉への出張から帰られた日に、突然の脳梗塞で倒れ20日間入院されたが、その後は自宅での療養に務められていた。昨年8月には83歳の誕生日を元気に迎えられ、あとの様子もよく、一安心していただけに、12月の急変は全く思いがけないことであつた。急性腎不全ということで集中治療室に入られたが遂に意識は戻らず痛恨の極みであつた。

先生は、明治38年8月8日、当時の東京府立川村にて誕生された。郷里は千葉県君津郡の元袖ヶ浦町坂戸市場で、坂戸神社の世家である。神官の祖父長守氏は、儒学者で郷土の人望を集め、父慎一郎氏（長守の次男）は、東京高等師範学校長になられた教育者であつた。先生は、その六男（末子）である。

簡単に履歴を述べると、昭和7年東大農学部卒業、9年まで大学院で造園学専攻を続け乍ら8年内務省嘱託、13年厚生技手、16年東京市技手、18年東京都技師となり、19年に井之頭自然文化園の初代園長に就任、20年3月には海軍

技師として南ボルネオへ派遣された。復員後22年に東京国立博物館に勤務（文部技官）、27年に奈良国立文化財研究所が設立され初代建造物研究室長として着任、奈良へ来られてからは、それまでの研究の蓄積をさらに発展させ、かつ新たな研究に次々と取り組まれて、後述のように多彩な成果を上げられた。42年に奈文研を定年退官、翌年京都に庭園文化研究所を設立し、所長として20年間、多方面での活動を続けられた。退官されてからの著書も多い。

先生は大学卒業後、当時少壮気鋭の建築史家の集まりであつた建築史研究会の一員となり、建築との関連をふまえた庭園史研究に没頭して、斬新な考察での多くの論文を発表された。発表誌は戦前では『建築史』『建築学会論文集』『造園研究』『造園雑誌』『庭園』『庭園と風光』の専門誌をはじめ、『画説』『宝雲』『国宝』『造形芸術』があり、戦後は『建築史研究』『大和文華』などがある。昭和30年までの論文目録によると、8年から19年までの42編、23年から30年までが18編、計60編を数える。

残念乍らその後のリストがないので全体の数はわからないが、報告書などを加えると優に100編を超えるであろう。一方、単行本は、増補新版や改訂版を含めて32冊ある。これらを編年的に見てゆくと、森庭園史の体系をうかがうことができる。そのいくつかを紹介したい。

先ず『日本庭園の伝統』は、日本庭園の発達、形態、意匠、造園技術、造庭法秘伝書、造庭技術家、名園遺構の解説よりなり、最初の単行本としてまとめられた意義は大きい。しかも戦時中の19年3月の刊行である（京都、一条書房）。25年にはこれを改定した『日本の庭園』が出版されている（京都、河原書房）。一般向けの教養の書ではあるが専門的にも高く評価され、森庭園史の基となった。

学術書としては、終戦直前の20年7月に『平安時代庭園の研究』が出ている（京都、桑名文星堂）。口絵に神護寺の山水屏風の絵がカラー図版で貼り付けてあり、当時としては出色の大冊であつた。序文の日付が19年10月15日とあり、20年に戦地に赴かれてからの出版である。本書は卒業論文とされた『平安鎌倉時代庭園遺構の研究』に、その後の調

査の史資料を加えた論考で、平安時代までの庭園に関する文献資料がふんだんに盛り込まれている。外山英策氏の『室町時代庭園史』（昭和9年、東京、岩波書店）と並んで、庭園史研究の基本的図書といえるものである。

先生は、昭和16年に建築学会の推薦で『江戸時代初期建築と庭園の研究、殊に桂離宮について』のテーマで文部省の研究助成を受け、戦後の東博時代には宮内庁書陵部所蔵の関係文書の閲読につとめ、奈文研に移られてからは地の利を得て桂離宮の詳細な現地調査を続けられた。この論文は同年、東都文化出版から刊行され、その後の各方面からの桂離宮研究、並びに論争の出発点となった。

奈文研での発表第1号は、29年に学報第2冊となった『修学院離宮の復元的研究』である。これは桂離宮研究の過程で得られた修学院関係の文献・古図・指図などの史料と、地形地物の詳細な現地測量調査との照合によって、その歴史の変遷と、かつての姿を明らかにしたもので、続く学報第3冊（文化史論叢）に追録の『修学院離宮造営に利用された建物と地形について』と併せて、同離宮に関する資料を殆ど集められたとみてよい。桂離宮論が史料の解釈や書院群その他の解体修理の所見によって新説が出されたのに対し、修学院離宮については本論文がほぼ定説になったといえる。ちなみに両離宮の一般書としては30年に『修学院離宮』、31年に『新版桂離宮』（いずれも東京創元社）の刊行がある。

次いで34年出版の学報第6冊『中世庭園文化史』は奈良大乗院の研究を主としたもので、大乗院の歴史、建築と庭園の復元、庭園の作者を考察し、室町時代中期の庭園、興福寺末寺の平安鎌倉時代庭園遺構にまで言及している。大乗院について初めてのまとまった論文として、遺構の保存・整備の上でも大きく貢献した。35年度の日本建築学会賞を受けられた労作である。

さらに37年には学報第13冊として『寝殿造系庭園の立地的考察』がある。平安京における寝殿造系庭園に利用された水脈や湧泉に着目した立地論で寝殿造建築と庭園の相関々係を明らかにし、広く平安鎌倉時代の寝殿造系庭園遺構、

浄土式庭園遺跡から中世以降近世の寝殿造系庭園に関する論考で、先生の平安時代庭園論を総括するものである。

定年を1年後に控えられた41年3月には、奈文研での最後の学報（第18冊）として『小堀遠州の作事』が上梓された。桂離宮の作者論に関連して遠州は早くから関心の的であったが、本学法は37年度から奈文研で本格的な遠州関係資料の収集を行なった成果である。これを契機に42年には吉川弘文館の人物叢書の一冊に加えられ、さらに49年には豪華版『小堀遠州』（大阪、創元社）を出されて決定版となった。本書は人物篇・文芸篇・茶道篇・作事篇・資料篇よりなり、遠州研究の拠り所となるものである。

先生は奈文研在職中の『日本の庭園』（32年、東京、創元社）、『日本の庭』（35年、東京、朝日新聞社）、『日本の庭園』（39年、東京、吉川弘文館）や、退官後の『庭園とその建物』（49年、東京、集英社）、『日本庭園史話』（56年、東京、日本放送出版協会）などで通史も多く書かれ、森庭園史を固められてきた。毎日出版文化賞受賞の『庭ひとすじ』（48年、東京、学生社）には、先生の生涯をかけた庭園研究の足跡から、庭園整備現場での発掘や復元の作業、多数に

上る昭和の庭づくりへの意欲など、幅広い活動が生々と書かれている。59年には80歳を前に、編集された『日本史小百科、庭園』（東京、近藤出版社）が出たが、61年3月出版の『作庭記の世界』（東京、日本放送出版協会）が最後となった。（作庭記……平安時代の造庭法秘伝書）

先生の論文第1号は昭和8年『造園研究』第8輯に掲載の「毛越寺に於ける藤原時代造園遺跡の研究」であるが、そこにはすでに作庭記の技法が論考されている。『平安時代庭園の研究』（昭和20年）では評論された。その作庭記の解



1975年、江馬氏館跡庭園の発掘現場視察（左に森蘊、右に村岡正）（「山中功旧蔵資料」奈良文化財研究所蔵）

釈に長年の間の結論を出したと、先生は満足されていた。先生の著述が作庭記に終わった因縁は深い。

以上、先生の著書の主なものをあげたが、これらの本からもわかるようにその功績は多くの史資料を渉猟し世に出されたことは勿論、遺構遺物の線蜜な調査による実証を重んじられ、両々相俟つての研究ということである。遺構や実測図に必ず等高線による地形が示されるようになったのも、先生から始まった。『奈良を測る』（46年、東京学生社）という先生ならではの著書があるが、実測作業における熱意は並みのものではなく、常に先頭に立っての大活躍で、奈文研時代は製図も殆ど自分でされた。多くの実測は研究の一つの基盤であり、その精神は森スクールの庭園研究の中に脈々と受け継がれている。

先生の研究は、庭園の遺構の復元整備という現場仕事にもよく発揮された。奈文研時代にもいくつか手がけられたが、時節の到来という意味で退官後、庭園文化研究所長としての実績が主体である。昭和45年の法金剛院庭園青女の滝（京都市）の発掘復元整備に始まり、和歌山城紅葉溪庭園（45〜47）、観自在王院庭園（岩手県平泉町、47〜53年）、白水阿弥陀堂庭園（福島県いわき市、48〜53年）、旧大乘院庭園（奈良市、49・50年）、円成寺庭園（奈良市、50・51年）、浄瑠璃寺庭園（京都府加茂町50・51年）、称名寺庭園（横浜市、53〜62年）などがある。54年来の毛越寺庭園（平泉町）の整備があと2〜3年という時に亡くなられたのはまことに心残りであるが、これらのよみがえった庭園に注がれた先生の情熱も又一人のものがあつた。

先生は新しい庭づくりもよくされ、前出『庭ひとすじ』に自ら解説されているものだけでも30数庭に上る。その後の作庭も多く、晩年の代表作に『紫式部公園』（武生市）があげられる。先生の作品の根底には常に『作庭記』があり、石組の表現には作庭記の現代解釈といえるものが多い。いつも不自然になることを戒められていた。作庭も先生の古庭園の延長にあり、伝統の現代化ともいえよう。

日本庭園史の研究に果たされた先生の多岐にわたる業績はまことに大きく、計り知れないものがある。

30年後に「森蘊先生の業績」を読む——まえがきにかえて

マレス・エマニニエ

先に掲載している「森蘊先生の業績」という文章は森蘊が亡くなった約1年後、1989年10月20日発行の古代学協会誌『古代文化』の中に発表されたものである。限られた紙面で森の幅広い活動を的確に紹介し、重要な作品や関わった主な庭園などの要点をよく概括している。森の逝去後に書かれた初めての紹介文でありながら、これまでにまとめられたものの中で、最も充実している。それは当然といえば当然である。なぜならば、執筆者の村岡正ほど、森の業績をよく把握している人はいないからである。

森蘊と村岡正

むらおか だんし

村岡正（1926―1990）というのは、1949（昭和24）年に京都大学農学部林学科を卒業した後、森の右腕として日本全国を走り回り、歴史的な庭園の実測や製図を数多くつくりながら、庭園の保護と研究の発展に貢献した人物である。1968（昭和43）年6月、森が奈良文化財研究所（奈文研）を退官すると、村岡の自宅で庭園文化研究所を開設し、森が亡くなるまで次長を務めた。労力も出費も惜しまず、森の庭園史研究をずっと支えた陰の立役

者であった。一般的に知られていないが、1978（昭和53）年に日本造園学会賞、1985（昭和60）年に地域文化功労者として文部大臣表彰を受けるなど、当時の学界ではその功績が認められていた。

昭和20年以降に出版された森の著書のまえがきやあとがきを読めば、村岡の名前が必ず記されているほど、二人の間は強い信頼関係によって結ばれていた。分厚い専門書の中の1、2行にすぎないが、発行できたことは村岡の並々ならぬ努力のおかげであると、森はいつも謝意を表している。たとえば、1960（昭和35）年の通史『日本の庭』では次のように綴っている。

「（前略）かくれた協力者を御紹介しておきたい。それは京大農学部大学院の村岡正氏で、私の研究調査の相棒として実測現場に、図面作製に、文献渉猟に、文字通り十年一日の如く従事されたのであって、私の業績の半ばは同氏の援助の賜であると言つてよい」

〔森 1960 「はじめの言葉」より〕

森の業績を考えるうえで、村岡は欠かせない存在である。文献資料の収集と整理と分析、現地の調査と実測、図面の作製、さらに本や論文の校正、復元整備事業の指導など、森の日本庭園史研究のすべての段階に携わった。森にとってはかけがえのない右腕であったのだろう。能楽にたとえるなら、森は舞台の中心に立ち、脚光を浴びるシテ方（主人公）であったのに対して、村岡は目立たずに、舞台の一角にこっそりと座っているワキ方（脇役）というような関係であったといえるのではないか。そして、能楽の演目と同じように、物語が成立するためには二人はそれぞれの役目に徹する必要があるということは、お互いによく理解していたのであろう。

1988（昭和63）年に森が逝去したとき、村岡は62歳であった。庭園文化研究所の所長となり、日本庭園史学の

新たな1ページを書き上げたかったに違いない。が、わずか2年後の1990（平成2）年2月12日に京都市下京区の武田病院で急逝した。享年64歳。村岡なら「多岐にわたる」森の活動をどのように評価し、そしてどのように展開させたのだろうか。残念ながら、それらの発現の前に村岡は亡くなってしまったので誰にもわからない。ここでは、村岡が書き残した文章「森蘊先生の業績」を読みなおしながら、本報告書の内容と目的を紹介したい。

行間に込めたメッセージ

普段、亡くなった人を思い出すと、いろんなイメージやエピソードが頭に浮かんでくるのではないだろうか。楽しかったことや嬉しかったこと、悔しかったことや悲しかったこと。特に「十年一日の如く」森に従事していた村岡なら、数えきれないほどの逸話があったのではないか。

森は子供の頃から野球好きで大の巨人ファンであったこと、世界中の珍しい切手を精密に収集していたこと、運転をしていなかったこと、酒や寿司を好まなかったこと、堅苦しい茶会が嫌いだったこと……。そのほかにもいろいろあるだろうが、村岡は人柄に一切触れていない。題名にあるように、彼の目的はあくまでも「森蘊先生の業績」を紹介することである。その人となりは業績の埒外で、後世に残すべきものではないと判断したのだろうか。それとも、亡くなって間もない頃のことだから、そのような事柄を振り返るよりも前に、やはり森が成し遂げた偉業を正確に伝えることが最大の課題であると考えたのか。

ともかくにも、昭和期の庭園史研究の歩みを振り返ったとき、森は「常に先頭に立って」いたと村岡は言う。しかし、森を先頭に位置づけているだけで、庭園史学界の先輩・同輩・後輩などとの関係に一切触れていないことは興味深い。森が所属していた大学名や卒業後に入った機構などは明記されているが、個人名は日本庭園史家の外山英策（1888



1975-76年頃、岩手県平泉町、観自在王院庭園の復元整備現場にて（右から3番目が森蘊、左から5番目が村岡正）

「1953」しかない。大学や大学院の指導教官も取り上げていない。もちろん、限られた紙面で関係者全員を羅列することができなかったであろうが、森は誰に、どのような影響を受けたのか、または誰と、どのように協力して研究したのかという話もなく、独学で日本庭園の歴史家・作庭家になったかのである。

結論から言えば、森は独立独行の男ではなかったが、村岡が行間に込めているように、造園学界との関係は必ずしも良好ではなかった。たとえば、大学院に入学すると同時に加入するのは「日本造園学会」ではなく、「日本建築学会」であった。また、1952（昭和27）年に「建造物研究室」の室長として奈文研に着任し、その2年後に取得した工学博士の学位も、母校の東京大学農学部ではなく、建築を専門とする東京工業大学からであった。じつは、東京大学農学部の担当教官丹羽鼎三（1891-1967）とは「破門同様」のような関係であったと本人も告げている〔森1973 26頁〕。日本造園学会賞よりも10年前の1960（昭和35）年に日本建築学会賞を受賞したことも偶然ではないだろう。このように、森は日本庭園史の研究をライフワークとしながらも、造園学界とは複雑な関係であった。

「森庭園史」と「森スクール」

村岡にとつて、この「森蘊先生の業績」という文章をまとめることは、森の偉業を紹介すると同時に、目録づくりに取りかかるきっかけでもあったと思われる。短い文章にもかかわらず、ひじょうに多くの著作名や論文の数、または復元整備の現場の名前などが盛り込まれている。そして、わずか2か月後の同年12月に、詳しい年表「故 森蘊先生著述作品目録（稿）」（以降「目録」）はでき上がった〔森蘊門下生一同 1989〕。

「森蘊先生の業績」を執筆した時点で村岡は森の論文について、「（昭和）8年から19年までの42編、23年から30年までが18編、計60編を数える。残念乍らその後のリストがないので全体の数はわからないが、報告書などを加えると優

に100編を超えるであろう」と推計しているが、「目録」には論文だけでも、昭和8年から19年までに72編、昭和23年から30年までに18編、さらに昭和60年までの論文を足せば合計134編になる。それに著書、共著、報告書、随筆などを加えると100編どころか、200編をはるかに超えている。

超人的な執筆活動だったといえるが、村岡はその量よりも内容に注目している。「これらを編年的に見てゆくと、森庭園史の体系をうかがうことができる」という。また、戦後に出版された通史で「森庭園史を固められ」とあるが、残念ながらその「森庭園史」とはどういうものだったのか、具体的に定義されてはいない。ただ、わざわざ「森庭園史」と名づけているのは、それなりの独自性があったからであろう。森は同時代の歴史家たちとは異なった庭園史観をもっていたようであるが、この場合も行間を読みながら想像するしかない〔マレス 2014〕。

「森庭園史」のほかに、村岡は「森スクール」という表現を利用しており、その特徴は「実測」であるという。じつは、歴史的な庭園の実測は戦前に始まり、重森三玲、吉永義信、久恒秀治などが森よりも先に取り入れた方法であるが、「実測図に

必ず等高線による地形が示されるようになったのも、先生から始まった」と村岡は強調している。等高線を取り入れることによって、森は一枚の平面図に庭園の主な構成要素の位置や相互関係に加えて、細かい起伏まで表現することができたわけである。

当時の最先端の技術、レベル測量をもつて森は日本庭園史を再考しようとした。その方法は「寝殿造系庭園の立地の考察」〔森 1996〕や「奈良を測る」〔森 1997〕という著作名にも表われているように、歴史的な庭園や遺構の「地形」を重視した研究である。そして、「多くの実測は研究の一つの基盤であり、その精神は森スクールの庭園研究の中に脈々と受け継がれている」と村岡は続けている。

森の精神を受け継いだ人といえば、一番最初に思い当たるのは当時の庭園文化研究所に所属していた村岡本人と、飛田範夫（本書26ページ）と山中功（本書160ページ）である。彼らは「森スクール」というか、「森チーム」として多くの庭園遺構の実測測量を行ない、森の庭園史研究を支えたかけがえのないパートナーであったことは間違いない。それに加えて、奈文研の牛川喜幸（1937-2009）も取り上げられよう〔日本遺跡学会 2014〕。さらに、森と一緒に復元整備や新規の作庭に携わった庭師も忘れてはならない。徳村五三郎と徳村盛市（本書154ページ）、小山潔、古川三盛（本書172ページ）、牧岡一生（本書184ページ）らである。残念ながら、村岡が亡くなった後は「森スクール」は解散し、流派のようなものは形成されることはなかったが、徹底的な文献資料の収集と分析、精密な現地調査と実測測量、さらに発掘調査という考古学の研究成果を考慮に取り入れたことなど、森の「復元的研究」という方法論は現代の庭園史研究の基盤となり、現在の文化財庭園の保存と修理においては当たり前になった。残念ながら、森が設立した庭園文化研究所という組織も、「森庭園史」や「森スクール」という名前も残らなかったが、その方法論は村岡の望みどおり、現代に「脈々と受け継がれて」いる。

『作庭記』から桂離宮へ、王朝趣味の庭園を求めて

「多岐にわたる」「森蘊先生の業績」の中でも、村岡はとりわけ2つの大きなテーマ、平安時代の庭園と江戸初期の桂・修学院離宮の研究を取り上げている。

平安時代の庭園と日本最古の造園書『作庭記』は森の初期、そして晩年の研究テーマとなった。実際に、一番最初に発表した論文は「毛越寺に於ける藤原時代造園遺跡の研究」〔森 1993〕であったと村岡は注目しているが、最後の復元整備の現場になったのも同じ毛越寺庭園であった。残念ながら、森はその復元整備事業の完成を見ることができなかったが、毛越寺庭園の遺水を明るみに出したことは庭園史学において画期的であった〔マレス 2013〕。

また村岡は、森の「著述が作庭記に終わった因縁は深い」と強調している。日本庭園の歴史家として、森は早くから『作庭記』に目をつけ、1945年発行の『平安時代庭園の研究』〔森 1945〕にその全文を掲載した。結局、一生をかけて追求したテーマになったが、森にとって日本最古の造園書『作庭記』はただ過去を知るための参考文献としてだけではなく、新規の作庭のための発想源でもあった。たとえば「山のふもとならびに野筋の石は、むら犬のふせるがごとし」「にぐる石一両あればをふ石は七八あるへし」などという一筋にちなんで石を立てることは稀ではなかった。昭和の作庭家として、森は『作庭記』を近代的に解釈し、昭和の新たな建築と生活様式に適応した庭を試みたといえる。その究極の目的は『作庭記』の内容に高らか唱えられる自然順応精神であること、中には現在残っていない作庭記流庭園の復興的作品と見るべきであったという〔森 1996 144頁、マレス 2020〕。

平安時代の庭園と『作庭記』の次に、森が最も力を注いだ研究テーマは桂離宮と修学院離宮であった。「離宮に関する資料を殆ど集められた」と村岡がいうほど、凄まじい研究ぶりであった。実際に、奈文研での一番最初の研究計画は「京都御所・離宮の研究」と題して、順番に「その一 京都御所の復元的研究」「その二 桂離宮の復元的研究」

「その三 修学院離宮の復元的研究」を分けていた〔森 1953〕。結果的には、京都御所や仙洞御所の実測なども行なったが、最終的には桂離宮と修学院離宮に集中することになった。

村岡は、桂離宮の研究は「論争の出発点となった」と指摘しているが、それ以上深入りはしていない。ここで言いかげようとしているのは桂離宮の作者、小堀遠州をめぐる論争のことなのかもしれない。じつは、江戸後期から近代にかけて、小堀遠州は桂離宮の作者として一般的に認識され、森も初期の通史などではその説を支持していたが、長年の研究の結果、遠州説を否定することになった〔マレス 2017〕。ジョサイア・コンドル、重森三玲、田村剛、ブルーノ・タウト、ヴァルター・グロピウス、和辻哲郎……など、遠州説は造園界の垣根、また国境を超えて広く共有され、「桂離宮神話」を支える重要な構成要素の一つであっただけに、責任は大きかったと思われる。しかし、森の研究は常識を覆すほどの効果があった。現在、桂離宮は「遠州好み」と言われても「遠州作」として紹介されることはない〔井上 1997、マレス 2017〕。

「桂離宮の研究」を始めた結果、森は様式論や意匠論だけではなく、作者論にも一步を踏み出すことになったが、修学院離宮の場合はまた異なった方法で「復元的研究」を行なった。それは具体的に「文献・古図・指図などの史料と、地形地物の詳細な現地測量調査との照合」であったと村岡は説明している。その結果、造営当初の姿、いわゆる原型を示すことができた。このような「復元的研究」や「復元的考察」というのは森が確立させた方法論であり、実証的研究の始まりでもある〔尾崎 2014、マレス 2019〕。

結局、平安時代の庭園と『作庭記』にしても、江戸初期の桂と修学院離宮の庭園にしても、森の研究対象になったのは必ずと言っていいほど王朝趣味の庭であった。同時代の庭園史家や造園家たちが室町時代の枯山水を最高峰とし、幽玄、侘びなどという禅宗文化、武家文化、茶の湯文化によってつくり上げられた美意識に日本庭園の独自性

を見いだしたのに対して、森は公家文化が生んだ寝殿造庭園や浄土式庭園、また桂離宮や修学院離宮のおおらかな池庭こそが日本庭園の頂点であり、その原点は『作庭記』に求めるべきだと語っている。これが、森の庭園史観の特異性であったのかもしれない。

「計り知れないもの」

「森蘊先生の業績」を振り返ってみた結果、著書や共著などは「100編を超える」、指導した歴史的な庭園の復元整備事業は9箇所ほど、新規作庭は『庭ひとすじ』〔森 1973〕を読むかぎり「30数庭に上る」と村岡は数える。しかし、このような物事を足し算しただけではとても表現しきれないほど、「森蘊先生の業績」には「計り知れないものがある」と村岡は最後に告げている。

筆者は10年ほど前から、この「計り知れないもの」を少しでも可視化できるようにしようと思い、森の研究に取りかかった。まだまだ深める余地は残っているが、一旦のまとめとしてこの報告書をつくることにした。森は日本庭園の歴史をどのように理解して、どのように解釈したのか。何を求めて、何を残したのか。また、何を理想としたのか。その理想は歴史的な庭園の復元整備や、新しい庭の作庭にどう反映されたのか。そして、我々の日本庭園の見方にとどのような影響を与えたのかなどなど、課題は多い。森の業績を振り返ることは昭和期における日本庭園史観とともに、今後の日本庭園のあり方について考えるきっかけでもある。本報告書一冊で、森の膨大な研究のすべてを網羅することはとてもできないが、基礎資料というか、一つの参考資料になれば幸いである。

本報告書の構成は次のとおりである。

第1部「森蘊の業績を分析する——研究会」は2018年8月18日に開催された研究会の報告である。偶然ではあ

るが、ちょうど森の没後30年にあたる年に行なわれた。森の旧宅（現「森蘊庭園研究室」）で集まり、森の孫の森有史氏から開会の挨拶を賜った。発表者は造園史、庭園史、建築史、測量の技術と製図、作庭など、それぞれの観点から森の幅広い活動を浮き彫りにした。言い換えれば、森の業績を論理的に分析する学術的なアプローチである。

第2部「森蘊の業績を振り返る——総合討議」は研究会の後に開催された総合討議の記録である。より自由なかたちでざくばらんに意見を出し合い、疑問を投げかけるような機会となった。2時間ほどの討論をした結果、具体的な結論や方針などを示すまでにはいかなかったが、お互いに共通認識を深め、今後の課題と展望を顕在化することができ、たいへん有意義な話となった。

第3部「森蘊の足跡を辿る——インタビュー」は生前の森を知る方々の言葉をまとめたものである。森と一緒に働いた研究者や作庭家、また森がつくった庭の施主など、合計10名のインタビューを掲載している。彼らは森の生きている記憶というか、最後の証人になるからこそ、その証言を残すことが重要な作業であると思い、2012年から2018年にかけて聞き取り調査を行なった。残念ながら、ここにすべてのインタビューを掲載することは叶わなかったが、複数の視点を紹介することはできたかと思う。第1部と第2部とは異なったアプローチではあるが、「多岐にわたる」「森蘊先生の業績」を明らかにし、正しく評価するためには必要不可欠な情報である。

報告書の最後にあたる第4部には年表を掲載している。整理にあたっては、「出来事・職歴・著書」と「作庭・調査・整備」というかたちで2段に分けた。1段目には私生活の主な出来事や職歴、また単著・共著・論文・エッセイなどの著作をまとめた。2段目には森が歴史家として指導した実測調査や復元整備の事業、また作庭家として新しくつくった庭をまとめた。概観するだけで、1945年まではとにかく論文の執筆が多く、現場での仕事がほとんどないのに対して、1952年から1967年までの奈文研時代は単著や共著などが増えると同時に、奈良を中心に史跡や歴史

的な庭園の調査と作庭の活動が一気に広がっていくこと、そして、1970年頃から晩年までは、遺跡や庭園の復元整備事業で多忙を極める時期になるという全体の流れを把握することができると思う。

この年表は『奈良を測る』〔森 1971〕『庭ひとすじ』〔森 1973〕『日本庭園史話』〔森 1981〕という森が遺した自伝や、亡くなった1年後にまとめられた「故 森蘊先生著述作品目録（稿）」〔森蘊門下生一同 1989〕、村岡の還暦の際にまとめられた「還暦記念 村岡正著作目録」〔尼崎・白幡・飛田 1986〕、また森のもとで働いた庭師たちの記録「徳村造園事業経歴書」〔徳村造園 1985〕、『庭師歷程 小山潔のhuman forest』〔小山潔の本出版発行人会 1986〕、そして田中栄治・高橋知奈津の論文に掲載されている目録を参考にした。それに加えて、筆者が多くの現地調査や聞き取り調査などで得た情報を照合して編纂したものである。それでも完璧ではないことは筆者が最もよく理解しているので、今後の研究によって更新されていくことを期待している。

この報告書についても同じことがいえる。森蘊研究の完成版をつくるつもりはない。逆に、出発点になることを望んでいる。これをもとに、さらに多くの人が森の業績を分析し、評価して、日本庭園の未来を考えるきっかけになれば何よりである。それこそ、森蘊本人が望んでいたことなのではないだろうか。

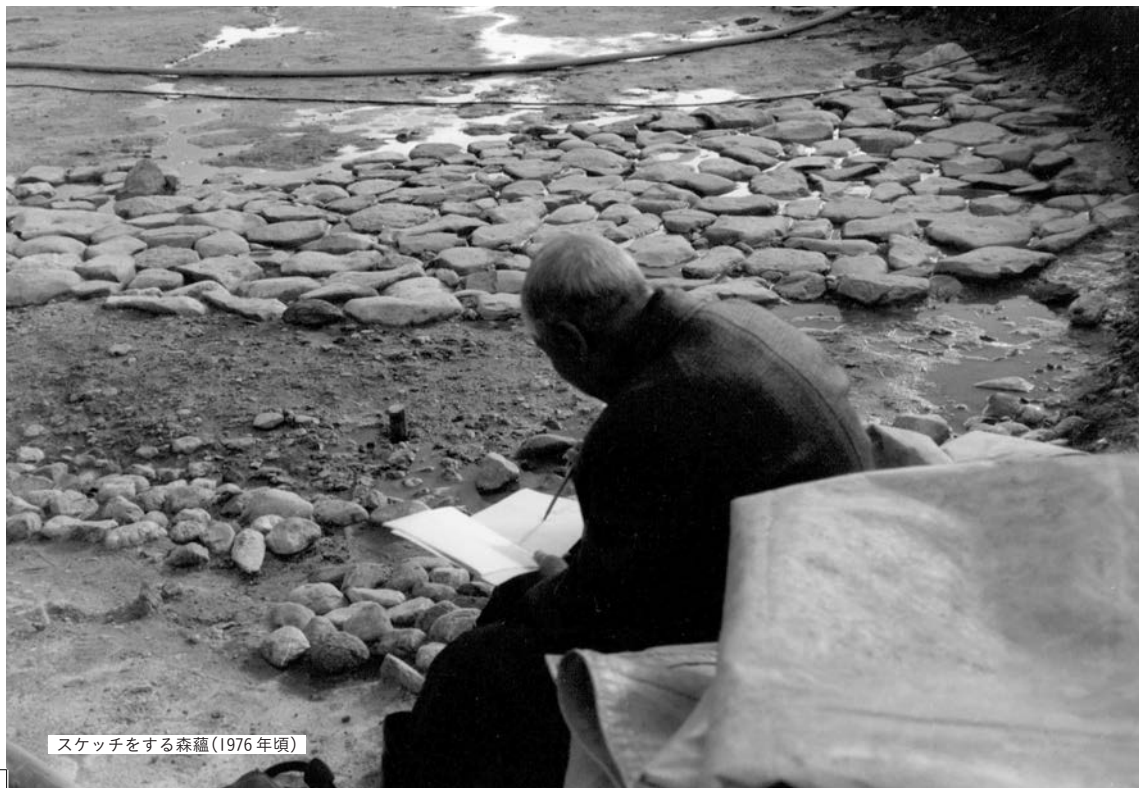
引用文献

- 尼崎博正（2014）「日本庭園の年代観」『歴史考古学』第70号 歴史考古学研究会
尼崎博正・白幡洋三郎・飛田範夫（1986）『還暦記念 村岡正著作目録』京都大学農学部造園学研究室
井上章一（1997）『つくられた桂離宮神話』講談社学術文庫
小山潔の本出版発行人会（編）（1986）『庭師歷程——小山潔のhuman forest』小山潔の本出版発行人会

徳村造園（1985）『徳村造園事業経歴書』 京都庭匠植清
 日本遺跡学会（編）（2014）『遺跡学の宇宙——戦後黎明期を築いた13人の記録』 日本遺跡学会
 マレス・エマニユエル（2013）『日本庭園史と森蘊の業績——毛越寺庭園の復元・整備を通して』『奈良文化財研究所紀要』 38―39頁
 マレス・エマニユエル（2014）『重森三玲と森蘊の庭園観——小堀遠州の伝記を通して』『日本庭園学会誌』 第28号、11―21頁
 マレス・エマニユエル（2017）『小堀遠州の庭——歴史と伝説の合間から』『野村美術館研究紀要』 第26号、54―70頁 野村文華財団
 マレス・エマニユエル（2019）『歴史的な庭園の復元——森蘊の「復元的研究」を通して』 海野聡（編）『文化遺産と〈復元学〉』 吉川弘文館 165―208頁
 マレス・エマニユエル（2020 予定）『奈良市における森蘊の作庭活動』『奈良市における庭園の総合的調査』 奈良文化財研究所
 森蘊（1933）『毛越寺に於ける藤原時代造園遺跡の研究』『造園研究』 第8輯、12―34頁
 森蘊（1945）『平安時代庭園の研究』 桑名文星堂
 森蘊（1953）『建造物研究室研究計画及び昭和27・8年度研究経過書』 森蘊旧蔵資料（奈良文化財研究所蔵）
 森蘊（1960）『日本の庭』 朝日新聞社
 森蘊（1964）『日本の庭園』 吉川弘文館
 森蘊（1971）『奈良を測る』 学生社
 森蘊（1973）『庭ひとすじ』 学生社
 森蘊（1962）『寝殿造系庭園の立地的考察』『奈良国立文化財研究所学報 第13冊』
 森蘊（1971）『奈良を測る』 学生社
 森蘊（1981）『日本庭園史話』 日本放送出版協会
 森蘊門下生一同（1989）『故 森蘊先生著述作品目録（稿）』 庭園文化研究所

【第一部】

森蘊の業績を分析する——研究会



スケッチをする森蘊（1976年頃）

開会挨拶——祖父森蘊と私

森 有史

森蘊庭園研究室（森蘊旧宅）
2018年8月18日（土）

祖父森蘊の功績を振り返り、見つめ直すこのような会を開催していただき、本当にありがとうございます。亡くなってから30年経った今でも祖父の功績を研究し続けてくださっている皆様に心より感謝しております。発起人のエマニユエルさん、そして開催にご尽力くださった皆様、本当にありがとうございます。

祖父は私が7歳の頃に他界いたしました。私に物心がついてからと考えるとほんの数年の短い触れ合いでしたが、祖父のことを思い出そうとすると、この家とこの庭とともに、あの優しい笑顔が蘇ります。

物心つく前から、年に数回は家族でこの家を訪れ、長い時間を過ごしました。私たち家族が寝ていた部屋には鑑真和上の仏像の写真が飾られていて、非常に罰当たりとは思いますが、私はその写真が怖くていつもなかなか眠れませんでした。怖いと言う私に母は、「とてもありが

たい方のお写真なのよ」と言いましたが、当時の私にとっては祖父の顔のほうが余程ありがたい顔に思えました。きれいな皺の刻まれた、清潔で、いつでも少し微笑みを湛えたような、その顔が私は好きでした。

滞在中はいつもこの庭で兄とサッカーをしました。きっと祖父が常日頃丁寧に手入れをしていたのだと思いますが、そこら中にボールをぶつけても何も諭されることなく、今思い返してみると贅沢な球技場だったと思います。祖父は、祖母とともにその縁側に座り、私たちを見守ってくれていました。ある時私の蹴ったボールが祖父の顔面に直撃し、一瞬祖母が焦ったような顔をしていたのも覚えています。その後に何事もなかったかのように微笑んでいた祖父の顔も。小さかった私にとっては、「素敵なお庭のある家に住んでる優しいおじいちゃん」でした。たくさんさんの功績を知った今でもそれは変わりません。

生きていた頃にもとにも過ごした時間こそ短かったものの、その後も奈良に来るたび、祖父の携わった庭に赴くたび、祖父の存在を感じ、そこに居るような気が、今でもしています。

今後とも、祖父の仕事をおして、祖父のことを時折思い出していただけたら、と思っております。祖父を支えていただき、お集まりいただいた皆様、本当に今日はありがとうございます。

森有史（もり・ゆうし） 1981年神奈川県川崎市生まれ。
2003年青山学院大学文学部英米文学科卒業。森蘊の孫。

日本近現代の歴史的庭園の 調査・保存・修理を巡る状況から 森蘊の業績を考える

栗野 隆

はじめに

筆者は、2004（平成16）年4月1日から2010（平成22）年3月31日までの6年間、奈良文化財研究所（以下、奈文研と記載）に所属していた。筆者が奈文研に勤務していた当時の庁舎は三ツ矢型3階建ての元病院であった施設を転用した建物で、その中に「第三書庫」という研究所の中でも非常に暗くて冷たい書庫があった。発掘調査部時代に平城宮跡の遺構図を整

理する関係で筆者はその書庫に足しげく通ったが、遺跡庭園関係の図面類の棚の上には、おびただしい数の森蘊（1905―1988）の実測図や、スタッフが残した測量時のスケッチブックが無造作に積まれていた。著作でしか知りえなかった森蘊の庭園調査の息づかいに直接触れた感動は今も忘れることができない。と同時に、図面類の劣化も進行しており、このままではまずいとも感じていた。

2009（平成21）年4月に文化遺産部に異動してからは、平城宮跡地内の収蔵庫に「図化室」という一室があることを知った。同年春に遺跡整備研究室長の平澤毅氏とその部屋に行き、おそらく森と庭園調査を推進した牛川喜幸（1936―2009）が使用していたと思われる昭和期の大型の図化機、ステレオメトログラフとともに、天井に届きそうなほどにうず高く積まれた膨大な数の段ボール箱を目のあたりにした。その段ボール群には、森蘊と村岡正の旧蔵資料が入っており、平澤室長から、この部屋の一面を「庭園文化資料室」として庭園史の豊富な資料群を整理し、閲覧、公開できるようにしたいとの意向を聞いた。筆者は2010（平成22）年4月より東京農業大学に籍を移した関係でその整理作業の具体に携わることとはできなかったが、遺跡整備研究室スタッフの青木達司氏、高橋知奈津氏、マレス・エマニエル氏らが精力的な整理を実施し、2019（平成31）年3月に、マレス氏より「森蘊 旧蔵資料」の目録の公開を始めたとの

連絡を受けた。さっそく確認した奈文研のホームページには、「手書きや青焼きの図面、スケッチ、レベルブック、原稿、書簡、メモ、写真、ネガ、冊子、雑誌などがあり（中略）この度、一旦の整理が終了したため、そのリストを公開することにした」とある。「奈良文化財研究所ホームページ」。平澤氏と筆者が、図化室で森蘊資料を確認した2009年からちょうど10年後にこのようななかたちで森蘊旧蔵資料が整理・公開されたことは、奈文研の遺跡庭園・元スタッフとしてたいへん喜ばしいことと思っている。

奈文研在籍時代には、先輩研究員からは、庭園史研究で森蘊を超えた研究者はいるのかとたびたび聞かれることがあった。その質問を受けるたびに、筆者は「おりません」と答えることしかできなかった。とりわけ、マレス・エマニエル氏の森蘊に関する論文や記事を読むたびに、庭園史研究者であった森蘊が庭園史研究の対象となりつつあることを実感する。本稿ではその森の造園活動と、同時代の日本近現代における歴史的

庭園の調査・保存・修理をめぐる状況を確認しながら、森の諸活動はその中でどのように相対的に位置づけられるのかを考えてみたい。

1. 日本近代の庭園史・意匠研究の黎明

森蘊は大正期から昭和後期にかけて、古代から近世の庭園通史を体系的に編成し、そして森が注目した個別の時代、事例、作庭家についても深く掘り下げた。通史として現われた日本庭園史の最初の研究は、横井時冬（1859-1906）が1889（明治22年）に著した『園藝考』〔横井 1889〕や小澤圭次郎（1842-1932）の「園苑源流考」〔小澤 1890-1905〕に遡ることができる。

横井時冬の『園藝考』は近代日本最初の日本庭園概史と評価され〔東京農業大学造園科学科 2011〕、1940

（昭和15）年創元社より『日本庭園発達史』として改版されている。改版書の校注は堀口捨己と森蘊が担当している。小澤圭次郎の「園苑源流考」は雑誌『國華』に1890（明治23）年から16年間176回にわたって連載されたもので、日本庭園史論と評価されている〔小野 2004〕。これらの研究は、文献の精読による史的解釈・解説を主としたものである。わが国の庭園史研究は明治中期から後期にかけて文献史研究から始まった。少し時期的に遅れて中国庭園史は後藤朝太郎（1881-1945）が研究を始め、大正期以降は東京帝国大学にて近世史、特に住宅史を専門としていた龍居松之助（1884-1961）が庭園の文献史研究を始めている。

森自身が文献史研究の緻密さ、徹底した文献収集の姿勢で評価しているのが外山英策（1888-1953）であった。1916（大正5）年に東京帝国大学農科大学を卒業した外山は、『源氏物語と日本庭園』〔外山 1927〕、『室町時代庭園史』〔外山

1934〕などの研究業績を残した造園史家であるが、『室町時代庭園史』では従来の史的研究は間違った文献の選択が非常に多く、誤解を生むような庭園史の流れを構築しているものがあり、古庭園の研究のためには、足利時代であれば禅僧の日記を読むよりほかないと主張している。

外山は、横井時冬の『園藝考』に対しては「簡単な小冊子に過ぎないにも拘らず誤謬が甚だ多い。大體も間違っているが細部も間違っている」とか、小澤圭次郎の「園苑源流考」には「一見引証該博、人をして驚嘆せしむるものがある。しかし今日では左程有難いものではない。要するに都名所図会、都林泉名所図会（中略）山城名勝志の類を羅列したに過ぎぬ」と『室町時代庭園史』で痛烈な批判をしている。

これを受けて森蘊は、「日本庭園史というものは、信頼できる文献の徹底的な収集と、その選択から始まる」ということを外山英策から強く認識したようである。ただし、「外山英策先生は庭園の実測をしておら

れない。また建築との関係をあまり深く追求しておられない」〔森 1981〕とも述べており、外山の研究に遺漏している観点も見いだすのであった。このことが、庭園の実測、そして建築と庭園との関係を追及する森の研究姿勢につながったと筆者は考える。

2. 史蹟名勝天然紀念物保存法と庭園の指定調査、修理への展開

▼1 史蹟名勝天然紀念物保存法の制定、原熙と吉永義信

1919（大正8）年に史蹟名勝天然紀念物保存法が施行された。価値のある庭園を名勝として指定し、保存・修理するという明確な目的をもつ行為が法的な実行力を有したことで、庭園の調査研究は革新された部分が認められる。すなわち、文献史研究のみならず、

庭園の地割、意匠の实地調査による研究の重要性も本法の施行によって鮮明になったのである。

井手久登^{ひさと}東京大学名誉教授によれば、庭園の名勝指定・調査に大きく貢献したのは東京帝国大学農科大学教授の原熙^{ひろし}であった〔井手 1996〕。原は本法が施行された翌1920（大正9）年に史蹟名勝天然記念物調査会臨時委員に就任し、およそ60庭園を踏査し、そのうちの41庭園が名勝に指定されたという〔井手 1996〕。実際の調査を推進したのは、1922（大正11）年に内務省大臣官房地理課名勝調査嘱託に採用され、後に文化財保護委員会で活躍する原熙門下・吉永義信であったと推定している〔井手 1996〕。文部省〔1935〕が昭和10年に発行した『名勝調査報告第二輯』には、名勝庭園の平面図の実測・製図の担当者に吉永の名が見えるので井手久登氏の指摘の蓋然性は高い。

試みに、1923（大正12）年8月に測量および製図が行なわれた鹿苑寺庭園平面図〔文部省 1935〕を

確認すると、建造物の配置関係と全体の敷地計画、庭園の地割は確認できる。しかし、本図面には等高線がなく、敷地の高低差や地形が不明確であるのも事実である。ただし、吉永が名勝庭園の保存・修理に資する研究に果たした役割は多大なものがあつた。戦前の造園雑誌に掲載された吉永の研究論文には、1924（大正13）年に名勝に指定された大仙院書院庭園、1925（大正14）年に名勝に指定された慈照寺庭園、1927（昭和2）年に名勝指定された醍醐寺三寶院庭園を扱ったものがあり、特に「創設時代と現代との醍醐寺三寶院庭園」〔吉永 1936〕では庭園の主要部分の保存状況を明らかにすることがまっとうされ、「大徳寺大仙院書院庭園の復原」〔吉永 1943〕では地割の変遷を明らかにして庭園の復原図を作成するなど、庭園の名勝としての価値の立証方法、名勝庭園の保存修理のための検討に先鞭をつける研究方法と解答方法を示したからである。



図 1-1 鹿苑寺庭園平面図 1923（大正12）年8月測量（測量および製図：吉永義信）〔文部省 1935〕

▼2 龍居松之助の知遇を得て歴史的庭園の保存修理を担った田中泰治（田中泰阿弥）

吉永義信が庭園の名勝指定調査実務を行なっていた大正後期から昭和前期では、龍居松之助の施工協力スタッフであつた田中泰治（1898―1978）の活動も注目される。龍居は1918（大正7）年に龍居庭園研究所を創設し、その6年後の1924（大正13）年に現在の東京農業大学地域環境科学部造園科学科の前身にあたる東京高等造園学校（以下、高等造園と記載）の理事・教授に就任している。高等造園にて教鞭をとるかたわら、1928（昭和3）年に史蹟名勝天然記念物保存協会評議員に就任し、歴史的庭園の調査、保存修理を進めた〔東京農業大学造園学科 1984〕。そのときに修理実務を担当したのが、後に田中泰阿弥^{たいあみ}と名乗る田中泰治^{たいぢ}であつた。田中は新潟・柏崎の出身であり、龍居松之助の知遇を得た契機等については不明であるが、「龍居松之助先生の著作」〔東京農業大学造園学科 1984〕には主な造園施工メンバー（昭和36年ま

で」として田中の氏名が記載されている。

田中泰治は慈照寺上部庭園の石組の発掘と修理を、1931（昭和6）年に吉永義信、京都大学教授・関口鉄太郎、龍居松之助の立ち会いのもとに行なった「田中泰阿弥研究会 1999」。これは、名勝庭園として発掘調査の手法を用いて修理を行なった最初の事例と考えられる。その後田中は、新潟・貞観園、鳥取・尾崎氏庭園、京都・天龍寺、相国寺、金地院等の名勝庭園の修理を昭和10年代に継続的に実施し「田中泰阿弥研究会 1999」、歴史的庭園の保存実務を手がける造園家として、その地歩を確実に固めていったのである。

発掘によって修理した慈照寺の石組に関しては、後年、吉永義信が吉川需に対して、その方法が学術的ではなかったと言ったようであるが、それに対して真つ向から龍居松之助がそうではないと主張したという逸話も残っている「吉川 1985」。



図1-2 慈照寺庭園 1931（昭和6）年に発掘された水流の石組 [文部省 1935]

3. 重森三玲による庭園の実測調査活動と日本庭園史図鑑の刊行

精力的な庭園の実測調査活動で知られるのが重森三玲（1896―1975）である。岡山県出身の重森は、枯山水を基調とした力強い石組の庭園作品を数多く生み出した人物である。重森は美術や前衛いけばなどでも足跡を遺したが、庭園の世界に入ったのは、1919（大正8）年に田村剛と知り合ったことを契機とすると重森千青氏が指摘している「重森 2016」。

重森三玲が庭園の実測を始めたのは1929（昭和4）年であった「重森 2016」。1932（昭和7）年に日本庭園の研究団体として京都林泉協会を創設し、庭園の調査研究と作庭を推進した「重森 2016」。重森の業績で庭園史研究上最も高く評価できると考えられるのは『日本庭園史図鑑』（全24巻）「重森 1936―1939」であろう。これは1936年から

1938年（昭和11―13年）にかけて全国のおよそ250庭園を実測したものであり、こんにちの庭園史研究の基礎資料として位置づけられる。重森が実測を始めたのは、全国の名園が荒廃する状況を憂い、たとえ庭が壊れても保存のための資料として図面があれば修理ができるという思いがあったからであった「重森 2016」。

この調査には、複数のスタッフがそれぞれ役割を分担して実測を行っていた。『日本庭園史図鑑』の各巻の凡例を確認すると、清水卓夫（写真、平面図）、下川苔地（写生図）、早尻華香（写生図）、鍋島雄男（平面図）、福井典（平面図）らの名前がみえる（括弧内は役割分担）。

重森の『日本庭園史図鑑』掲載の実測図は、精妙な地割表現、高木と低木の関係、石組の関係までも精緻に表現し、庭園の空間性をも表現した図面を提示した点に特徴がある。しかし、筆者は奈文研で高瀬要一氏と庭園の実測方法について話をしていた際、重森三玲

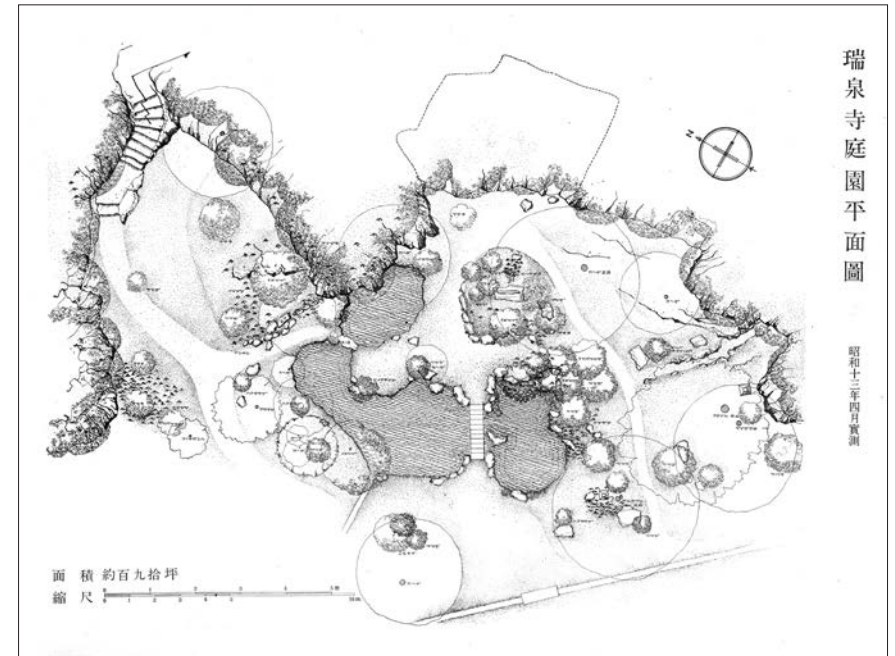


図1-3 瑞泉寺庭園平面図 1938(昭和13)年4月実測 [重森 1938]

の実測図は絵画的には傑出しているが、庭園内の要素となる庭石等を数箇所実測して残りはスケッチで表現しているため、誤差が大きいものだったと聞いたことがある。なお、森蘊も昭和10年代では平泉や鎌倉で庭園の実測を行なっている。

4. 室戸台風による庭園被害と保存修理のための調査

昭和初期に庭園の保存のための調査が進展したのは、1934(昭和9)年に発生した室戸台風のためであった。本台風は同年9月21日に関西に上陸したが、死者が約2700名、行方不明者334名、負傷者1万4994名、損壊建物9万2740棟を数えた、日本近代の中でも未曾有の自然災害として知られている[国立情報学研究所・北本朝展氏ホームページ]。特に大きな

被害が確認されたのは京阪神地域であった。「庭園と風景」[日本庭園協会 1934]では、「風水害と造園」という特集が生まれ、大阪府内の公園の被害とともに、とりわけ京都の名園の被害が甚大であった点が報じられた。同誌では京都大学教授・関口鏐太郎が、京都名園の風害として、仙洞御所、二条城、修学院離宮、桂離宮、金地院、知恩院、曼珠院、詩仙堂、天龍寺、平安神宮等々の庭園の損壊状況を報告しており、高台寺や上賀茂神社の風倒林の生々しい写真が掲載された[日本庭園協会 1934]。

この室戸台風によって、損壊を被った庭園を調査しようと東京から馳せ参じたのが、高等造園を1933(昭和8)年に卒業して龍居庭園研究所に入った久恒秀治(ひさつねしゅうじ)(1911-1982)であった。久恒が1967(昭和42)年に著した『京都名園記』上巻の序文には、「昭和9年9月に京都に大風が吹き、その風致の復興のため、私はゆくりなくも東京より京都にゆき『都林泉名所図会』をたずさえて、心ゆくまで名



図1-4 室戸台風による被害の様子 (上：高台寺境内松林の倒壊/下：上賀茂神社境内赤松林の風倒) [日本庭園協会 1934]

園を鑑賞する機会を与えられた。(中略) 当時はまだ今のような文化財保護の観念を官民とも認識していなかった時代で、名園の多くは雑草のなかに荒廃するものが多かった(中略) 政府がこの運動に非協力的で、まったく無力であることを知り、青春を賭してでも独力で京都の名園を実測することに決心した」と書かれている[久恒 1967]。久恒は、龍居松之助から給料を送金してもらいながら、京都帝国大学農学部教授・関口鏐太郎のもとで、西芳寺庭園、慈照寺庭園などの実測調査を展開した[龍居 2010]。しかし龍居松之助は久恒が京都の庭園実測調査を行なっていたときは高等造園2代目校長であり、この頃高等造園は経営難に陥っていた。そのことから龍居は久恒に給料が送金できなくなったため、久恒は龍居庭園研究所を辞し、京都風致復興会囑託として実測を継続したという[龍居 2010]。この頃、後に綜合庭園研究室を創設して昭和の造園をリードする中島健が久恒の実測を手伝ったというのはよく知られる逸話である。

久恒の調査と記録の考え方として、実測図は庭園が破壊を受けたときの修理・復元を目的とするために50分の1の縮尺で作成したという[久恒 1967]。庭園の実測は地物の点と点だけを求めるのが目的ではなく、点と点の間の線、つまり石の形、庭の景勝が要求されるため、多大な労力と時間を要した。西芳寺だけに1年間、慈照寺には半年を要した[久恒 1967]。しかし、この実測図は終戦後、京都府知事の委託を受けて行なった名園修理の仕事に役立つこととなり、天龍寺、西芳寺、鹿苑寺、慈照寺、成就院等の庭園では、役石と樹木の復元的改修、伐採、整理を縦横に行なうことができた。久恒は『京都名園記』の中で述懐している[久恒 1967]。

『京都名園記』(上・中・下巻)に掲載されている庭園の平面図は、昭和10年代の久恒による実測図を『京都名園記』の挿図とするために透写したものであり、原図そのものではない[久恒 1967]。ただし、原図の複写と思われる慈照寺庭園平面図の一部が『京都名

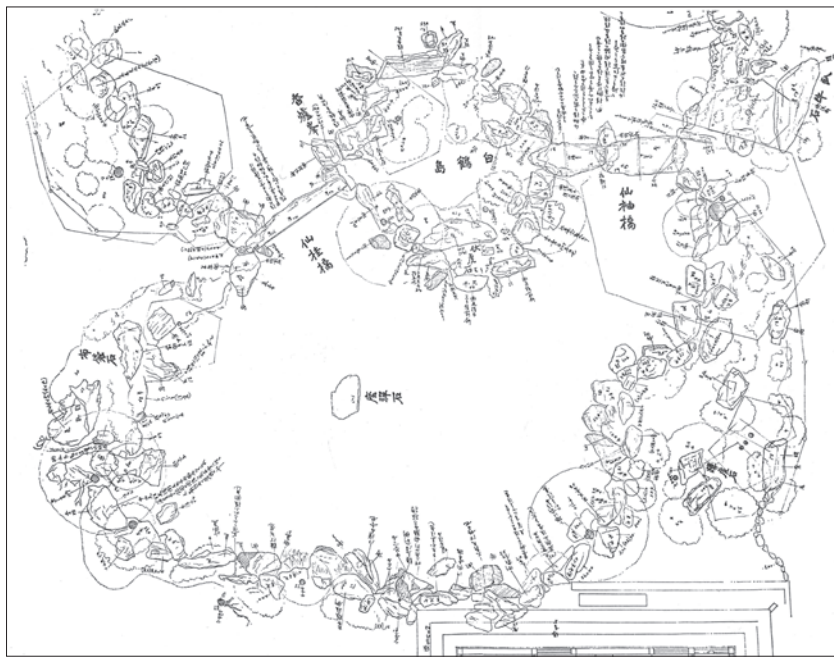


図 1-5 慈照寺の庭の実測図(部分) [久恒 1967]

園記』(上巻)に確認できる。ただしこの図面も吉永義信の図面と同様に等高線がなく、地形の抑揚が不明瞭であり、地形を重視した森蘊の実測図とは異なるものである。

5. 京都大学農学部造園学研究室が輩出した歴史的庭園の調査、保存、修理の担い手

戦前から戦後にかけての京都大学は、歴史的庭園の調査、保存、修理の重要な担い手が輩出された大学であると筆者は考える。東京農業大学造園学科を1947(昭和21)年に卒業し、龍居松之助の計らいで京都大学農学部林学科の研修生になった平井昌信(京都市役所、日本技術開発を経て農大造園学科助教授を歴任)の自伝[平井 1995]によれば、昭和10年代後半から20年代には、京大に2人の造園の教授がい

た。一人は造園学研究室の関口鏐太郎であり、もう一人は森林経理研究室の岡崎文彬であった。平井が研修生になったのは関口の造園学研究室であり、当研究室には、助手に中村貞一（後の京大教授）と新田伸三（後の九州芸術工科大学教授、名城大学教授）がおり、大学院生には久保貞（後の大阪府立大学教授）、浅野二郎（後の千葉大学教授）、村岡正（後に森蘊と庭園文化研究所を共同）、田中正大（後の東京農業大学短期大学教授）が在籍していた。関口鏐太郎は京都大学教授に着任する以前は高等造園で教鞭をとっていたこともあり「東京農業大学造園科学科 2006」、京大造園学研究室の関口鏐太郎のもとには、上述の久恒秀治のほか、京都府技師として吉永義信の支援のもと天龍寺、竜安寺、慈照寺、鹿苑寺の各庭園の修理を実施した中根金作、現代造園で活躍する西川浩、荒木芳邦、井上卓卓といった高等造園卒業生の面々が何らかのかたちで在籍・出入りしていた「平井 1995」。

ここで注目されるのは、村岡正、浅野二郎、久恒秀治、

中根金作といった、名勝庭園の保存・修理に関わる人材が造園学研究室から育っていたことである。名園の宝庫という京都の地域性もさることながら、関口鏐太郎が史蹟名勝天然記念物保存行政に関する委員として指導的役割も有していたことも関係したと筆者は考える。この流れは、名勝の保存に資する学統として、牛川喜幸、加藤允彦、中村一氏、安原啓示氏、田中哲雄氏、尼崎博正氏、白幡洋三郎氏、飛田範夫氏、丸山宏氏、佐々木邦博氏、小野健吉氏、井原縁氏らへと、連綿と受け継がれてきているのである。

6. 森蘊による調査、保存、修理の活動の位置づけ・評価

本稿では、雑駁ながら日本近現代における歴史的庭園の調査・保存・修理をめぐる状況について述べてき

た。これを踏まえ、以下に森蘊が日本庭園に目覚めた経緯を確認しつつ、森の業績について位置づけ・評価を行なった「粟野 2018」*2。

▼1 森蘊が日本庭園に目覚めた経緯

森蘊は、1905（明治38）年8月8日、東京府立川村（現東京都立川市）に生まれた。1929（昭和4）年に東京帝国大学農学部農学科に入学した。森が東大に入学した当時、造園学の講義は農学の原熙と林学の田村剛によって開講されていた「森 1973」。その講義で田村剛（大正9年12月に日本庭園の発達に関する論文で林学博士を取得）の熱の込められた日本庭園の講義に感動したことが、森が日本庭園に強く関心を寄せていったきっかけであった。森は林学科・農学科共通科目として開講されていたこの造園学の講義を1929年から1931年（昭和4～6年）の3年間、続けて受講した「森 1973」。

1931（昭和6）年、東京帝国大学農学部農学科

では原熙が停年直前に道筋をつけて造園を扱う園芸学第二講座が誕生した「井手 1996」。本講座の主任教授は原熙門下の丹羽鼎三（1891～1967）であった「北村 1996」。森は東大林学科ではなく農学科の学生であり、丹羽が森の卒業論文の指導教官となった。丹羽は森を内務省の折下吉延のところに送り込むという意図から卒業論文のテーマに「路傍公園」を勧めたが、森はどうしても日本庭園をテーマとしたということとこれを拒否し、大学院では農学から林学に転じて田村剛に指導を求めたのであった。森は田村の紹介を経て藤島亥治郎、藤岡通夫、福山敏男といった建築史家にも指導を求め、日本庭園史研究を推進していったようである「森 1973」。したがって森と丹羽鼎三との関係は「一種の破門状態」「日本遺跡学会 2014」であったらしい。

▼2 庭園と建築をセットで研究する姿勢

森は学生だった昭和初期に外山英策の研究に出会う

た。そこで森は適切な文献選択による史的研究の重要性と、庭園は建物とセットで研究しなければならない点を自覚した〔森 1973〕。

東京大学大学院を経た昭和10年代には、森は内務省で国立公園の仕事をしつつ、いろいろなところへ顔を出しては庭園を独学で勉強していたとされる〔日本遺跡学会 2014〕。その間の庭園史研究の成果は、造園雑誌ではなく、建築学会や建築史会に発表されたものが多かった^{*3}。これは外山英策の諸研究から庭園と建築とはセットで研究しなければならないという森の研究姿勢に起因するものなのか、丹羽鼎三との不仲の関係から造園雑誌に投稿することが憚られたのかは不明である。ただし、『建築史』に掲載された論文には、「浄瑠璃寺建築と庭園」（1944、6巻3号）や「称名寺の建築と庭園」（1944、6巻4号）とあり、その題目から建築と庭園の関係を明らかにしようとしたことが把握できよう。

▼3 日本史全体への位置づけを意識した庭園史研究を展開

森の研究対象の特色は宮庭庭園を軸として扱っていた点にある。森と同時代を生きた重森三玲が中世の禅宗寺院の庭園の様式・意匠を評価の対象としてきたのに対し、森は平安時代の貴族邸宅の寝殿造系庭園や浄土庭園、江戸時代においても桂離宮といった宮庭庭園を検討したことが多い。森は東大農学部農学科丹羽鼎三のゼミにおいて先輩から「平安鎌倉時代庭園のことや寝殿造系庭園のことなど分かるはずはない」〔森 1973〕と批判され、研究心に水をかけられて悔しい思いをしたらしい。これが宮庭庭園を主たる研究対象とした理由の一つなのかもしれないが、森の『造園雑誌』に掲載された論文「鳥羽殿庭園考」〔森 1938〕、「鎌倉時代宮苑に関する研究」〔森 1939〕に共通する問題意識として、従来の日本庭園史研究は寺院に残る庭園遺構にとらわれがちであり、日本文化が宮廷や公家によって形成されてきた日本史研究の流れに庭園史

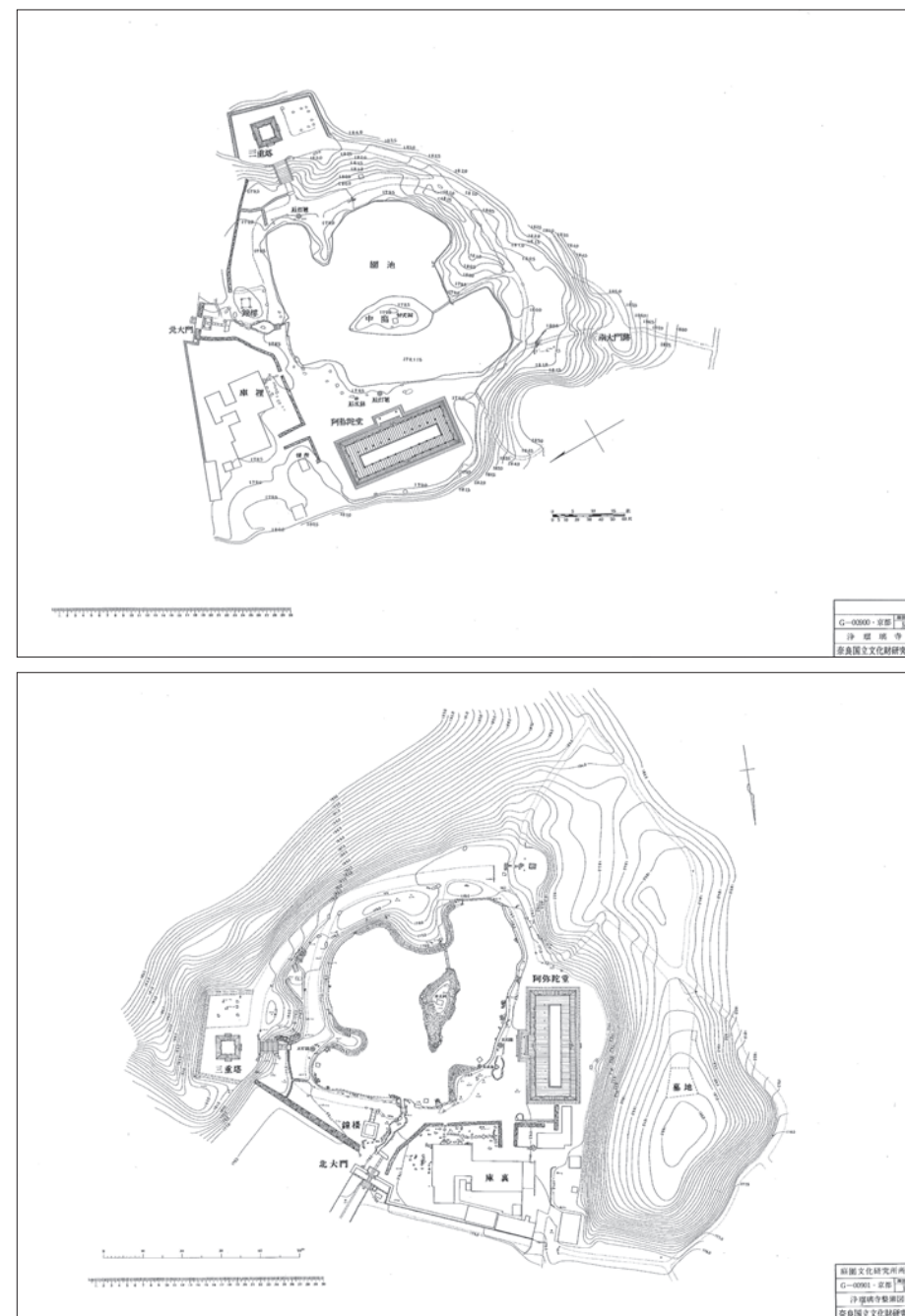


図1-6 森蘊の浄瑠璃寺庭園図面（上：整備前の実測図／下：整備後の実測図）（奈良文化財研究所蔵）

のみが歩調を外していた点を指摘しており「森 1938、1939」、森が庭園史そのものを日本史全体の中で編成しようとしていた姿勢をうかがうことができる。

▼4 庭園の地形を重視した実測調査による旧態の考察

森は、鎌倉、平泉、奈良、京都等の古都に所在する庭園遺構の実測を数多く行なった。建造物もしくは建造物跡、池泉、水路、石等の地物を正確に計測して庭園と建築とを総合的に把握しようとしていた点は同時代の吉永義信、重森三玲、久恒秀治と同様である。ただし注目すべきことは、森だけが庭園の実測に昭和初期から水準測量を導入していた点である。重森三玲の実測図は絵画的にも美しいがスケッチに頼った部分が多いため誤差が大きく、吉永義信や久恒秀治の図面は地割は把握できるがいずれも高低差を記してはいなかった。一方、森の図面は等高線に海拔高の数字を記入し、地形の凹凸や抑揚を表現し、旧地形についても

推定したり、庭水が枯れていても地形から水源が復元的に考察できるように整理した点が特徴である。

そして森の実測図面は植栽の表現がないことが多い。植栽は作庭後の経年によって枯死や実生によって変化している場合が多いためであった。

▼5 発掘調査知見等の先駆的活用

1932（昭和7）年には、森は鎌倉の永福寺庭園跡の発掘を経験している。森本人は発掘について熱心ではなかったようであるが「森 1981 17頁」、「日本の庭園」〔森 1964〕に挿図として使用された発掘中の写真を確認すると、苑池の汀線、池底の石敷などが検出されており、本格的な発掘調査の方法を用いて庭園の旧態に迫っていたことがわかる。その前年には慈照寺上部庭園の発掘調査を関口鏝太郎、吉永義信、龍居松之助の立会いのもとに田中泰治が行なって保存・修理につなげていったことを本稿では言及したが、森自身もほぼ同時期に庭園の調査研究に発掘という方法

からアプローチしていたのである。

さらに国立博物館保存修理課を経て1952（昭和27）年に奈良文化財研究所建造物室長に就任し、1959（昭和34）年に京大から牛川喜幸が奈文研に入所してからは、法金剛院の調査で電気探查を導入している。奈文研の退職1年前には平城宮東院庭園の発掘調査が始まるが、ここでは森も発掘調査知見に基づき庭園の特徴を押さえる方法を明確に採用した。

▼6 調査・研究から修理にいたるまでの歴史的庭園保存の系統的实践

さらに森は、1967（昭和42）年に奈文研を退官後、1968（昭和43）年に村岡正と庭園文化研究所を設立し、調査・研究のみならず、浄瑠璃寺、毛越寺、和歌山城紅葉溪庭園などの歴史的庭園において、関係文献の精査、実測、発掘、保存・修理、復元にいたるまでの工程を、系統的に実践している。これは特徴的で、すなわち、森は机上の調査研究にとどまらず、その学

術的成果を保存・修理を通じて実空間に展開するという実践性を示し、修復造園家とでもいうべき職能像を確立した点が注目される。これらは歴史的庭園のみならず、加満田旅館庭園や紫式部公園日本庭園など森自身の発想に基づく新規作庭へと展開する。このことは森蘊個人ではなく、パートナーとしての村岡正、保存・修理工事の実際を担当した徳村五三郎、城越章宏、山中功、小山潔、牧岡一生の協力〔森 1973〕があったからであろう。

▼7 結び

以上のように森蘊は、歴史的庭園の文献史研究・実測調査・発掘調査・保存修理、そして新規庭園の作庭といった多面的な方法を駆使してきた造園史家・造園家であることが確認できた。筆者は奈文研時代に平澤毅氏から、森は、作庭を実際に行なっていくために調査・研究に打ち込んでいたということを牛川喜幸に語っていたことを教えていただいたことがある。

「私は本当の庭園鑑賞に値するものをこの国に永久に残すために、研究に、発掘・復元・整備に、作庭活動を通じて協力しつつあるのである」〔森 1973〕という言葉からわかるように、森蘊は庭園史研究を、先人がつくった庭を適切に保存・修復・継承するための実学であるのみならず、「未来を読むための学」としても位置づけていたと筆者には思われてならない。

なお、本稿は、『日本庭園学会誌』に投稿中の論文「日本近現代の歴史的庭園の調査・保存・修理を巡る状況からみた森蘊の評価」（栗野隆、マレス・エマニユエル著）の内容を加筆・修正したものである。

補注

*1 日本庭園協会（1934）「風水害と造園」「庭園と風景」16巻11号は昭和9年11月に発刊されたが、記事はおそらく10月



図1-7 森蘊の庭園作品（上：遍照院庭園、1960年作庭、福岡県久留米市／下：紫式部公園、1986年作庭、福井県越前市）（マレス撮影、2013年）

に作成されたものと考えられる。

*2 本章は、栗野隆『造園雑誌』（1～10巻）にみる庭園史・意匠研究の系譜『ランドスケープ研究』82巻3号の内容を加筆修正したものを含んでいる。
*3 昭和10年代においては、下記の論文が建築関係雑誌に掲載されている。

- ・1938（昭和13）年「平等院庭園考」『建築学会論文集』9巻
- ・1944（昭和19）年「浄瑠璃寺建築と庭園」『建築史』6巻3号
- ・1944（昭和19）年「称名寺の建築と庭園」『建築史』6巻4号
- ・1939（昭和14）年「平安時代前期庭園の研究」『建築学会論文集』13巻
- ・1938（昭和14）年「法金剛院庭園について」『建築史』1巻1・2号

引用文献

- 栗野隆（2018）『造園雑誌』（1～10巻）にみる庭園史・意匠研究の系譜『ランドスケープ研究』82巻3号
- 井手久登（1996）『日本のランドスケープアーキテクト原典』『職域の拡大と専門家養成の先駆者——ランドスケープ研究』59巻4号、239～242頁

小澤主次郎（1890－1905）「園苑源流考」（『國華』所収）
國華社
小野健吉（2004）『岩波日本庭園辞典』岩波書店
北村文雄（1996）「日本のランドスケープアーキテクト 丹
羽鼎三 造園植物研究の開祖（昭和激動期・造園教育界の巨
星）」『ランドスケープ研究』60巻1号、1－4頁
国立情報学研究所・北本朝展氏ホームページ「デジタル台風
過去の台風災害・被害」（最終閲覧：2018年8月18日）
（情報の出典は「理科年表」による（本HP記載） [http://
agora.ex.nii.ac.jp/digital-typhoon/disaster/help/past.html](http://agora.ex.nii.ac.jp/digital-typhoon/disaster/help/past.html)）
重森千青（2016）「伝統文化をベースに永遠のモダンを追及
した革新者」『重森三玲 庭NIWA』225号、72－75頁
重森三玲（1938）『日本庭園史図鑑』（第2巻ノ上）有光社
重森三玲（1936・1939）『日本庭園史図鑑』（全24巻）
有光社
龍居竹之介（2010）「龍居松之助の造園と東京農大」東京
農業大学リカレントスクール・造園・2010（2011年
1月18日講演・於東京農業大学）
田中泰阿弥研究会（編）（1999）『孤高の庭匠 田中泰阿弥』
展覧会カタログ
東京農業大学造園学科（編）（1984）「龍居松之助先生の著作」
『造園学科記録』84巻1号
東京農業大学造園学科（編）（2006）『近代造園学80年の
あゆみ―東京高等造園学校から東京農業大学造園科学科へ』
東京農大出版会
東京農業大学造園科学科（編）（2011）『造園用語辞典第三版』

彰国社
外山英策（1927）『源氏物語と日本庭園』文友社
外山英策（1934）『室町時代庭園史』岩波書店
奈良文化財研究所ホームページ「森蘊旧蔵資料」（最終閱
覧：2019年3月29日）[https://www.nabunken.go.jp/
research/morisamu.html](https://www.nabunken.go.jp/research/morisamu.html)
日本庭園協会（1934）『風水害と造園』『庭園と風景』16巻
11号、265－286頁
日本遺跡学会（編）（2014）「文化財保護における造園学の
役割」（口述）井手久登（聞き手）平澤毅・一ノ瀬友博・恵
谷浩子『遺跡学の宇宙 戦後黎明期を築いた13人の記録』日
本遺跡学会 190－219頁
久恒秀治（1967）『京都名園記』（上巻）誠文堂新光社（な
お、本著作は上・中・下巻の3冊であり、1967年まで継
続的に誠文堂新光社より刊行された）
平井昌信（1995）『先達あり 友ありて 今』私家版
森蘊（1938）「鳥羽殿庭園考」『造園雑誌』5巻2号、90－
102頁
森蘊（1939）「鎌倉時代宮苑に関する研究」『造園雑誌』6
巻3号、142－155頁
森蘊（1964）『日本の庭園』吉川弘文館
森蘊（1973）『庭ひとすじ』学生社
森蘊（1981）『日本庭園史話』日本放送出版協会
文部省（編）（1935）『名勝調査報告第二輯』
横井時冬（1889）『園藝考』大八洲学会
吉川需（1985）「龍居松之助先生の立場」（『龍居松之助先生

を憶う』所収）「龍居松之助先生生誕百年記念会」実行委員
会
吉永義信（1936）「創設時代と現代との醍醐寺三宝院庭園」
『造園雑誌』3巻2号、154－167頁
吉永義信（1943）「大徳寺大仙院書院庭園の復原」『造園雜
誌』10巻3号、28－31頁

森蘊の庭園測量図

飛田範夫

はじめに

森蘊（1905―1988）先生の庭園史研究の業績の一つは、正確な庭園測量図を作成したことにある。庭園の測量をすることについて、森先生は「庭園史学を単に趣味的なものから脱皮させ、もっと科学的な根拠を持たせようとしてはじめた測量や発掘」から出発したと述べている「森 1971 序」。大学で学んだ測量技術をもとに、それを研究に生かしていたのでは

ないかと推測してしまうが、実際はそうではなかった。本稿では森先生がいつ頃から正確な測量技術を体得したのかを探り、どのような業績を残したのかをみることにしたい。以下、煩雑になるため失礼ながら、すべての方々の尊称を省略する。

1. 大学での専攻と測量

▼1 森蘊の学歴

森の大学入学までの略歴を見ると、次のようになっている「田中 2016」。

- ・1905（明治38）年8月8日 東京府立川村（現東京都立川市）に生まれる
- ・1918（大正7）年3月 青柳小学校卒業
- ・1923（大正12）年3月 東京高等師範学校付属中学校卒業
- ・1928（昭和3）年3月 浦和高等学校理科乙類卒業
- ・1929（昭和4）年4月 東京帝国大学農学部農学科入学

1歳年上の建築家・谷口吉郎の学歴と比較して見て

も、中学校5年・高等学校3年で卒業できたはずなのだが、森は高校を出るまでに5年かかったうえに、大学に入るのに1年間空白がある。希望した高校に入学するのが難しかったのか、家庭の経済的事情があったのか、それとも病弱だったのだろうか。同年の人間より大学に入るのが3年も遅れたことは、青年期の森に精神的に影響を与えたことだろう。森の回想には恩師が並ぶが、大学時代の友人のことにはまったく触れていないのは、年下だった同級生たちとは気持ちを通じ合わなかったからではないだろうか。大学の指導教官となった丹羽鼎三（1891―1967）ともうまくいかなかったのは、森の孤独が影響していたように感じられる。

▼2 測量の授業

丹羽は園芸学が専門で、東京帝国大学農学部農学科園芸第二講座として、花卉および庭園学を担当していたのだが、林学科講師だった田村剛（1890―1979）が行なっていた、農学科と林学科の共通

科目だった「造園学」の講義に、森は惹かれていった
〔森 1973 12頁〕。丹羽が与えた卒業論文の課題は
「路傍公園」だったが、森は田村の影響を強く受けた
ことから、日本庭園の歴史の研究を目指すようになった
ていく〔森 1973 12頁、25頁〕。

現在測量士は、測量法第50条第1号の規定では、「大
学であつて文部科学大臣の認定を受けたものにおいて、
測量に関する科目を修め、当該大学を卒業した者で、
測量に関し一年以上の実務の経験を有するもの」となっ
ている。「測量に関する科目を修め」というのが重要で、
測量法施行令第14条で「土木工学科、農業土木学科、
林学科、採鉱学科若しくはこれらに相当する学科」と定
められている〔国土地理院ホームページ〕。おそらく昭和初期
も同様だったであろうから、東京帝国大学の農学科には
林学科とは違って測量の授業はなく、森は大学では測
量を学んでいなかっただろう。「庭園史研究に着眼する
ずっと以前から地理が好きで地図を買い集め、大学で
は測量学を熱心に勉強していたから」と森は述べている

『源氏物語と日本庭園』〔外山 1927〕のように文献研
究を踏まえたうえに、現地の実測・発掘を加味した「平
安鎌倉時代庭園遺跡の研究」を卒業論文のテーマにし
ることを決めている〔森 1973 21、29頁〕。

▼2 ポケット・コンパス測量

平泉の庭園を見に行った際には、独学で始めたポ
ケット・コンパス測量を開始している〔森 1973
164頁〕。コンパスで方向を確認して、距離は歩測で
測定したものだろうから、簡易な略式の測量というこ
とになる。1931（昭和6）年12月には淳和院跡
を訪れているが、その時の測量図が残っている（図
2-1）。淳和院の場所は、北は四条坊門小路、西は
道祖大路、南は四条大路、東は西堀川小路で囲まれ
た方二町とされている〔京都市編纂室 1980〕。しかし、
森が測定した北は三条通、西は西堀川通、南は四条
通、東は西大宮通に挟まれる東西二町・南北四町の部
分は、その東側になるので一致しない。鎌倉時代の

ので〔森 1981 12頁〕、測量は独学だったことがわかる。

2. ポケット・コンパス測量の時期

▼1 卒業論文のテーマ

卒業論文テーマを決定していくまでは、森は暗中
摸索だったようだ。平安時代の寝殿造に興味をもつ
た森は、親戚の紹介で東京工業大学教授の前田松韻
（1880-1944）に面会して、寝殿造については
建築と庭園の両方の専門家がともに研究を進めるべき
だと励まされている〔森 1973 23、24頁〕。大学3年に
なった1931（昭和6）年4月には、東大工学部建
築学科の藤島玄治郎助教授（1899-2002）の
講義の聴講を始めている。藤島の講義で、平泉毛越寺
跡には伽藍の礎石と園池が残存していることを聞き、
現地を見に行き、外山英策（1888-1953）の

『拾芥抄』の図では、森が測量した地点は「小泉」と
記された場所になっている。

1932（昭和7）年3月に東京帝国大学農学部農
学科を卒業して、4月には田村剛の勧めで大学院に進
んだのだが、1933年に父親が亡くなったために大
学院に籍を置いたまま、田村の推薦によって内務省
衛生局嘱託になって、国立公園の区域指定調査にあ
たっている。この時に計画に必要な実測図の作成を行
なっているから、平板測量の技術を覚えたのだろう

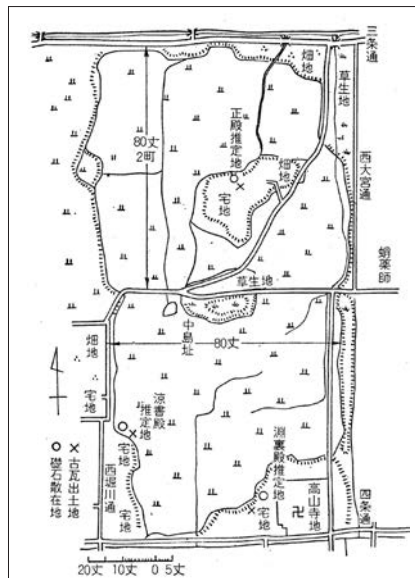


図 2-1 淳和院跡現況図〔森 1973 41頁〕

「森 1973 15-17頁」。1934年には大学院を卒業している「森 1944 著者経歴」。大学院での研究成果の一部が、1935年5月に発表された「永福寺に於ける鎌倉時代前期の庭園遺跡の研究」(『造園研究』13巻)などになるようだ。

1938(昭和13)年1月に厚生省体力局施設課に勤務しているが、この年に測量図なしの「鳥羽殿庭園考」(『造園雑誌』5巻2号)、翌1939年4月に「平安時代前期庭園に関する研究」(『建築学会論文集』13巻)を執筆して、「嵯峨院(大覚寺)庭園現況図」と「淳和院庭園想像図」を掲載している。就職してからも庭園の研究は続けていたことがわかる。

▼3 召集で南方へ

1941(昭和16)年9月には、厚生省から移籍して東京市技手になり、1944年4月に井之頭自然文化園の初代園長に就任している「森 1973 27頁」。1941年12月8日に真珠湾攻撃が行なわれ、アメリカ

カとの戦争が開始されたが、世の中は余裕があったのか、森は1944年3月に『日本庭園の伝統』(一条書房)を出版し、古代・中世・近世の各庭園の概要を述べ、造庭技術については秘伝書と著名な造庭家を取り上げている。これが翌年の『平安時代庭園の研究』の下敷きになったようなのだが、この本には測量図はまったく掲載されていない。

満17歳から40歳、1943(昭和18)年からは45歳までの者は、召集があれば応じなくてはならなかったからか「渡邊 2014」、39歳になっていた森は1945年1月に海軍技師となつて、ボルネオ民政部員として南ボルネオに行き、原始住居や農業園芸などの調査にあたっている「東京文化財研究所美術部 1989」。だが、1945年7月に『平安時代庭園の研究』(桑名文星堂)が出版されている。第1章で上古(飛鳥・奈良時代)、第2-5章で平安時代庭園を扱い、谷村庄平所蔵『作庭記』や『山水并野形図』の全文も掲載している。この本には等高線が入った「朝鮮慶州臨

海殿庭園遺跡実測平面図」が掲載されているが、関野貞(1868-1935)から借用したもので「森 1971 13頁」、森自身が朝鮮に渡つたという記述はみられない。この本の出版については、戦地に行つていてまったく知らなかったと、筆者は晩年の森から聞いた。南洋に行つたために2回も乗っていた船が撃沈されて、海を漂つたという。

3. 桂離宮の研究と測量

1945(昭和20)年8月15日に戦争が終結し、復員した森は1946年5月に東京都の農事試験場に勤務し、翌1947年5月には東京植木株式会社の研究部長になっている。食べていくためには、どのような仕事でもするしかなかったのだろう。同年8月には国立博物館嘱託となつて、修理課で文化財保護に携つて

いく。1950年に文化財保護法が成立し、文化財保護委員会が設立されて、修理課は同委員会の建造物課にかわる「東京文化財研究所美術部 1989」。同年から森は桂離宮の研究に取り組んでいき、「桂離宮古書院について」(『建築史研究』3巻)を発表している。

平安時代から歴史を順にたどっていくつもりだった森が、いきなり桂離宮の研究に取り組んだのは、建築学会の推薦で1936(昭和16)年度に「江戸時代初期建築と庭園の研究、殊に桂離宮について」というテーマで、文部省から96円の研究補助を受けたことが契機だった。「私が割合に早く桂離宮研究にふみきらざるを得なかったのも、先生(前田松韻・伊東忠太・藤島亥治郎)のおかげと考えてよさそうである」と森は述べている「森 1973 25頁」。

1951(昭和26)年には「桂離宮古図について」(『建築史研究』8巻)を書き、9月には『桂離宮』(創元社)を出版している。この本で森は桂離宮の建物について、最も古いのが中書院で、それに他所から持つてこられ

た古書院が付け加えられたという説を出している。しかし、近年の解体修理の結果、これまでの説のように古書院が最初で、それに中書院が増築されたことが判明している〔宮内庁 1984〕。測量図については、桂離宮の全体平面図と各建物の飛石を含む「建築平面図」を掲載しているが、正確な測量図にはまだなっていない。

4. 奈良国立文化財研究所での測量

▼1 奈良国立文化財研究所への就職

1952（昭和27）年4月に奈良国立文化財研究所が新設されると、森は建造物研究室の初代室長に就任している〔東京文化財研究所美術部 1989〕。1953年には、「桂離宮の研究」で東京工業大学から工学博士号を授与されている。庭園という研究課題からすると、林学あるいは農学博士号を取得するのが普通なのだ

が、過去の経緯から東京大学でもらうわけにはいかなかったのだろう。1950年に藤岡通夫（1908-1988）に依頼されて、森は東京工業大学において「庭園学」の非常勤講師を担当していた〔田中 2016〕。藤岡通夫は東京工業大学建築学科卒業後、1939年に同学科助教教授になり、1951年に前田松韻の後を受けて教授になっているので〔ウィキペディア・藤岡通夫〕、学位授与は藤岡との関係が強かったことによるのだろう。1956（昭和31）年5月に森が出版した『新版桂離宮』（創元社）では、庭園の各部分の実測図が掲載されている（図2-2）。主要な建物周囲の地形測量もされていて、50センチ間隔で等高線が描かれている。「池底を測量してみると1米50位の水深の舊河床が東西に横たわっているのを探知することができ」〔森 1956 310頁〕と述べているように、測量によって園池の成立過程も明らかになっている。奈良国立文化財研究所に勤務するようになった1952-1956年の間に、詳細な実測図を作成したようだ。

村岡正夫人から、幼かった息子を背負いながら箱尺を持って桂離宮の池を測ったと筆者は聞いているが、おそらくこの時のことだろう。研究調査費が少なかったために、家族まで駆り出されたようだ。

桂離宮の模型作成は後、1961（昭和36）年に

開始されて1963年に完成している〔森 1973 157-158頁〕。この模型は森の息子史夫（1938-）と、彼と同じ日本大学の建築科の級友たちが作成した

もので、樹木はヒョウタンのタワシ、石は実物だと逆に違和感が出てしまうので消しゴムを切って作っていると、筆者は村岡正から聞いた。

▼2 村岡正の調査協力

1953（昭和28）年秋に、京都大学農学部大学院（正確には研究生か）の村岡正（1926-1990）らと修学院離宮の実測調査を行なっている。この時のことを、森は次のように述べている。

「下御茶屋と上御茶屋の地形は、スタヂア利用によるトランシット測量、ただし石組および細部は平板測量を併用した。中御茶屋は平板測量にレベルによる高低測量を加味し、離宮内についてはおのおの縮尺一〇〇分の一の実測図を得た。（中略）農耕地の地形をも調査し、全体を五〇〇分の一の縮尺とし、その間に上・中・下の御茶屋をはじめんだ離宮全体図も作った」

〔森 1973 99-100頁〕

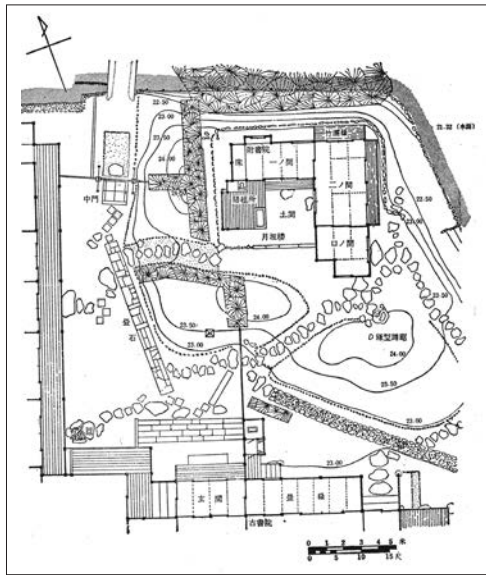


図2-2 桂離宮「興寄月波樓付近実測図」〔森 1956 付図〕

筆者が中村一（1931）から聞いたところによると、この時の測量には、京都大学造園学研究室の中村や近藤公夫（1929-2016）などが参加していて、近藤は器用にトランシットを使いこなしていたという。この冬には、村岡が奈良国立文化財研究所の遺跡庭園研究室の臨時職員になり、有力な補佐員を得たことで、森は次々に庭園実測を行なっていく。

▼3 測距アリダードの使用

1954（昭和29）年4月には、大乗院庭園の調査を開始し、「敷地の周辺をトランシットを使用して周囲測量」を行なっている「森 1971 31頁」。7月に行なった円成寺実測は、「二晩泊り」というあわただしいものだった「同 44頁」。この時から、南都諸大寺寺地や『中世庭園文化史』の実測図は、「測点ごとにテープを引く平板測量を行わず、細部は新式の測距アリダードを使用し、周囲測量はトランシット、高低はレベルを併用し、測点ごとに海拔稿を計算記入した上で



図2-3 江田式測距アリダード

等高線を切った」「同 18頁」というように、角度から換算して距離が計測できる「測距アリダード」という新式の測量器具が導入されている。

地理調査所技養測地学教室長だった高橋三郎が、「江田式測距アリダードについて、使ってみての感想」を、雑誌『測量』（日本測量協会）に1955（昭和30）年7月に発表しているので、森の使用時期からすると、1954年が発売の最初だろう。最近インターネットで売り出された中古品が、当初の型ではないだろうか

立文化財研究所学報第2冊）を刊行している。この学報には下御茶屋・中御茶屋（部分）・上御茶屋の現況実測図と、万松塙平面並断面実測図・上御茶屋西浜（塘堤）断面図が掲載されている。西浜（塘堤）断面図からは、谷川の水を堰き止めるために土塁を築いてから裾部分を石垣で補強して、上御茶屋の園池（浴竜池）を築造していることがわかる（図2-4）。

1955（昭和30）年には、村岡夫妻や奈良女子大学生有志らと、平泉の庭園の「平板とレベルを併用した実測」を行なっている「森 1973 53頁」。奈良女子大学卒業生たちと森との交流は長く続いていたと村岡から聞いているが、この測量のときの学生なのだろうか。この年の秋には、後に『中世庭園文化史』にまとめられる浄瑠璃寺境内の実測を、「四日間」で仕上げている「森 1971 44頁」。筆者は1977年の浄瑠璃寺保存整備事業のときに、この測量図を参考に製図を行なったが、ケント紙に書き込まれた文字は森直筆で、個性的だがレタリングとして味わいがあるものだった。

（図2-3）。森が定年後に設立した庭園文化研究所で使用していた測距アリダードは、望遠鏡や器械本体の形が洗練された形になっているので、研究所の開設時に最新型を購入したのだろう。当時は何十万円もする高価な器具だった測距アリダードは、名称のとおりテープで距離を測る必要もなく、高低差があっても正確に水平距離を測れるもので、池などを測るときには非常に便利なものだった。しかし、現在は江田式の販売は終了していて、光波距離計が付けられた50万円ほどの他社製品が販売されている。

1954（昭和29）年7月中旬～9月上旬には、大岡実（1900-1987）、浅野清（1905-1991）の奈良の寺院一帯の測量を手伝っているが、この時は従来の測量器械のトランシット・ポールとスチールテープを使用している「森 1971 15-16頁」。こうした文化財研究所の仕事もあって多忙だったのだろうが、9月には前年から行なっていた修学院の測量結果をまとめて、『修学院離宮の復原的研究』（奈良国

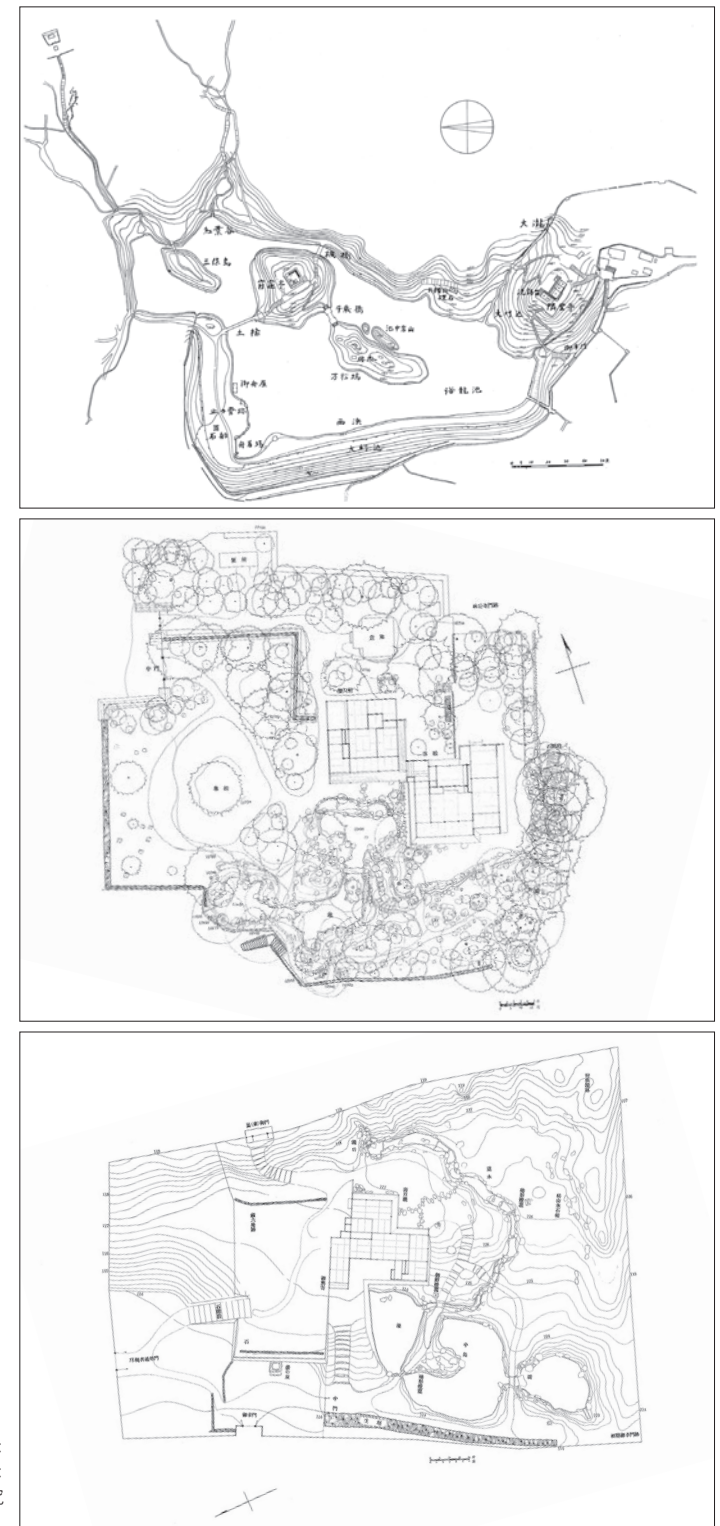


図2-4 修学院離宮図面（上：上御茶屋／中：中御茶屋／下：下御茶屋）（奈良文化財研究所蔵）

1958（昭和33）年4～5月には、奈良の永久寺跡の実測をし〔森 1971 44頁〕、またこの年には奈良公園の全域調査を奈良県観光課から依頼を受けて行なっている〔同 73頁〕。この年の暮から1959年正月にかけては、奈良県の郡山城跡の実測を500分の1で行なっている〔同 62頁〕。100メートル離れている地点は、50メートルテープを使う平板測量だと1～2回移動させなくてはならないが、100メートルは図上で20センチなので、測距アリダードだと1回で正確に測定することができる。城のような広大な場所では、測距アリダードが威力を発揮することになる。

▼4 『中世庭園文化史』の測量図

1959（昭和34）年2月には『中世庭園文化史』（奈良国立文化財研究所学報第6冊）が発刊されているが、大乘院庭園遺跡・本泉寺庭園・山科南殿跡・西芳寺庭園・一乗谷朝倉氏館湯殿庭園跡・一乗谷朝倉氏館諏訪館庭園跡・慈照寺庭園・妙心寺退蔵院庭園・願行寺庭

園・浄瑠璃寺庭園・忍辱山円成寺庭園・内山永久寺庭園跡など、中世の主要な庭園の地形実測図が掲載されている。福井県の一乗谷朝倉氏遺跡など遠隔地の庭園を含めて、短期間でよくまとめている。この『中世庭園史の研究』で、翌年5月に森は日本建築学会賞を受賞している〔田中 2016〕。

測距アリダードを使った平板測量について、説明しておこう。「海拔高は、地図上に記入されている三角点または水準点を現地で見つけ、そこから引くのを原則としている」と森が述べているように、最初に海拔高が測定される〔森 1971 18頁〕。実際の測量の状態が図2-5で、平板の上の測距アリダードを覗いているのが村岡正、奥でスケッチブックと箱尺（スタッフ）を持つているのが森蘊だろう。スケッチブックに森は庭園の略図を書き、測点を番号で記して「今何番」と村岡に告げ、村岡は測距アリダードが読み取った点に番号を付けていく。この写真には写っていないが、レベルを村岡が、または別の人間が覗いて箱尺の数値



図 2-5 実測情況 [森 1964 136 頁]

を読み、レベルブックに測点番号を添えて記入していた。森の庭園実測図は等高線を入れるために、1日に1000〜3000点を測定しているが、レベルブックの測定値をその日の夜に換算して、標高を図面に書き入れて等高線を書いておく決まりになっていた。こうした図面書きが村岡の夜の仕事だった。庭園文化研究所の時期に、庭園整備工事を担当していた徳村造園社長の徳村五三郎は、現場での厳しさから村岡のことを、「鬼軍曹」と陰で呼んでいたという。測量から戻ってから事務所では、測点と等高線を書き込んだである図面をケント紙(後にはポリエステルの薄膜「マイラーフィルム」

を使用)にトレースしていき、主要な構成要素に名称を入れ、タイトル・方位・縮尺を書き込んで完成となる。

▼5 牛川喜幸が研究所職員に

1959(昭和34)年4月に京都大学農学部を卒業した牛川喜幸(よしゆき)(1935-2009)が、奈良国立文化財研究所の建造物研究室の技術補佐員になり、1962年4月には建造物研究室の技術員になっている^{*1}。この時期から森と牛川との共同研究の色合いが出てくる。牛川と一緒に測量を行なって、1961年6月に「瑜伽山と鬼蘭山城跡」という論文を『大和文化研究』[森・牛川 1961]に書いている。牛川は「森先生は私のお師匠さん」と口癖のように言っていたから、かなり仕事のうえでしごかれたのだろう。

1959(昭和34)年夏には京都市の法金剛院庭園一帯を測量し、翌年に法金剛院庭園の地盤の電気探査を牛川が行なっている[森 1973 141頁]。電気探査を手伝った人の話によると、電極を持っていると電

流が流された瞬間にかなりショックを受けたという。同じ土質状態ならば、地中に電気は同じように流れるはずだが、水分が多いなど土質が異なると電気の流れの強さが変化するので、池跡は明確な差になって現われるとされている。

1960(昭和35)年春には大阪府堺市の南宗寺庭園の復元・整備[森 1973 135頁]を行なっている。本格的な庭園保存整備の最初ということになるだろう。また、同年夏に奈良公園の実測[森 1971 125頁]と一乗院跡の実測を実施し[同 132頁]、9月に薬師寺境内の測量[同 81頁]、10月初旬〜11月下旬に奈良の頭塔の地形実測[同 203頁]、7月末〜12月末には唐招提寺旧寺地の実測調査を行なっている[同 90頁]。一乗院跡の実測図には1964年に牛川が行なった電気探査結果も示されている。

▼6 『寝殿造系庭園の立地的考察』の測量図

1961(昭和36)年11月2日〜10日には、『寝

殿造系庭園の立地的考察』に含まれることになる、伝称徳天皇御山莊池庭跡の実測を行なっている[森 1971 109頁]。また、この年に奈良国立文化財研究所では、南都諸大寺の総合調査(薬師寺・唐招提寺・西大寺・大安寺・法華寺・元興寺・秋篠寺)が始まり[同 80頁]、庭園関係では法華寺境内の地形実測図を作成している[同 105頁]。

1962年(昭和37)5月に『寝殿造系庭園の立地的考察』(奈良国立文化財研究所学報第13冊)が刊行される。「寝殿造系庭園」というのは森の造語で、平安時代の寝殿造庭園の流れを汲むものという意味で使われている。そのために鎌倉時代の天龍寺庭園・南禅院庭園の実測図だけでなく、京都御苑内の江戸時代の閑院宮跡・仙洞御所・近衛殿・九条殿の庭園実測図が掲載されている。

「地形実測図」という名称がつけられた図面は、園池の規模・水系を明らかにするために、周辺まで広く実測したもので、奈良では伝称徳天皇御山莊跡付近・

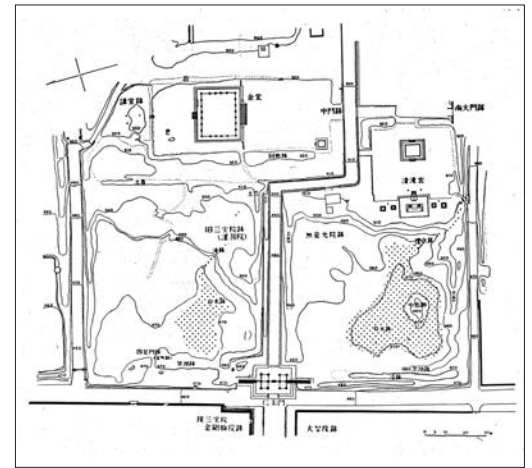


図 2-6 無量光院・旧三宝院跡地形実測図[森 1962 58 頁]

唐招提寺本坊付近・天地院住坊跡湧泉付近・春日野湧泉付近・永久寺大喜院跡付近の地形実測図、京都付近では大沢池（嵯峨院庭園跡）・鳥羽殿秋の山（築山）跡付近・法金剛院庭園跡付近・無量光院旧三宝院（醍醐寺）跡・水無瀬殿跡鶴ヶ池付近・平等院庭園付近・法界寺阿弥陀堂付近の地形実測図、岩手県平泉町の毛越寺庭園（大泉池）・観自在王院池跡の地形実測図、

神奈川県鎌倉市の永福寺・伝大慈寺池跡の地形実測図がある。そのほか旧一乗院（奈良地方裁判所）構内実測図・伊豆の願成就院池跡実測図・仁和寺池庭関係図などが掲載されている。

「無量光院・旧三宝院跡地形実測図」（図2-6）は目立たない実測図だが、等高線の記載が重要なことをよく示している。醍醐寺境内の無量光院・旧三宝院跡は、現地に行くと木々の間に窪地が残っているだけで、荒れ果てた場所という印象しかない。しかし、庭園実測図に等高線を記入することで、かつての園池の範囲が明瞭にわかるようになる。図の網目の部分が旧園池だったことを示している。

▼7 『小堀遠州の作事』の測量図

1962（昭和37）年になると、江戸時代の庭園史研究の一環として、森は小堀遠州論に取り組んでいる[森 1973 112頁]。その結果として1966年3月に『小堀遠州の作事』（奈良国立文化財研究所学報第

18冊）を刊行している。小堀遠州が関わった庭園として、二条城二の丸庭園・伊庭御茶屋跡地形・仙洞御所庭園・金地院庭園・南禅寺方丈庭園・孤蓬庵（大徳寺塔頭）庭園・大徳寺方丈庭園・桂離宮庭園の実測図を掲載している。翌年3月に奈良国立文化財研究所を退官するが、6月に『小堀遠州』（吉川弘文館）を出版している。小堀遠州については、森は古文書の解読も行なっているが、古書店から手紙の実物を購入して、苦労して読んだという本格的な研究だった。

このほかの業績を見ると、奈良国立文化財研究所の勤務期間中は、1964（昭和39）年11月に『日本の庭園』（森蘊編、吉川弘文館）を出版している。この本には、これまで作製した多くの庭園実測図が掲載されている。またこの年の秋には、藤岡通夫が建築を担当した東三条殿の模型の庭園部分の設計図を100分の1で作製し[森 1973 159-160頁]。1966年には、神奈川県立博物館の依頼で現地の実測結果に基づいて、鶴ヶ丘八幡宮の復元模型を作製し[同

162頁]、1967年秋～翌年春には、平泉文化史館に展示するための毛越寺庭園の復元模型の製作に協力し[同 164-165頁]、1968年には実測に基づいて称名寺復元模型を作製している[同 167頁]。

5. 庭園文化研究所の設立

奈良国立文化財研究所を1967（昭和42）年3月に60歳で退官した森は、1968年4月に京都市東山区七条の村岡正宅に庭園文化研究所を開設している。このことが可能になったのは、村岡が家業を廃業したことによる[尼崎・白幡・飛田 1986]。それまでの経験を生かして、官庁・民間からの依頼による庭園の保存整備を開始するようになる。

1970（昭和45）年7月には法金剛院境内の環境整備を行ない、平安時代の滝組の下部を発掘で明らか

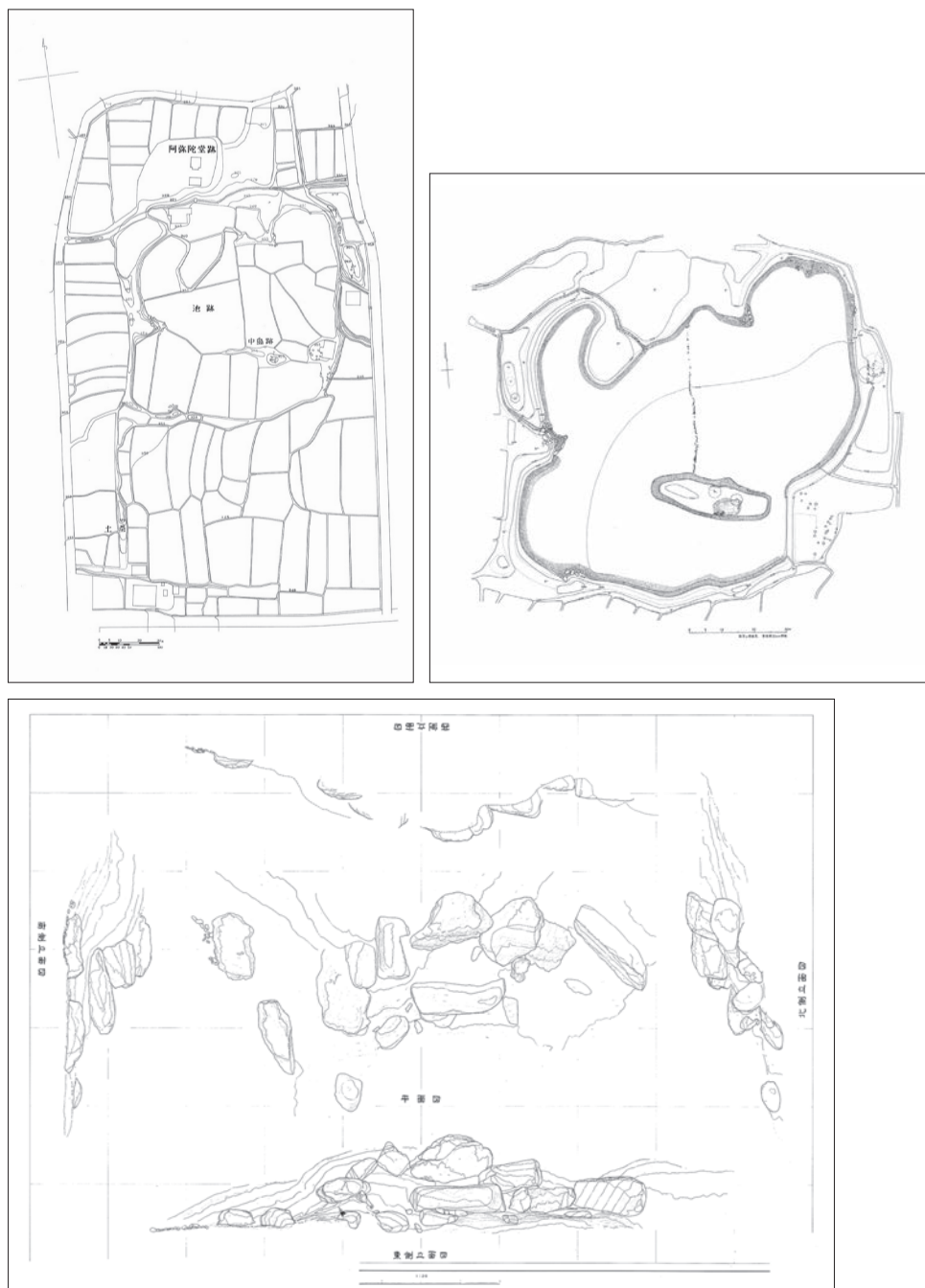


図 2-7 観自在王院図面（上段左：整備前実測図／上段右：舞鶴池整備図／下段：滝組平面・立面図）

にしている〔森 1973 141-145頁〕。1971年1月～1973年3月までは、和歌山城紅葉谷庭園の復元・整備を行なっている〔同 147-153頁〕。復元当初は発掘された青石の色が鮮やかだったが、現在はくすんでしまっていて、水路には土砂が溜まっているのは残念なことだ。1971年秋には、漏水の起こっていた西本願寺滴翠園の整備を行なっている〔同 146頁〕。

1971（昭和46）年秋には毛越寺と平泉町から正式依頼を受けて、毛越寺の綿密な地形・地物の実測を行ない〔同 53頁〕、1972年6月には観自在王院園池跡の復元基本設計をし（図2-7）、8月には磐城市白水阿弥陀堂園池跡の復元・整備に着手して、10月20日～11月3日には旧境内地約9・5ヘクタールを測量している〔同 30頁〕。庭園整備の仕事で変わったところでは、1969年1月に京都の妙蓮寺玉竜院の庭を、唐招提寺東室へ移設している〔同 139頁〕。

出版では1975（昭和50）年11月に『庭園の旅』

（芸艸堂）、1984年11月に『日本史小百科 庭園』（近藤出版社）、1986年3月に『作庭記の世界』（日本放送出版協会）と精力的に続いている。『日本史小百科 庭園』については、「百科事典というものは皆でつくるものですね」と村岡は危惧していたが、森は一人で仕上げてしまった。

晩年まで壮健だったが、1988（昭和63）年12月14日、森は急性腎不全のために奈良県の天理よろづ相談所病院で死去した。享年83歳だった「東京文化財研究所美術部 1989」。その後を追うように、村岡正は1990（平成2）年2月12日に、京都市下京区の武田病院で、心不全のために64歳で死去した。突然の死だったために後継者はなく、庭園文化研究所は消滅してしまった。

おわりに

森蘊の一生は戦争が間にはいったために、波乱万丈

の人生だった。もし南方で乗っていた船とともに撃沈されていたら、森の業績は『平安時代庭園の研究』だけで終わっていただろう。工学博士なので大学の農学部教授になることは困難だったが、戦後の激動期に奈良国立文化財研究所が誕生して、庭園を専門に研究できるようになったのは幸運だった。1950（昭和25）年に文化財委員会に勤務するようになって、桂離宮の研究をまとめ、1952年に奈良国立文化財研究所に移ってからは、『修学院離宮の復原的研究』『中世庭園文化史』『寝殿造系庭園の立地的考察』『小堀遠州の作事』の研究を、45歳から60歳の間に成し遂げている。現在のように文化庁に出向して行政業務を行なうようになっていたならば、おそらくこれほどの業績は残せなかっただろう。

測量は1人ではできないが、最低2人いればできるので、村岡正の援助を受けたことは大きかった。村岡の庭園についての疑問について森が丁寧に応答したことが、師事した理由だったというから、森の学識の深

さが信頼の根底にあった「冠崎・白幡・飛田 1986」。また、測距アリダードというテープを張らずに距離が測れるというすぐれた器具の出現で、多くの庭園を短時間で正確に測量することができたことも大きかったが、これも村岡の協力がなければ不可能だった。

奈良国立文化財研究所では、1954（昭和29）年7～9月まで平城京をほぼ一周する測量を大岡実らが行ない、「諸大寺の旧寺域をつぎつぎに乘せていくように」と指示されたことも、森の仕事に大きく影響している「森 1971 16頁」。その継続作業として、研究所では1959年3月に東大寺旧境内地の実測調査を開始し、10年近く続けていて森も参加している「同 153頁」。庭園とは関係が薄いように見えるが、『奈良を測る』「森 1971」のカバー写真には東大寺一帯の実測図が使われていて、現況等高線から推定した東大寺造営以前の地形が赤線で示されている。

庭園史の研究を一生の仕事と決めた森は、奈良の諸寺院の地形測量だけでなく、寝殿造系庭園の研究を進

めるために、平泉の毛越寺・観自在王院や神奈川の永福寺など遠隔地の庭園、奈良では永久寺・旧一乗院跡、京都付近では大沢池・鳥羽殿跡・法金剛院・水無瀬殿跡・平等院・仙洞御所など大規模な庭園跡や現存庭園を実測して、文献考察を加えている。これだけでも普通の人間ならば一生かかってしまう仕事なのだが、森は短期間に完成させてしまう。

森は切手収集が趣味で、明治の貴重なものを何枚か持っているという話を、筆者は村岡から聞いたことがある。野球については巨人の大ファンで、各選手のスコアをノートにつけていたほどだったという。「森先生に電話するには、ラジオを聞いて巨人が勝ったか負けたかを確かめてからでないといけない。負けたときに電話すると、腹を立てているのでひどい目にあう」と、徳村五三郎はよく話していた。森が凝り性だったことは間違いないだろう。短期間に主要な庭園の実測図を数多く作製したのは、凝り性が発揮された結果だともいえる。しかし、単なる凝り性ではなかった。目標を定めて

確実に進んでいくということは、強い意志がないとできない。戦争をくぐり抜け、戦後の混乱期を生き抜いた人間だからこそ、成し遂げることができた偉業だったといえるだろう。

補注

- *1 牛川喜幸が奈良国立文化財研究所に提出した経歴書による。
- *2 本稿で取り上げた森の著作は以下のとおりである。
 - ・1935 「永福寺に於ける鎌倉時代前期の庭園遺跡の研究」『造園研究』13巻、15―35頁
 - ・1938 「鳥羽殿庭園考」『造園雑誌』5巻2号、90―102頁
 - ・1939 「平安時代前期庭園に関する研究」『建築学会論文集』13巻、310―319頁
 - ・1944 「日本庭園の伝統」一条書房
 - ・1945 「平安時代庭園の研究」桑名文星堂
 - ・1950 「桂離宮の古書院について」『建築史研究』3巻、10―21頁
 - ・1951 「桂離宮古図について」『建築史研究』8巻、1

- 18頁
- ・1951 『桂離宮』 創元社
 - ・1954 「修学院離宮の復原的研究」『奈良国立文化財研究所学報 第2冊』
 - ・1956 『新版 桂離宮』 創元社
 - ・1959 「中世庭園文化史」『奈良国立文化財研究所学報 第6冊』
 - ・1962 「寝殿造系庭園の立地的考察」『奈良国立文化財研究所学報 第13冊』
 - ・1964 『日本の庭園』 吉川弘文館（森蘊編）
 - ・1966 「小堀遠州の作事」『奈良国立文化財研究所学報 第18冊』
 - ・1967 『小堀遠州』 人物叢書 吉川弘文館
 - ・1971 『奈良を測る』 学生社
 - ・1973 『庭ひとすじ』 学生社
 - ・1975 『庭園の旅』 芸艸堂
 - ・1981 『日本庭園史話』 日本放送出版協会
 - ・1984 『日本史小百科 庭園』 近藤出版社
 - ・1986 『作庭記の世界』 日本放送出版協会

引用文献

尼崎博正・白幡洋三郎・飛田範夫（1986）『村岡正著作目録』
京都大学農学部造園学研究室

- ウィキペディア・藤岡通夫 <https://ja.wikipedia.org/wiki/藤岡通夫>
京都市編纂室（1980）『京都市の歴史』（第1巻）
宮内庁（1984）『桂離宮御殿整備記録（本文編）』
国土地理院・測量士及び測量士補登録に関する案内 www.gsi.go.jp/LAW/SHIKEN-sikenoroku.html
高橋三郎（1955）「江田式測距アリダードについて、使つてみての感想」『測量』5巻7号、21頁
田中栄治（2016）「庭園研究者・造園家・森蘊と建築家・谷口吉郎」『神戸山手大学紀要』18号、59-87頁
東京文化財研究所美術部（編）（1989）『日本美術年鑑 平成元年版』東京文化財研究所 277-278頁 東文研
アーカイブデータベース ps://www.robunken.go.jp/materials/bukko/10199.html
外山英策（1927）『源氏物語と日本庭園』文友社
森蘊（1944）『日本庭園の伝統』一条書房
森蘊（1956）『新版 桂離宮』創元社
森蘊（編）（1964）『日本の庭園』吉川弘文館
森蘊（1971）『奈良を測る』学生社
森蘊（1973）『庭ひとすじ』学生社
森蘊（1981）『日本庭園史話』日本放送出版協会
森蘊・牛川喜幸（1961）「瑜伽山と鬼園山城跡」『大和文化研究』38号、1-6頁
渡邊勉（2014）「誰が兵士になったのか（1）」『関西学院大学社会学部紀要』119号、1-18頁

森蘊の奈文研時代

はじめに

奈良文化財研究所は、1952（昭和27）年4月に文化財保護委員会の付属機関として、奈良・春日野に設立された。1949（昭和24）年に法隆寺金堂が消失してから3年後のことである。森蘊はその年47歳で初代建造物研究室長に就任し、1967（昭和42）年3月に退官するまでの15年間、文化財の宝庫である奈良の地で文化財保護行政に資する調査研究に従事した。

高橋知奈津

森蘊による庭園の調査研究上の特徴は、地形実測や考古学的発掘調査によって地形やその変化を読み取り、当初の庭園の姿を復元的に考究する手法にあるといえる。森は研究所在籍中、近畿圏を中心におよそ60件もの庭園および庭園跡の実測を行ない、また東大寺旧境内をはじめとする奈良市の中心市街の地形実測調査や、旧一乗院庭園の発掘調査にも取り組んで、研究所における南都諸大寺の総合的研究に寄与した。これらの奈文研時代の実測調査や発掘調査の経験が、森蘊

の庭園史研究の礎となり、ひいては彼の作庭活動における発想の源となったと考えられる。

本稿では、森蘊が奈良文化財研究所に在籍していた頃の事績について整理し、当時の研究所の動向と合わせて検討することで、当時の森の調査研究環境がいかなるものであったのか、また奈良文化財研究所という組織が森にどのような影響を与えたのか考えてみる。

1. 奈良と森蘊、先学の導き

『奈良を測る』〔森 1971〕は、森蘊が自身の奈文研時代を振り返って記した「奈良周辺遺跡の測量記録」

〔森 1971 はじめに〕である。

「私がこのように奈良に関心をもち、その地形地物と取り組むようになったのは、自分の意志はともか

く、そこには、何人かの恩師・先学の徳恵があつて、それが私を奈良に引き寄せ、そしてこの土地を測らせたのである」〔森 1971 11頁〕

森は、『奈良を測る』「序章 1. 奈良を測らせた恩師と先学たち」において、このように述べ、彼の奈良における調査研究に影響を与えた研究者を5名あげている。

具体的には、まず有職故実研究家の関保之助^{やすのすけ}（1868―1945）があげられる。東京美術学校の第一回卒業生であり、有職故実や考古学に明るい上代の武器・武具の権威で、帝室博物館の学芸委員を務めた人物である。森とは遠い縁戚であり、学生時代に関西旅行をする際、京都の関の自宅に宿泊させてもらっていた間柄という。

次にあげられるのは、いずれも奈良の古建築や宮跡の調査研究の礎を築いた建築史家の、関野貞^{ただし}（1868―1935）、足立康^{こう}（1898―1941）、大岡実^{みの}

（1900―1987）の3名である。足立と大岡は、関野の弟子であり、森の学生時代当時、足立の自邸において「建築史研究会」が開かれ、これに森も加わって親交を深めた。この会は、福山敏男（1905―

1995）、関野克^{きよ}（1909―2001）、太田博太郎（1912―2007）らも重要な構成メンバーで、南都諸大寺が話題の中心となるが多かったという。特に大岡実は、1947（昭和22年）の森の復員に際し、当時国立博物館保存修理課長であったことから、課員として森を誘ったとのことで、奈良文化財研究所に森が赴任する前提をつくった人物であるといえる。

そして、白鳳時代の仏教彫刻が専門の美術史家である小林剛（1903―1969）があがる。小林はのちに国立博物館で同僚となり、さらに奈良文化財研究所の初代美術工芸室長として、森とともに赴任することになる。森が小林と会ったのは、足立の自宅での「建築史研究会」においてである。小林と足立が異分野にもかかわらず話がよく合ったのは、「仏像彫刻研究に

はその容器である仏堂と、その置き台となる寺地をなおざりにすべきでない点と、もう一つは世界のどこよりも奈良を熱愛する気持のふれ合いでなかったか」〔森 1971 16頁〕と森は回想する。

以上のように、森を奈良に導いたのは、奈良の古建築・古美術の調査研究を熱心に行なっていた建築史・美術史の先学たちの姿であった。「足立康先生のありし日の姿がいつも目前から去りやらず、その遺訓が今なお私の闘志を鼓舞するが故」〔森 1971 15頁〕奈良や周辺の保存問題となるとむきになってしまふ、と森が記すように、ここにあげた先学たちは奈良を愛し、奈良の文化財の保存に精力を傾けていたのである。

奈良文化財研究所に赴任した直後、森は、桂離宮や修学院離宮の研究に取り組んでいたこともあり、京都の禅寺に住みながら奈良に通勤していた。しかし、小林から「早く奈良に移住し、研究チームも南都諸大寺に重点を置くべきだと忠告」〔森 1971 17頁〕されたという。そこで、「はじめはたんに奈良の古い庭園の



図 3-1 奈良文化財研究所 春日野庁舎(旧奈良県物産陳列所)

調査をしてみようぐらいの気持ちで、先学のすすめるままに」〔森 1971 42頁〕大乗院庭園の調査を実施した森である。しかし、実際に、地形測量や文献調査などを進めるにつれ、その考えに変化が起る。「奈良の上代から中古・中世にわたる庭園遺跡を調査することによって、日本庭園はもう少し、その曖昧であった昔の状態がはつきりとさせられるのではないかと考えるようになった」〔森 1971 21頁〕。もともと、森は学生時代より古庭園の研究を行っており、平安時代や鎌倉時代の庭園など、それまで庭園史があまり射程に入れていなかった古い時代の庭園の研究をしようという姿勢をもっていた。しかし、森は奈文研着任当初、京都をフィールドに調査研究活動を行なうつもりであった。ところが、森の周りにいた建築史・美術史の研究者たちの奈良への情熱に後押しされるかたちで、ついには彼らの調査研究の舞台である奈良に自らも身を投じることとなったのである。

て組織案を検討、1952(昭和27)年4月に、国立博物館奈良分館に仮事務所を置いて、奈文研が発足した。その後、奈良県知事より寄付を受けた県立商工館(旧奈良県物産陳列所)内部の改装が済み、翌年1月になってようやく事務室および研究室が本庁舎に移転した。その3月に職員の陣容もそろい、5月15日に開

2. 設立当初の奈良文化財研究所建造物研究室

▼奈文研の設立経緯

『奈良国立文化財研究所二十年史』〔奈良国立文化財研究所 1972〕「I 沿革」によると、奈文研の設立の発端は、吉田茂首相が在任時の奈良県視察の際に、南都諸大寺に伝わる文化遺産のすばらしさを目の当たりにし、現地に美術学校か美術研究所の設置の構想をもったことによると伝わる。そして、1950(昭和25)年8月に文化財保護法の施行に伴い、文部省の外局として文化財保護委員会が発足。国立博物館、同館奈良分館、美術研究所(現在の東京国立博物館、奈良国立博物館、東京文化財研究所)が同委員会の付属機関として決定した。これに奈文研は含まれなかったが、その後、奈良県議会や奈良県教育委員会が文部省や国会にその設立を陳情し、これが委員会を動かすこととなった。1951(昭和26)年10月に設置準備会が発足し

所式が執り行なわれた。

▼南都諸大寺の総合的研究

「奈良文化財研究所要覧 昭和28年度」〔奈良国立文化財研究所 1972 20頁、沿革資料10〕*(図3-12)における「(2)事業計画」には、13の事業の柱が列挙されている。その第一にあげられるのが奈文研創立からの最重要テーマであった「南都七大寺及びその他近畿各地における著名寺院の総合的調査研究」である。ここに「総合的調査研究」と示されるように、設立当初に奈文研に設置された3つの研究室、美術工芸研究室・建造物研究室・歴史研究室が協力して調査研究に取り組むのが、当初からの奈文研の研究スタイルであった。

▼まぼろしの遺跡庭園研究室

森の専門は庭園史であるが、着任したのは建造物研究室であった。文化財保護委員会事務局が1951(昭和26)年11月7日付で作成した「奈良文化財研究所設

置案」〔奈良国立文化財研究所 1972 18頁、沿革資料9〕（図3-3）によると、構想段階での奈文研の組織案における研究室は、美術部・歴史部・建造物部の3部の下に、各分野の研究室が置かれる体制が掲げられていた。そのうち建造物部の下には、建造物研究室と遺跡庭園研究室が置かれていた。

ここに「遺跡庭園」という語が登場する。現在の庭園史学では「遺跡庭園」とは「遺跡化した庭園」すなわち「廃園」を指す語として理解されている。これは現在まで庭園として継承された「現存庭園」や、考古学的な発掘調査によって新たに発見された「発掘庭園」に対する概念である。³しかし、ここでの「遺跡庭園」とは後述するように「遺跡・庭園」を意味すると考えられる。いずれにせよ、当初は建造物研究室とは別に、庭園を標榜する研究室の設置が構想されていた。

研究員の人的な規模としては、組織案内訳によると、調査研究の任に就く技官の人数は奈文研全体で27名、これに直接雇用の技術員が16名の体制が構想されていた。

た。そのうち建造物部は部長以下12名で、研究室は2室あり、建造物研究室が室長以下7名、遺跡庭園研究室が室長以下4名、という内訳であった。

しかし、この理想的な体制は「主として人員面と経済面とで規模縮小を余儀なくされ」〔奈良国立文化財研究所 1972 2頁、「I沿革（1）設立の由来」〕、結果として、研究部は美術工芸研究室・建造物研究室・歴史研究部の3室として組織されることとなった。

▼建造物研究室における「遺跡庭園」分野

以上のように、奈文研における庭園史学に関わる分野は建造物研究室に吸収され、「昭和27年4月1日施行の奈良国立文化財研究所組織規程」における建造物研究室の職掌事務には「庭園」という語すらみえない。とはいえ、この分野に関する調査研究は、建造物研究室の職掌の一つとして維持され、「奈良文化財研究所要覧 昭和28年度」（図3-2）に示される「（2）事業計画」には、「三 京都御所及び桂離宮、修学院離

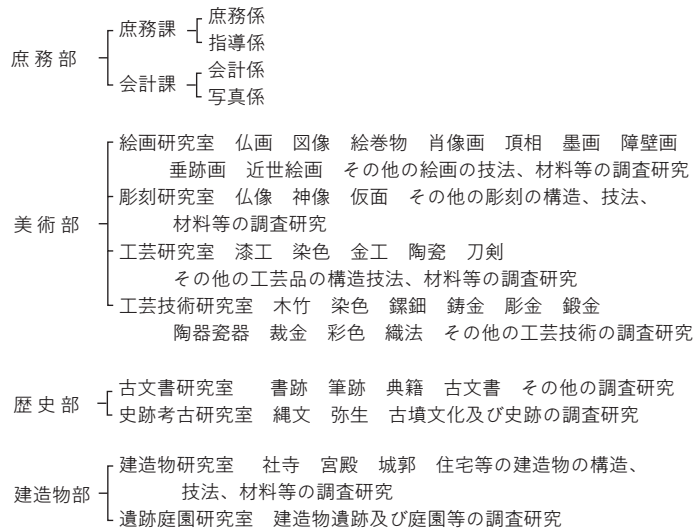
- （1）目的
奈良及びその附近に伝わるものを主とする文化財の総合的且つ基礎的な調査研究をなし、その結果を研究報告書その他の印刷物に編集出版し、またこれを講演或は講座として一般公開して我が国文化の発達に資する。
なお、これを補助する意味において、文化財に関する図書類や文化財の写真その他を公開する。
- （2）事業計画
- 一 南都七大寺（東大寺、興福寺、元興寺、大安寺、西大寺、薬師寺、唐招提寺、法隆寺）及びその他近畿各地における著名寺院の総合的調査研究
 - 二 著名な宮跡の調査研究
 - 三 京都御所及び桂離宮、修学院離宮その他の著名庭園の調査研究
 - 四 仏像及び仏画における図像的な総合研究
 - 五 中世以前の文化に密接な関係のある中国西域及び朝鮮等の諸文化との比較研究
 - 六 建築の用材、彫刻、絵画、工芸品等の材料に関する科学的研究
 - 七 仏教文化とその経済に関する研究
 - 八 文化財の保存及び修理に関する基礎的研究と事務局への連絡
 - 九 事務局保存部の文化財調査に対する援助
 - 十 文化財に関する図書、写真、諸図面類の蒐集、作成整備及び公開
 - 十一 紀要、研究報告書等の編集及び出版
 - 十二 文化財に関する講演及び講座の開催
 - 十三 その他文化財に関する一般研究
- （3）事業の特色
- 一、物に即した実施の研究を主とする
奈良を中心とする関西地方には古文化財が実に多数あるので、これらの詳細なる寸法測定とか材質の研究とか、その他どうしても実物に即さなければ出来ないような研究に重点を置く。
例えば南都諸大寺における建築の実測、彫刻構造材の調査、古墳及び史跡の発掘調査、諸資材の蒐集等。
 - 二、文化財の保存行政に直接役立つ研究を主とする
保存行政の実務的な仕事は、修理事業が最も重要なものであるが、その対象は関西地方に多いので、その実際の仕事に終始接しながら、その色々なことを調査研究し、また修理技術者の指導や養成に務める。
例えば、修理諸材料の実験的研究、修理方法の研究、修理技術者に対する研究資料の提示及び講習等。
 - 三、応用的研究に力を注ぐ
関西地方は古来から各種の美術及び美術工芸品の製作地で、今なおそれ等の伝統的な技術を伝えているものが多い。因ってこれ等を保護助長せしめると共に、またこれらを現代美術及び美術工芸品の上に応用せしめるように務める。
例えば、奈良における特殊な漆工、木竹工をはじめ、その他の染織、陶器等。
 - 四、総合研究を行なうこの研究所には、有形文化財の各部にわたる研究室があるので、従来とかくないがしろにされ勝ちであった総合研究をなし、その成果を上げることが出来る。
例えば、東大寺の研究という題目の下においては、建築、彫刻、絵画、工芸、古文書、史跡等の各部門の調査を同時に行なって、それらの相互関係を明らかにし、東大寺の文化史上における重要な意義を尋ねることが出来る。
 - 五、更に各研究室の個別的な特色は次の如くである
- イ 関西地方には、飛鳥・奈良・天平・鎌倉等の中世以前のすぐれた彫刻が多いので、ここに重点を置く。
 - ロ 絵画は、仏画、図像、絵巻物、肖像画、障壁画等のすぐれたものが多いので、これらを主として研究する。
 - ハ 工芸品は室町時代以前の名品が多く社寺に所蔵されており、また染織や塗物や陶器等の現代工芸が盛んなので、これらを研究の対象とする。
 - ニ 関西地方の寺社にある古文書は、実に莫大な数量に上るので、これらを逐次調査研究する。
 - ホ 日本古建築の主要なものは、殆んど関西地方に集中しているので、これらの詳細な実測図を作ることに重点を置く。
 - ヘ 日本文化史の上で重要な寺院跡、庭園その他の史跡が関西地方には多いので、これらの発掘調査や実地測量をする。
 - ト 考古においても、日本上代の重要な古墳その他が関西一円に多いので、これらの発掘調査を行ない、また重要古墳の分布図を作る。
 - チ 関西地方には、各種の古い工芸技術の伝わっているものが多く、この中にはなかなかすぐれたものがあるので、これを調査し、またこれを現代工芸に応用せしめる。

図3-2 奈良文化財研究所要覧 昭和28年度〔奈良国立文化財研究所 1972 20頁 沿革資料10〕

昭和 27 年度歳出予算要求内訳

		円
人件費	要求人員 62 名	11,494,000
事業費		16,767,000
1. 事務統括に要する経費		5,562,000
2. 調査研究に要する経費		3,877,000
3. 資料に要する経費		5,213,000
4. 技官研究費		2,115,000 (27 人分)
営繕費		
資料庫及び書庫鉄筋コンクリート		
二階建新築外 6 件		13,291,000
合計		41,552,000

奈良文化財研究所組織 (案)



職員別	官 吏			雇 員					備 人				計
	事務員	技官	小計	事務員	技術員	外 ² 運	運転手	小計	守衛	小使	給仕	小計	
定員	6	27	33	3	16	1	1	21	2	2	4	8	62

(組織案内訳)

※ () の数字は
定員数を示す

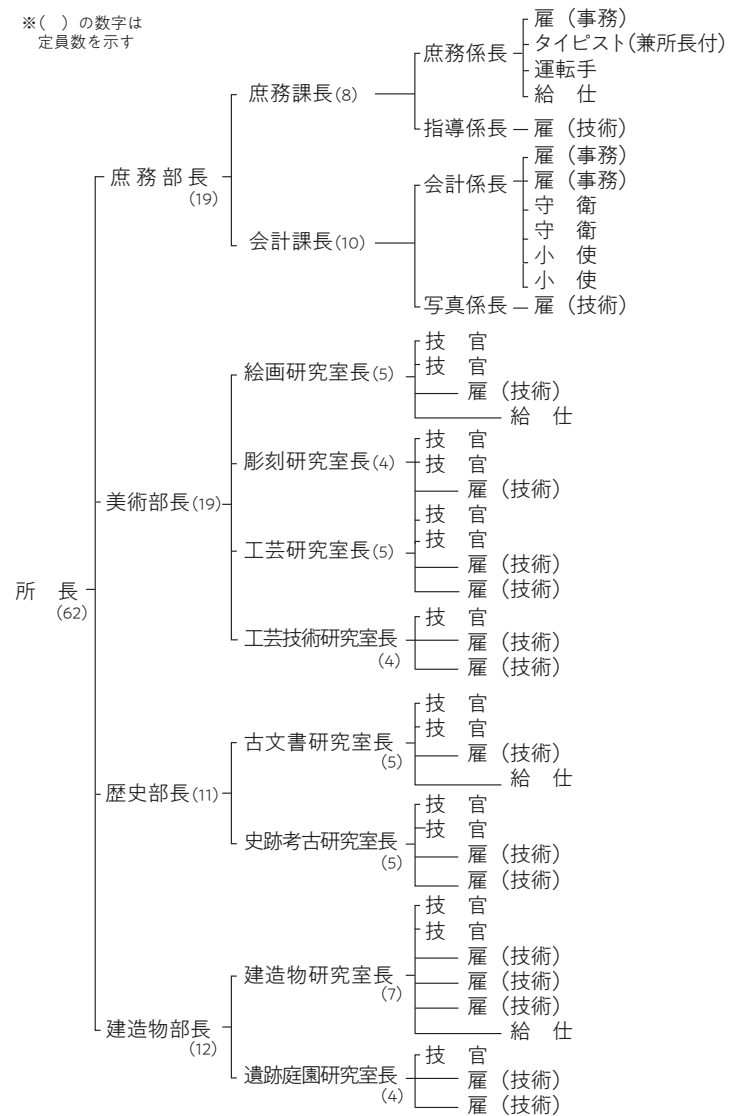


図 3-3 奈良文化財研究所設置案 (昭和 26 年 11 月 7 日付) [奈良国立文化財研究所 1972 18 頁 沿革資料 9]

宮その他の著名庭園の調査研究」とあり、実質的に当時の森の宮庭庭園への関心がここにそのまま引き写されてある。

一方、「(3) 事業の特色」の五、に各研究室の個別的な特色として示されるものをみると、「へ 日本文化史の上で重要な寺院跡、庭園その他の史跡が関西地方には多いので、これらの発掘調査や実地測量をする」とある。昭和26年の「奈良文化財研究所設置案」(図3-3)における遺跡庭園研究室の項に示された「建造物遺跡及び庭園等の調査研究」をより詳しく言い換えた内容と理解できる。寺院跡も庭園も、地盤の上にかたを遺す文化財であり、これら記念物を対象に発掘調査・実地測量を行なうことが、遺跡庭園分野に期待された職掌であったとみえる^{*4}。

▼森に期待されたこと

以上のように、当時の森の研究対象と、奈文研職員として森に求められた期待とは若干の乖離があつ

た。それが、先に述べた小林剛の忠告につながったといえよう。

森自身、1945(昭和20)年に『平安時代庭園の研究』[森 1945]において示したように、それまでの庭園史研究は室町時代以降の庭園を対象としてきた。これはひとえに、庭園史学が現存庭園の地割や意匠を分析することをその手法の中心に据えてきたこと、そのうえで現存庭園には室町時代以降のものが多くに要因がある。一方、鎌倉時代以前の庭園を研究対象とするには、遺跡と化した庭園跡の実地測量に加え、考古学的な遺構解釈、古記録の読解、建築学的な知識等を駆使して、当初の姿を復元的に解明する必要があつた。そのように周辺諸分野の科学的手法を援用し、学際的・総合的な庭園史の構築に本格的に取り組んだのがほかならぬ森蘊であつた。南都諸大寺の調査研究を主眼とする奈文研の室長として森が登用された理由は、この森の研究スタイルが評価された結果なのではないだろうか。

3. 建造物研究室における遺跡庭園の調査研究

▼研究室の当初の人員

設立直後の建造物研究室の人員構成は、室長以外に技官1名、直接雇用の技術職員1名のわずか3名であつた。しかも、森蘊以外は、建造物が専門の人員であつたようである。総合研究を標榜する奈文研であるが、各専門分野ごとの分担は厳密に分かれていたように、当時の『年報』をみると、森が建造物室長として建造物調査の報告を執筆することはなく、また調査にも一切参加していない様子がうかがえる。同じように遺跡庭園の調査には、建築史の研究員は参加していなかったようにみえる。1953(昭和28)年によやく、村岡正(京大造園学研究室所属、当時26歳)が臨時筆生として森の調査に加わり、京大造園学研究室(中村一・近藤公夫ら)の協力も得る中で、修学院離宮の実測調査に取り組めるようになった。森自身「村岡君

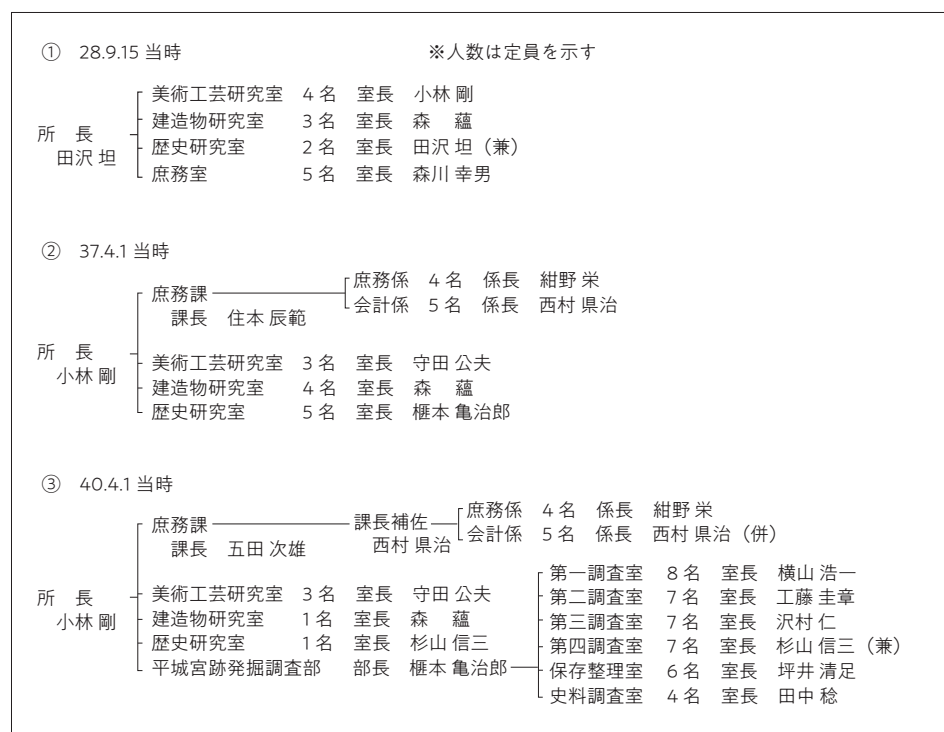


図 3-4 森蘊在籍時の奈文研の組織変遷 [奈良国立文化財研究所 1972 97-98 頁 V組織・機構]

は）私が助手もなく一人ぼっちであった遺跡庭園研究室の臨時職員として、私の片眼・片手・片足となつて親身も及ばぬ世話をしてくれた人である」〔森 1973 233頁、傍点筆者〕と記しており、奈文研着任当初の森の孤独が述べられる。遺跡庭園研究室と誤記するように、建造物分野と遺跡庭園分野では、研究室が異なるほどの隔たりがあった、あるいは春日野庁舎において実際に異なる部屋が割り当てられていたということかもしれない*。

1957（昭和32）年の段階で、技術補佐員として牛川喜幸が加わる。これにより、効率的に測量ができる3名の人員が揃った。その結果、この年から測量調査の実施件数が急激に増加し、年間10件弱の件数の測量をこなしている。

▼平城宮跡発掘調査の拡大と組織改編

その後、研究所全体の動きとして、1959（昭和34）年に平城宮跡や飛鳥・藤原地区の発掘調査の推進

のため、考古学の職員の雇用が増加する。高度経済成長期における都市開発事業の増加に伴って、埋蔵文化財の保護が記念物に関する文化財保護行政上の最大の課題となり、奈良文化財研究所においても考古学的発掘調査がその主たる業務として位置づけられることとなり、1963（昭和38）年には平城宮跡発掘調査部（以下、調査部）が新設された。これに伴い、翌年度には建造物研究室と歴史研究室の人員は、基本的に室長1名のみと削減され、その他の人員は調査部に所属し、併任によって研究室の業務を補うかたちとなった。1962（昭和37）年に建造物研究室の技術員として正職員となった牛川も、この時の組織改編によって、調査部第二調査室に配置換えとなった。1965（昭和40）年には、藤原武二^{たけじ}が調査部第三調査室に新規採用され、ここでも遺跡庭園分野の正職員が、研究所全体で3名となる。しかし、同時に森自身も調査部に兼任がかかるなど、研究所の職員がますます発掘調査に動員されていく様子がうかがえる。

▼遺跡庭園分野の調査研究、2本の柱

森が在籍していた間の遺跡庭園分野の調査研究の内容には、大きく2つの柱があったことが、『二十年史』『IV事業・学術研究活動』の「遺跡庭園の調査研究」に端的に記されている〔奈良国立文化財研究所 1972〕。

第一に「庭園およびその遺跡の復元的研究」がある。「従来あまり行われなかった精密な実測資料の作成に主眼」を置き、「等高線を入れ、しかも測点すべてに海拔標高を併記した平面図を採用」しての研究であった*。

森による庭園や遺跡の実測図の特色は、森自身が『奈良を測る』〔森 1971 序章〕において述べているように、高低測量による本格的な等高線を入れたことにある。実際、図面をみると基本的に50cmピッチの海拔標高による等高線が図示されている。これによって遺跡と化し、護岸石等が地表で視認できないような池等についても、現地に残された起伏によって捉えることができる。加えて、樹木を省略する点も、それま

での庭園実測図とは大きく異なっていた。たとえば、1936年から1938年（昭和11～13年）にかけて重森三玲が作成した庭園実測図は、現在も文化財庭園の修理の現場等でよく参照されるが、庭園の主体となる部分を中心に実測がなされ、樹木が樹種とともに詳細に描かれている。これは、重森が1934（昭和9）年の室戸台風の被害を受けて、植栽を含む庭園の現状を「記録」しようと考えた結果といえる。森の実測図に対する姿勢は、これとは異なるものである。現況として存在する庭園や庭園遺跡は、往時から変化していることを前提に、往時の姿を復元的に考察するために必要な情報を図示することを目的としたのである。そのため、森は単に地形実測をするだけでなく、必ずここに復元的な考察を加えており、図面にも「○跡」との記載がみられる。

第二に、主要な建造物の平面図をその間取りを含めて図示している。庭園と建築が密接な関係のもとに設計されているという認識による特色である。先述の重

森の実測図もそうであるが、それまで庭園の実測図では、庭園とそれに面する部屋、あるいはその外形のみが記される程度であった。森の場合、建造物をできるだけ詳細に示そうとしたため、必然的に実測範囲は広がり、敷地全域や周辺地形を含む範囲までを実測対象としている場合もある。

このような方法によって実測図を作成し、文献史料や絵図資料の収集をあわせて行ない、庭園のみならず建造物・敷地全域にいたるまで往時の姿を総合的にまた、復元的に考察するのが、森の調査研究の特徴であるといえよう。これらの調査研究は、京都御所離宮の研究、南都大乗院を中心とする中世庭園文化史の研究、小堀遠州の研究などのテーマに沿って、旺盛に行なわれ、その成果は4冊の学報にまとめられた^{*}。

以上の庭園に関する調査研究に併行して行なわれてきたもう一つの遺跡庭園分野の柱が、奈文研の研究課題である南都諸大寺の総合調査の一端を担う、旧境内の実測調査である。

諸大寺旧境内の実測調査の2つの研究の柱の存在は、奈文研退官後に森が自身の業績を振り返って、『奈良を測る』『森 1971』と『庭ひとすじ』『森 1973』の2冊として、それをまとめたことに重なる。『奈良を測る』において、森は「奈良を測る」ことは私の退官とともに、いちおうのピリオドが打たれたことになり、「庭ひとすじ」に生きる私はなおつづいている。（はじめに）と記した。一方、『庭ひとすじ』には、奈文研の業務外である作庭や庭園修理等の業績も示され、退官後の活動についても言及がなされている。森にとって「奈良を測る」ことは、「奈文研職員」としての仕事であったということなのだろう。

しかし、研究手法上の観点からすると、現況の地形実測を行ない、史資料を収集し、敷地全体についてかつての配置計画を復元的に考察するという手順は、ほぼ共通しており、両者の仕事は互いに好影響を与えていたように思われる。森が初めて、寺域の遺存地割の測量の機会を得たのは、おそらく1954（昭和

「昭和二十七年春、奈良国立文化財研究所開設と同時に、ここに移籍し、奈良一円の庭園調査に取り組みはじめた方、便の地形測量が、いつの間にか宮殿跡や古社寺境内の立地的考察という面に首をつっこみすぎ、ミイラ取りがミイラになりおせした自分を発見した。たしかに奈良で行わなければならない研究といえば、平城宮、南都諸大寺、飛鳥宮・藤原宮遺跡などに集約されるものであり、この方面の仕事はそれなりに意義を見出すことができた。私が退官記念講演に「東大寺山堺四至図」という標題を選んだのもそのためである」

〔森 1971 はじめに〕

この森の回想から、もともと森自身がやりたいことではなかったものの、南都諸大寺や宮跡の調査研究に重きを置く奈文研の方針を認めて、奈文研の研究員として自分がやるべき職務というものの、かなり意配って取り組んでいた森の様子がうかがえる。

この「庭園およびその遺跡の復元的研究」と「南都

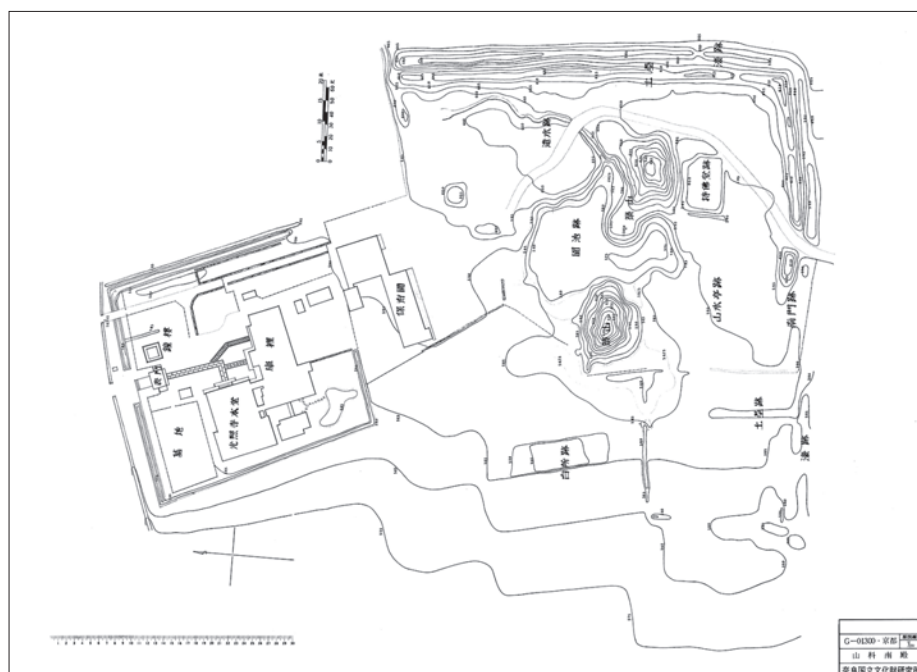
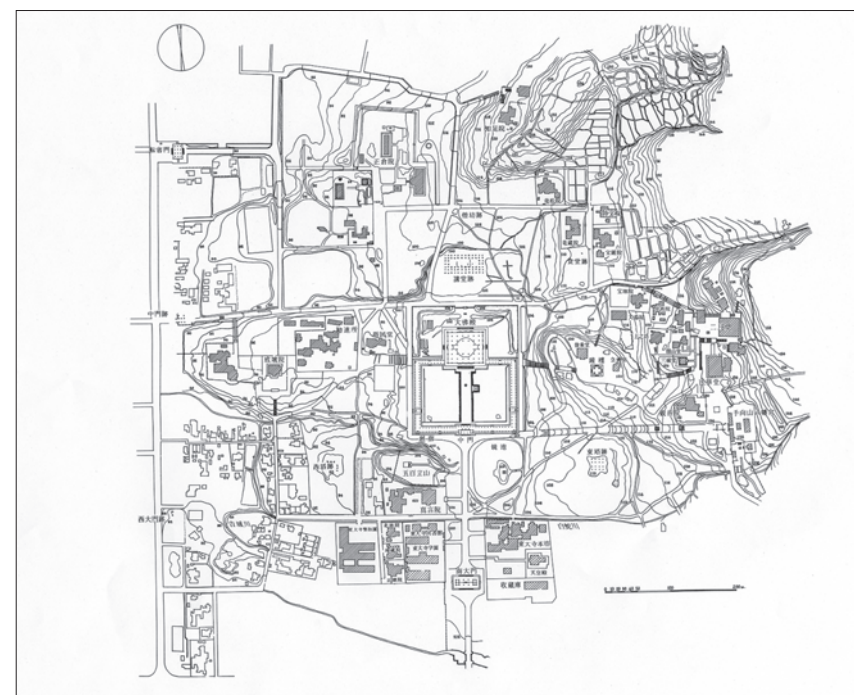


図 3-5 山科南殿 地形実測図（昭和 31 年実測）（奈良文化財研究所蔵）

29)年の夏に、大岡実と浅野清の指示により平城京をほぼ一周する測量を手伝ったことであろう「森1971 序章」。1958(昭和33)年実測の鳥羽殿遺跡の地形実測図はその経験に倣い、水田畦畔が広範囲に描き込まれている(図3-7)。ただし、奈良盆地や鳥羽周辺は広大とはいえ比較的平坦な土地に収まっており、庭園実測で必要とされるような等高線はあまり必要ではなかった。しかし、1959(昭和34)年から森が精力的に取り組んだ東大寺旧境内から春日大社・興福寺旧境内の地形実測では、森が日頃、庭園の実測調査で磨いた等高線による起伏の表現が見事に活かされることとなった。この経験を受けてか、その後、庭園の実測調査においても、水無瀬離宮跡や法金剛院の周辺地形など、狭義の庭園の領域にとどまらない広域的な周辺環境を実測の対象とする傾向がみられるようになる。



上：図3-6 東大寺旧境内 地形実測図(昭和34年実測)
下：図3-7 鳥羽殿遺跡 地形実測図(昭和33年実測)(奈良文化財研究所蔵)

4. 退官後の奈文研・遺跡庭園分野

▼退官後の奈文研・遺跡庭園の調査の行方

森蘊は1967(昭和42)年3月31日に奈文研を退官した。退官記念講演は「東大寺山堺四至図」について」と題し、4月17日に行なわれた。

森の退官後、建造物研究室の室長には、建築史学専門の職員が就任し、現在にいたる。遺跡庭園分野は牛川喜幸がその中心となり、1968(昭和43)年には、調査部に遺跡庭園分野の室員によって構成される、計測修景調査室が設置され、その初代室長に就任した(当時43歳)。室員も藤原武二のほか、伊藤太作、田中哲雄が加わった。

この頃の遺跡庭園分野の業務については、牛川が『二十年史』に、「昭和40年頃から史跡の環境整備、写真測量の文化財調査への応用などの研究が加わり、一方平城宮跡発掘調査規模の拡大にともない庭園遺跡の

調査にやや支障を生じるようになったが、(中略)発掘遺構の検出等、発掘遺構による庭園研究の機会も増大し、造園史上の新たな知見を得た」〔奈良国立文化財研究所 1972 63頁〕と記している。計測修景室は、宮跡等の発掘調査に伴って測量し、調査後は遺跡整備(修景)をする室であった。森のように庭園に関するテーマを掲げての継続的な調査を推進するポストが建造物研究室から失われた結果、庭園遺跡の調査はほとんど行なわれなくなっていた。一方で、全国的に発掘庭園の検出例が増加し、その解釈や整備等において、主導的な立場を取っていくことが求められるようになり、庭園史研究としてはこれらを新たな対象として、研究が深められることとなった。

牛川は、大学時代には電気探査による遺跡の把握に取り組み、奈文研入所後も、仏像や遺跡の写真測量の手法開発に尽力し、「計測」の旗手といえる人物であった。森蘊も「写真測量という新兵器が登場する学界にとって、手動による実測図はもう時代遅れの感がある」〔森

1971 はじめに〕と、新しい時代の到来を捉えている。

▼基礎研究から応用へ／奈良から全国へ

退官後の森は、村岡正とともに庭園文化研究所を開設する。それまで縛られていた奈文研の職務から解放されて、まさに庭園史研究一筋に没入するののかといえば、決してそうではなかった。

「終戦後一時「文化」がやはり言葉となり、いつのまにか「文化財」という変な熟語が固まり、法律や役所の名前にまで使われ出した。私もその渦巻に呑みこまれた一員として、奈良国立文化財研究所に勤務し、昭和三十四年の学報第六冊を『中世庭園文化史』と銘打って興福寺の大乗院庭園を中核とした、中古・中世庭園の種々、解明の自分の姿勢を表現しようとした。長年の私の研究態度が、そうであったように、私たちの研究所は小庭園の設計に限ったり、庭石や庭木だけの研究をするところ

ろではない。建築・美術・考古学・古代史学、その他各般の基礎知識のうえに成り立つところの広義の庭園の研究を行い、その研究成果の応用として、古庭園の発掘・復元・整備事業に協力し、新しい日本庭園の開発にも寄与しようとするものである」〔森 1973 234頁 傍点筆者〕

森の奈文研在籍時、高度経済成長に伴い奈良にも都市化の波が押し寄せ、平城宮跡では1961(昭和36)年の近鉄操車場建設問題や、1964(昭和39)年の24号線バイパス問題など、開発に対抗する保存運動がたびたび起こっていた。森が入所してすぐに取り組まねばならなかった大乗院庭園は、1939(昭和14)年に都市計画道路建設からの保存問題が、重森三玲、田村剛らによって大いに取沙汰され、その結果保存された経緯を有する。「種々解明の自分の姿勢を表現しようとした」という言葉からは、「文化財」という言葉を嫌いながらも、文化財の保護のための自分の

役割は、調査研究によって文化財の価値を明らかにすることにあると考え、懸命に取り組んでいた様子がうかがえる。そして、庭園文化研究所は、趣味的に庭園を設計したり研究したりするところではなく、基礎研究を行ない、それを応用して古庭園の修理や整備、そして新しい造園に寄与するのだ、という。

庭園文化研究所での森の業績をみると、庭園の発掘調査や復元・整備事業は、調査研究と作庭とを両輪とする森の面目躍如といったところで、その後の文化財庭園保護行政において、大きな影響を与えた実績といえる。しかし、実のところ、森は奈文研在籍時には、調査部とは一定の距離を取っていたとみえ、発掘調査に積極的に関与した様子はあまり見受けられない。森が個人的に取り組んだ南宗寺庭園以外には、旧一乗院庭園の発掘調査が数少ない経験であるようだ。

復元についても、復元的研究として、地形測量の成果から当初の姿を考察し図面や模型として表現する研究は、従来から取り組んでいるものの、庭園現地の修

理工事として復元事業に取り組んだ経験は、南宗寺庭園以外には見受けられず、少なくとも奈文研の事業の中においては実施していない。おそらく、森は奈文研時代の仕事は、基礎研究として位置づけ、作庭や整備をはじめとする「応用」とは区別していたのであろう。退官後には、研究者として基礎に徹しなければならぬとする呪縛がとけ、応用としての仕事に積極的に取り組めるようになった、ということなのかもしれない。

おわりに

以上、森蘊が奈文研に在籍していた期間を中心に、森蘊の調査研究、そして奈文研の遺跡庭園分野の取り組みを概観した。初期の奈文研が取り組んだ古都奈良を解明する研究方法には、遺存地割から往時を復元的に考察する方法や、さまざまな分野・資料を関連させた総合研究などのように、森蘊自身の調査研究スタイルにそのまま重なるものがあるように思われる。

ものにするかの追究の結果であったといえよう。

補注

- *1 当初は「奈良文化財研究所」の名称であったが、1954（昭和29）年7月に「奈良国立文化財研究所」と改称、1968（昭和43）年に文化庁発足に伴い、その付属機関となる。2001（平成13）年4月に「独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所」、2007（平成19）年4月に「独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所」となり、現在（2019年）にいたる。
- *2 原本の所在は不明。
- *3 「遺跡庭園」の語は、現在、庭園史学では「遺跡化した庭園」を指す（平澤毅・鹿野陽子・武内和彦（2007）「日本とイタリアにおける発掘庭園の特性に関する比較検討」『ランドスケープ研究』70巻5号）。
- *4 なお「奈良文化財研究所設置案」の組織（案）、歴史部に、史跡考古研究室が想定され、その職掌は「縄文 弥生 古墳 及び史跡の調査研究」とある。建造物部 遺跡庭園研究室に示された「建造物遺跡」は寺院跡（宮跡）を意味するとみられることから、両室の職掌において先史時代と歴史時代とを区別していたことがうかがえる。

昭和40年代以降、奈文研の遺跡庭園分野では発掘調査とその記録やその後の整備等、遺跡や考古学を対象とする業務が主となり、庭園研究は考古学的成果を中心に据える発掘庭園へとその対象を変え、結果として地形実測と総合研究を駆使するような研究は低迷していった。また、最新技術による実測の精度向上や、学術研究における実証性・専門性が求められる時代において、研究者の研究スタイルも専門分野ごとに先鋭化し、森のような全分野対応型の研究スタイルは時代遅れとなってしまうたかのである。

しかし、庭園という存在は、自然基盤や建造物と密接に関わり、政治・文化・生活等さまざまな出来事の舞台となり、かつ芸術性をもつ点で、分野横断的な検討を必要とするものであり、かつ周期的・経年的に変化することを前提とする点で、適切的な検討なしに構造・意匠を検討することができないものである。森が構築した調査研究スタイルは、このような庭園の性質を十分に踏まえたうえで、いかにこの分野を学術的な

- *5 牛川喜幸は、入所当時の奈文研について「『遺跡庭園』というのは森先生と私しかいなかった。広い部屋でね、」と振り返る。（恵谷浩子・前川歩（編）（2014）『遺跡学の宇宙 戦後黎明期を築いた13人の記録』日本遺跡学会 124頁）また、「毎日だいたい晴れの日とはにかく屋外で東大寺旧境内の実測ですよ。それで昼休みには飛火野で野球をやる、みんな一生懸命やるんですよ。終わったら、また山に戻って、実測。森先生はものすごいジャイアンツファンでね、そんなことはよく知らなかったんだけど、時々ものすごく機嫌の悪い日があったりして、私は野球は好きだったけど、晶眞のチームは無かったから、理由が全然分からなかった。森先生は「入所試験は野球をやらしたらええ」とか言うくらいだったから、野球をするっていうのはとても大きいことだね」（124頁）という。奈文研には「春日野パンビーズ」と「平城ホッテルズ」という草野球チームがあり、森は大の野球ファンとして有名だった。
- *6 森蘊の実測図について、仲野浩（1928-2018、当時文化財保護委員会記念物課文部技官、のちに文化庁主任文化財調査官）は、「春日野の研究所に行ったときに森蘊さんがつくったコンタマー入りの図面を見たときはハッとしたね。（中略）あれは森さんが始めたやり方です。森さんをあまりよく言わない人もいますけども、悪くはないと思う」と述懐する。文化財の現状変更申請書類等の付図にはコンタマーが入っていなかったという（出典*5に同じ、89頁）。
- *7 4冊の学報とは、以下のとおりである。
・1954 「修学院離宮の復原的研究」『奈良国立文化財研

西暦 (和暦)	1905 (明治38)	東京府立川村に出生	森蘊に係る主な出来事※1	建造物研究室・遺跡庭園の調査研究※2	遺跡庭園分野 人員構成※3	森蘊	年齢	奈文研の動き※2
1952 (昭和27)	奈良文化財研究所建造物研究室長（4月16日）				47	0		
						村岡 牛川		

年表 森蘊在籍時の奈文研・遺跡庭園分野の調査研究

〔凡例…〕
 〔一〕テーマ、★実測調査、☆その他調査等、■報告書

＊ 8 庭園文化研究所のこと。

『**所学報 第3冊 文化史論叢**』

なお、補遺として以下がある。

・1955 「修学院離宮造営に利用された建物と地形につ

・1966「小堀遠州の作事」『奈良国立文化財研究所学報
第18冊』

・1962 『寝殿造系庭園の立地的考察』『奈良国立文化財研究所学報 第13冊』

・1959
『中庭園文化史』奈良国立文化財研究所学報
第6冊』

究所學報 第2冊

引用文献

奈良国立文化財研究所（1972）『奈良国立文化財研究所二十年史』〔奈良国立文化財研究所 研究成果要録〕
森繡（1945）『平安時代庭園の研究』 桑名文星堂
森繡（1971）『奈良を測る』 学生社
森繡（1973）『庭ひとすじ』 学生社

1953 (昭和28)	奈良県文化財専門審議会専門委員（3月17日）	【修学院離宮の調査】 ★修学院離宮（京都市） ☆修学院離宮の史料収集	48	
1954 (昭和29)	7月中旬～9月上旬…大岡実・浅野清とともに平城京一周測量 工学博士。学位論文「桂離宮の研究」（12月25日）	【南都庭園遺跡の研究】 （大乗院庭園の史料収集） ★法華寺庭園（奈良市） ★円成寺庭園（奈良市） ★大神神社境内（桜井市） ■学報第2冊「修学院離宮の復原的研究」	49	奈良国立文化財研究所、に改称（6月29日）
1955 (昭和30)	「桂離宮の研究」東都文化出版（5月） 【修学院離宮】創元社（9月）	☆大神神社環境整備 ■学報第3冊「文化史論叢」 「修学院離宮造営に利用された建物と地形について」 修学院離宮の研究（補遺） ★桂離宮詳細 ★大和郡山城 【中世庭園の研究】 ★大乗院庭園（奈良市） ★浄瑠璃寺（木津川市）	50	
1956 (昭和31)	横浜国立大学非常勤講師（4月1日） ※天理市史編纂協力（暮～翌4月） 【新版桂離宮】創元社（5月）	【中世庭園の研究】 ★山科南殿 ★西芳寺	51	
1957 (昭和32)	奈良県立公園審議会委員（2月21日） 奈良女子大学非常勤講師（10月1日）	【京都御所の建築・庭園実測】 ★京都御所 ☆禁裏御庭指図の整理…高槻市史料 【中世庭園の研究】 ★竜王山城跡（天理市）	52	
		【建造物研究室】 森蘊（文部技官・室長） 牛川喜幸（技術補佐員） （村岡正（臨時筆生））	30	
			22	

1957 (昭和32)	★内山永久寺跡（天理市） ★法金剛院跡（京都市） ★本泉寺庭園（金沢市） ★湯殿跡庭園跡（一乗谷） ★諏訪館跡庭園跡（一乗谷） ★南陽寺庭園跡（一乗谷） ★妙心寺退蔵院庭園（京都市） ★慈照寺庭園（京都市） ★福田寺庭園（米原市） ★願行寺庭園（下市町）		
1958 (昭和33)	★鳥羽殿遺跡 【中世庭園の研究】 ★旧秀隣寺庭園 ★北畠国司館跡庭園 【南都諸大寺伽藍配置並びに境内地形実測調査】 ★東大寺境内（一部東大寺より補助金） 【近世初期庭園・遠州】（科研費） ★大徳寺孤蓬庵庭園 ★南禅寺金地院 ★高野山天徳院 ☆宮内庁書陵部、内閣文庫、史料編纂所での史料調査	53	
1959 (昭和34)	【水無瀬離宮跡並びに伝桜井御所跡の調査】 ★水無瀬離宮跡 ★伝桜井御所跡 【南都諸大寺伽藍構成と地形の関係】 ★東大寺旧境内 ★正倉院境内（四聖坊庭園） 【南宗寺庭園の復元的修理】 ★南宗寺庭園	54	平城宮跡発掘調査の始まり
		31	
		23	

1960 (昭和35)	日本建築学会賞「中世庭園史の研究」(5月30日)	【頭塔の実測調査】 ★頭塔 【法金剛院跡の調査】 ★滝口立石下方一帯の電気探査 【南都諸大寺伽藍構成と地形の関係】 ★興福寺旧境内 ★春日大社林苑 ★高畑界限 【小堀遠州研究】 ★知恩院庭園 ★二条城一の丸庭園 (佐治家藏遠州関係資料調査) ★当麻寺中之坊庭園 ★仁和寺庭園および境内 【旧西大寺境内の地形と水系】 ★伝称徳天皇御山荘池跡 【興福寺一乗院の調査】 (数年前から古文書・指図を収集) ☆旧一乗院庭園の電気探査 ☆臨川寺庭園の電気探査	【醍醐寺旧三宝院と無量光院等庭園跡遺跡の調査】 ★無量光院遺跡 ★旧三宝院(灌頂院)遺跡 ☆菩提寺遺跡現地踏査 【願成就院庭園遺跡の調査】 ★願成就院(静岡県韭山町) 【法金剛院跡の調査】 ★周辺地形実測調査 ■学報第6冊「中世庭園文化史―大乗院庭園の研究」
1961 (昭和36)	※10周年記念に桂離宮模型を長男らと製作		
56	55		
34	33		
26	25		
	人員増加 (37年度までに行政職10名、研究職13名となる)		

1961 (昭和36)	【京都御苑内における寝殿造系庭園遺跡】 ★凝花洞跡 ★九条殿 ★閑院宮跡 ★近衛殿		
1962 (昭和37)	【小堀遠州関係資料の探訪】 ☆指図等の複製作成 【興福寺一乗院の調査】 ☆宸殿・殿上の調査 【奈良市内の庭園調査】 ★東大寺竜松院 ★今西家 ★依水園 等 ■学報第13冊「寝殿造系庭園の立地的考察」	57 35 27	平城宮跡鉄道検車庫問題（2月） 奈良国立文化財研究所10周年記念式典（5月） 平城宮跡国費買い上げの決議（8月）
1963 (昭和38)	【京都市内庭園樹木調査】 ☆桂離宮・修学院離宮・仙洞御所・慈照寺ほか 【興福寺一乗院の調査】 ★発掘調査 【古代都城制の研究 平城京の復原的研究】 ☆平城京内1/1000地図の作成 【大安寺の発掘調査】 ★旧寺域の地形実測調査 ☆発掘調査 【鳥羽離宮の調査】 ☆発掘調査 【奈良県・京都府下の茶座敷と露地の調査】 ★依水園三秀亭 蔵松庵跡 ★称名寺独炉庵 ★東大寺四聖坊 ★慈照寺東求堂、漱蘇亭跡	58 36 28	〔4月1日現在〕 【建造物研究室】 森蘊（文部技官・室長） 牛川喜幸（技術員） （村岡正（臨時筆生）） 〔平城宮跡発掘調査処理要項〕の決定（3月30日） 平城宮跡発掘調査部の設置（4月）

1964 (昭和39)	★西芳寺湘南亭・北亭跡・縮遠亭通路付近 ★醍醐寺三宝院松月軒沈流亭 ★仙洞御所又新亭・醒花亭女院 ★御所寿山御茶屋跡 ★桂離宮竹林亭跡 ★修学院離宮変曲閣、止々斎 【小堀遠州関係資料の調査】 ☆史料内容の検討 【遺物・遺跡の写真測量による研究】 ★龍泉寺庭園 【奈良市内庭園の調査】 ☆仏池院跡 ☆摩尼珠院 ☆興福院 【鳥羽離宮発掘調査】 ☆鳥羽南殿 ☆証金剛院御堂 【小堀遠州関係資料の収集】 （史料内容の検討）	59 37 29	【建造物研究室】 森蘊（文部技官・室長） 牛川喜幸（兼） （村岡正（臨時筆生）） 【平城宮跡発掘調査部】 森蘊（兼） （第二調査室） 牛川喜幸（文部技官）
1965 (昭和40)	大阪府文化財専門員（7月1日） ※紫式部顕彰会からの依頼で、東三条殿復元模型製作	60 38 30	【建造物研究室】 森蘊（文部技官・室長） 牛川喜幸（兼） （村岡正（臨時筆生）） 【平城宮跡発掘調査部】 森蘊（兼） （第二調査室） 牛川喜幸（文部技官）
1966 (昭和41)	奈良都市計画地方審議会委員（2月22日） ※神奈川県立博物館の依頼で法住寺殿、鶴ヶ丘八幡宮、細川管領邸復元模型製作	61 39 31	【平城宮跡発掘調査部】 森蘊（兼） （第二調査室） 牛川喜幸（文部技官） （第三調査室） 藤原武二（文部技官）

国道24号線奈良バイパス建設計画

1967 (昭和42)	退官（3月31日） 史跡観自在王院整備専門員 会委員（4月1日） 社団法人日本観光協会専門 委員（4月1日） 退官記念講演「東大寺山 堺四至図」について」（4 月17日） ※平泉文化史館の依頼で毛 越寺庭園復元模型製作 「小堀遠州」（人物叢書140） 吉川弘文館（6月）	【鳥羽離宮の調査】 ☆発掘調査 【写真測量による遺跡・遺物の図化】 【調査・整備指導】 ☆五色塚古墳史跡公園化に伴う実測修景調 査 ☆末松廃寺史跡整備に伴う調査 ☆右橋千塚風土記の丘史跡整備調査 ☆多賀城廃寺史跡整備指導 ☆法皇山古墳史跡整備指導	
	62	40	32
			平城宮跡東院庭園の発見

参考文献

- ※1 「故森蘊先生著述作品目録（稿）」1989年の略歴による。一部、森
蘊（1973）「庭ひとすじ」学生社によって補った。
※2 「奈良国立文化財研究所年報」（1958）、1968、「奈良国立文化
財研究所二十年史」（1972）、「奈良国立文化財研究所三十年史」
（1982）による。
※3 ※2「年報」要項、牛川喜幸氏経歴は、恵谷浩子・前川歩（編）（2014）
「遺跡学の宇宙 戦後黎明期を築いた十三人の記録」日本遺跡学会に
よって補った。

森蘊における建築と 庭園の結びつきの視点

田中栄治

はじめに

日本庭園研究者で作庭家の森蘊は、日本建築学会の機関誌『建築雑誌』1983年9月号に、「建築と庭園の結びつきを求めて」〔森 1983〕と題する文章を掲載している。^{*1} 森は生涯を通じて建築と庭園の結びつきの視点をもって日本庭園研究および作庭を行なった。本稿では、森の建築と庭園の結びつきの視点の形成過程や建築家との交流についてまとめ、さらに森や

建築家による桂離宮意匠論における建築と庭園の結びつきの視点についての考察を行なう。

1. 背景

森が庭園を学び始めたのは昭和初期であるが、まず

その頃の背景を確認しておくこととする。齋藤英一郎の研究では、明治から大正期には建築界と造園界に密な交流があったとしている^{*2}。たとえば、明治政府によるお雇い外国人建築家であるJ・コンドルが著した『Landscape Gardening in Japan』[Conder 1893]は上原敬二に影響を与えている^{*3}。また建築界では、庭園に関する研究を行なった古宇田実や大江新太郎は、1918（大正7）年の庭園協会設立に理事として参加しており、その機関誌『庭園』には建築関係者が多く寄稿していた。さらに、大学の建築学科における庭園学の授業を、東京帝国大学での田村剛をはじめ造園系の先生が教えていた。このように森が庭園を学び始めた時期には、建築界と造園界の交流が背景にあった。また、大正から昭和初期に生活改善運動が行なわれた。当時発行された建築系雑誌に掲載された庭園に関する記事によると、生活改善運動における住宅改良の主なテーマの一つに、日本の伝統的な住宅形式の良さ、特に住宅が自然と一体になっている形式を見直すとい

2. 建築への関心

森は、東京帝国大学農学部農学科に入学して、田村剛の造園学に強く引かれたことから日本庭園研究を志した^{*5}。その田村の紹介で京都の社寺や御所、離宮の庭園を見て回ること、森は、庭園の研究において建築の知識の必要性を感じるようになる。そのため、森は藤島亥治郎の許しを得て東京帝国大学工学部建築学科の授業を聴講し始める。その後、1932（昭和7）年に森は日本建築学会に入会し、学会誌に論文を発表している。さらに、森は大学院の頃から庭園設計や造園の実地の仕事を経験しており、藤島の家も実際に森が施工していた^{*6}。大学院修了後の1938（昭和13）年に森は建築史研究会に入会している。建築史研究会は1940（昭和15）年から機関誌『建築史』を発行しており、森はそこに論文を発表している。つまり、森は学生の早い段階から庭園を研究するう

うものがあった「田中 2006」。もう一つは、西洋の住宅における耐震性や健康・衛生・生活の合理性を取り入れようというものであり、これらを合わせて、和と洋を統一した新しい日本式の住宅形式を模索しようということが大正後期から昭和初期に盛んに言われるようになった。

一方、建築よりも少し遅れて、大正後半から昭和初期には住宅の庭園も改造しようという議論が出てくる中で、造園関係者から住宅に関する提案が出るようになる^{*4}。その後、昭和初期になって建築家も庭園に関心をもち始める。この頃から、雑誌や書籍の中で住宅における建築と庭園の連携や、住宅設計における建築家と造園家の連携という議論が出てくる「田中 2014」。森はそういう時代に庭園を学び始めたことになる。

えて建築への関心を強くもっており、建築学会や建築史研究会に入会して、そこで自分の研究を発表していく。「故 森蘊先生著述作品目録（稿）」[「森蘊門下生一同 1989」]によると、戦前には森の論文は多くが建築系の雑誌に発表されていることがわかる。

3. 森蘊と東京工業大学

東京工業大学は1929（昭和4）年に設置された大学で、森は1931（昭和6）年頃から同大学の教授であり、建築家でもあった前田松韻の研究室に出入りしていた[森 1973^{24頁}]。前田は寝殿造系住宅の研究をし、1927（昭和2）年にカラーの復元図を建築学会誌に発表していた[前田 1927^{a, b}]。森は、前田から寝殿造系住宅の建築と庭園の研究は両方の研究者が手を取り合って進むべきという話を聞かされた

としており、1937（昭和12）年以降は、森が東京工業大学の近くに引越して、しばしば前田研究室を訪ねて指導してもらっている〔森 1973 24頁〕。

また、森は1953（昭和28）年に東京工業大学に学位請求論文「桂離宮の研究」を提出して、工学博士の学位を授与されるが、その桂離宮の研究を始めたきっかけにも前田が関わっていた（このあたりの経緯は〔森 1973 25頁〕に詳しい）。森は建築学会の推薦で1941（昭和16）年度に「江戸時代初期建築と庭園の研究、殊に桂離宮について」というテーマで文部省から研究補助を受けるが、最初のテーマは「平安時代建築と庭園との関係」としていたのを、前田が伊東忠太や藤島と話した結果、標題を変更して申請を出したとしている。さらに、「小堀遠州の建築論」の研究をしていた前田研究室の学生が、週に2回ずつ森の自宅にやってきて、森の研究テーマと見合わせて研究を進めていった経緯があり、ここでも前田が森の桂離宮研究にかなり影響していた。

前田が1944（昭和19）年に他界した後は、森は藤岡通夫と交流を続けて、東京工業大学とつながりを持ち続けていた。1950（昭和25）年からは、藤岡の依頼でかつて前田が担当していた東京工業大学の庭園学の講義を、森が非常勤講師として担当している〔東京工業大学 1951 104頁、森 1973 25頁〕。

さらに、森の学位請求論文によると、1951（昭和26）年度に宮内庁書陵部において、藤岡が整理した資料を利用することを許され、そこで新しい発見がたくさんあり、論文の完成に非常に役に立ったと書いている〔森 1953 6頁〕。森は農学出身であるにもかかわらず、工学博士を授与されたのには、前田研究室に出入りし、そこでの指導が非常に大きかったからだと考えられる。

『東京工業大学案内』によると、当時の東京工業大学の研究教育方針については、根本の学理に重きを置くと同時に実地にも重きを置くところにある〔東京工業大学 1932 6頁〕。理論だけではなく、実地問題に対して

理論的、実験的研究をとおして実際的方法をもって討究を行なうという研究教育方針をとっていた。特に建築学科では、建築計画分野について各種の理論的、実験的研究が進められ、その結果として合理的な建築を実現することを求めるという方針で研究教育が行なわれていた。森が実測や復原を重視するようになるのにも、東京工業大学での建築関係者との交流、特に前田や藤岡、さらに建築家で東京工業大学教授であった谷口吉郎などとの交流が影響しており、そこで森は建築と庭園の結びつきの視点を形成していったと考えられる。

4. 森と建築家の交流

昭和初期には建築家も庭園に対して興味をもちだしていくが、森は『日本の庭』の中で「昭和十年頃から後、

殊に終戦後の庭園界の特色として、農林関係の出身者よりは建築家出身の設計家の進出が目立っている」〔森 1960 129頁〕と書いており、特に堀口捨己、谷口吉郎、吉田五十八、坂倉準三、さらに若いところで、丹下健三や清家清という建築家の名前をあげている。

▼堀口捨己

まず、堀口捨己は1895（明治28）年生まれで、



図4-1 堀口捨己〔稲垣・他 1996 2頁〕



図4-5 谷口吉郎 [谷口 1974
9頁]

紹介している。その他の著書でも堀口の設計した住宅を取り上げており、森が堀口の設計した建築と庭園を高く評価していたことがわかる。

さらに堀口は、古文書や史料をもとに建築的な研究をしており、その中でも堀口の洛中洛外屏風の建築的研究に刺激を受けて、森も洛中洛外屏風の建築的研究をしている。逆に、堀口も「洛中洛外屏風の建築的研究」の中で森の研究を参考にしたと記している[堀口 1943 2頁]。堀口と森は、お互いの研究に刺激されて自分の研究の幅を広げていったという関係であった。さらに、森は『日本庭園史話』の中で、日本庭園史学を始めた人たちの一人として堀口を取り上げている。

森より10歳年上の建築家である(図4-1)。堀口は、茶室建築や茶庭の研究から日本的なものに興味をもって、自然と庭園と建築が一体となった空間構成の美を追求し、自身が設計した住宅や建築の作品集のタイトルを『堀口捨己作品・家と庭の空間構成』[堀口 1974]とするような建築家であった。1938(昭和13)年に堀口が日本庭園協会の理事になったとき、森は評議員を務めていた[横川 1996 232頁]。その後、1940(昭和15)年に発行された横井時冬(しきふゆ)の『日本庭園発達史』の校注を堀口と森が一緒に担当している。

森は、『美しい庭園』の中で堀口が設計した住宅について、「鉄筋コンクリート構造の建築と整形式庭園がよく調和している近代住宅の実例」(図4-2)[森 1950a 161頁]、「近代住宅の実用の中に生きている日本古来の庭園意匠」(図4-3)[森 1950a 162頁]、「建築家出身の造園家(堀口捨己博士)の代表的作品」(図4-4)[森 1950a 178頁]として



図4-2 吉川邸 [森 1950a
161頁]
鉄筋コンクリート構造の建築と整形式庭園がよく調和している近代住宅の実例(東京都品川区大崎 吉川市住宅)設計者 建築・庭園ともに堀口捨己博士



図4-3 岡田邸 [森 1950a 162頁]
近代住宅の実用の中に生きている日本古来の庭園意匠(東京郊外A氏住宅 設計者 堀口捨己博士)



図4-4 山川邸 [森 1950a 178頁]
西宮市山川氏住宅 建築家出身の造園家(堀口捨己博士)の代表的作品

▼谷口吉郎

る。特に、堀口は建築家として庭園をいかに美しくつくるかという抜群に鋭い意識で作品集や庭園研究書を著しており、森は堀口をつくる視点をもって庭園を研究するという点を高く評価している[森 1981 8頁]。

次に、森「1960」が『日本の庭』で取り上げていた建築家に谷口吉郎がいる(図4-5)。谷口は1904年生まれであり、森より1歳年上のほぼ同年代である。谷口は、東京工業大学の教授であり、伝統的な建築と庭園について「清らかな意匠」という視点から考察を行なって、建築や住宅を設計した建築家である。谷口の著作の中でも、『御所離宮の庭3 修学院離宮』[谷口・森・村岡 1975]では、巻頭文の「修学院山荘」を谷口が担当し、解説の「修学院離宮の歴史」を森が担当しており、実測図は庭園文化研究所が提供している。

『東京工業大学一覧』[東京工業大学 1931]によると、

谷口は1930（昭和5）年度に東京工業大学に講師として着任している。^{*9}その翌年頃から、森は東京工業大学の前田研究室に出入りしている。大学は設置されたばかりで規模もそれほど大きくなく、建築の研究室も非常に小さなものだったので、おそらくここで谷口と森は知り合っていたと考えられる。戦後になって、森は1950（昭和25）年度に桂離宮の研究に対して科学研究費の助成を受けるが、森が東京工業大学に提出した学位請求論文によると、この時に「東京工業大学教授谷口吉郎博士の協力者として、博士より種々便宜を與えられた」[森 1953 6頁]と書いている。科学研究費の助成を受けるために谷口が研究代表者となり、森がその協力者として申請を行なったと考えられ、ここに森と谷口に庭園研究における関係があったことがわかる。

さらに、森の学位請求論文の審査報告書によると、谷口はこの論文の副査の一人であった。^{*10}ここでも森と谷口に関わりがあったことがわかる。その審査報告書

によると、森の学位請求論文について、実測などの工学的な手法を使った庭園研究を初めて行なったことが、建築計画的に今後の研究に非常に貢献しているし、また造園学の分野でも非常に重要な研究になっていると評価されている。

一方谷口も、『修学院離宮』[谷口 1956]をまとめるときに、森の研究から非常に多くの知識を得たとしている。^{*11}ここでも森と谷口の庭園研究における関係があったと考えられる。森は、『美しい庭園』の中で谷

口が設計したK氏邸の庭を紹介し、「門から玄関までの空間の建築的取扱方、白い牆壁と敷石道と灌木とが調和して截然たる美しさを示している」[森 1950a 223頁]とし、谷口による庭園設計を評価している(図4-6)。

一方、谷口の庭園に関する記事や著作が多くなるのは1950年代からである。ちょうど科学研究費助成を受けるのに、森と谷口が研究協力の関係になった頃から、谷口が庭園について文章を書き始めており、森の研究に触発されたと考えられる。

▼西澤文隆

3人目の建築家として西澤文隆を取り上げる(図4-7)。西澤は、森「1960」が『日本の庭』で取り上げていた坂倉準三の設計事務所の最初の所員であり、森「1950b」が『家のはなし』に写真を掲載している坂倉が設計した住宅の担当者である(図4-8)。西澤は、庭園の研究、特に日本の伝統的な庭園の実測



図4-7 西澤文隆 [新建築社 1999 172頁]



図4-8 飯箸邸 坂倉準三設計 西澤文隆担当[森 1950b 32-33頁]



図4-6 K氏住宅 [森 1950a 223頁]
門から玄関までの空間の建築的取扱方 白い牆壁(ぞうへき)と敷石道と灌木とが調和して截然たる美しさを示している。(東京都中野K氏住宅 谷口吉郎博士設計)

をとおして、建築と庭園の交互関係、空間のつながりや流れを研究し、そこから見いだした日本の建築と庭園に特有の「透ける空間」を手がかりに建築や住宅の設計を行なった建築家である。西澤は1915年生まれで森より10歳下であり、森の影響が西澤にみられるという関係であった。西澤の庭園実測に参加していた金澤良春によると、西澤と森には1953（昭和28）年頃から親交があったとしている^{*12}。

西澤は1966（昭和41）年に建築と庭園の関わりに関する本の依頼を受けたときに、それまでの古建築や伝統的な日本庭園の資料や図面などを集めたが、建築と庭園の結びつきを表現した実測図がなかったため、自分で実測を始めたとしている^{*13}。ところで、それよりも前の1960（昭和35）年に出版された森の『日本の庭』にも同じことが書かれており、森も西澤より前に同じ理由で建築と庭園の実測を行なっていた。ここに西澤が受けた森からの影響がみてとれる。

また、『日本の庭』には、森が実測をしたときの思

いが書かれている。等高線が描かれていることや、庭石をかなり正確に実測していたのは、何かあって庭園が壊れたときに、復旧の役に立つからである。また樹木を描き入れていない図が多いのは、樹木は変化していくので最終の成果品には入れていないが、測量はすべてしてあり、原図にはすべて入れているとしている。さらに、森は庭園の研究をするうえで高低差が大事ということから、今までの測量にはなかった断面図を描くようにしたとしている^{*15}。西澤も実測図として断面図を作成し、庭園の特徴を捉えようとしている点で森と同じである。

西澤は、森の実測図を提供してもらうか、あるいは森の著作から拡大トレースをしたベースの図面を持って現地に行き、自分が知りたい情報を入れて実測図を描いていた^{*16}。さらに、『建築雑誌』1978（昭和53）年10月号に掲載された感銘を受けた図書に関するアンケートの中で、西澤は森「1945」の『平安時代庭園の研究』を取り上げ、「該博な知識の海の中に浸り

ながらもものをつくる喜びが味わえる筆力と構築力は氏自身がつくる立場を忘れていない証拠のように思われる¹⁷。西澤は森の日本庭園研究を高く評価し、大きな影響を受けていたことがわかる。

以上のことから、森は、日本庭園研究をして建築や住宅を設計した建築家と交流があったことがわかる。それまでの明治・大正から続く、建築界と造園界の交流がここでも続いていたと考えられる。

5. 桂離宮意匠論

ここでは、森を中心として、それ以前および以後の建築研究者あるいは建築家を書いた桂離宮の意匠についての文献を比較することで、森の建築と庭園の結び



図 4-10 新書院足元より庭への移り変わり
[藤島 1945 104 頁]

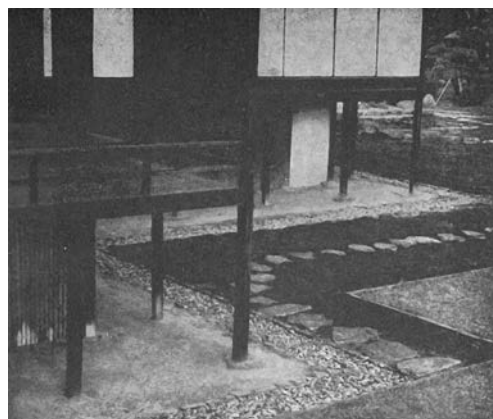


図 4-9 御中門内より御輿寄 [藤島 1945 18 頁]



上段左：図 4-11 御興寄前庭 [森 1951 口絵 1] / 上段右：図 4-12 中書院楽器の間前面の雨落溝と飛石 [森 1951 198 頁]
下段左：図 4-13 御興寄 [堀口 1952 口絵 13] / 下段右：図 4-14 楽器の間西の濡縁と中書院西側 [堀口 1952 口絵 20]

つきの視点についての考察を行なう。

藤島亥治郎が著した『桂離宮』の中に「これは注目すべき重要事であるが、桂の御庭が極めて建築的であることである」[藤島 1945 124 頁]という記述がある^{*17}。特に藤島は、御中門内より御興寄(図 4-9)や、新書院足元より庭への移り変わり(図 4-10)、松琴亭前の取り扱い、などの直線的な構成などは非常に建築的だとしている。さらに、古書院の月見台からの眺めの軸や、月波楼から松琴亭を結ぶ軸に建築と庭園を結びつける視点があると指摘している。森は、この藤島の『桂離宮』に非常に啓発されたとしている[森 1973 30 頁]。

創元社から発行された森「1951」の『桂離宮』では、「庭園における建築的意匠」「建築と庭園の関連的合理性」についての記述がある。特に森は、御興寄前庭(図 4-11)や、中書院楽器の間前面の雨落溝と飛石(図 4-12)、茶亭付近、松琴亭周辺の取り扱いなどが著しく建築的であると指摘しており、藤島「1945」の『桂

離宮』の影響を受けていることがわかる。さらに、森は建築と庭園の構成が非常に合理的につくられているとし、たとえば月を見るといふ目的に対して建築と庭園が一体的に考えられていて、それにより桂離宮の魅力が作り出されていると指摘しており、森が建築的な視点をもって桂離宮を評価していたことがわかる。

堀口「1952」は森の1年後に『桂離宮』を出版した。堀口は建築家として写真をとおして桂離宮の建物や庭のよさ、美しさを表現しようと試みており、御興寄(図 4-13)や楽器の間西の濡縁と中書院西側(図 4-14)、松琴亭の土庇から周辺の庭園にかけてなどに建築的な手法がみられるとしている。堀口のこれらの視点には藤島や森からの影響をみることができる。また、堀口「1952」の『桂離宮』には森の研究が引用されている箇所があり、森の研究を参考にしていたことがわかる^{*18}。また、森ものに『新版 桂離宮』の跋文の中で、堀口の著作に自分の研究が引用されていることを嬉しく思っていると記している[森 1956 跋文 3 頁]。



図 4-15 観念的な間仕切 [森 1956 299 頁]

東都文化出版から発行された森「1955」の『桂離宮』は、森の学位請求論文の内容に加筆再編して出版されたものである。ここでも「庭園における建築的意匠」「建築と庭園の実用性」についての記述がみられる。あるいは、今まで庭園で使われていなかった加工された石造材料や、自然らしくない方形の刈り込みの植栽を利用しているところに新しい考え方がありとされている。

としている。ここには森の影響がみられ、西澤は桂離宮の庭の刈り込みや植栽を間仕切とみなして、それぞれが屋外の室だとみなせる庭園になっており、非常に建築的につくられていると指摘している。特に飛石の高さによる室の区切りについては、西澤は森の発見であると記している「西澤 1976 444 頁」。

これらのことから、森の日本庭園史研究では、桂離宮意匠論にみられた庭園における建築的意匠や建築と庭園の実用性など、建築と庭園の結びつきの視点が重要であると考えられる。さらに、森の建築と庭園の結びつきの視点は、学生時代の東京帝国大学工学部建築学科での聴講から、建築学会や建築史研究会での研究発表、東京工業大学での前田や藤岡・谷口との研究協力、堀口などの建築家たちとの交流の中でつくり上げていった、森ならではの視点ではないかと考えている。

さらに森は、桂離宮には戸外室や建築と呼ぶようなしつらえの庭の部分もあるということを指摘している。創元社から発行された森「1956」の『新版 桂離宮』では、「庭園における建築的意匠」「建築と庭園の実用性」とともに「桂離宮の国際的性格」「庭園における間仕切の存在」という視点も追加されている。特に森は、庭園における間仕切の存在というのが、方形の刈り込みや植え込みで囲われた部分を間仕切とみなすとともに、飛石が分かれているときに片方の飛石が30センチ程度高くつくられていて、そちらに行くには少し意識が変わる仕掛けがされているものも、意識のうえで空間を分ける観念的な間仕切という見方ができると指摘している(図4-15)。森は、建築的な視点から桂離宮の庭園を評価するということをこの著作の中で行なっている。

最後に、西澤は『庭園論Ⅱ』の中で桂離宮の庭園について書いており、「景を区切つてゆく技法が桂離宮ほど徹底しているものはない」(西澤 1976 436 頁)

補注

- * 1 この文章は森が日本建築学会に入会して50年目に終身会員となった際に掲載されたものである。
- * 2 齋藤「2006」による。この論文は、建築家による日本庭園研究の系譜とその特徴を把握し、建築界と造園界の交流の一端を知ることが目的としている。
- * 3 上原「1983 57 頁」に記述がある。上原は「本郷高德講師の蔵書を再三に互って借覧し、貪るように読んだ」と記している。
- * 4 上原敬二(1919)『住宅と庭園の設計』嵩山房、大屋靈城(1924)『庭本位の小住宅』裳華房、西川友孝(1930)『近代的な小住宅』資文堂書店、西田富三郎(1934)『新時代の庭園と住宅』太陽社書店など、造園の側から住宅にまで言及した著作が挙げられる。
- * 5 森「1973 12 頁、1981 2 頁」などに記述がある。森は田村の造園学を1929〜1931(昭和4〜6)年と3年続けて受講した。
- * 6 森「1957 あとがき」による。森は「東大教授藤島亥治郎博士邸の庭木も私が運び、運び、そして植えることのお手伝いをしたものである」としている。
- * 7 森・他「1949 64 頁」に若狭邸、森「1950 b 32〜33 頁」間の挿絵に吉川邸など、森は著作の中で堀口の住宅を取り上げている。
- * 8 森「1973 121〜122 頁」による。堀口の洛中洛外屏風絵の研究は堀口「1943」があり、森の洛中洛外屏風

絵の研究は、森「1962 84―85頁」に「室町時代（平安京）の湧泉と著名庭園」があり、また1967（昭和42）年に神奈川県立博物館からの依頼を受けて中世武家住宅の模型をつくった際に「洛中洛外屏風絵」の細川管領邸の復元的研究を企画したとしている。

*9 東京工業大学「1931 75、80頁」による。谷口は翌1931（昭和6）年に助教授となり、建築意匠・衛生工学（のちに建築衛生）・設計及製図第一・同第二・同第三を担当し、1936（昭和11）年度より伊東忠太とともに建築史も担当した。

*10 藤岡・谷口・加茂「1953」による。森の学位請求論文の審査員は、東京工業大学教授の藤岡通夫、谷口、東京工業大学教授で科学技術史が専門の加茂儀一であり、藤岡が主査であった。

*11 谷口「1956 はしがき 2頁」による。谷口は、森の古図や古い記録によって造営の規模を復原した研究から多くの知識を得たことを感謝している。

*12 金澤「2006 39頁」による。金澤によると、森の研究の背景には藤島亥治郎、藤岡通夫、平井聖、村岡正らがいて、それぞれの研究テーマについて西澤はよく知っていたとしている。

*13 西澤「1978 77頁」による。西澤は、「夫々の学者は名園なら名園を研究しているだけで、それが建築にどのように関係しているかなど考えてもいない。古建築の方も同様で、その関り合いを本にするということは、日本のみならず世界でも希有のことだったのである。（中略）図面は全く新

しく実測して起すより手はないのである」と記している。

*14 森「1960 10頁」による。森は「従来の建築関係の実測図だと建築の部分は正確でも、環境の部分が経視され勝ちであつたし、庭園関係の実測図だと、建築の方が見取圖的に杜撰であつたというように、共に不完全であつたことに對する私の氣持の上での不満が、私をこの種の仕事に没頭させ、このような實測圖作製の面倒な仕事にかり立てる動機となつたのである」と記している。

*15 森「1960 5―6、9頁」による。森は日本庭園の「作者の性格と流派の傾向、作風の特色を論じ、日本の庭のよき、面白さを浮き彫りに」〔森 1960 9頁〕するためには地形と庭石を重視することが必要であるとしている。

*16 金澤「2006 39頁」による。また、西澤「1976」、西澤文隆実測図集刊行会「2006」などに西澤が庭園を実測する際に、森の実測図を参考にしたことが記されている。

*17 森「1955」の中で、森は藤島以前に岸田日出刀、ブルーノ・タウト、柳亮の桂離宮意匠論について言及しているが、これらには藤島の指摘する桂離宮の庭園を建築的とする視点はみられない。

*18 堀口「1952」の中で、堀口は新御殿の前の芝庭、智仁親王の馬を好まれたこと、八条宮妃常照院の手紙、賞花亭と今出川本邸のことなどに関して森の研究を引用している。

引用文献

- Conder, J. (1893) *Landscape Gardening in Japan*. Kelly and Walsh.
- 稲垣栄三・他（監修）（1996）『堀口捨己の「日本」——空間構成による美の世界』建築文化8月号別冊 彰国社
- 上原敬二（1983）『この目で見た造園発達史』この目で見た造園発達史」刊行会
- 金澤良春（2006）『西界曼陀羅——「設計と実測」あるいは「坂倉三と西澤文隆」 西澤文隆実測図集刊行会『日本の建築と庭——西澤文隆実測図集 解説編』中央公論美術出版 36―47頁
- 齋藤英一郎（2006）『近代建築家による日本式庭園研究の系譜とその特徴——著作・雑誌にみる建築界と造園界の交流』『日本庭園学会誌』14―15号、15―22頁
- 新建築社（1999）『坂倉建築研究所 アソシエイツのかたち』新建築1999年9月臨時増刊号
- 田中栄治（2006）『雑誌『建築と社会』にみる戦前の関西の住宅——阪神間のモダニズム住宅 その2』『神戸山手大学紀要』8号、105―118頁
- 田中栄治（2014）『昭和初期の住宅における建築と庭園——西川友孝『造庭建築』を中心に』『神戸山手大学紀要』16号、19―36頁
- 谷口吉郎／佐藤辰三（写真）（1956）『修学院離宮』毎日新聞社
- 谷口吉郎（1974）『建築に生きる』日本経済新聞社

谷口吉郎・森蘊・村岡正／遠藤崇（写真）（1975）『御所離宮の庭3 修学院離宮』世界文化社

東京工業大学（1931）『東京工業大学一覧 自昭和五年至昭和六年』

東京工業大学（1932）『昭和八年度 東京工業大学案内』東京工業大学（1951）『東京工業大学一覧 昭和25年度』

西澤文隆（1976）『西澤文隆小論集3 庭園論II』相模書房

西澤文隆（1978）『庭への履歴書』『庭』第39号、74―79頁

西澤文隆実測図集刊行会（2006）『日本の建築と庭——西澤文隆実測図集 解説編』中央公論美術出版

藤岡通夫・谷口吉郎・加茂儀一（1953）『森蘊氏提出学位請求論文審査報告』東京工業大学

堀口捨己（1943）『洛中洛外屏風の建築的研究』『畫論』18号、2―40頁

堀口捨己（1952）『桂離宮』毎日新聞社

堀口捨己（1974）『堀口捨己作品・家と庭の空間構成』鹿島研究所出版会

前田松韻（1927a）『寝殿造りの考究（一）』『建築雑誌』41巻491号、1―38頁

前田松韻（1927b）『寝殿造りの考究（二）』『建築雑誌』41巻492号、105―141頁

森蘊（1945）『平安時代庭園の研究』桑名文星堂

森蘊（1950a）『美しい庭園——鑑賞と造園』創元選書197創元社

森蘊（1950b）『家のはなし』小学生文庫 小峰書店

森蘊（1951）『桂離宮』創元社
 森蘊（1953）「桂離宮の研究」東京工業大学学位請求論文（博士論文）昭和28年12月26日工学博士授与
 森蘊（1955）『桂離宮』東都文化出版
 森蘊（1956）『新版 桂離宮』創元社
 森蘊（1957）『日本の庭園』創元選書259 創元社
 森蘊／恒成一訓（写真）（1960）『日本の庭』朝日新聞社
 森蘊（1962）「寝殿造系庭園の立地的考察」『奈良国立文化財研究所学報 第13冊』
 森蘊（1973）『庭ひとすじ』学生社
 森蘊（1981）『日本庭園史話』NHKブックスカラー版 日本放送出版協会
 森蘊（1983）「建築と庭園の結びつきを求めて」『建築雑誌』98巻1211号、20頁
 森蘊・大岡實・小林文夫（1949）『こどものための文化史——日本の住居のうつりかわり』童話春秋社
 森蘊門下生一同（1989）『故 森蘊先生著述作品目録（稿）』庭園文化研究所
 横井時冬（1940）『日本庭園発達史』創元社
 横川茂樹（1996）「堀口捨己をめぐる人びと——他分野を中心として」『堀口捨己の「日本」——空間構成による美の世界』建築文化8月号別冊 彰国社 231～234頁

参考文献

谷口吉郎／佐藤辰三（写真）（1962）『修学院離宮』淡交新社
 藤岡洋保（1997）『合目的性を越えた意匠の世界——谷口吉郎自邸』新建築社
 森蘊（1971）『奈良を測る』学生社

はじめに

一般的に、森蘊は日本庭園の歴史家、いわゆる学者として認識されている。たとえば、1994年に出版された『江戸の大名庭園——饗宴のための措置』〔白幡1994〕という本の中で、造園学者の白幡洋三郎は次のように紹介した。

「森蘊は奈良国立文化財研究所に長く勤め、国立大

森蘊の庭 復元整備と作庭の間^{あわい}

マレス・エマニユエル

学を含むいくつかの大学でも日本庭園史を講じた。造園の研究では学界の大御所である」

〔白幡 1994 12頁〕

森は東京帝国大学農学部を卒業した後、東京工業大学で博士号を取得した純然たる学者であり、造園界に大きな功績を残したことは誰もが認める事実である。本報告書の最初に掲載した村岡正の「森蘊先生の業績」



図 5-1 森史夫による森蘊の肖像画（「森蘊旧蔵資料」奈良文化財研究所蔵）

という追悼文では、森が書き上げた著作や指導した復元整備事業、また授かった勲章などが列挙され、学術的な業績が詳らかにされたのち、最後は次のように締めくくられている。「日本庭園史の研究に果たされた先生の多岐にわたる業績はまことに大きく、計り知れないものがある」〔村岡 1989〕。その認識は今となっても変わらない。造園学者の尼崎博正にとって森は「今日の庭園研究の基礎を築いた」〔尼崎 2014〕人物であり、また考古学者の鈴木久男にとって森は「日本庭園史研究の第一人者」〔鈴木 2018〕であるという。

結局、表現は変わっても、森は歴史家として高く評価され、日本庭園史を考えるうえでは欠かせない存在であることは共通している。

このような偉大な業績の陰に隠れ、森の作庭活動はこれまで見落とされてきた。というより、貶められてきた、過小評価されてきたという印象さえある。先に取り上げた「森蘊先生の業績」という文章を読み返しても、作庭活動は後半の数行だけに集約され、評価も位置づけもされていない。たしかに、森がつくった庭がテレビや雑誌などで紹介されることはきわめて稀であり、最も活躍した奈良県においてもほとんど知られておらず、注目を浴びることはない。活動していた当時も今も、その認知度は低いですが、森にとって庭園史研究と作庭は切っても切れない関係、表裏一体のものであった。「私の庭園史研究は、歴史のための歴史研究であるより、これからの庭園意匠の在り方を考える参考資料の収集と整理」のためと白状するほどであった〔森 1967〕。

森は大学時代から作庭をたしなみ、「生活が維持できたなら私はそのまま研究を片手間としながら、実地の方に進みたい」〔森 1973 172頁〕と考える時期もあったという。結局、1952（昭和27）年に奈良文化財研究所に着任すると、庭園史研究が森の本業となり、作庭は副業になった。しかし傍らであったとはいえ、森は晩年まで研究と並行して新しい庭をつくり続けた。（「作庭をとおして」私は机の上の庭園史学者からはい出すことができたのではなく、単なる庭園評論家または理論家の域から脱皮することができ、今日のように古庭園の発掘・復元・整備などに躊躇せず立ち向かえる自信を植え付けてもらった」と説明している〔森 1973 229頁〕。森にとって、作庭は単なる気分転換や娯楽のようなものではなかった。歴史の研究は新たな庭のための発想源となり、作庭現場での経験は文化財の復元整備に役立った。つまり、森の業績を理解し、評価しようと思えば、庭園史の研究と作庭の活動は不可分の関係にあるということである。

歴史家と作庭家。森のこの二つの側面を浮き彫りにするために、本稿では歴史的な庭園の復元整備の事業に合わせて、森が新しくつくった庭に焦点を当ててみたい。^{*}

森が復元整備した庭園は特別史跡や特別名勝、今となっては世界遺産にも登録されているような有名な庭がほとんどである。一方で、森が自らつくった庭は50年以上経ってもどれも無名で、文化財になったためしかない。東北から九州まで森は生涯約70の庭園をつくったが、一般公開されているところは少なく、地元でも知られていない。ここで取り上げる庭園はその一部にすぎないので十分な結論を導き出すことは難しいが、本稿は森がつくった庭の現況を報告するとともに、その位置づけや評価などを再考する試みである。それでは、具体的な事例を取り上げながら、森の知られざる業績に光を当ててみよう。

1. 法華寺「仔犬の庭」… 史跡・名勝の指定範囲内につくられた庭

法華寺は奈良市内、平城宮跡の北東に位置する尼門跡である。現在する本堂と南門と鐘楼は1601（慶長6）年に再建されたもので、重要文化財に指定されている。その北西に位置する客殿の前には京都御所の「写し」と言われる庭園が広がり、2001（平成13）年に国指定名勝になった。

1950（昭和25）年に近畿地方に多大な被害をもたらしたジェーン台風で法華寺の境内も罹災したので、翌年から1958（昭和33）年までの7年間で「昭和の大修理」という伽藍整備が行なわれた。当時、奈良文化財研究所の建造物室長であった森はその一環で客殿とその周辺の庭園の実測調査や修理を指導した。その結果、1954（昭和29）年に建物と庭園は奈良県の指定文化財になった。当時の説明文で「法華寺庭

園」は次のように定義されている。

「この庭園は、法華寺本堂の東側にある中門を入って、本坊客殿玄関にいたる前庭と、客殿南前面の内庭と、上御方西南方に展開する主庭との三つの区画から成り立っている（後略）」

〔奈良県教育委員会事務局文化財保存課 1957 13頁〕

指定された「法華寺庭園」というのは、客殿の東（前庭）と南（内庭）と西（主庭）に広がる3区画によって構成されているという。しかし、数年後の1958（昭和33）年、大修理の最終年に森は客殿の北西に移築された建物（庫裏と茶室）の前に庭をつくるよう、当時の住職久我高照門跡に依頼された。戊年であったということ、法華寺の「お守り犬」に因んで、森はその庭を「仔犬の庭」と名づけた。その発想の源は「山のふもとならびに野筋の石はむら犬のふせるがごとし」という『作庭記』の一文や『鳥獣戯画』に描かれ

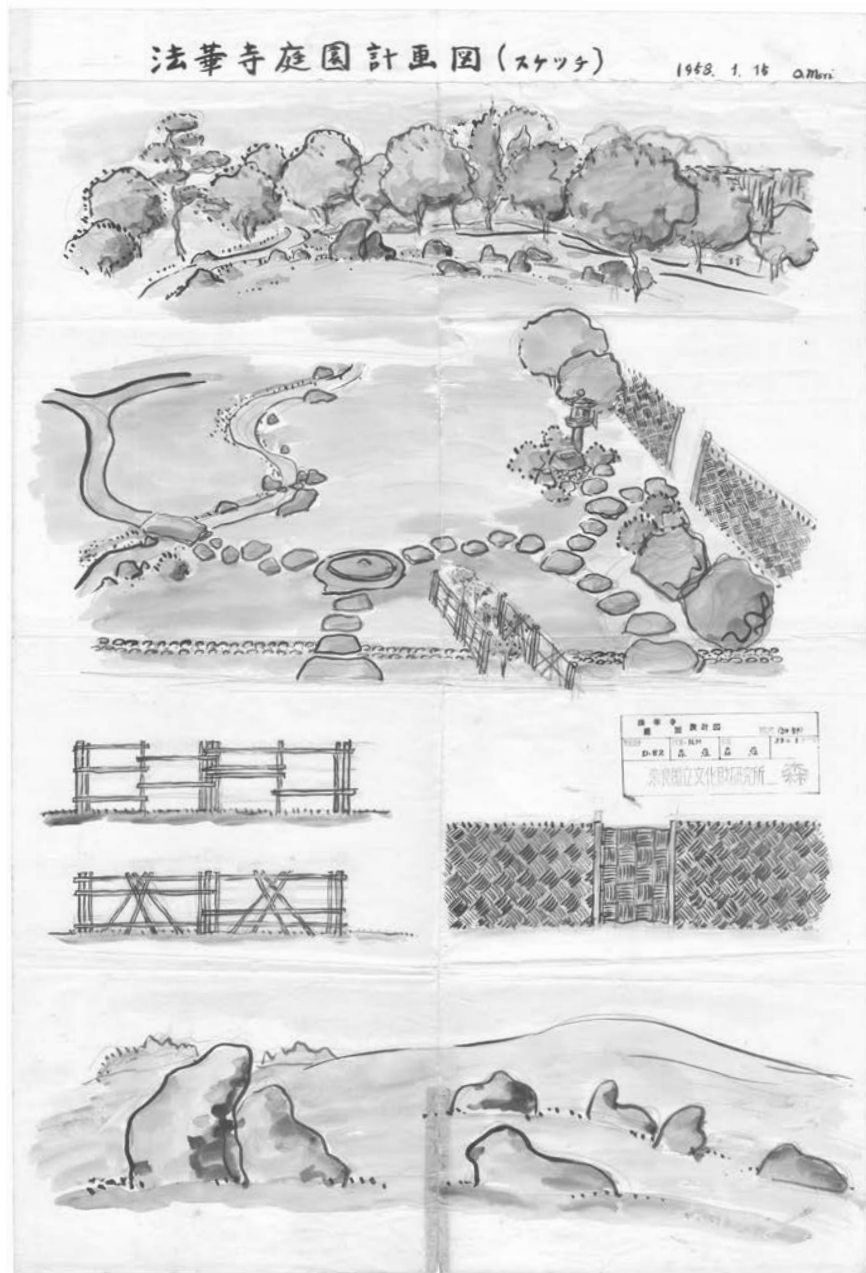


図 5-2 森蘊による「法華寺庭園計画図」(「村岡正旧蔵資料」奈良文化財研究所蔵)



図 5-4 名勝法華寺庭園指定範囲 [光明宗法華寺 2019] (森蘊作の「仔犬の庭」「慶久庵露地」「東室庭園」の名称と範囲は筆者による)

構想を練ったのである。

この「仔犬の庭」は森の作風を考えるうえでたいへん貴重な事例ではあるが、ここではその構成や意匠よりも、その立地条件について考えたい。森の「仔犬の庭」は当時、奈良県の指定文化財であった法華寺庭園のすぐ北西に位置しており、池に注ぐ流れによって構造的に法華寺庭園と繋がっているような、密接な関係にある。にもかかわらず、2001年に法華寺庭園が国指定名勝になったときは「三つの区画」が指定の対象になっても、隣接している「仔犬の庭」については言及されなかった。「仔犬の庭」は指定の対象になっていないので当然のことと思われるが、よく調べてみれば、国指定名勝の範囲はほぼ現在の法華寺境内の全体に及ぶことがわかった。つまり、「仔犬の庭」ももちろんのことであるが、森が1973(昭和48)年につくった慶久庵露地と、1985(昭和60)年につくった東室庭園も名勝の範囲内に含まれる。その実態が判明したのは2017年、奈良文化財研究所が「名勝法華寺

ている犬の姿であり、またロマン派音楽を代表する作曲家、フレデリック・ショパンの「子犬のワルツ」でもあったという。『作庭記』も『鳥獣戯画』も日本の

歴史的な書物であるのに対して、ショパンは19世紀の西洋音楽家である。一見して矛盾に思われるが、森は古今東西の文化に縛られずに、「犬」をイメージして

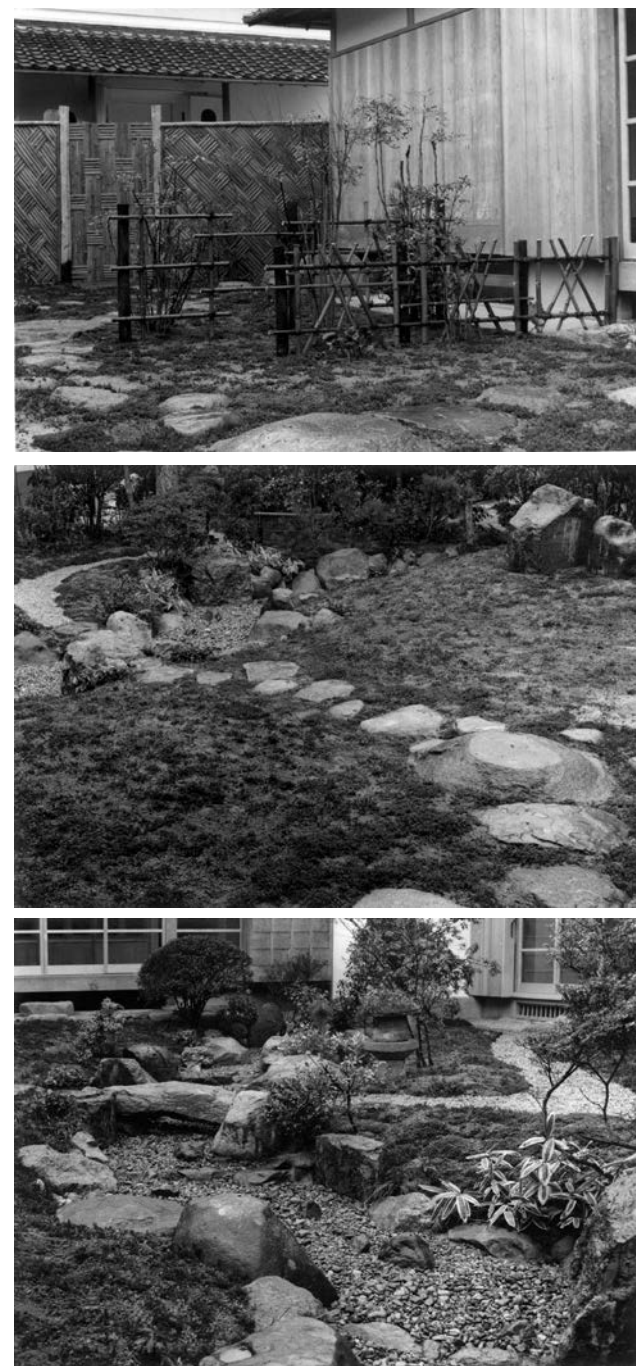


図 5-3 作庭直後の「仔犬の庭」(「村岡正旧蔵資料」奈良文化財研究所蔵)

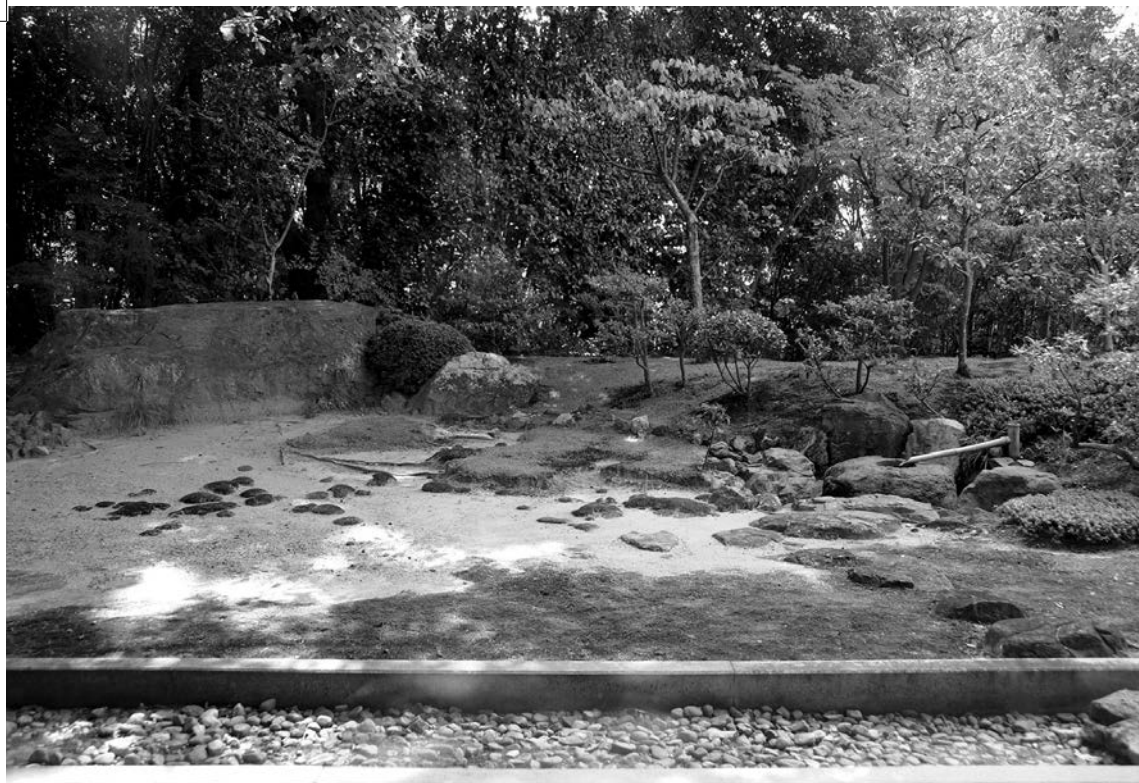


図 5-5 上：慈光院新書院の南庭／下：慈光院新書院の北庭（マレス撮影、2012 年）

庭園保存活用計画」のための調査にとりかかったときである。その中で、1958（昭和33）年につくられた「仔犬の庭」は近世の「名勝法華寺庭園」とは明らかに質の違うものであるとは言うものの、空間的に連続しているし、名勝の範囲内に含まれているというところから「副次的な価値が認められつつある」という結論にいたった。その他の慶久庵露地と東室庭園はさらに新しい庭であるということと、また同じ法華寺境内の中でも、客殿とは離れた区画にあるので、特に評価はなされていない。おそらく、森自身は名勝の範囲内に作庭したつもりはなかったであろうが、「仔犬の庭」のように、周辺環境との調和を図ってつくったことは注目に値する。これからは、狭義の「名勝法華寺庭園」（客殿周辺の3区画）と広義の「名勝法華寺庭園」（境内）を分けて調査や保護が行なわれることになるのであろうが、森がつくった庭園の評価と位置づけは今後の大きな課題となった。

2. 慈光院「新書院庭園」…環境整備としての庭づくり

慈光院は奈良県郡山市、富雄川の西に位置する禅宗の寺院である。1663（寛文3）年に石州流茶道の開祖・片桐貞昌（石州）が創建したことに始まる。庭園の成立時期とその変遷の過程は明確ではないが、書院と茶室と同時期、江戸初期まで遡る可能性が高いということから、早くも1934（昭和9）年に国の名勝に指定された。

1967（昭和42）年には書院の西側に鉄筋コンクリートの新書院が建てられたが、重要文化財の建物と名勝庭園に隣接するので適切な環境整備が必要だと、当時の奈良県文化財保存課が指示した。したがって、当時の住職尾関昭保が森に新書院庭園の作庭を依頼した。作庭といっても、第一の目的は一般公開されている園路から新書院を隠すことであつた。そのために森は

敷地の境目に常緑樹を密に植えた。先述した法華寺の「仔犬の庭」の場合、森は文化財庭園との連続性を重視し、緩衝地帯として新しい庭をつくったが、慈光院では逆に断絶、古い庭と新しい庭を切り離すことになった。一見して、まったく異なるアプローチであると思われるが、森があくまでも新しい環境に合わせた庭づくりに専念した結果である。また、新書院の南は広場となっていたので、一面に苔を敷き、随所に捨石を配置した。北西の隅には手水鉢を据えるなど、全体を「露地風」に整えた。それはやはり慈光院の創始者であり、茶匠でもあった片桐石州がつくった建物と庭に合わせるためであったのではないだろうか。とにかく、隣接している文化財との関係を念頭に置いて、新しくできた建物が目立たないように、目立たないように心がけたという。

〔前略〕在来の慈光院風物とは異質の、しかも大がらな建物が、重要文化財構築物にきわめて近接して建てられることはけっして好ましいことではない

が、できてしまった以上なんとか始末しなければならぬ。この庭園工事はそのなんとかしなければならぬ場合の試みとしては、意義があったのではないかと思っている」

〔森 1973 197頁〕

森は日本庭園の歴史家なのに、新書院は「名勝庭園」に隣接して建てられたことより、「重要文化財」に指定された建造物の近くにできたことを惜しむところが興味深い。しかし、森は名勝法華寺庭園の場合でもみたように、常に周辺環境に合わせて、特に文化財に配慮しながら新しく庭をつくったことが特徴であるといえる。たとえば、1966（昭和41）年に奈良文化財研究所の牛川喜幸と共著した記事の中で、森は文化財建造物の周辺につくられた庭園のあるべき姿を次のように解説している。

〔前略〕折角厳正に復元的修理がなされた建造物の周辺において、造園家は十分慎重でなければならぬ

い。庭園意匠としてすこぶる奇抜なものでも、それが当該保存対象の性格としっくりしない場合は、かえって逆効果さえ生ずることを思うべきである（龍吟庵とその庭園）。（中略）安易な造園趣味で満足しようとする気持ちを極力抑制せねばならない

〔森・牛川 1966 46頁〕

歴史的な建物の周囲を整備するとき、森と牛川は「造園趣味で満足」しないことと、「気持ちを極力抑制せねばならない」という、文化財に携わる人の心得というか、あるべきスタンスを明確に示しているが、具体的に良い事例を示さない。逆に、括弧で「逆効果」の悪い事例を取り上げている。その事例というのは、森と同時代に活躍した重森三玲がつくった東福寺龍吟庵庭園である。龍吟庵には、室町時代初期に建てられた現存最古の方丈建築が残っており、国宝に指定されている。1964（昭和39）年、方丈の修理が終わった後、重森が当時の吉田義寛住職の依頼により、環境整備の

一環で3つの庭をつくった〔重森 1972〕。「龍吟庵」「不離の庭」「無の庭」という、当時の文化財の業界を分裂させるような斬新な庭であった。方丈の東に広がる「龍吟庭」では、白砂と黒砂を敷き、青石を利用して昇天する龍を表現した。西の「不離の庭」では、大明国師の幼少の頃の故事にちなんで、赤い砂の中に狼や犬などをイメージして石を据えた。方丈の正面（南）に当たる「無の庭」の場合、重森は昔ながらの白砂を敷き詰めた平地をそのまま保存したが、「龍吟庭」との境目に大胆な稲妻模様の竹垣を設置することによって、メリハリをつけた。とにかく、全体的に色彩豊かで動的な表現であり、室町時代の庭というより前衛美術やインスタレーションのような斬新な庭である。今となつては、それは高く評価され、観光の名所にもなりつつあるが、森と牛川にしてみれば、これはあくまでも「安易な造園趣味」であり、古い歴史をもつ国宝の建物を取り巻く環境として不適切であるという（重森と森の庭園観については「マレス 2014a」を参照）。



図 5-7 重森三玲による東福寺龍吟庵の「龍吟庭」／「不離の庭」／「無の庭」
(マレス撮影、2013 年)

3. 和歌山城「二の丸庭園」…「推理を動かす庭」

森ができるだけ周囲の環境に合わせる、隣接する文

化財と調和するような庭づくりに細心の注意を払ったことは、法華寺の「仔犬の庭」や慈光院の「新書院庭園」の分析でわかった。連続を選んでも、断絶を選んでも、不釣り合いな組み合わせにならないように、自己主張

をしない、自己満足に終わらない庭を求めた。そして、どんな場所や状況においても、その作風は常に日本最古の庭園書『作庭記』の理念に基づくものであったという。

「(前略) 外見は前衛的であっても、結局帰するところの理論は『作庭記』の内容に高らかに唱えられる自然順応精神であること、中には現在残っていない作庭記流庭園の復興的作品と見るべきものに含まれてくるのである」

〔森 1964 144 頁〕

森が11世紀後半に成立したと思われる『作庭記』を参考にするのは驚くべきことではない。最初出版した庭園の研究書は『平安時代庭園の研究』〔森 1945〕であり、そして最後に刊行したのは『作庭記の世界——平安朝の庭園美』〔森 1986〕である。その間に出版された多数の著書で『作庭記』を読み解き、現存する平安期の名園と照らし合わせながら解説

を行なっている。森以前の研究では、室町時代に発展した禅宗と茶の湯の影響を受けた枯山水や露地こそが日本庭園の最高峰であり、その独自性を最もよく示すという歴史観が一般的であったのに対して、森はさらに遡って、平安時代末期は日本庭園の「第一の黄金期」であると位置づけ、戦後から晩年まで京都の法金剛院庭園や浄瑠璃寺庭園、岩手県の観自在王院や毛越寺庭園、福島県の白水阿弥陀堂庭園など、平安時代の庭園遺構の復元整備に尽力している〔森・他 1960〕。研究対象が変わっても、室町時代の門跡寺院旧大乗院庭園や、江戸初期の京都御所、桂離宮、修学院離宮などという皇族や貴族の庭園に焦点を当てた。つまり、日本庭園の長い歴史の中でも、森は「浄土式庭園」や「寝殿造系庭園」、いわば王朝趣味の庭園を理想とした。歴史家として、その実態を明らかにすると同時に、平安時代と『作庭記』こそが日本庭園の原点であることを証明したのである。

作庭家としても、森は『作庭記』の「自然順応精神」

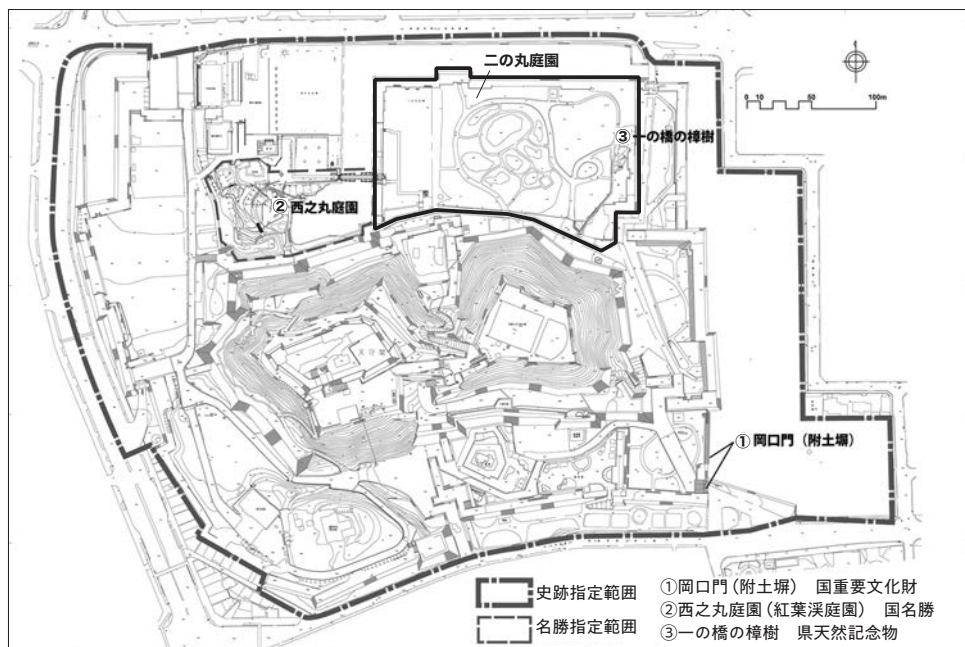


図 5-8 和歌山城の史跡・名勝指定範囲 [和歌山市産業まちづくり局観光国際部和歌山城整備企画課 2017] (森蘊作の「二の丸庭園」の名称と範囲は筆者による)



図 5-9 左上：和歌山城二の丸庭園の作庭風景／右上：二の丸庭園の開会式（「森蘊旧蔵資料」奈良文化財研究所蔵）／右下：和歌山城二の丸庭園（マレス撮影、2012 年）

に徹した。森の作風は環境に合わせることで、自然の地形と景色を生かすために作為を極力抑えるという美的感覚を重視した。「いつも不自然になることを戒められていた」と村岡正も指摘している。しかし、それだけではない。新しい庭をつくっても、森は『作庭記』を現代的に解釈し、「作庭記流庭園の復興的作品」を目指した。言い換えれば、新作でも、森は常に王朝趣味の庭を「復元」しているつもりでいた。村岡正の言葉をもう一度借りると、森の作庭活動は「伝統の現代化」であった。そう考えると、森は復元と作庭、古庭園と新作、平安時代と昭和期、歴史家と作庭家というものも明確に分けておらず、特別に境界線を引いていなかったのかもしれない。だから、彼にとって文化財庭園の整備の一環で新たな庭をつくることはごく自然なこと、なんの違和感もなかったと思われる。

こうして、森が文化財担当者としてつくった庭でも、今となつては周囲の文化財にそぐわない、不適切であるという指摘もある。その一つの事例は和歌山城の二

の丸庭園である。

和歌山城とその周辺は、1931（昭和6）年に史跡として指定され、北西隅には西之丸庭園（通称・紅葉溪庭園）という江戸初期の大名庭園がある。1970年から1972年（昭和45～47年）の終わりまで、森は和歌山市に依頼され、西之丸庭園の実測、発掘、そして復元整備の工事を指導した〔森 1973〕。続いて、1975（昭和50）年に和歌山城の南東隅にある岡公園の整備計画を策定し、さらに1982（昭和57）年には西之丸庭園の東、堀に隔たれた二の丸庭園の設計を行なった。

二の丸庭園というのは、和歌山城史跡の範囲内であるが、戦後に野球場やNHKの校舎などが設置された場所である。森が設計する頃には更地になっていたのだ、まずは現況の実測と発掘調査から始まった。発掘した結果、特に庭園の遺構が見つからなかったため森は和歌山城公園の一部として、自由に整備することにした。無論、「自由」というのは『作庭記』の立石口

伝と『鳥獣戯画』を参考にすることであった。その作庭意図を森は次のように説明している。

「和歌山城の建つ虎伏山とらふすやまの名になぞらえ、猛虎の姿を示した庭石を中心として、鳥獣類が仲よく集まる家族的な生態を庭石群で表現した庭園である。（中略）（『作庭記』と『鳥獣戯画』）を参考にして、この庭園の石組みをデザインしたもので、言わば、昭和の鳥獣戯画的構図による庭園石組みと言っても差支えない」

〔森・他 1982〕

森は和歌山城という場所性を活かす試みとして、「虎伏山」の名前にちなんで庭をつくったという。それは、先述した重森三玲がよく使った手法である。しかし、いくら「虎」をイメージしても、森は「すこぶる奇抜な」庭園意匠を避けた。つまり、写実的ではなく、あくまでも抽象的な表現である。「虎」というのは作庭をするためのヒントであり、来場者に押しつけるイメージ

ではないと、森は最後に説明を加えている。

「この庭石は特定の動物の種類だけを表示するものではなく、見る人々が各自の推理を働かせていただき、自分はこう見たいという連想を通じて石組みの楽しさを味わってもらいたい」〔森・他 1982〕

森はあくまでも謙虚な態度で庭づくりに関わったということがわかる。実際に、和歌山城二の丸庭園というのは、明るくて広々とした空間である。中央に芝生を張り、周辺に曲線を描く園路を巡らす。巨石がところどころに点在するだけである。一個一個の石は大きく、ダイナミックに配列されているが、あまりにも広い敷地なので庭園の主景にならない。インターネットを検索してみると、二の丸庭園の石組がストーン・サークルのようだという利用者のコメントが多いが、「虎」や『鳥獣戯画』などに関する情報は公式サイトにしか載っていない。庭園の一角に説明板が設置されている

のにもかかわらず、作庭当初の意図がなかなか伝わらないようである。しかし、「見る人々が各自の推理を働かせていただき、自分はこう見たいという連想を通じて石組みの楽しさを味わう」庭になったと思えば、森の望みどおりなのではないだろうか。現在、二の丸庭園では観光客が休憩をしたり、また市民がピクニックをしたりしている。さらに、子供たちが石に登って遊んだりしている様子を見るかぎり、都市の緑地として十分に機能しているといえる〔マレス 2014b〕。

こうして、昭和40から50年代にかけて、森は和歌山城の周辺の整備に深く関わったわけであるが、その業績は現在の評価基準や価値観からすると、さまざまな問題点があるという。

「森蘊の西之丸庭園の整備は、当時としてはよくできた整備であつても、現在のレベルから見ると問題もあるものであつた。二の丸庭園は市民の憩いの場になっているが、本来の城の構造が全く考慮され

ずに整備された点は問題であろう」〔大山 2017〕

西之丸庭園の整備の問題点は別の機会に譲るとして、ここでは森の「二の丸庭園」に焦点を当てたい。先述したように、森は和歌山城の構造を考慮して「虎」というテーマを選んだ。しかし、ここで問題視されているのは「虎」のイメージではなく、『作庭記』と『鳥獣戯画』という古代日本の書物を参考にしたことであろう。二の丸庭園に「昭和の鳥獣戯画的構図による庭園石組み」が設置されたことは現在、不適切だと判断されている。森はなぜ、和歌山城が創建された近世ではなく、平安時代から着想を得たのか。このことが理解されない。2016（平成28）年に「史跡和歌山城整備計画報告書」が作成され、今後整備される予定である「和歌山市産業まちづくり局観光国際部和歌山城整備企画課 2017」。その際、森の「二の丸庭園」は見直されて保存されるのか、それとも和歌山城にふさわしくないものと評価されて、撤去されるのか。森の作庭活動

を研究するうえで、その成り行きには注目を要する。

4. 毛越寺「庫裏庭園」…文化財の現状変更

二の丸庭園はつくられてから約35年後に批判を受けることになったが、じつは生前にすでに問題となった事例もある。たとえば特別史跡・特別名勝に指定されている、平泉の毛越寺庭園である。境内の北には平安末期につくられた池庭が広がり、南には新しくつくられた本堂、庫裏や宝物館などがある。森が手がけた「庫裏庭園」は一般公開されていない区域で、庫裏の南、駐車場との間の細長い平坦地である。1972（昭和47）年7月、隣接している観自在王院の復元整備の委員会に参加した際に、森は当時の南洞頼教住職から作庭依頼を受けた。さっそく、同年の10月23日からわずか3日間で、発掘調査の合間を縫ってつくり上げたとい

う。限られた期間と予算とで、現地に点在していた庭石を据えてから、樹木や低木を植えて風致を添えた。東に枯滝のような石組を設置し、西へと流れていくような構成である。周知のとおり、文化財の毛越寺庭園は平安末期に遡る池庭であり、『作庭記』の思想と技法を今に伝えている貴重な遺構である。森にとっても特別な場所であった。最初に発表した学術的な論文のテーマは「毛越寺に於ける藤原時代造園遺跡の研究」であり、そして晩年に復元整備をしたのは毛越寺庭園の遺水であった（「森 1933」。森が指導した毛越寺庭園の遺水の復元整備工事については「マレス 2013」を参照）。だから、「庫裏庭園」をつくるにあたって、森は戸惑いもなく『作庭記』と『鳥獣戯画』を参考にした。その結果、依頼者は満足されたというが、苦情もあつたようだ。

「この庭園の構築に関して1つ申し開きしておきたいことは、毛越寺境内はいわずと知れた特別史跡で

あり、無断での現状変更は法律上許されないことになっていくことは、寺の職分も私も一番よく知っている。ただ私は寺の言い分で働いたのではなく、庫裏の庭に巨石がごろごろしているのはみつともないから、それをいくらか姿よく並べかえて差し上げたにすぎないと考えている。その証拠には地形をかえるような大穴を掘ることはさけ、石でも木でもすべて盛土の上に配置されているのである。もし文化庁の方針で現状回復の命令が出されたときは、いつでももとの姿にもどせる用意だけは充分考えておいたのである」

〔森 1973 229頁〕

毛越寺の「庫裏庭園」がつくられた1年後に書かれた文章であるが、このような解説をわざわざつけ加える必要を感じるといことはどこかで指摘、もしくはクレームがあつたからだと思われる。しかし、作庭から約40年経った今、この庭はそのまま現地で保存されており、そして特に問題視されていない。一般公開さ



図 5-10 毛越寺「庫裏庭園」(マレス撮影、2013 年)

れていない場所にあり、文化財とは完全に隔離された区画にあるのが、その第一の理由であろう。言い換えれば、その庭園の存在はほとんど忘れられている。

5. 普門寺庭園と多賀神社…忘れ去られた森の庭

じつは、忘れ去られた森の庭は少なくないので、最後にその問題について触れておきたい。たとえば、大阪府高槻市の普門寺庭園といえ、誰もが思いつのは国指定名勝の枯山水であろう。重要文化財に指定されている方丈と同時期で、江戸初期まで遡ると思われる。しかし、そのすぐ隣に森がつくった庭が2つあるということを知る人ははたしてどれぐらいいるのだろうか。それほど古いことではないが、記録がほとんど残っていないので、作庭の経緯や意図などを明らかにすることは難しい。

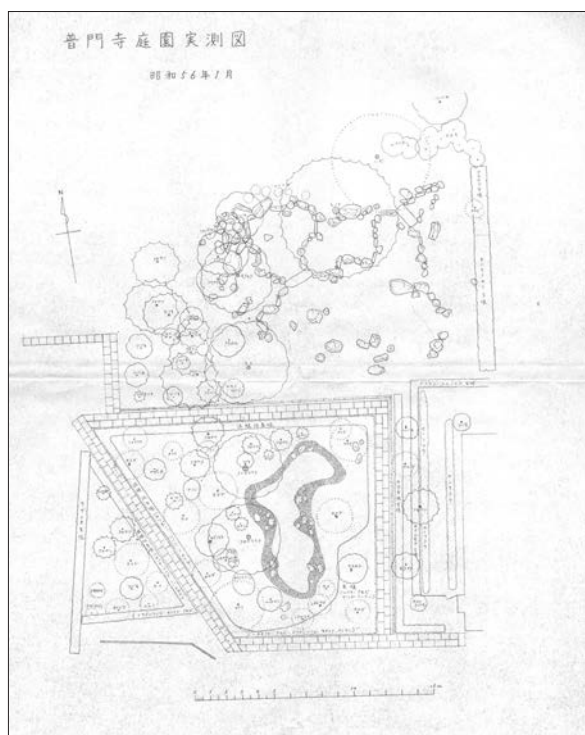
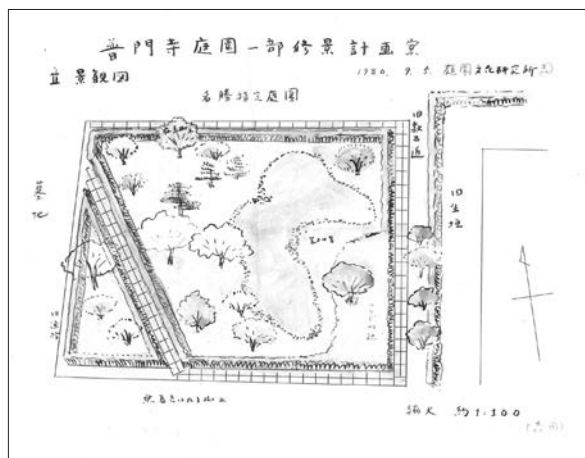
奈良文化財研究所に保管されている図面から、森が1980（昭和55）年に方丈の西庭を設計したことがわかる。現存する枯池と、敷石の園路の構図はほぼ図面どおりである。また、現地での聞き取り調査によって、森が枯池と同時に、方丈の正面（南）にも枯山水をつくったということがわかつている。いずれも歴史的な庭園の調査、もしくは修理に伴う環境整備の一環でつくったものと思われる。実際に、普門寺庭園はちょうど1年後の1981（昭和56）年に国指定名勝になった。その時は、指定範囲は方丈の北西に位置する歴史的な枯山水庭園と、その背景をなす土塁に画された区域のみであった。しかし、2000（平成12）年に追加指定がなされた際に、普門寺の境内全体に名勝の指定範囲を広げることになった。

「今回追加指定をしようとする範囲は、庭園に面し、庭園鑑賞の場である方丈（重要文化財、昭和52年指定）ほか江戸時代寺院隆盛時の状況を伝える山門、

毘沙門堂（旧行者堂を再建）、隠元禪師作と伝えられる黄壁式石畳、寺院境内を画す中世普門寺城の遺構と見られる土塁等を含め、庭園を取りまき風致景觀の上で一体となっている区域である。この追加指

定により、貴重な庭園を好良な環境のもとで永く保存しようとするものである」

〔文化庁文化財部 1998 26頁〕



上：図 5-11 森蘊による「普門寺庭園一部修景計画案」（「森蘊旧蔵資料」奈良文化財研究所蔵）
下：図 5-12 森蘊による「普門寺庭園実測図」（「森蘊旧蔵資料」奈良文化財研究所蔵）

追加指定の主な目的は、歴史的な枯山水の「良好な環境」を保存することである。そこで評価されたのは山門、毘沙門堂、黄檗式石畳、土塁など、いわゆる歴史的な遺構に限り、森がつくった2つの庭に関する言及はない。しかし、森の庭は現在の普門寺境内を形成する重要な要因であり、歴史的な枯山水の「庭園鑑賞」にも「良好な環境」の保存にも深く関わってくる。そう考えると、法華寺の「仔犬の庭」と同じように、副次的な価値を認めることができたのではないだろうか。森の庭はまだ新しいから、文化財の対象にならないうという判断なのか、それともただ単に作庭家と作庭の時期が不明瞭だから取り上げられなかったのか。じつは、森がつくった庭であるということすら認識されていなかったのかもしれない。

同じようなことは滋賀県が多賀大社でも起きた。2017（平成29）年に作成された『名勝多賀神社奥書院庭園保存活用計画書』の中でも、追加指定をする予定の範囲内に森が作庭した七五三の石組が含まれて

いるが、その存在が認識されておらず、取り上げられなかったのだ。『滋賀県多賀町教育委員会 2017』。その計画書を作成した時点では、1957（昭和32）年に小宮山博康がつくった東庭に関する情報（古写真や資料など）は神社や委員会の手元にあり、名勝庭園の「本質的価値と密接なかわりを持つ」重要な空間であるという認識しかなかった。つまり、東庭の一角に眠る森の石組はいつの間にか、小宮山博康の庭と併合していた。幸いに、2018（平成30）年に奈文研に保管されている森の「設計計画図」が発見され、これから新たな調査をすることになった。こうして、多賀大社に残る森の庭には光が当たることになったが、全国に潜んでいる森の庭はまだ多量にあるので、その数と分布を把握したうえで、現地調査を行ないながら、評価と位置づけをすることが緊急の課題である。



図 5-13 上：普門寺方丈西庭／下：普門寺方丈南庭（マレス撮影、2013 年）

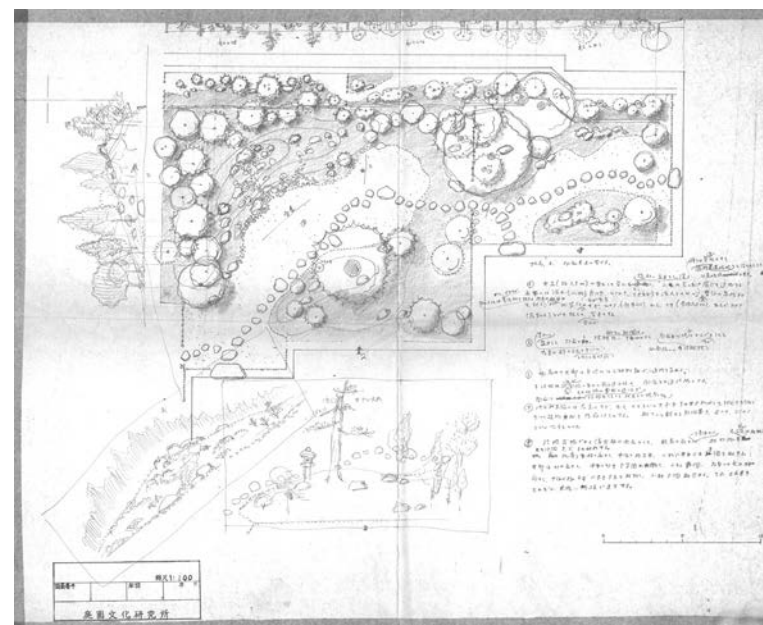


図 5-4 森蘊による多賀神社東庭計画図(「村岡正旧蔵資料」奈良文化財研究所蔵)

6. 庭の歴史…記憶と忘却の間^{あらい}

庭園は生きているものであり、時間とともに姿を変えていくことは当然であろう。それでは、作者が庭に残すものはなんだろうか。作庭当初の意図とその形態、またはその経緯はどう継承されるのか。どう記憶されるのか。どう記録されるのか。

森と同年代に活躍した重森三玲は数年前から再評価され、その作品もテレビのCMをはじめ、本や雑誌などで広く紹介されている。20世紀中頃につくられた東福寺方丈庭園や岸和田城庭園などのように、名勝に指定された事例も増えつつある。今となつては、昭和期を代表する作者として認識されている。それに比べて、森は亡くなってから30年経っても、一般的に知名度はまだ低く、その業績の再評価も始まったばかりである。本稿で取り上げた庭園でも明らかになったように、森は多くの文化財庭園の発掘や復元整備の事業に携わ

ると同時に、その周辺の環境整備の一環で新たな庭もたくさんつくった。それらはお互いに密接な関係にあり、日本庭園の歴史家と作者という森の二面性をよく表わしているといえる。さらに言えば、昭和期の日本庭園史観と新たな日本庭園のあり方、文化財制度や歴史的な庭園の復元整備のあり方などを考えるうえでも貴重な事例である。しかし、森のこのような業績を知るのには一部の専門家にすぎず、場合によっては関係者の間ですら忘れられている。重森三玲と違って、森は歴史に名前を残さないことになるのだろうか。

森が書いた多くの著作は現在の日本庭園史の基盤として未だによく引用されているが、新しい研究成果によつて歴史はこれからも書き換えられ、いずれは参考文献として利用されなくなっていくだろう。森が指導した歴史的な庭園の復元整備も同じように、いつかは再整備され、森がそこに残した痕跡もわからなくなるだろう。それでは、森が新しくつくった庭はどのようなものだろうか。現在は森が作庭活動を行なったこ

と自体がほとんど認識されていない。それに個人宅の庭が多いので、世代交代すると消える可能性が高い。残るものがあるとすれば、それはやはり森が文化財付近につくった庭なのではないだろうか。しかし、何が残るかは、時間のみが証明してくれることである。とりあえず、現段階では森の活動に関する多くの情報を収集し、整理して、まとめることが重要な研究課題である。本稿と、本報告書が今後のための参考文献になればと願う次第である。

補注

*1 筆者は2019年12月発行の『文化遺産と〈復元学〉』(海野聡編、吉川弘文館)の中で「歴史的な庭園の復元——森蘊の「復元的研究」を通して」という論文を発表し、学者としての森蘊の業績を分析している。また、2020年3月発行予定の『奈良市における庭園の総合調査』(奈良市)の中で「奈良市における森蘊の作庭活動」を紹介し、評価している。

引用文献

- 尼崎博正（2014）『日本庭園の年代観』『歴史考古学』70号、64-72頁
- 大山僚介（2017）『史跡和歌山城における公園整備——本多静六と森蘊の整備を中心として』『近世城跡の近現代』奈良文化財研究所 185-192頁
- 光明宗法華寺（2019）『名勝法華寺庭園保存活用計画』滋賀県多賀町教育委員会（2017）『名勝多賀神社奥書院庭園保存活用計画書』
- 重森三玲（1972）『日本庭園史体系——現代の庭（二）』（第29巻）社会思想社
- 白幡洋三郎（1994）『江戸の大名庭園——饗宴のための装置』INAX
- 鈴木久男（2018）『シリーズ「遺跡を学ぶ」131 平安末期の広大な浄土世界——鳥羽離宮跡——新泉社
- 奈良県教育委員会事務局文化財保存課（1957）『奈良県指定文化財 第二集』
- 文化庁文化財部（1998）『月刊文化財』12月号
- マレス・エマニエル（2013）『日本庭園史と森蘊の業績——毛越寺庭園の復元・整備を通して』『奈良文化財研究所紀要』38-39頁
- マレス・エマニエル（2014a）『重森三玲と森蘊の庭園観——小堀遠州の伝記を通して』『日本庭園学会誌』28号、11-21頁
- マレス・エマニエル（2014b）『時の香り——時代を感じさせる庭』『人と自然——香をめぐる人と自然』7号、26-

- 27頁
- 村岡正（1989）『森蘊先生の業績』『古代文化』41巻10号、58-60頁（本報告書iv-viii頁）
- 森蘊（1933）『毛越寺に於ける藤原時代造園遺跡の研究』『造園研究』第8輯 12-34頁
- 森蘊（1945）『平安時代庭園の研究』桑名文星堂
- 森蘊（1964）『日本の庭園』吉川弘文館
- 森蘊（1967）『設計のための庭園史研究』『体系農業百科典（第7巻）造園』農政調査委員会
- 森蘊（1973）『庭ひとすじ』学生社
- 森蘊（1986）『作庭記の世界——平安朝の庭園美』日本放送出版協会
- 森蘊・牛川喜幸（1966）『文化財保全と造園』『建築と社会』第47輯第9号、46-48頁
- 森蘊／恒成一訓（写真）（1960）『日本の庭』朝日新聞社
- 森蘊／山中功（代筆）（1982年3月27日）『和歌山城二の丸庭石解説（試案）』奈良文化財研究所蔵
- 和歌山市産業まちづくり局観光国際部和歌山城整備企画課（2017）『史跡和歌山城整備計画報告書』<http://wakaya-majo.jp/pdf/seibiketakaku.pdf>

【第2部】

森蘊の業績を振り返る——総合討議





■開催日…2018年8月18日(土)
 ■場所…森蘊庭園研究室(森蘊旧宅)
 ■参加者…飛田範夫/牧岡一生/仲隆裕/田中栄治/栗野隆/
 高橋知奈津/マレス・エマニユエル

マレス 今日はお忙しいなか、お集まりいただき誠にありがとうございます。この場所で、皆さんと一緒に研究会を開くことができたことは本当に光栄に思っています。ご存じのように、ここは森蘊先生の旧宅です。現在は牧岡一生さんが管理されておりまして、「森蘊庭園研究室」というかたちで活用されています。

窓越しに見えるのは、森先生がつくった庭。緑豊かで、とてもシンプルな構成。建物は森先生の息子、森史夫^{ちかお}先生の設計によるものです〔森 2007〕。木造建築の平屋で、ディテールに凝ってはいるけど自己主張はしない。さすがの親子合作。息がよく合っているというか、とても落ち着いていて調和した空間ですね。森先生の業績を再評価するための研究会を開くには、この空間が最もふさわしいと思って牧岡さんをお願い

してみました、快く引き受けてくださいました。牧岡さん、改めてお礼を申し上げます。

今年はずいぶん森先生の没後30年にあたります。しかし、最初から記念的なイベントがやりたくて計算していたわけではありません(笑)。偶然というか、縁というか、そういうタイミングなんですね。

じつは、2010年頃から森先生の研究を始めたときは驚きの目で見られることが多かったのです。森先生を知っている人たちからすれば、まだ最近のことすぎて、研究の対象になるなんて想像にも及ばなかったことでしょうね。しかし、この頃は色んなところで話題になっています。たとえば、森先生が70年代に復元整備した浄瑠璃寺庭園は改めて整備されました。また、森先生がつくった檀原神宮の文華殿庭園が牧岡さんによって久しぶりに整備され、公開されました。さらに、今年のはじめに南九州大学から問い合わせがありました。森先生が久留米市でつくった遍照院庭園を研究したいという学生がいるというではありませんか。少しずつですが、森先生の業績は注目を浴びるよ

うになってきました。

とはいえ、やはり森先生は一般的にはまだ知られていないし、専門家の間でもその業績はきちんと把握されていません。森先生は日本庭園史をどう理解して、どう作成したのか。何を求めて、何を残したのか。どこで、どんな庭園を整備したのか。どこで、どんな庭園をつくったのか。そういうことを明らかにすることが緊急の課題だと思います。

没後30年となる今、森先生の業績をどう評価すればよいのでしょうか。批判はもちろん簡単です。ここでは単なる批判がしたいわけではないのです。かといって、森先生の業績を美化したいわけでもありません。その業績を正確に把握することによって、森先生が日本庭園の世界にどんな影響を与えたのか、そして、それが現在にどのように引き継がれているのかということとを皆さんと一緒に考えたいのです。

今日は5つの発表がありました。栗野先生は、20世紀の造園業界における森先生の位置づけを明らかにしました。飛田先生は、森先生の業績の中でも特筆すべ

き庭園測量の技術と図面の作成方法を詳しく紹介しました。高橋さんは、森先生が奈良国立文化財研究所に所属した15年間の研究方法に着目しました。田中先生は建築家として、森先生が考えていた庭園と建築の関係を探りました。最後に、私は歴史家でありながら、作庭家でもあった森先生の葛藤というか、その二面性の分析を試みました。

たくさんのお話がありましたので、全体をまとめるのはなかなか難しいんですが、今日はせっかく仲先生にもご参加いただいていますので、ご意見とご感想をお願いできればと思います。仲先生は、村岡正先生と一緒に『京都の庭園 遺跡にみる平安時代の庭園』『京都市文化観光局文化財保護課 1990』を編集された経験もあります。今日の発表を聞いていかがでしたか。仲 発表者の皆さんはいろんな方面から森先生の業績を客観的に評価しておられ、たいへん有意義な研究会だったと思います。私からは感想というのか、いくつか聞きたいことがあります。まず、森先生の研究の特徴として、それ以前の庭園史研究とどう違っていたの

か、またその後はどのような研究が発達したのか、という課題があります。

森先生は徹底的な文献研究だけではなく、発掘や復元整備の現場の指導もされていましたが、日本庭園史研究において、こうしたアプローチをとる人は多いようです。戦前に活躍された外山英策にしろ、文献研究で評価されていますが、現場にも携わっていたようです。たしか、醍醐寺三宝院や三千院の修理に関わっていたと思います。

飛田 それはどこかで読んだ覚えがあります。外山さんの『室町時代庭園史』『外山 1934』に醍醐寺のことが書いてあったと思います。

仲 外山の『源氏物語と日本庭園』『外山 1927』は初期の文献研究として有名なんですけど、それ以前から歴史的な庭園を文化財としてしっかり検討し、評価していくという考え方がすでにあったと思います。ただ史跡研究において、外山さんよりも吉永義信さんのほうが早かったような気がします。

飛田 吉永さんの名勝調査報告書はみんなしつかりし

てますね。

栗野 そうですね。吉永さんは大正11（1922）年にすでに活躍していたので、かなり早いです。その頃から庭園研究が活発になるみたいです。

仲 森先生も吉永さんを目標にしていたという話を聞いたことがあります。吉永さんは非常に細かくて、自分の論文に間違いを発見したら、必ず反省するような人だったそうです。だから、森先生は憧れというか、少しライバル意識をもっていたのではないかと思います。吉永さんのほうが年上なんですけれども。

文化財行政の一匹狼

仲 森先生と文化財保護行政との関係もおもしろそうですね。最後のマレスさんの発表の中で、森先生が毛越寺という特別史跡・特別名勝の中に無断でつくった新しい庭の話がありました。わざと挑発しているようにも聞こえましたが、どうでしょうか。

高橋 森先生は「文化財」が嫌いだったような気がし

仲 隆裕（なか・たかひろ）

1963年、京都府に生まれる。千葉大学大学院園芸学研究科修了。農学博士（京都大学）。京都造形芸術大学教授、日本庭園・歴史遺産研究センター長。1984年、千葉大学大学院の授業で村岡正の「庭園管理論」を受講したことが縁となり、庭園文化研究所の庭園実測に参加。大学院修了後、京都市文化財保護課にて村岡先生の指導を受け、名勝庭園の調査や修理に従事した。主な著書に『京都の庭園：遺跡にみる平安時代の庭園』（京都市文化財ボックス第5集、1990）、『庭園史をあるく：日本・ヨーロッパ編』（加藤允彦、佐々木邦博らとの共著、昭和堂、1998）などがある。



ます。文化財なんて、変な言葉をつくってどうするんだというような感じで。

飛田 それに文化財行政が嫌いでした（笑）。

栗野 『遺跡学の宇宙』という本の中で、井手久登先生が言っておられました。文化財保護行政における名勝の保護の人的系譜は原熙^{（ひろし）}、吉永義信、吉川需^{（もち）}、牛川喜幸などと続きますが、森先生だけがその流れに乗らなかったと「恵谷・前川 2014 203頁」。

マレス たしかに、ちよつと一匹狼のイメージがありますね。

飛田 しかし、森先生は実際に文化財の仕事をしていますから、どうしてその流れから外されているのか、私にしてみればちよつと不思議なんですけど。

高橋 文化庁の調査官になったか、なっていないかというのでしょうか。

栗野 井手先生によれば、文化財保護行政における名勝保護に関して、原先生がベースをこしらえて、そのうえで吉永先生が具体的な実績を積んで、ある程度軌道に乗せたというのです。そして、吉永さんの後を引

き継いだのが吉川さんであり、さらに牛川さん、安原啓示さん、本中眞さんという流れになって今日に続いているわけです。しかし、森先生の経歴は違います。森先生は「一種の個人事務所のスタイルでやっていた」と井手先生が強調しています。

飛田 やはり、文化庁に行かなかったことが大きな違いでしょうか。

仲 森先生は文化庁の調査官にならなかったのですが、文化財保護審議会のメンバーでしたね。

栗野 とにかく、森先生が文化財に深く関わっていたことは間違いないですね。

奈文研と遺跡庭園の測量

栗野 そもそも、森先生はどういう経緯で奈良国立文化財研究所に入ったのかわからないと、井手先生がおっしゃっていたんですけれども、今日の発表を聞くと、元国立博物館の同僚で、奈良国立文化財研究所の初代所長小林剛先生が引つ張ってきたのでしょうか。

高橋 『奈良を測る』〔森 1971〕を読むと、小林先生が森先生を引つ張ってきたという印象を受けます。おそらく、奈良の古代寺院の研究では、寺院跡の地形実測が重要だという認識があつて、測量ができる人を連れてきたのではないかという感じがします。

飛田 奈文研では最初から遺跡が強く意識されていたのですか。

高橋 最初は比較的に弱いと思います。平城宮跡の発掘は後からのことです。当初の歴史研究室の中に考古部門がありますが、古墳時代までを担当して、遺存地割は歴史時代として区分されています。だから、最初あまり視野に入っていたわけではなさそうですが、開発の事業が進むにつれて平城宮跡をはじめ、遺跡が意識されてきたようですね。

仲 でも、一方でこの当時「遺跡庭園研究室」が昭和26（1951）年に構想されていたのは不思議ですね。この当時は京都ならまだしも、奈良で庭園の研究をするなんてあまり主流じゃなくて、まるで森先生の人事が前提となっていたような感じがですね。

高橋 建築史において遺存地割の研究というのは奈良で行なわれてきていたと思うので、森先生が建築史家の関野貞^{（ただし）}や足立康^{（こう）}などと関係があつたのも大きかったかもしれない。「遺跡庭園」という言葉自体が急に出てきた感じがします。

飛田 そうですね。その後もあまり使っていないです。

仲 でも、森先生が奈良に来られることになったのは、当時の奈文研の研究方針と無関係ではないですよ。

高橋 旧大乘院というのが一つの大きな理由かもしれませんが、昭和十年代に旧大乘院庭園の保存運動が始まり、東京帝国大学の田村剛先生も関わっていました。旧大乘院庭園は遺跡庭園である、という認識があつたと思います。しかし、奈文研に入つたばかりの森先生は京都御所と離宮の研究に没頭していました。旧大乘院庭園に対する関心は薄かったようです。言われたからやりだしたようなところがありますね（笑）。

マレス 奈文研で森先生は庭園ではなく、建造物の研究室長になるという経歴がおもしろいですね。なのに、



飛田 範夫（ひだ・のりお）

〔本報告書第1部「森蘊の庭園測量図」筆者〕

1947年、東京に生まれる。京都大学農学研究科博士課程中退。元長岡造形大学教授。専門は日本庭園史。1972年に京都大学農学部研修生として、村岡正の日本庭園史の授業を受講したのが始まりで、その後庭園文化研究所で測量の手伝いをするようになり、森蘊に出会う。2003年に『日本庭園の植栽史』で日本造園学会賞（研究論文部門）を受賞。2012年度に名勝楽山園の整備事業で日本造園学会賞（技術部門）を受賞。主な著書に『江戸の庭園』（京都大学学術出版会、2009）、『大坂の庭園』（京都大学学術出版会、2012）、『京都の庭園』（京都大学学術出版会、2017）などがある。

1960年に発行された『日本の庭』[森・他 1960]という本の導入に「奈良国立文化財研究所で、私にあってがわれている本務は庭園の歴史的研究である」と堂々と書きますから、当時はそれでよかったのでしょうね。

栗野 そもそも、奈文研が奈良につくられた理由は何ですか。

高橋 それはやっぱり、南都諸大寺の研究だと思います。

栗野 京都につくるべきか、奈良につくるべきかという議論がありましたが、結局綱引きをやって奈良にできたという話を聞いたことがあります(笑)。

飛田 京都に研究所があったなら、初期から庭園の研究室があったのかもしれませんが。

マレス 初期の奈文研には仏像の研究室があったと聞いたことがあります。研究所が奈良にできたから設置されたものなのか、それとも仏像の研究をするために奈良が選ばれたのか、そのあたりはよくわかりませんが。

高橋 初代所長の小林剛先生は美術彫刻の専門家でした。

マレス 大学を卒業してから、内務省で国立公園の調査に関わったときに測量の基礎を学んだと『庭ひとすじ』[森 1973 16-17頁]に書いてあります。具体的にいつ、どこで、何をしたのかは明記されていませんが、自然地形の測量は印象深い経験になったのかもしれないですね。

高橋 測量技術もそうですが、内務省に務めていたときはいろんな史料にもアクセスできたそうですね。

「国立公園の父」田村剛の教え子

マレス まだ調べていませんが、森先生の調査方法とその研究の展開を理解するためには、卒業論文と修士論文を読まなければならないだと、前から思っています。

飛田 修士論文で何をまとめられたのかははっきりしていませんね。

マレス そうですね。修士論文の話はどこにもでてきませんが、卒業論文は永福寺の庭園跡と鎌倉の庭園、また夢窓国師の作風についてまとめた『庭ひとすじ』

た。それに、南都諸大寺の研究を総合的にやろうという方針があって、その中心に古建築と仏像の研究があったと思います。その流れの中で、最先端の手法を利用する試みとして仏像の三次元測量にも取り組みました。それは牛川喜幸さんが担っていて、森先生の研究所での動きとは別の動きだったようです。

飛田 牛川さんは最初、電気探査を利用されていたんですね。法金剛院庭園とかもそれで調査しましたね。

高橋 やっぱり、奈文研で遺跡庭園に関わる人は測量をするのが命題だったと思うんです。その中で、新しい技術を取り入れようとしたのでしょうか。

仲 そもそも、森先生はどこで実測・測量の技術を身につけたのでしょうか。

飛田 初期はポケット・コンパスを利用していたようですが、誰に教わったのか全然わかりません。

仲 ポケット・コンパスというのは、林学で使うんじゃないですか。

飛田 しかし、森先生はほとんど山に登ってないと思います。

にあります[森 1973 14頁]。その論文は東京大学の図書館に保管されているのでしょうか。

飛田 森先生は学部を卒業してから大学院に進んだけど、何学科に入ったかは全然書いてないから不思議でしょうがないのです。指導教官も修士論文もわからないでしょう。

マレス 修士論文のタイトルもはっきりわからないので、調べるのが難しいです。しかし、その論文を読めば、当初の方法論や庭園観、またはどんな人と一緒に勉強していたのかなど、いろいろと見えてくるのではないかと思います。

仲 卒業論文はわかりませんが、修士論文は田村剛先生が面倒を見たんだと思います。その後、就職の世話もしていますし。

マレス 森先生と田村先生との関係は複雑ですね。森先生は田村先生の教え子でたいへん尊敬していたらしく、必ず本の中でその名を取り上げますが、田村先生が森先生の研究や作庭を褒めたり、励ましたりするような文章は読んだことがありません。1964年に出

栗野 隆(あわの・たかし)

[本報告書第1部「日本近現代の歴史的庭園の調査・保存・修理を巡る状況から森蘊の業績を考える」筆者]

1976年、兵庫県に生まれる。2004年東京農業大学大学院修了。奈良文化財研究所研究員を経て現在東京農業大学准教授。奈良文化財研究所研究員時代に、森蘊、村岡正の資料整理に従事。主な著作は『近代造園史：Modern Landscape Architecture』(建築資料研究社、2018)などがある。



版された『作庭記』という本を書くときに、森蘊の『平

安時代庭園の研究』〔森 1945〕を参照しなかったというぐらいです〔田村 1964 7頁〕。一方で、田村先生は重森三玲の処女作を絶賛して、その後もずっと応援しています〔田村 1925〕。だから、田村先生を巡って、森蘊と重森三玲の間にはライバル意識があったのではないかと思います……。

栗野 男女の三角関係みたいですね（笑）。

高橋 そうですね。旧大乘院庭園の保護についても同じことが言えます。最初の保存運動は田村先生と重森さんが一緒に頑張っていますが、その後、それをまったく無視するかのように森先生が調査を始めるとい

う、とても不思議な感じですね。

仲 田村先生には森先生の真価がわからなかったのではないのでしょうか。最初はあまり大きな期待はかけてなかったのかもしれませんが、森先生が力を出してから、その評価はどうなったかわかりませんが。

飛田 その後、田村先生は日本庭園より国立公園のほうに行きますからね。

王朝趣味の庭園を求めて

飛田 「私は時代順に日本庭園の研究がしたい」と森先生は庭園文化研究所の新年会でおっしゃっていました。だから、最初に発行した『平安時代庭園の研究』は飛鳥時代から始まります。そこで平安までやったわけです。その後、桂離宮に移るので順番が変なことになるんですけども、平安時代、中世、そして江戸時代というかたちで時代をずっと追ってきました。それから小堀遠州という流れですね。小堀遠州の研究を始めたのは、古文書が読みたかったからだそうです。

マレス 小堀遠州の書簡も集めていたようですね。

飛田 ずっと眺めておられたそうです（笑）。ずっと眺めていると読めるようになっておっしゃっていました。

高橋 たしか、座右にあったから読めるようになったと書いてました。

マレス しかし、どの時代になっても、森先生が取り上げる庭園は必ずと言っていいほど王朝趣味というか、貴族の庭ですね。平安時代はもちろん寝殿造庭園と浄土式庭園。江戸時代になっても、森先生が注目す

参考にしていたようです。

高橋 様式としては枯山水なんだけど、洲浜のようなつくり方をしたり、平安時代の滝石組のイメージをしているようなものがあって、どうしてもそこに寄っていつてしまうという感じがしますけれども。

飛田 どうしても『作庭記』のほうに走ってしまいますね。

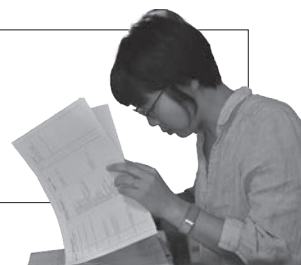
高橋 『作庭記』が大好きな印象です。

復元整備と作庭という葛藤

マレス 飛田先生も仲先生も、大学で庭園史学を教えながら、歴史的な庭園の修理や復元整備にも携わっておられますね。つまり、森先生と同じような仕事をされていますが、引き継がれているものはありますか。仲 引き継いでいる意識はないんですけど、やっぱり憧れですね。森先生のような仕事がしたいです。

マレス 森先生が亡くなったから、庭園の復元整備の仕方は大きく変わりましたか。

マレス たしかに、たくさんつくっていますね。でも、石を据えるときはいつも『作庭記』や『鳥獣戯画』を



高橋 知奈津（たかはし・ちなつ）

【本報告書第1部「森蘊の奈文研時代」筆者】

1982年、山形市に生まれる。2008年に京都造形芸術大学大学院を修了し、現在は奈良文化財研究所研究員。森蘊から始まった奈文研の庭園史研究の灯を受け継いでいけるよう、日々調査研究業務に従事している。論文に「飛鳥・奈良時代の池護岸手法の類型」『文化財論叢Ⅳ』（奈良文化財研究所、2012）などがある。

飛田 今となつては、発掘がいかげんだったという文句がありますが、当時は文化庁や教育委員会の監修指導も受けていましたし、ほかに方法がなかったのです。森先生の前は、ほとんど調査せずに思い込みで修理する場合が多かったのです。それと比べたら、森先生が残した発掘と整備のデータはたいへん貴重な記録です。森先生は庭園の復元整備に学術性を導入した第一人者です。後から批判するのは簡単なんですけれども、きちんと調査をしようという流れをつくったのは森先生でした。

マレス その後、発掘の技術はずいぶん発展したのですか。

飛田 技術が発展したというか、とりあえず発掘調査は最小限の範囲にとどめることが原則になりました。昔は全面発掘をする場合もありましたが、その後、もう1回発掘すると元の形がまったくわからないわけです。それでも、当時は最先端の技術を使った結果だったので、50年前の仕事はあまり批判できないですね。

高橋 森先生より以前の修理はどういうものだったの

きたとしても、大木だけは復元できないと部下たちが非常に困っていました。結局若い木を植えました、それを讃えるような歌をつくって道長に贈ったら、納得してくれたという話が『栄花物語』にあります。マレス おもしろい話ですね。でも、この場合は復旧というべきか、復元というべきか、難しいところですね。高橋 森先生は歴史的な庭園をさわることに對して、罪悪感みたいな気持ちと、やってみたくてむずむずするような気持ちの間でずっと葛藤していたように思います。たとえば、唐招提寺の客殿庭園は指定されていないけど歴史的な庭園ですから、改修できたときは自由で、ものすごく楽しかったような気がします。森先生の気持ちはこうして、常に庭園の保存復元と作庭の間を行き来していたのではないのでしょうか。

庭の設計と施工

仲 マレスさんの発表では、森先生が名勝庭園の脇に、またはその中で新しくつくった庭園をどう評価するべ

ですか。多くの例があるのですか。私にはちよつと、具体的なイメージがないのですが。

飛田 もちろん、やっていますね。それこそ権威者の勘というか、当時の権威者がこうだという指導に基づいてやっていました。しかし、森先生以降は必ず発掘調査をすることになりました。

マレス 庭園の場合、「復元」という、元の姿に戻すような考え方は文化財の概念と同時に導入されたものではないかと思っています。庭園というのは生き物ですから、常に成長して変わっていくことを前提としています。日常の手入れでその変化をある程度コントロールするわけですけど、それは庭を育む行為であつて、元に戻すという巻き戻しのような行為とは根本的に違うような気がしますが、いかがでしょうか。

仲 文化財の概念と一緒に、というのはそうでしょうね。ただ、記録上からいうと、復元という行為は藤原道長のときからやっています。道長の邸が火事で焼けたとき、前とそっくりなものに復元しろと部下に命じて、つくらせるわけです。しかし、池や築山の形は復元で

きか、文化財としてどう扱うべきかという問いがありました。それを客観的に評価しようと思えば、必ず比較というか、森先生の作庭歴の中で位置づける必要があるでしょう。しかし、森先生がつくった庭がどれだけあるのか、いつ、何をつくったのか、そのうちのどれくらいが残っているのかという基礎研究がないのですね。そのところはどうか。目録でもつくっていますか。

マレス 一応、森先生が亡くなった後にまとめられた作品目録の中にリストがあります「森蘊門下生一同1989」。それ以外にも、『庭ひとすじ』〔森 1973〕や『庭師歷程 小山潔のhuman forest』〔小山潔の本出版発行人会 1986〕という本、または徳村造園の「事業経歴書」などに一部載っていますので、今回の報告書をつくるに当たって、そのリストを更新したいと思っています。

仲 森先生がつくった庭を評価するに当たって、田中先生がおっしゃっている建築と庭園の結びつきという観点が一つの軸になるのではありませんか。

田中 栄治（たなか・えいじ）

〔本報告書第1部「森蘊における建築と庭園の結びつきの視点」筆者〕

1967年、大阪に生まれる。1991年に神戸大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了。工学修士。株式会社坂倉建築研究所大阪事務所に勤務ののち独立し、現在は一級建築士事務所田中+青山の代表とともに、神戸山手大学現代社会学部総合社会学科建築・インテリアフィールドの教員も務める。一級建築士、一級造園施工管理技士。坂倉建築研究所元代表で、日本庭園の実測を行なった建築家・西澤文隆について調べる中で、森蘊との関係を知り、それ以降、森蘊の建築と庭園の結びつきの視点や、建築家との交流について研究している。論文に「建築と庭園の結びつきの視点：森蘊と堀口捨己・西澤文隆の桂離宮意匠論」（神戸山手大学紀要第19号、2017）などがある。



高橋 王朝趣味の側面に目をうばわれて、今まで、私も考えたことがなかったのです。

仲 それが明確になればいいですね。庭園の研究が進むにつれて、作庭にもその傾向が現われたのかもしれない。森先生自身もどこかでそんなことを書いていませんでしたか。歴史の研究をしても、やっぱりつくって初めてわかることがあると言っておられました。つくっては研究し、研究してはつくり、という中でやっぱり深めていく姿勢をとっておられたのではないかなと思います。作庭の年表と庭の作風の変化をパarelルに見ていくと、ダイナミックでおもしろい森蘊像を描くことができるのではないのでしょうか。

田中 森蘊の作庭は奈良が多いですね。

マレス 奈良に住んでいたのではありません奈良が多いですね。森蘊のつくった庭の約30%が奈良市内にあり、約半数が奈良県内にあります。私は奈良市内で20庭園ぐらゐの調査をしました、その成果を「奈良市における庭園の総合的調査」[マレス 2020(予定)]という報告書に発表する予定です。

が、奈文研の業績として残しているのではなさそうです。

飛田 同じ頃に、中根金作さんが京都府庁の文化財課に勤めていました。職務時間中にはやらなかったけれども、昼休みにタクシーで東寺まで走って、庭をつくっていたという話を聞いたことがあります。だから、昔は結構役所の中でも融通がきいていたみたいですね。仲 森先生がつくった庭園の施工者の情報も、ある程度収集されていますか。

高橋 それはさらに難しいですね……。

マレス 森先生は『庭ひとすじ』[森 1973]の中で1973年までにつくった主な庭と、その施工者を紹介していますが、それ以降の記録はほとんど残っていません。あとは、前にも言いましたように『庭師歷程 小山潔のhuman forest』[小山潔の本出版発起人会 1986]と徳村造園の「事業経歴書」を参考にできますが、全体を把握するのは非常に難しいですね。

いずれにせよ、森先生の作庭を考えると、施工者の存在もとても重要だと思います。森先生の作庭歴を

高橋 奈文研に保管されている資料の中に、カラーの設計図や写真などもあるので、きちんと整理してまとめる価値があると思います。森先生が建造物研究室に在籍していた時代の資料と、定年してから庭園文化研究所で集めた資料が混ざっていたりして、泣き別れている資料もありそうです。庭園文化研究所の資料も、森蘊資料と村岡正資料に分けられていて、全体を把握するのはもう少し時間がかかりそうです。

飛田 森先生は奈文研在職中にも作庭をやっていたというのでしょうか。

マレス 本格的に作庭家として活躍したのは、奈文研に入所した一年後の1953年、今西邸露地を改造したときです。その後、1956年に唐招提寺の客殿庭園をやったことがきっかけとなり、当時の森本長老の紹介などでどんどん広がっていったみたいですね。どこまで公にできたかわかりませんが、森先生が改造した今西邸露地の図面が堂々と奈文研の資料と一緒に保管されているところはおもしろいですね。

高橋 ひた隠しにされていたわけではないと思います

みると、一番最初は京都の花豊造園ですが、その後は徳村造園が多いですね。しかし、徳村造園はほとんど文化財庭園の修理と復元整備を担当するようになると、個人宅の現場は小山潔さん、古川三盛さん、山中功さん、牧岡一生さんなど、当時の若手の庭師が担うようになります[古川 1997]。

飛田 小山さんが崖から落ちて亡くなれたとき、森先生はものすごく惜しんでおられました。

マレス 「私の願望していたような造園技術者に育つて呉れた」[小山潔の本出版発起人会 1986 7頁]というぐらい、ものすごく高く評価していたようですね。

飛田 ものすごく褒めていましたね。

仲 そのほかに、京都の小宮山博康さんもいましたね。マレス 小宮山さんは庭園文化研究所と村岡先生との関係が深かったみたいですね。

飛田 小宮山さんは高台寺庭園の修理をしました。あそこの亀島の修理は思い出深いです。

マレス とにかく、森先生を理解するために、その周りで働いていた職人たちの存在は大きいですね。実際

牧岡 一生 (まきおか・かずお)

1945年、福井県に生まれる。1970年に近畿大学を卒業し、1975年より12年間、作業部隊の一人として森蘊に師事。1980年に森蘊と小山潔とともにドイツに渡り、フランクフルトのパルメンガルテン日本庭園展に参加して以来、ドイツ、イタリア、フィンランドなどヨーロッパと日本で庭づくりを行なう。現在は国指定名勝依水園や法華寺庭園の維持管理など、奈良を中心に活躍している。



に、森先生の庭を見ていると、施工者によってでき
がりが全然違います。

飛田 やっぱりつくった人にずいぶん左右されますね。

栗野 古本屋で買った建築の雑誌に、森先生が湯河原
でつくった加満田旅館の庭園が紹介されていました
が、東日本の現場の場合、誰が施工をしていたのしょ
うか。

マレス この庭は『庭ひとすじ』にも紹介されていま
す。関東の現場ですが、そこもやはり徳村造園が施工
をしたそうですね〔森 1973 174頁〕。本に綺麗な
写真が載っていますが、5年前（2013年）に訪れ
たときはスギの落ち葉に覆われて、あまり手入れされ
ていませんでした。残念ながら、そういう事例は少な
くないですね……。

飛田 施工者のこともそうですが、森先生は贅沢な材
料を使わないんだ、と村岡先生はいつも嘆いていまし
た。そのへんにある材料しか使わないからだめなんだ
と言っていました。だから、森先生の庭って全然目立
たないんですね。

高橋 それがいいか悪いかわからないところですね。

牧岡 雨風で土砂が流されて、頭をだしてきた石みた
いに据えなさいと、森先生はいつも我々に言っていま
した。石を深く埋めることによって、重みと存在感が
増すということを教わりました。

マレス たしかに、森先生の庭はあまり目立たないの
ですね。とにかく石が小さい。しかし、毛越寺の庫裏
の庭と、高野山の持明院庭園と、豊橋市の永井邸庭園
みたいに大きな立石を使っている場合もあったみたい
です。珍しいですが、そういうものもありますね。毛越
寺の場合は特別史跡だから石は深く据えられなかった
ようですが。

飛田 和歌山城二の丸庭園でも浅いですけど、石組に
動きがありますね。

建築と庭園

マレス 今日、皆さんにお集まりいただいたのは森先
生の旧宅です。牧岡さんのおかげでずっと綺麗に維持



されています。最初にも紹介したように、この空間は親子合作になるわけですが、田中さんは建築家の観点から何かありますか。

田中 そうですね。オリジナルがわからないので難しいんですが、家の中に入って初めて庭が見えてくるというつくりはおもしろいですね。建物際の植栽も気になりました。最初からこういう配置ですか。

牧岡 配置はほとんど変わっていませんね。モミジやエンジュやサクラの木なんかはずいぶん太くなりましたが、全体の構成は昔と変わりません。

田中 部屋の中と外をどうつなげるかといったときに、植栽の配置が重要ですから。ここには、南面する部屋が2つありますが、東側の部屋の窓の前まで木が植わっているのに対して、西側の座敷前はバツと開放的です。だから、両部屋から見ると景色はずいぶん違うなと思いました。やっぱり実用的ですね。

マレス 森先生のお孫さんは子供の頃、この庭でサッカーをしていたというぐらい、景と用がバランスよく調和している庭ですね。新しい日本庭園をつくるとき

は、歴史や伝統よりも家族全員の日常生活と使い勝手を重視するべきだと森先生も書いていますからね〔森 1964 142頁〕。

田中 伝統的な日本庭園はすべて鑑賞本位ではなく、平安時代の寝殿造庭園みたいに実用的な庭園もたくさんあったと書いていますね〔森 1950 17-18、90頁〕。そういう考え方がここに表現されているのではないかと思いました。手前の飛石なんかも、中に座っていたらまったく見えないので、石はほとんど見えなかったということですね。わざと石をぐつと減らして、植栽だけで構成している庭という印象を受けました。

森の業績紹介

マレス この庭もそうですが、奈良市内だけでも森蘊がつくった庭は多くても、ほとんどは一般公開されていなくて、まったく知られていません。たとえば、この近くだけでも唐招提寺や薬師寺にも森先生の庭園があります。唐招提寺で聞き取り調査をしたときは、公

開はしたいのですが、整備も受付も監視も必要なので、なかなか難しいとおっしゃっていました。だから、今後は森先生がつくった庭をどう活用したらよいかというのの一つの課題だと思います。

田中 数年前、『庭N I W A』という雑誌で森先生の特集が組まれていましたね〔建築資料研究社 2012〕。あの時に唐招提寺や延命寺などの庭園も載っていました。それを手に持って、唐招提寺をうろうろしましたが、なかなか見えませんね。

マレス 今年（2018年）の10月28日に、名勝大乗院庭園文化館の企画で、牧岡さんと一緒に東大寺龍蔵院の庭を案内する予定です。普段は見れないところなのでそういうツアーも少しずつ増えたらいいですね。**仲** まずは森先生の作品集とか、そういったものがあれば、今後は残しやすいかもしれませんね。壊してから、あれは森先生の庭だったんだというのでは遅いからです。

マレス そうですね。今つくろうとしている報告書（本報告書）が森先生の作品集の一部になればいいなと

思っています。2010年頃から森先生の研究を始めたんですが、課題はまだたくさんあります。

まずは森先生が歴史家として復元整備された文化財庭園の研究と評価が緊急の課題の一つだと思います。最初にも話したように、森先生が40年ぐらい前に整備した浄瑠璃寺庭園が最近また発掘・整備されましたが、そういう事例はこれからどんどん増えてくるでしょう。

それから、森先生が作庭家としてつくった庭園の全体像を把握、再評価、そして活用することも重要だと思います。研究を深めることも大事ですが、やはり一般的に知ってもらうことも大事でしょう。そのためには、資料の整理と活用がよいのかもしれませんが。じつは、名勝大乗院庭園文化館や檀原神宮の文華殿でも小さな展示をしたことがあります。もっと大きな規模でできればいいなと思っています。

飛田 その時はどれぐらいの庭園を紹介されましたか。

マレス そうですね。浄瑠璃寺、円成寺、唐招提寺、東大寺龍蔵院、法華寺、矢田寺……。そして個人宅の庭も2箇所ほどを簡単に紹介したぐらいです。



マレス・エマニュエル (Emmanuel Marès) [本報告書編者、第1部「森蘊の庭：復元整備と作庭の間」筆者]
1978年、フランスに生まれる。2002年にINALCO（フランス国立東洋言語文化研究所）で修士課程、2006年に京都工芸繊維大学で博士後期課程を修了する。工学博士。専門は日本建築史、日本庭園史。京都通信社、CRAO（フランス国立東洋アジア文化研究所）、総合地球環境学研究所、奈良文化財研究所を経て現在は京都産業大学文化学部京都文化学科准教授。日本庭園学会理事。

著書に『縁側から庭へ：フランスからの京都回顧録』（あいり出版、2014）、記録映像の企画・制作に『昭和の作庭記——森蘊の足跡を辿る』（57分、2019年）などがある。

高橋 奈文研で企画展示ができたらいいなあとはいはあります。

マレス 企画展示でちょっとずつ資料を紹介して、最終的にまとめていけばすごいものになるのではないのでしょうか。情報量は多いですが、復元整備の仕事と作庭の仕事、両方をカバーできたらいいと思います。

ストイックな実測図と、繊細な設計図

高橋 前に、森先生の実測図を出版したらどうかという話がありましたが、全体をみると、一次資料として最も価値があるのは作庭の設計図のほうで、歴史的な庭園の実測図のほうはある意味シンプルなんです。西澤文隆先生の実測図のように大きく印刷するようなものではないような気がします。もちろん、細かく植栽を描いている図面はいくつかあるんですけども、それ以外のものをもし出版するのなら、図面そのものよりも、むしろそれに付随する測量時の情報のほうが重要になるかと思います。とにかく、どうかたち

しているのでしょうか。

仲 村岡先生もいつも植栽ありと植栽なしの図面、2種類つくっておられましたね。

マレス 『日本の庭』という本の中で桂離宮の図面がありますが、植栽がありません。それはとてもスッカリしていて、全体の構成がわかりやすい。しかし、奈文研に残っている桂離宮の植栽図を見ると、本当に見づらいですね。何を見ればいいのか、よくわかりません。

飛田 庭園の管理のためにはいいんですけど。

マレス 植栽のリストがあるとさらにありがたいですね。

高橋 森先生の実測図の描き方に一番影響されたのは西澤先生なのではありませんか。

田中 もろに影響を受けていますね。西澤さんは感銘を受けた図書の一つとして森先生の『平安時代庭園の研究』〔森 1945〕を挙げていました〔西澤 1978 7頁〕。彼らの実測図を比べたことがあるんですけど、やっぱり、西澤さんは実測図に植栽も全部入れて、今の庭の魅力を一枚の図面で表現しようとしています。

公開すればよいかが悩みどころです。

マレス 色つきの設計図は特に綺麗ですね。

高橋 かなり綺麗です。設計図はスケッチとして筆で描いているものもありますし。それに比べて、実測図のほうはものすごくストイックですね。設計図のほうは展示として見栄えがします。図面で庭園を表現するって難しいですね。

飛田 植栽の幹だけを明記すると楽なんですけれども、木を全部なくしてしまうのも問題だから、どうすればよいかなと思います。

田中 森先生も『日本の庭』〔森・他 1960〕の中で説明しています。樹木の下には庭石があるから、樹木と庭石を重ねるとわかりづらくなるので、樹木は省略したと。ただ、鉛筆仕上げの原図には丁寧に樹木まで描いているのがあると書いてあるんですけど、そういうものは残っているんですか。

高橋 それは調べないとわからないですね。今まで見たところではあまりないですね。

田中 やっぱ1枚にまとめるときには植栽を簡略化

ぐつと茂っていて向こうが見えない植栽と、枝の間から向こうが透けて見える植栽によって描き方を変えています。石も、平たく置いてある石と立ててある石と、表現を変えて描いています。それを見ると、庭のどういうところが透けていて、どういうところが閉ざされているのかわかるような実測図をつくろうとされていたんだということがわかります。

高橋 森先生の実測図にはメモがないのでいつ、誰が作成したものか、わからないことが多いですが、資料の整理と活用を考えると、早くデジタル化したほうがいいと思います。

マレス 図面が劣化する前に、早くできると思いますね。

栗野 森蘊先生の資料は分量でいうとどれぐらいあるのですか。

高橋 一箇所に全部を広げて把握するのはとても無理ですので、順番にデジタル化していくのが一番良い方法かもしれません。図面や資料もそうですが、写真もすごい量です。



マレス ということで、課題はたくさん残っているんですけど、今日はこのあたりで終わりにしようと思います。とにかく、皆さんとお話すると、森蘊の研究を深める余地はまだあるなと思ったのと、とても一人で行えるような作業ではないということがよくわかりました。今後はどうかたちで続けられいいのかまだわかりませんが、また皆さんと一緒に森蘊の業績を研究し、残っている庭園や資料の活用を考える機会をつくりたいと思います。今日は本当にありがとうございました。(了)

引用文献

- 恵谷浩子・前川歩(編)(2014)『遺跡学の宇宙——戦後黎明期を築いた13人の記録』日本遺跡学会
京都市文化観光局文化財保護課(編)(1990)『京都の庭園 遺跡にみる平安時代の庭園』京都市文化財
ブックス 第5集
建築資料研究社(2012)『森蘊の世界』『庭NIWA』
204号 建築資料研究社
小山潔の本出版発起人会(編)(1986)『庭師歷程——小

- 山潔のhuman forest』小山潔の本出版発起人会
田村剛(1925)「枯山水と重森氏の處女作」『庭園』
巻(6月号) 617頁 日本庭園協会
田村剛(1964)『作庭記』相模書房
外山英策(1927)『源氏物語と日本庭園』文友社
外山英策(1934)『室町時代庭園史』岩波書店
西澤文隆(1978)「私の感銘を受けた図書」『建築雑誌』
93巻1142号 日本建築学会
古川三盛(1997)『庭の愛』善本社
マレス・エマニユエル(2020 予定)「奈良市における
庭園の総合的調査」奈良文化財研究所
森蘊(1945)『平安時代庭園の研究』桑名文星堂
森蘊(1950)『美しい庭園——鑑賞と造庭』創元社
森蘊(1964)『日本の庭園』吉川弘文館
森蘊(1971)『奈良を測る』学生社
森蘊(1973)『庭ひとすじ』学生社
森蘊(1986)「天国に昇った小山潔君を偲ぶ」小山潔
の本出版発起人会(編)『庭師歷程——小山潔のhuman
forest』小山潔の本出版発起人会
森蘊/恒成一訓(写真)(1960)『日本の庭』朝日新聞
社
森蘊門下生一同(1989)「故 森蘊先生著述作品目録
(稿)」奈良文化財研究所蔵
森史夫(2007)『亜流年譜住宅造形森史夫』デザイン
オフィースケイ

【第3部】

森蘊の足跡を辿る——インタビュー——

●聞き手：マレス・エマニユエル



作庭の指導をする森蘊(奥)(1957年頃)



インタビュー場所：奈良市、依水園／日時：2013年7月18日
(写真は平泉の無量光院跡)

「森先生と比較できる人は
あまりいないですね」



龍居竹之助（たつひ・たけのすけ）

1931年、東京に生まれる。造園史家。造園家。早稲田大学卒業後、日刊スポーツ新聞社文化部記者を経て、1972年より（有）龍居庭園研究所所長。1990年、文化庁文化財保護審議会専門委員。2004年より（社）日本庭園協会会長。2005年より、創造学園大学客員教授。古庭園の修復整備とともに、庭園の啓蒙活動にも従事。著書に『おりおりの庭園論——庭を通して日本の文化を考える』（建築資料研究社、1991年）などがある。

●日本庭園史界において、森蘊はどう位置づけることができますか。

龍居…とりあえず、えらい。えらいんで

すけど、私にはわからないところもありますね……。

森先生は明治38（1905）年生まれでしたね。ということは、昭和10年頃に私らがやっていた庭園協会の機関誌の編集を手伝ってくれたときはちょうど30歳ぐらいになっていました。すでに日本庭園を研究テーマにして、一番論文を書いていた時期です。

その頃、森先生はとにかく平安時代と「作庭記」を中心に研究されていた時期ですが、同世代に平安時代を研究している人は誰もいないんですね。その前に、外山英策さんが一番最初に文献研究に手を染めた人ですが、森先生はその研究に圧倒されてやってみようと思ったんでしょうかね（笑）。それが戦前の生き方です。

戦後から、森先生は桂離宮の研究に移るんですね。研究人生の前半は平安の庭園、そして後半は桂離宮の研究。つまり、古代から江戸初期までの庭園史を網羅したわけですが、その後はやってないんですね。私の親父がすでに『近世の庭園』〔龍居 1942〕で発表していたから、森先生はやらなかったのだろうか（笑）。まあ、実際にやる時間が

なかったと思います。それに、森先生の世代はほとんど近世を意識していませんでした。桂離宮までしか範疇になかったのです。

平安時代の庭園と桂離宮、そして遠州の研究。とにかくすごい業績です。そういう意味では、森先生と比較できる人はあまりいないですね。ほぼ同世代で庭園史の研究者であり、また作家でもあった重森三玲を取り上げることができるとはいいませんが、やっぱり立場が違いますね。両方ともよくやっただと思いますが。

●森蘊は同時代の造園の先生とどのような関係をもっていましたか。

龍居…森先生はあまり講師をされていないでしょう？ 戦争中に井の頭の自然文化園の園長になりましたが、それは東京都の行政職でやっぱり生活のためでした。戦後、奈良文化財研究所に入って初めて庭園の研究に集中できる環境が整ったと思います。生活が安定して、小林剛所長に可愛がられて、わりと自由に研究できたと思います。

その頃に博士論文「桂離宮の研究」〔森 1953〕を完

表したんですね。東京帝国大学の農学部を卒業したのに、博士は東京工業大学でした。そこではほとんど建築史の先生としか交流していませんね。とにかく、森先生は造園界の人との交流が以外と少なかったのです。外山英策先生とも、上原敬二先生とも、田村剛先生ともいまひとつでした（笑）。だから相談する相手も少なく、ずっと一人で研究を進めた。それはすごいことだと思いますけどね。

●森蘊が残した多くの本の中で、一番印象に残るものは何でしょうか。

龍居…『美しい庭園』〔森 1950〕という本は読んだことがありますが？ そのまえがきの中に、日本庭園はもう観光資源でしかない、森先生は明確に書いてたんですね。たしかにそうかもしれないんだけど、森先生がそんなことを書いたらまずいんじゃないかと、私は思いました。実際にそうなるっていうのも、なんとかしなければならぬのは私たちの役目だと思います。

●森蘊の研究の特徴は何でしたか。

ればよいのか、難しいところですが。

森先生は文献と現場をやってきたわけですが、やっぱりどこかで都合よく決めたところがあるような気がします。助手の村岡正^{ただし}さんもそこで苦労したと言っていましたね。振り返ってみると、皆が仲良くできなかったのは、そういうところなのではないかと思ったりもします。

●作庭家としての森蘊はいかがでしたでしょうか。

龍居…森先生の庭が嫌いです（笑）。なぜあんな表情のない石を使うんだろうという不思議に思います。それは研究者と作庭家のギャップなんでしょうか。スケッチには表情のある石を描いているのに、庭となったら印象が全然違います。

上原敬二先生は私の親父と同じく、大正7（1918）年に事務所を開いた。田村先生だって、学校の先生をやっているながら設計もやりました。大正時代になると、皆は古い庭を研究したうえで自分なりの庭をつくりますね。残念ながら、その作品はもうほとんど残っていない。皆戦争で焼けてしまいました。山形県に上原さんの庭が一つ残っている

龍居…森先生は優しい人でしたよ。話すときは、少し自重されているようでしたが、論文を書くときはなんでしょう、文句ではないですが、批判が多かったですね。戦前の平安時代庭園の研究にはまだ遠慮があったんですけど、桂離宮の研究あたりからは段々と自信がついてきました。主張がどんどんきつくなってきた、すべてを否定するという意識になります（笑）。自分がやっていることに対抗できる人は誰もいないと思っていたのかもしれませんが。

私の親父も、「森君はよく頑張るし、ピーアールがうまい」という言い方をしていました。だから年上に可愛いがられなかったんでしょう。すごい勉強家だったというのは間違いないだけだね。

森先生はまた多くの文化財に指定された庭園を修復しましたね。古い庭園の復元にこだわっていたようですが、最近の現場では安全性、特に歩きやすさとかが重視されています。だから、古い庭でも、時代が変わって、植物も変わって、訪れる人も変わってきたのだから、庭も多少変わってもよいのではないかと私も思いますね。もちろん、常に遺構との戦いです（笑）。どういうふうに折り合いをつけ

くらいでしょうか。

森先生も重森三玲も、庭園史を研究してから新しい庭を設計しましたが、戦後ですから作品が残っていますね。ただ、なぜ森先生が名勝に指定されている庭園の横に庭をつくるのか、私には理解できません。重森三玲もつくっていましたが、森先生の立場は違います。森先生は文化財の指定や保護などに直接関わっている人間ですから。やっぱり、指定された庭園の周辺はよく考えて整備するべきだと、私は思います。

（了）

引用文献

龍居松之助（1942）『近世の庭園』三笠書房
森蘊（1950）『美しい庭園——鑑賞と造庭』創元社
森蘊（1953）『桂離宮の研究』東京工業大学学位請求論文（博士論文）



インタビュー場所：京都市、円山公園／日時：2018年10月7日
(写真は平泉の毛越寺庭園)

「自然に石を放り投げたぐらい、 という感覚」

た古い建物でした(現・仏教美術資料研究センター)。しかし、その日森先生はものすごく機嫌が悪くて、けんもほろろにというか、あんまり向き合ってくれなかったのです。いろんな事情があったと思いますが、会見はすぐに終わりました。

その後、村岡^{ただし}正先生に紹介していただきました。村岡先生は当時、京都大学の研究員になっておられたのです。純粹な京都の人で、京阪の七条駅の近くで炭屋を経営しながら、森先生と一緒に庭園史研究をしておられたのです。村岡先生は残念ながら早く亡くなられたのですが、森先生と並んで日本庭園史の重要人物だったと思います。

京都大学の造園学のセミナーに入ったときに村岡先生に出会いました。村岡先生はとにかくものすごくオープンで、喜んでいろんな人と接触する人でした。当時、僕はまだ学生でしたが、村岡先生の家にお伺いするのは常に楽しかったです。必ず一杯ごちそうになって帰りました。僕はあんまり飲めないんですけど、ちょっとだけならお酒は好きなので、数えきれないほど村岡先生のお宅にお邪魔しました。そこでいろんな話をしました。だから、森先生の仕事とか



中村 一(なかむら・まこと)
1931年、京都府に生まれる。農学博士、造園学者。京都大学名誉教授。著書に『風景をつくる——現代の造園と伝統的日本庭園』(尼崎博正との共著、昭和堂、2001年)などがある。

●森先生との出会いを聞かせていただけますか。

中村…じつは、森先生との出会いには2つのルートがありました。一番最初は、外国人留学生を連れて、直接森先生に会いに行きました。当時、奈良文化財研究所はまだ奈良国立博物館の敷地内にあっ

は村岡先生を通じて知ることができました。

もちろん、村岡先生は森先生を非常に尊敬していました。ものすごく緻密に研究されるところが似ていたと思います。二人がどういうふうに接触されたかというのは、僕はわかりませんが、出会うべくして出会ったと思います。接点は造園学会なのかもしれません。村岡先生は日本造園学会によく出席されていたし、森先生も若い頃はよく参加されました。有名になってからはあまり見かけなくなっただけですけどね。庭園史の研究者として、森先生は造園学会よりも、建築学会との関係が深かったと思います。とにかく、本格的な造園史の研究者というのは、森先生の前にはあんまりおられなかったような気がします。歴史的なトピックを扱う人は少なかったです。どちらかというと、デザインにつながるような問題のほうが多いですね。

●庭園史において、森先生が残した最も重要な業績とは何でしょうか。

中村…森先生が『平安時代庭園の研究』[森 1945]を書かれた背景というか、動機の一つには、当時の最も優



左：毛越寺庭園の遺水（北より）（マレス撮影、2018年）



右：森蘊による毛越寺遺水のスケッチ（「森蘊旧蔵資料」奈良文化財研究所蔵）

毛越寺庭園の整備委員会ではほとんど10年ぐらいい、森先生と一緒に委員をしておりました。そこで、森先生が研究されていた平安時代の遺水と壮大な州浜が発見されましたね。しかし、森先生が亡くなってからしばらくすると、浄瑠璃寺の中島あたりにアシが一気に生えてきまして、平安時代の趣が

だいぶ薄れてきました。境内に平安時代の風情というか、草花がところどころに生えたりするのは悪くないんですけど、メインの中島の景色が消えてしまうのはもったいない。せつかくの森先生の復元整備が台無しになります。この中島の風景と風致が浄瑠璃寺の本質ですからね。それで、10年ほど前に再整備することになりました。森先生は一生懸命携わったんですけれども、なにせ、平安時代の遺構が次から次へと出てくるわけですから、非常に忙しい時代でした。気をつけないと、すぐ埋められたり、壊されたりします。浄瑠璃寺の復元整備でも、森先生はもう少し力を注ぎたかったのではないかと僕は思いますね。たとえば、今回はお堂の前をちよつと発掘して、州浜の跡が出てきました。あれなんか、森先生に見つかってれば、復元整備の仕方もうまた変わったかもしれないですね。ただ、復元整備といっても、何もかも昔のようにはないんです。水位の問題もありますし、現代の使い方もありますので、州浜を完全に復元することはできませんでしたが、今回の発掘の成果を見せるために、西護岸の一部を州浜にしました。森先生が整備したとき、そこは柵護岸

れた著書、外山英策の『室町時代庭園史』（外山 1934）があると思います。あの本は、文献研究を主として室町時代の庭園を詳しく説いたものなんですけど、当時庭園の歴史をやる人は必ずそこを通らなければならぬ本の一つだったわけです。森先生も、その『室町時代庭園史』はかなり勉強されたと思いますが、自分はさらに古い平安時代を取り上げようと決心したきっかけだと、僕は思うのです。幸か不幸か、『平安時代庭園の研究』は戦時中に出版されたので、主に文献研究に基づいた研究でした。じつは、その頃を境として日本の経済が上向きになりました。そうしたら、京都なんかでもビルがたくさん建つようになりまして、そういう開発に伴って、日本各地で発掘も始まるわけです。すると、平安時代の庭園の遺構が続々とでてきます。森先生も本当に、そういう平安時代の庭園遺構なんかを歩き回って研究されたと思いますけれども、とにかく発掘に追いつくのがちよつと難しいほど忙しかつたと思います。森先生はとにかく、平安時代の第一人者でした。日本庭園というのは、平安時代にピークを迎えることは確かだと思ふんですけれども、その前の奈良時代の後半からすでに

日本庭園に独自のものが培われていったと僕は思っています。特に、奈良時代後期の東院庭園なんかは、中国庭園に対する決別というか、さよならをするための重要な庭園だと僕は思っているんですけれども、森先生が『平安時代庭園の研究』を書かれた頃はその存在すら知られていませんでした。●1970年代から、森先生は発掘された庭園遺構の復元整備を指導するようになりました。その中でも、1977年に整備した浄瑠璃寺庭園が有名だと思いますが、近年、中村先生の指導のもとで再整備されました。いかがでしたか。中村…1977年に整備事業が終わったときにすぐ見に行つたわけですが、本当に感激しました。ハスなどに覆われた池がああいうふうに戻されるなんてね。平安時代の精神がそこに残っているということを確信させられるような庭でした。これはいいなと思いました。特に中島の岬の立石なんかは素晴らしいですね。残念ながら、浄瑠璃寺庭園では一緒に仕事できませんでしたが、その後、平泉の



整備前（左）と整備後（右）の浄瑠璃寺庭園（「名勝 浄瑠璃寺庭園 環境整備報告書」より）

る庭園史研究はこれだけ違うということです。
森先生が『平安時代庭園の研究』を書かれた頃は文献研究が主流でしたが、70年代を境目に、平安時代の庭園遺構がたくさん発見され、復元整備が緊急の課題になります。森先生の庭園史研究はこうして2つの時代に分けられると

でした。でも、それ以外はほとんど森先生のときの整備と変わりません。

とにかく、浄瑠璃寺の中島と立石を復元整備したのが、森先生の大きな研究成果だったと思います。門をくぐって、中島の先端部にそびえ立っている石が見えてくる感じというの、やはり素晴らしいですね。森先生が一番にやりたかったことなのではないかと思います。

●当時の復元整備の技術と今の技術を比較すれば、大きく変化していますか。

中村…変化や違いはあまりないと思います。森先生は今のやり方に近い方たちで復元整備をしました。庭師の技術のほうもほとんど変わっていません。仙洞御所の庭みたいなのに、後の時代につくられた州浜の庭もたくさん残っていますので、手法というか、スキルとしては今も昔もあまり変わらないと思います。ただ、平安時代の庭に州浜がよく使われていたというふうに常識は変わりました。

森先生の時代と大きく変わったのは、発掘の工事でしょうか。浄瑠璃寺の復元整備の際、森先生が発掘から整備ま

で指導されましたが、今発掘を指導するのは考古学の専門家ですね。どのお役所の中でも埋蔵文化財課ができて、考古学的な視点で年代とかを明確に判断できる人がいます。考古学者は庭園の復元整備をするための土台をつくってくれますね。あとは私たち造園家がどの表現が一番ふさわしいのかを決めます。

たとえば、このあいだ、京都新聞でも紹介されていましたが、金閣寺で新たな池のような部分が発掘されました。僕も委員の一人ですが、金閣寺という庭で非常に重要なのは、州浜がまったくなくことです。全部石積護岸でしょう。足利義満が金閣寺の庭をつくったときに、日本庭園の新しい時代を浮かび上がらせた、僕は思います。要するに、州浜をつくらないというのは、よっぽど大きな決断だったと思います。平安時代には池を海に見立てるので、必ず州浜をつくるのです。もともとの西園寺家の庭園がどうだったかははっきりわかりませんが、やっぱり義満は徹底的につくり直しています。室町時代の庭園の特色をつくり出した庭だと、僕は思うのです。いずれにせよ、文献研究に基づいている庭園史研究と、考古学の成果に基づいてい

思います。

●森先生は古庭園や庭園遺構の実測にも力を入れていましたね。

中村…実測というのは、最初から森先生の手法の中にあっただと思います。それは重森三玲さんの『日本庭園史図鑑』〔重森 1936・1939〕の影響もあるかと思いますが、森先生はそこに等高線が入っていないことをずっと批判していました。もちろん、重森三玲さんも等高線らしいような感じの表現をされていますから、僕はそんなに悪くないと思うんですけど、森先生によると等高線の入っていない庭園の図面は、不備というか、ふさわしくないというわけですね。とにかく地形の表現にこだわっていました。

●浄瑠璃寺庭園のように、森先生が70年代に整備した歴史的な庭園は最近再整備されていますので、森先生の業績が再評価される時期がようやく来たのではないかと思います。森先生は復元整備だけではなく、新しい庭もつくられましたね。そのあたりはいかがでしょう。



『日本の庭園』に掲載されたドーズ樹木園日本式庭園の写真 [森 1964 92 頁]

中村…庭を一緒につくったことはないですね。奈良を中心に作庭の活動をしていたかと思いますが、和歌山城の二の丸庭園もつくっていますね。鳥獣戯画をイメージして、ちよつと遊び心のある庭をつくっていますね。

その頃の施工は主に徳村造園だったと思います。僕は、今の徳村盛市さんと一緒に大きな滝をつくっています。森先生と一緒に仕事していたお爺さんとよく似ていますね(笑)。こうして、森先生は京都の庭師と一緒に新しい庭もつくりますが、平安時代の庭の整備もしました。そこで、感覚の違いを実感したのは、毛越寺庭園の整備のときです。遣水の主流、滝が落ちるあたりに少し広くなったところがあるでしょう。そこに石敷きの中島みたいなものがあります。徳村さんの親父さんがあまりにも綺麗に石を並べすぎたので、森先生がものすごく怒っていました。こんなに綺麗に並べたらいかんと。「自然に石を放り投げたぐらい」、森先生はそういう感覚を重視していました。それは一理あると思います。桂離宮の州浜というのは、相当熟練した技術ですね。平安時代には人為的に石をきっちり張りつけることは行なわれなかったのではないかと、というのは森

先生の推測ですが、僕もそう思います。森先生は毛越寺庭園の滝の整備でも苦労されたことを覚えていてます。一部崩れていましたので、そこに森先生の意図というか、感覚が表われていると思います。

森先生は、毎年忘年会を企画されていました。「森グループ」みたいなものが形成されて、森先生自身も喜んでいて、と思います。要するに、机の上の研究だけではなくて、実際に古庭園を修理したり、あるいは新しい庭をつくったりする、そういうグループがいました。それも森先生にとってはプラスだったと思います。調査、復元整備、作庭など、いろいろ頼まれるから、そういう人材は相当力になったと思います。

●中村先生も文化財庭園の委員会に参加されたり、また新たな庭の設計もされていますが、森先生はモデルというか、憧れだったのでしょうか。

中村…僕はどちらかというと、日本庭園のアーティスティックな面に惹かれました。江戸時代で日本庭園は本場に終わったのかという問題を捉えようと思いました。日本庭

れたのかもしれませんが。

ダムで堰き止めた水を日本庭園の池のようにつくりました。「土が余っている」と言って、土木屋さんが困ってましたので、こちらで全部引き受けて、その土を築山風に使って単調なダムを和らげました。土木屋さんはものすごく喜びましたね。こうして、小さなブルドーザーで池の外側に築山をつくってもらって、そこに石を突き刺したのですが、それが案外うまくできたようですね。とにかく、自然の地形と環境を利用する庭づくりという意味で、森先生は共通点を感じたのもしれないですね。僕の仕事に対して、好意的な面はたしかにあったと思います。

(了)

引用文献

- 重森三玲(1936-1939)『日本庭園史図鑑』(全24巻) 有光社
 外山英策(1934)『室町時代庭園史』岩波書店
 森蘊(1945)『平安時代庭園の研究』桑名文星堂
 森蘊(1964)『日本の庭園』吉川弘文館



場所：奈良市、円成寺／日時：2018年6月5日

「とにかく、やることはすべて
徹底的にやっていましたね」



徳村盛市（とくむら・せいいち）
1948年、京都市に生まれる。造園家、庭師。同志社大学卒業後、森蘊に師事。森蘊とともに、文化財に指定された庭園の復元整備事業に携わると同時に、森蘊の作庭活動を支えてきた。現在は庭匠植清代表。2015年12月に文化庁長官表彰、2018年3月に黄綬褒章を受章した。

●円成寺庭園は平安末期まで遡る浄土式庭園です。1973年に名勝に指定された直後ぐらいに徳村さんは森先生と一緒に復元整備をされたようですね。

徳村…そうですね。できるだけ昔に近い

姿に戻すように、庭園の復元整備をしました。整備前はスギやモミの木などが鬱蒼としていて、中島にも背の高いアカマツがたくさんありました。ほんまに森みたいでしたね。植栽は鬱蒼としていたけど、庭園の骨格はそのままの状態がよく残っていました。庭に時代が必ず重なりますからね。

平泉の毛越寺庭園でも、江戸時代になると伊達藩がスギを植えて整備しますよね。もう300か400年ぐらい前のことですが、庭園の場合は必ずどこかで人の手が加わっていると思います。そういう意味で、ここはよく古い形を保っていると思います。

整備した後は青竹の柵護岸が見えて、スカッと開かれた感じで綺麗になりました。でも40年も経つと、やはり護岸も後退するし、低木類も大きくなって池に張り出てきましたね。今日は久しぶりに来ましたが、また雰囲気が変わりましたな。

●徳村さんは今も文化財庭園の復元整備をされていますが、円成寺では具体的にどんなことをされましたか。

徳村…今は、測量は測量士に、発掘は考古学者に、設計は

設計管理事務所に任せますよね。すべての作業が専門家ごとに分解されてしまいました。しかし、当時はそんな組織なんか全然なかったんですね。森先生と村岡正先生と相談しながら、地形測量から、図面作成、復元整備まで、最初から最後まで一緒にやっていました。

最近「保存整備工事」という言葉もよく使われるみたいですけど、森先生のときはひたすら「復元」でした。とにかく、森先生の復元整備工事はいつも測量から始まりました。だいたい、測量図なんて存在していませんでしたからね。もちろん、お寺に保管されている古い絵図を参考にしていました。でも、そんなに細かくても、そこには等高線は絶対入っていませんからね。森先生の測量では必ずレベルも測っていました。時間的に考えればもったいないのですが、できあがった図面を渡されて整備をするのと、自ら実測した庭を整備するのと、やっぱり違いますね。整備が始まる前からある程度イメージできますから。

もちろん、最近の図面はまったく狂いのない、完璧な図面です。我々がやっていたときは、いちいちテープを張って、池を一周していたから、そこまで精密ではなかったか

もしませんが、最終的には不思議と合っていましたね。森先生も村岡（正）先生も偉かったと思いますよ。そういう、測量は山中（功）さん「160頁を参照」もよく手伝っていましたな。

測量をしてから、今度は発掘調査。当初の池の汀線（ていせん）を確認するために、ところどころにトレンチを入れて、断面で土の層を見ます。それで昔の池の形というか、輪郭がわかります。しかし、ここは玉石が全然なかったのです。毛越寺でも、白水阿弥陀堂でも、平等院でも、玉石の州浜ですが、ここはなかったですね。鎌倉や室町時代になると、金閣寺に代表されるような石組護岸になりますが、それは比較的、新しい手法ですね。円成寺の場合は州浜が出てこなかったから、土留め代わりに、杭と竹で柵（しごらみ）護岸をつくりました。とにかく、新しい石を取り入れていません。

発掘の次は、泥上げをしました。ものすごいたいへんな作業でした（笑）。もともとの池底は粘土で固めているはずですが、何百年間も溜まってきた落ち葉や、流れてくる土などが泥になってしまつて、たいへんでした。

それから、中島の松もたくさん切りました。大きくなり

すぎた松がたくさんあったから、切るしかなかったんです。思いきつてやったことは今もよく覚えています。倒してから枝を落として、そして、引き出しましたね。それもないでしたわ。

●整備の工事が始まるまでがたいへんでしたね。

徳村…たいへんでしたが、水源が枯れていないのが救いですね。歴史的な庭園で水源が枯れているところは多いので、その場合はポンプを利用したり、別の水源から導入したりする必要がありますが、円成寺の場合は今も綺麗な水が流れています。だから、泥上げをした後、池底の粘土を修理しただけです。最近は大タキの工法を利用して、石灰を使って固めたりしますが、森先生のときは粘土しか使いませんでした。

●森先生は現場でどのような指導をされていましたか。

徳村…森先生は熱心に指導されていました。日帰りでも、朝から晩まで一日一緒に作業していました。地方に行くと、泊まりがけで指導したり、スケッチしたりしていました。

とにかく、細かいところまで指導していました。今は、一つの復元工事に造園、建築、考古学などで先生方が4、5人もいますが、昔は森先生だけでしたから、一人で決断することが多かったですね。もちろん、委員会もありましたが、森先生の一言ですべてが決まるような感じでした。石の据え方や木の植え方とか、微妙なところまでこだわっていましたね。石の向きと傾きぐあい、木の枝ぶりも「もうちょっと、もうちょっと」とか言つて、なかなか決まりませんでしたね（笑）。あまり人工的なつくりは避けていました。私が言うのも偉そうですが、自然の流れをつかんでいましたね。

●40年前に整備されてから、円成寺庭園は大きく変わりましたか。

徳村…そうですね。背景の木はどうしても大きくなりますが、中島の松と、護岸の低木類はちゃんと手入れされているので、今も綺麗に庭を見渡すことができます。ただ、護岸はかなり侵食されましたね。水の力というのはすごいのですね。ずっと動いていますから。鯉の影響もあると思



1. 浚渫作業



2. 伐採作業



3. 柵施工作業



4. 中島の植栽作業



5. 剪定作業

円成寺庭の整備工程（『名勝 円成寺庭園 環境整備事業報告書』）



森蘊による円成寺のスケッチ（1976年3月）（「森蘊旧蔵資料」奈良文化財研究所蔵）

いますが、護岸は40年間で50センチぐらい後退してしまいました。また、整備をしたときに池の北側に平橋をかけましたが、それも無くなったんですね。

●徳村さんは歴史的な庭園だけではなく、森先生の作庭の施工もされましたね。

実際にお寺に入り込んで、測量も史料も全部自分で研究材料を集めて本を書いていましたから。立派だな、ほんまに感心しましたな。

なんでも徹底的にやるというのが、森先生の特徴ですね。野球に関しても、巨人の大ファンでしたね（笑）。レベルブックに打数と安打、全部記録していましたよ。出張先で夜に電話して「どうですか、巨人勝ってますか？」と聞いていましたね。巨人負けたら、めちゃくちゃ機嫌が悪かったですね（笑）。

それと、切手のコレクションを見せてもらったことがあります。これはまたすごかったですね。私も子供の頃から少し収集していましたが、森先生のアルバムを見たらもうあかん、これだけのものを集められるはずがないと思いましたね（笑）。ずっと大事にしていました。

とにかく、やることはすべて徹底的にやっていましたね。たとえば、写真を撮っているところは見たことがないですわ。カメラを一切使わない。すべてスケッチでしたね。写真は後からじっくり見ると、奥行きの感じと石の大きさとか、ものすごく狂ってしまいます。しかし、森先生のス

徳村…それも多いですね。久留米市まで、一緒に庭づくりしに行きましたからね。しかし、森先生の庭は古いですよ。新しいものをつくっても古いです（笑）。古代の日本庭園研究が作庭に生かされているのでしょうかね。

石を探すときは「動物的な石を集めてください」とよく言われていましたから、やはり『鳥獣戯画』をイメージされてしまったね。法華寺の子犬の庭も、和歌山城の二の丸庭園もそうですね。奈良の石田邸と豊明市の古川邸で巨大な切石を利用して、現代的な庭を試みたこともありすが、あとはみな古いですよ。久留米の遍照院庭園や創世苑（現・ホテルマリタール創世久留米）もそうですが、それぞれの時代の特徴を一つの庭にまとめることもされていました。まあ、私にはそう感じたんですけど。

●徳村さんが森先生に惹かれたところを教えてくださいませんか。

徳村…森先生はものすごい苦労されたと思いますよ。ほら、今は庭園の研究といえば、参考文献がたくさんあるから、それらを集めるだけで本一冊書けますね。森先生の場合は、

ケッチには狂いがない。これはやっぱり違うな、普通人が真似できないところまで追求するなと思いました。

●徳村さんは2015年に文化庁の長官表彰を受けたそうですね。

徳村…あれは少し前ですね。2018年に今度は黄綬褒章をもらったんですね。造園関係は国土交通省から受ける方が多いようですが、文化庁から受ける方はなかなかいないそうですね。しかし、そういう晴れ舞台には慣れていないものですから恥ずかしいですね。冬季オリンピックのゴールドメダリストや、EXILEのHIROさんとかも来ているので、一人だけ何かちょっとこの場にふさわしくないやつがおるなと思ったんですが、最後に天皇陛下にご拝謁できました。それも、森先生のおかげですね。

しかし、最近は庭園史を研究している先生も少なくなってきましたし、造園界もだいぶ変わりました。昔のやり方と違うな、とつくづく感じますね。

（了）



場所：奈良市、旧柳生陣屋跡／日時：2018年4月4日

「庭の実測は、根のいる仕事」

山中…整備する前はもと小学校の跡地でした。東側に校舎を配置し、その前に運動場が広がっていたようです。小学校が移転してから、もともとの陣屋跡の景色を戻そうと、奈良市が森先生に整備をお願いしました。しかし、図面がないものですから、まずは現地を実測することから始めました。現況図をもとに、今度は発掘調査をしました。発掘をしないと位置関係がわからないものですから。そうして実際に掘ってみましたら、井戸が出てきたんですね。コンクリートの蓋をされていたが、その下に江戸初期の石積が綺麗に残っていました。その頃の武家屋敷には、井戸が台所の中にあつたということで、森先生はこの井戸を中心に、古図に見られる屋敷の間取りを参考に整備しました。森先生と一緒に、いろんなところで測量をしてきました。が、平面だけではなく、いつもレベルで海拔を測っていました。たとえば、ここは海拔が263・5から264メートルの平坦地です。それに合わせて整備しました。たとえば、大玄関の前に見える岩はじつは、地山の岩なんです。森先生はそれを活かして、周辺に玉石を敷いて、山岳的な石組にしました。

●今日はちょうどいい天気恵まれたし、サクラも満開で本当に綺麗ですね。さて、この旧柳生陣屋跡というのは、ちょうど40年前に森先生と山中さんが整備されたんですね。整備をする前はどのようなところでしたか。

●この陣屋跡は具体的にどのように整備されましたか。

山中…建物を復元するほど情報はありませんでしたが、石積で屋敷の間取りを表わしました。石積の高さは当時の武家屋敷の床の高さ、50、60センチに合わせました。畳の部屋には芝を張って、廊下は砂利敷きにしました。でも、40年経って廊下の砂利部分は全部芝に覆われましたね(笑)。井戸は丈夫につくられていたので、目印になるように、その上に1メートルぐらいの高さの石積をしました。

凹んでいるところは坪庭だった場所ですが、発掘調査から遺構も出てこなかったし、古図にもその姿が描かれていないので、森先生は地元の石を集めて、自由に石組されました。花崗岩が多いので、角張った石や丸い石、天端の平らな石など、いろんな形のを組み合わせて、その場で指導していただきました。納屋があつた場所は石積ではなく、切石で囲んで花壇をつくりました。背後は生垣を配置し、サクラ、マツ、モミジを中心に四季を彩る植栽にしました。陣屋跡なので、森先生はやはりマツとサクラで華やかにしたかったと思います。当時は休憩所がなかったんですが、雨をしのぐ場所がなかったので、その後に観光協会が休憩所をつくつたんだと思います。



山中 功(やまなか・いさお)

1944年、奈良県に生まれる。造園家、庭師。1969年に森組と出会い、1970年4月より庭園文化研究所所員となる。1980年10月に山中造園を設立。作庭のほかに、古庭園の実測や復元整備にたずさわる。2017年12月文化庁長官表彰を受賞。

●公園の南側は発掘の成果と、古図に描かれた間取りに基づいて整備された歴史的なエリアということですね。それに対して、北側はどのように整備されましたか。

山中：北側には遺構が見つからなかったけど、ちよつと凹みのあるところがあったので、その地形に合わせて森先生が枯山水をつくりました。枯池をつくるために掘り上げた土は北側に上げて、築山にしました。あとは、護岸の要所要所に景石を据えました。護岸と池床全体は玉石敷で仕上げました。それと出島に立石を据えました。この立石は浄瑠璃寺の中島の立石によく似ているでしょう？ じつは、森先生が浄瑠璃寺庭園を整備されたのは昭和51(1976)年、このちよつど2年前のことです。

しかし、この枯池周辺は今、芝生や雑草に覆われていて玉石も景石も見えなくなっていますね。

全体を回遊できるように、園路をつくりました。だいたいの道筋は私が図面上で決めて、先生に見ていただきました。「あまり真つすぐすぎると違うか」と言われましたので、結局ちよつと迂回するようなかたちで描きなおしました。こうして、最初は実測図をつくつて、その次に発掘

の製図、最後には整備の計画図を描きました。

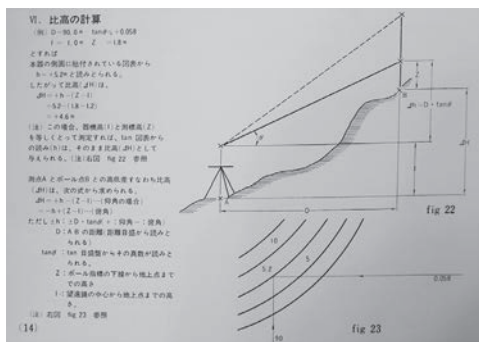
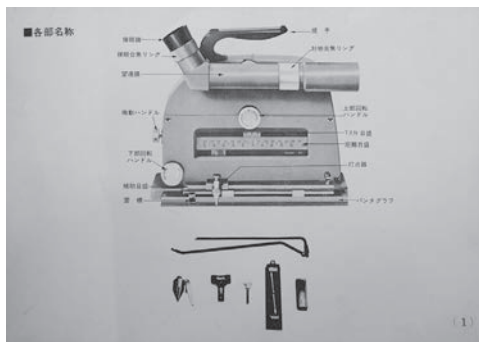
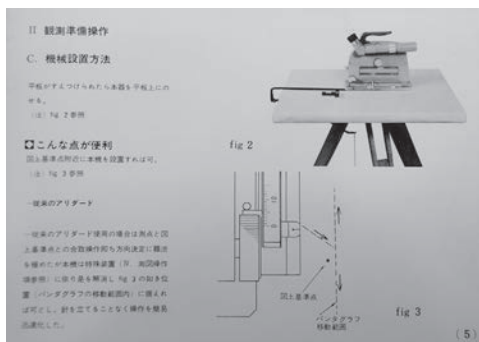
●山中さんが森先生と一緒に働くようになったきっかけは何ですか。

山中：昭和37(1962)年の暮れか、38年頃だったと思います。庭の仕事がしたいと思つていたところ、庭園史研究の権威者を紹介してあげると、ある方に言われました。普通の造園屋で働くよりかは、学者さんについて勉強したほうがいいだろうと、私は思いました。数日後に森先生にお会いしたら、「どうしてもしたいなら、弟子が2人いるから、そこで一緒に仕事しなさい」ということで始まりました。全然知らない世界に飛び込んでしまったものですから、一から勉強しました。

1年間ほど2人の庭師についていたんですけども、ある時、突然「君、測量できるか」と森先生に聞かれました。高校時代にちよつと測量の勉強もしていたので「平板ならできます」と答えたら、さつそく次の日から庭園文化研究所の研究員になつていて、測量をすることになりました。初めて行つた現場は京都の法金剛院庭園。ちよつど滝組



上段左：柳生陣屋で発掘された井戸／上段右：井戸の前でノートをとる森蘊／中段左1：枯山水の作庭工事／中段左2：完成した枯山水庭園（森蘊設計）／中段右：柳生陣屋跡の園路／下段右：石積で復元された柳生陣屋跡の間取り（「山中功旧蔵資料」奈良文化財研究所蔵）



山中さんが使っていた測量機とその説明書
〔「山中功旧蔵資料」奈良文化財研究所蔵〕

が完成したところでした。そこで初めて森先生と村岡正先生と一緒に平板測量をしました。それから、和歌山城の紅葉溪庭園、平泉の観自在王院、毛越寺、白水阿弥陀堂……とにかく、整備をする前に、まずは測量して現況図を作成しておかないといけないので、ひたすら古庭園の測量をしていました。この技術は何となく身につけて、今後に生かしたいなと思って、ずっと森先生と村岡先生について覚えさせていたんだです。

特に、和歌山城の紅葉溪庭園で石の扱いや石組の修復をだいぶ勉強しました。石が多かったですからね。あそこをやりこなせたことで、修復の考え方、やり方が少しわかりました。

●山中さんは測量をたくさんされてきましたね。現在はトータルステーションという便利な測量機があります。が、当時は何で測量されていましたか。

山中…庭の実測はたくさんやりました。根のいる仕事ですね。特に石の多い庭はたいへんです。

今みたいに高度な測量機ではなかったんですが、法金剛

院庭園の測量をした頃にアリダード（スタジメーター）という画期的な測量機を使い始めました。それを平板上に載せてから目標点を定めると、距離と高低差を測ることができるようになった機械でした。これでテープもボールもいらなくなりました。アリダードとスタッフさえあれば測量できました。おかげでだいぶ早くできるようになりました。最新の光波とは比べものになりませんが（笑）。でも、あの機械でたくさん庭を測量して、図面をつくりましたね。庭はどんどん変わっていきますから、記録を残すのも大事だと思いますね。

●森先生は学術的な図面をたくさん残しましたが、庭のスケッチもよくされていたようですね。

山中…スケッチは覚えたかったですね……。先生に一遍お尋ねしたんですけれども「スケッチってなかなか難しいよ」と言われたきりです（笑）。

森先生は現場で写真を撮らずに、いつもスケッチをされていました。それも早かったですね。縦12センチ、横18センチぐらいの紙と、墨つぽに柄がついた中に筆を入れた矢



作庭家
山中 功(2) — 松尾寺本坊

場所：奈良県大和郡山市、松尾寺本坊／日時：2018年4月4日

「一見して、なんでもない庭のようですけど、
落ち着いた感じがありますね」

●松尾寺は郡山市の西に聳えつつ松尾山の中腹に建って、日本最古の厄除け寺として知られています。境内はとても広いですが、本坊の北庭は森先生がつくったのですね。山中…そうですね。本坊が昭和50（1975）年に修理されたときに森先生がこの庭をつくられました。ちょうど僕がお手伝いを始めた頃ですね。その後はずっと手入れをさせてもらっています。

ここは本坊の北庭であり広くない空間ですが、生垣の向こうに本堂の屋根が見えて、わりと奥行きのある感じがします。境内の中で、北向きになっているのは本坊だけです。本堂、大黒堂、七福神堂、行者堂、三重塔もみな東を向いています。本坊は住職の住まいで、座敷から本堂を拝

立てを、いつもカバンに入れておられました。

庭全体を表現することができるとすごいと思いました。奥行きや感覚など、バランスが難しいんですよ。森先生は特に習ったわけでもなさそうですが、やはりセンスと
うか、優れた感性でしたね。

●森先生は学者として、歴史的な庭園の発掘と復元整備も
されましたし、また作庭家として新しい庭もたくさんつ
くりましたが、そのやり方というか、姿勢は違いましたか。

山中…そうですね。史跡の整備と、個人宅の庭園のつくり
方はやっぱり違いますね。石一つにしたって、植栽一つに
したって、扱い方が違います。

古庭園の場合は石組がどうしても崩れたり、壊れたりし
ているので、それをどの位置に戻すのか、どのように修復
するのかということで森先生はよく苦悩されたと思いま
す。落ちていくことがわかっていても、その石がどこから
落ちたかを判断するのは難しいですからね。そこは長い経
験がないと判断しづらいです。だから、森先生の力ってす
ごいんだなと思いました。それでも、石の崩れ方によって

は、さわりがたいところもあったみたいですね。「もうこ
のまま置いとこうか」と言われたこともあります。やはり、
史跡や名勝庭園では、石が明らかに崩れていても、なか
かさわれませんね。一度さわってしまったと、もとの関係が
わからなくなってしまうでしょう？ だから、森先生はい
つも実測図をつくって、記録を残していました。そのへん
がやっぱり違いが違います。

しかし、先生は古庭園で見た石の据え方や間隔とかを作
庭にも活かしていましたね。石の向き、高さ、相互関係と
か。それは森先生に惹かれた理由の一つです。やはり、普
通の植木屋さんと違いますね。森先生は植栽に關しても細
かかったです。特に枝ぶりや木の向き、少し高くとか低く
とかですね。いつも離れたところから庭全体をよく観察し
ていました。一本の枝を切ることによって、空間がどう変
わるのか、またその後に木がどう伸びていくのかをいつも
考えておられました。

とにかく、陣屋跡は完成してからほとんど来ることがな
かったのです。こうして桜吹雪の中で久しぶりに見れてよ
かったです。

(了)



松尾寺本坊北庭（澤崎賢一撮影、2018年）

めます。

この庭はだいたい50平米ほどあるんですけども、日陰でも育つ木のほうがいいだろうということで、アセビの生垣で区切りました。でも、ここは厄除けで有名なお寺なので、垣根以外は、赤い花や実のなる植物を主に植えました。赤が魔よけの色なんですね。ツバキ、サルズベリ、サツキなどは赤い花が咲く。ナンテン、センリョウ、マンリョウ、ヤブコウジ、ウメモドキなどは赤い実がなる。それに、秋に紅葉するモミジ。そういう植物が主体になっています。数年前まで縁側の近くに山桜もありました。実生で生えてきましたが、大きくなりすぎて、建物によくないので伐採しました。モッコクだけは改修される前からあったんです。これは結構古い木で大事に手入れをしています。

●この庭のテーマは「厄除け」ということですね。飛石や景石の配置にも特別な意味がありますか。

山中…飛石や景石の配置などは、厄除け寺といっても特別な意味はありません。飛石はもとからあったものですが、改修のときに配置換えをしました。飛石自体がだぶ

りなので、歩きやすいように、と。景石はみな、森先生と一緒に新しく据えました。最初に一番大きい石を据えて、それからほかの石を組んでいきました。

あとで聞いたことですが、森先生は『鳥獣戯画』をイメージされていたようです。動きのある石組ということでしょう。うか。ほら、あの石は何か追っかけているような感じがしう？ 私もこの庭で石の据え方とか、いろいろと勉強させていただきました。石はどれだけ埋めるとか、どれぐらいの間隔を空けるとか、どの角度を見せるとかね。当時は先生の指示に従うだけでしたが、あとで気がつきました。ああ、こういう据え方をするんだな、と。

たとえば、この空間にでかい石を持ってくるとバランスが悪いですね。これぐらいがちょうどいいんです。こじんまりとした庭はそれなりに工夫が必要です。先生が据えられた石だから、こうした落ち着いた感じになるのですよね。

●新しい石はどこから持ってこられたのですか。

山中…新しく据えた石はみな、この山から探してきました。

森先生は石質とかにこだわっておられなかったのです。「ある石をうまく使え」と。どんな形の石でも、うまく扱って据えておられましたね。バランスよく。

先生は史跡や名勝庭園の測量や修復をしたりするなど、いろんなことを経験されてこられましたので、石の大きさや配置、据え方とかも十分に考えて庭をつくっていました。たとえば、ここにあまり大きな石を持ってきたても合わないでしょう。仮に持ってきたとしても、森先生はそれを深く埋めて、小さく見せます。大事なものは、石と石との関係です。立石は時々使っておられましたが、めったにないですね。ここでも、立石は一個あるけど、あまり高くないでしょう？ この場合は、厄除けのお寺なので、あまり派手な庭にはしたくなかったようです。

あいにく、森先生と一緒に石を据えたりするような、作庭の経験は少ないです。僕は測量や発掘調査のほうが多かったです。ただ、森先生は石が大好きだったことは確かです。たとえば、発掘の現場でいたい作業をするのは地元の方でしょうか？ 埋もれていた石が出てくるたびに「先生、先生！」と大きな声で呼ぶんです。そうしたら「どれ、

どれ」と言って先生は走ってこられます。皆さんはそれをおもしろがって走らせてましたね（笑）。

●柳生陣屋跡の場合は現況の実測図と作庭の設計図をつくられましたが、松尾寺本坊の場合も図面を描きましたか。山中…この場合は図面はなかったのです。森先生の頭の中に設計図があったと思うんですが、直接現場で指示されました。柳生陣屋跡「↓160頁を参照」と違って、松尾寺本坊の庭は面積的にもあまり大きくないので、現場にある材料を見ながらつくられました。この石はここだ、あの石はあそこだ、と言われてとりあえず配置しておきます。それぞれの位置に置いてから、森先生が縁側に腰をかけて、石の高さや角度を見ながら据え方を決められ、僕らはただただ、言われるままに動きました。この庭で何か特別な催しをすることはないので、本坊から鑑賞できるようにつくったと思います。

時々、森先生が腰を下ろしていたこの縁側に座って、庭を眺めたりします。一見して、なんでもない庭のようですが、落ち着いた感じがありますね。

●山中さんは40年間ほど、この庭を手入れされてきました。が、大きく変わったことはありませんか。

山中…全体的に木が大きくなりましたね。特に生垣のアセビが大きくなって、雰囲気が変わりました。当初はだいぶ低かったんですが、木も生きていますのでね。つくった当時のイメージを維持できれば一番いいんでしょうけれども、やはり、年代とともに変化していきます。変わらない庭はないと思いますし、ここは広い境内の一つの庭なので、庭木がちよっと高くなってもいいかなと思っています。

●この庭をつくる前に、森先生は外苑という庭も境内にありましたよね。

山中…はい、昭和35（1960）年に外苑という回遊式の庭をつくられましたが、それは僕が森先生を知る前のことです。急斜面につくられた庭ですが、一角に新しい塔頭（たっちゅう）が建つということで、その部分は潰されました。南の池庭や途中の滝石組などがまだかろうじて残っているだけです。見事な石組ですけど、現在はあまり見られるような状態ではありません。北のほうに「アルプスの枯山水」とい

う石組もありましたが、あいにく潰れてしまいました。今となってはイノシシに荒らされる竹藪です。最初に植えたサクラ、ツバキ、カシ、ヒノキなども自然のかたちに戻って、山林化しています。

●おもしろいですね。本坊の北庭の場合、森先生は『鳥獣戯画』や『作庭記』という古代の文献を参考にしながら庭をつくりました。一方で、外苑の場合はアルプスというまったく新しい景色をイメージしていたということですね。

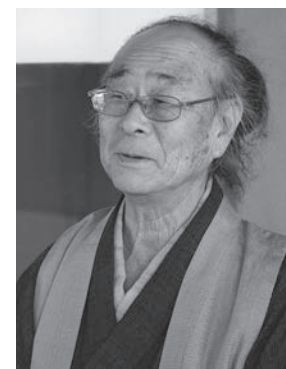
山中…本坊の古庭園では『鳥獣戯画』と、外苑の山林ではアルプスの豪快な石組。森先生の中には両方の思いがあったと思います。古代の庭園のイメージはやはり、多くの遺跡や歴史的な庭園の調査をされた経験上の技だったと思います。アルプスのイメージは国立公園の調査技官の頃（1938～1941年、33～35歳頃）にできたと聞いています。先生は、壮大な岩肌の景色をこの庭に取り入れたかったのではないかと思います。

（了）



場所：奈良県大和郡山市、矢田寺大門坊露地／日時：2017年10月4日

「形のない、あつても気がつかない、
水や空気に近い世界」



古川三盛(ふるかわ・みつもり)
1943年、福岡県に生まれる。鹿児島大学農学部卒業。作庭家。北九州市・菅原清風園、京都・徳村造園に勤務ののち、1970年に独立。主に森蘊の作庭に従事。主著に『庭の憂』(善本社、1997年)のほか、雑誌「庭」「銀華」「チルチンぴと」など連載多数。

●1970年、森先生と一緒にこの矢田寺大門坊露地をつくられてから、古川さんはずっと手入れをされていますよね。古川さんにとっては特別な場所ですか。

古川…私にとって、この場所はたいへん

れない小さい庭ですが、捉えどころはやはり同じです。見晴しだけは修学院に負けません。

●そもそも、森先生に惹かれた理由は何ですか。

古川…私は農学部出身といっても農芸化学ですから、お酒をつくったり、味噌をつくったりしていて、造園界はまったく知りませんでした。体もあまり強くないほうだったけ

思い出深いところです。小山(澤)が作庭にかかっていましたが、私は途中から入り込みました。今思えば、本当に迷惑だっただろうなと思います(笑)。その時点で大半の構成はできていて、あとは仕上げをするだけでした。今は大刈込になっていますけど、もともと、ここは自然の雑木林でした。背の高い木々に覆われて、何も見えなかったのですが、それをばつさり切ると、最高の見晴らしが現われました。ここは、ただ単に景色がいいというだけでなく、奈良盆地を目の前にして、長い歴史を偲ばせる場所です。ほら、若草山も東大寺の大仏殿まで見えますでしょう？当初は南までもう少し開けていましたが、向こうのヒノキとかが大きくなったので、眺望の範囲が少し狭くなりました。露地をつくるときに、ここにあった木々の高さを揃えただけで、新しく植えたものではありません。ここから見ると、大刈込は高さ1メートルぐらいしかないように見えるけど、じつはガクンと崖になっていますから、4、5メートル以上あります。2段のはしごをかけても届かないぐらい。ほとんどはシャシャンボですから、最上級の大刈込です。よとにかく、大刈込と開けた眺望。修学院離宮とは比べら



矢田寺大門坊の茶室「一如庵」に続く露地(マレス撮影、2013年)





自然石と切石の飛石が茶室「一如庵」を囲む（マレス撮影、2013年）

森先生は現場につきっきりというわけにはいかないの
で、ある程度こちらでつくってから見に来られていました。
ここはこうしたほうがいいとか、また何かを付け加えるよ

ど、縁があつて、卒業後に郷里の北九州の造園屋さんに入
りました。それから、鹿児島大学の西田正義先生をおし
て村岡正先生を紹介していただき、そして最終的には森先
生に辿り着いたわけです。でも、造園の勉強をしていなかっ
たものですから、森先生の名前すら知りませんでした。
しかし、森先生のもとで庭の仕事をしてわかりました。
森先生なしには考えられない世界でした。単に研究だけで
はなく、そのセンスといえますか、それまでにない基本的
なものをもっておられましたね。森先生と出会って、私の
頭の中にあつた否定的な庭のイメージはガラッと変わしま
した。石の形がどうこうではなくて、庭は地形だというわ
けですよ。そこが一番驚いたところです。地形がきたら
庭はできたようなのだとおっしゃっていました。それに、
石組も軽く、連続性があり、最初に見たのは多賀大社の式
場の庭でしたが、その時モーツアルトのピアノソナタが脳
裏を横切りました。その後唐招提寺の庭を見て、この世界
に身を沈めることができると思つたものでした。

●森先生は学者として地形の測量にこだわっていたし、庭



茶室の脇に配置された手水鉢と石灯籠（マ
レス撮影、2013年）

をつくる時も、現況実測図をつくってから設計図を描
いていたようですね。しかし、この矢田寺大門坊露地の
場合は図面をつくらずに、現場で直接作庭にとりかかっ
たということが『庭ひとすじ』（森 1973）に書いて
あります。

古川…森先生の庭の場合、図面はほとんどないも同じです
よ。ある程度の雰囲気を図面で示しても、あとは、やつぱ
り現場に合った庭づくりが一番大きなテーマですからね。
歴史的な庭園の修理や復元とは違って、作庭の場合はある
ように、できるようにというのが森先生の趣旨でした。図
面を描いていても縛られていませんでした。

うな指導をされていました。図面とまったく違う場合もあ
りました。それが、それほど叱られたりはしませんでした。基本
的には石を深く埋めて、大きく見せることはなかったです
ね。大きすぎると思ったら、その近くに木を植えて小さく
見せるようにしていました。石が10個あったら、10個で庭
をつくるし、5個しかなかったら5個でつくりました。

石だけではなく、森先生は灯籠に関してもこだわりがあ
りました。目立つものを取り入れてしまうと、その庭を象
徴してしまうでしょう？ たとえば、立派な家を建てたの
に、床の間に安っぽい掛け軸をかけるようなものです。そ
うすると、家全体が掛け軸の値打ちで見られてしまいます
よね。主人の心まで見られてしまいます。いい掛け軸がな
いなら、掛け軸をかけないほうがいい。花一輪を生けるぐ
らいでいいんですよ。灯籠も同じです。

あの頃、古い雑誌で森先生が灯籠について書いた文章を
たまたま見つけましたけど、図面に細かい寸法まで描いて
ありましたから、この露地に下手な灯籠を入れたらめっちゃ
怒られるだろうと思いました。しかし、ご住職は灯籠がほ
しいと言われるし、蹲踞をつくるなら灯籠は絶対に必要で



作庭家
古川三盛(2)——延命寺

場所：大阪府河内長野市、延命寺／日時：2017年10月20日

「音楽を感じさせる庭」

●森先生が延命寺境内でつくった庭は3つあります。本堂北の枯山水と、本堂西の池庭と、玄関前の平庭です。延命寺にその図面が残っているのが、最初に描かれたものと、現在残っているものを比較することができておもしろいですね。

古川…図面に近いけど、図面どおりではない。その違いがおもしろいですね。森先生も、図面にこだわらなくていいとよくおっしゃっていました。図面は第三者に渡すときに必要でしょうけれども、あくまで雰囲気伝えるためのものです。実際に、図面どおりにしたからっていいものができるとはかぎらないのです。図面どおりにできるところは2、3割だと思えます。図面どおりにいかないほうがい

したので、こっそり京都の白川で探してきて、恐る恐る据えたら、この灯籠なら私も欲しいと花丸をもらえました。とても嬉しかったですね。

●この庭をつくられてからほぼ50年経ちましたが、大きく変わったことはありませんか。逆に、変わっていないことは何でしょうか。

古川…森先生は庭園遺構を研究されていたから、庭というものはどういうかたちで残るかというのはさすがによく知っておられました。樹木なんていうのはその時その時に移り変わるものだからほとんど問題外でした。最終的に残るものは地形と石組しかない。それも、時間が経てば残るかどうかわからないのです。たとえば、この地形は一気に下がっていて、土が流れやすいので、あとから土留めをつくりました。茶室に座っているとちろん見えないんですけども。

●森先生は学者として高く評価されているけれども、作庭の活動をしていたということはほとんど知られていませ

んね。作庭家として評価されるときはくるのでしょうか。

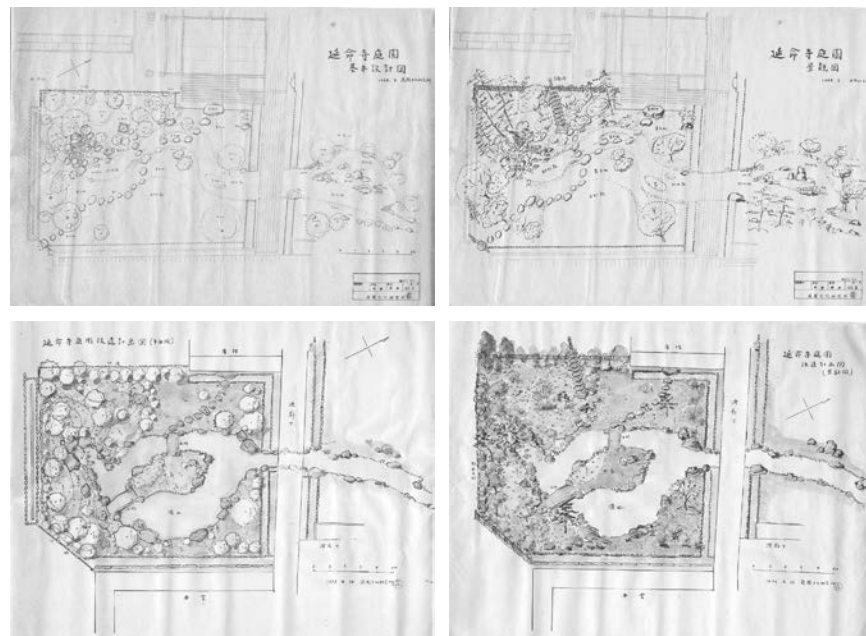
古川…学者として、森先生は怖い存在ですね。でも、森先生の庭はなかなか理解されないでしょう。特に今の時代は何か衝撃的なもの、劇的なもの、インスタ映えするものをもつてないと理解されないですね。森先生の庭はわかりにくいんですが、鯉節や昆布の出汁みたいな、本当にいい味がするんですよ。うま味の庭というか、つくった庭ではなくて、存在している庭ですね。

森先生の庭は美術品として片づけることのできない、在る庭です。美術品は嫌になったら、片づければいいでしょう？ ピカソの絵だって、ずっと飾っていると飽きると思いますよ。庭はやっぱりそういう世界とは違う。形のない、あっても気がつかない、水や空気に近い世界です。究極は何もなかったっていいわけですよ。空間さえあればいいのです。

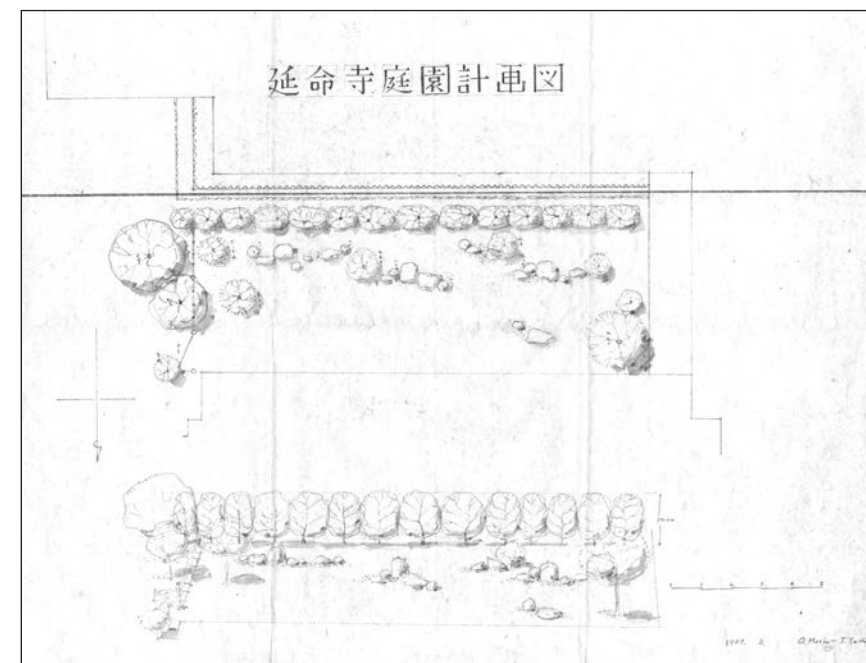
(了)

引用文献

森 蘊 (1973) 『庭ひとすじ』 学生社



上：森蘊による延命寺本堂西庭図面（上：1968年9月、下：1973年4月、延命寺蔵）
下：延命寺本堂西庭（マレス撮影、2013年）



上：森蘊による延命寺本堂北庭図面（1967年2月、延命寺蔵）
下：延命寺本堂北庭（マレス撮影、2013年）

い場合だつてあるわけです。現場は違いますからね。もちろん、地形に合ったことをすれば、という話ですが。

●本堂西の池庭は現在枯池になっています。上田住職によると、水源が枯れたということで古川さんが枯池にアレンジしたそうですね。また近年にできた新しい建物に合わせて古川さんが改造されたとおっしゃっていました
「↓204頁を参照」。

古川…ここは枯池になってよかったと思います。石組がよく見えるようになって、落ち着きました。奥の滝石組なんか、森先生は桂離宮の鼓の滝を意識してつくっていると思います。森先生は古い良い庭が頭の中にあるから、地形を見たら、それに合うものがすぐ浮かんだと思います。過去にとらわれることはなかったけど、ヒントにはされています。結局、いろんな試みをしたのでしうけれど、やっぱり『作庭記』に返らざるを得ないというか、『作庭記』から逃げられなかったと思います。

森先生は石組をつくるときはいつも明るかったです。一つの石だけを見せようと思うとたいへんですけど、石を組

むというのは、まさに『作庭記』にあるように「その石の乞わんに従いて」作業します。一つの石を据えたら、その石が何を欲しがっているかというのを察して次の石を据えてやる。まさに石と遊んでいるようで、そういうのが森先生としては楽しかっただろうなと思います。森先生の庭は『作庭記』の世界であり、また『鳥獣戯画』の世界でもあります。やっぱりリズムがあるし、メロディーがあります。あんなに音楽を感じさせる庭は少ないですね。森先生は音楽の話をよくしていたわけではないのですが、私に言わせれば、森先生の庭はリズムカルで天から降ってくるモーツァルトの音楽だと思うんですけど。

●延命寺は昔からモミジの名所ですが、森先生の図面にモミジがたくさん描かれていますし、実際に今もよく茂っていますね。

古川…ここは意外と木の成長がいいので、思いきって切れるんですよ。思いきって切っても、次の年になるとさらに増える。やっぱりすごい土地柄だなと思います。その中でも、モミジが特によく育ちますね。山間部の湿気のぐあい

ると、庭が自然にできてくるわけです。

●手入れをされるとき、古川さんは植物と石とのバランスをどういうふうに保っていますか。

古川…植物が大きくなりすぎたら、ある程度切りますが、いつも自然の形に戻れるように手を入れます。たとえば、本堂の北側にサンゴジュの生垣がありますが、傷んでいたので一度根元に近いところで切りました。今は、新たに出土た芽でまとめている段階です。あと少しでちょうどいい高さになりそうです。でも、その間にモミジがかなり大きくなりましたね。

当初は植物が小さかったので、その手前にある七五三の石組はよく見えていました。石は苔にも覆われていますが、取ってもあまり意味がないですね。要するに、見えても見えなくてもいいわけです。龍安寺のような思い込ませる庭ではないですから。作品ではないのです。

●それでは、森先生の庭の意味というのは何ですか。

古川…わかっていなければするほどわからないと思います

か、土壌かわかりませんが、モミジにはすごく適してるんじゃないですね。森先生は土地柄をよく理解したうえでのことだと思います。

●庭をつくるとき、森先生は地形と環境を重視していたというのでしょうか。

古川…とにかく、一番大事なのは地形だといつもおっしゃっていました。私は九州から出てきたときに庭が地形だなんて言われてもびんとこなかったですよ。庭はやっぱり石組だと思っていました。しかし、一緒に作業してみると、なるほど、庭っていうのは地形なんだな、地形さえきつちりすれば石は二の次なんだということがよくわかりました。だから、地形に合った石組をすることが大事ですし、その石も地形なのです。

最近、田中泰阿弥(1898-1978)という作庭家の特集を読みなおしましたが、庭は「排水」だっているわけですよ。なるほどな、この2つの言葉の選択には学者と庭名人との違いがよく出てるなと思いました。まあ、言葉や立場はともかく、どうやって水を処理していくかと考え



延命寺庫裏前庭（マレス撮影、2013年）

（笑）。つくるときに何かを伝えたかっただろうけれども、ことさら庭をとおして伝えなければならぬものというのには特になくすからね。あったとしてもそれは自己満足だから、森先生はあまり崇められるのも好きではなかったのです。

●昭和の造園界を振り返ったとき、森先生はどう位置づけられると思いますか。

古川…そうですね、ちょうどいいあんばいに相対するところに、重森三玲という人物がいます。重森さんがいたから、森先生もおられたと思います。方向が違うというか、私はよく映画監督の黒澤明と小津安二郎に例えます。インパクトが強い黒澤明の作品はどこか重森三玲の庭と似ていますね。でも、インパクトが映画の世界のすべてではないでしょう。森先生は地形というか、地平線を意識する。小津安二郎の映画で描かれている日常生活みたいなものです。三玲さんは、どうしても石を立てて、上に上に向かい見せよう見せようとするのですが、森先生は小津安二郎みたいにカメラを低く据えて、気づけるものがあれば気づいたら

よいといったようなところがあります。私は見たことがあるのですが、何かの映画専門誌、たしか英国だったと思います。これまでの映画のランキングが載っていて、小津の『東京物語』が一位でした。たしか『タクシードライバー』や『2001年宇宙の旅』などが連なっていたように思います。黒沢の映画は載っていませんでした。

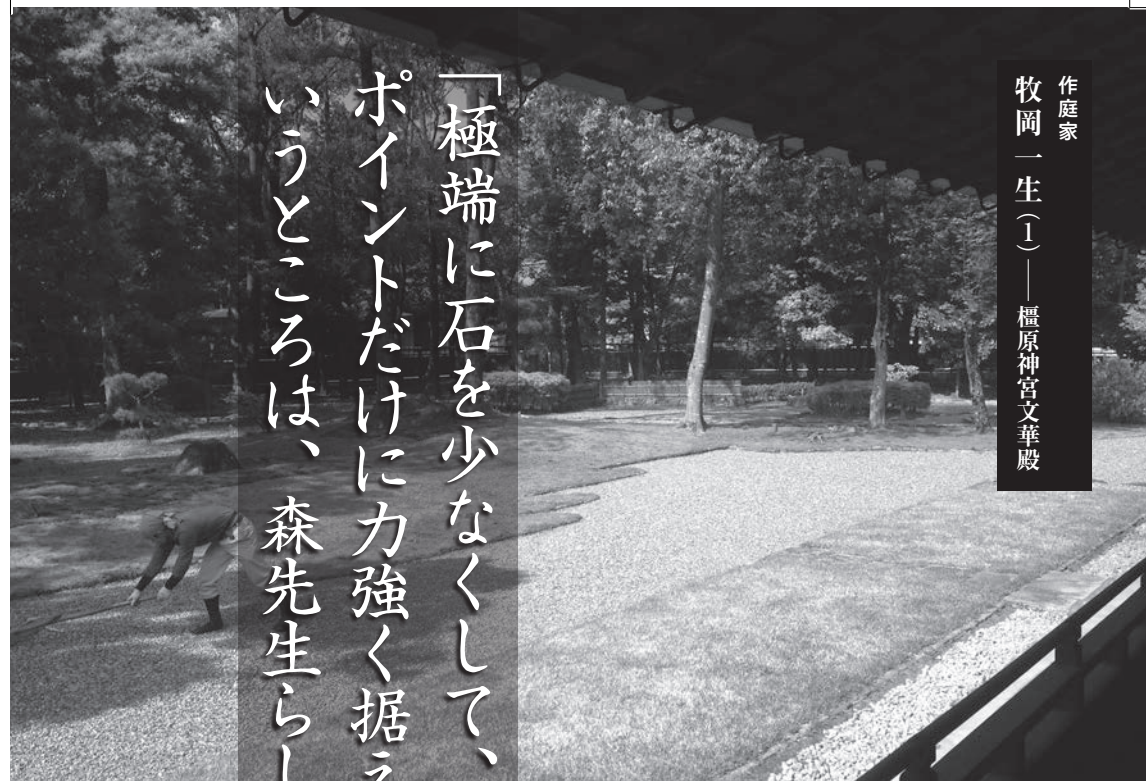
あえて言うなら、重森三玲と森蘊、この二人で造園の世界が成り立っていると思います。もちろんほかにはないわけではないのですが、作家でいうならば、太宰治と志賀直哉。写真家では、土門拳と入江泰吉。方向は違っていますが、それぞれが自分なりの空間をつくっています。そしてこの二者は、ほどよい周期で交互に現われ必要とされていると思います。

●今、重森三玲の庭は有名になって、国指定の名勝になっているところもありますが、森先生が設計した庭は公開されているところも少なく、ほとんど知られていません。今後はどう継承していけばよいのでしょうか。

古川…森先生の庭はフォローによって決まる、と言えると

ころがあると思います。七・五・三のような感性だけでできる枯山水の庭だと、それほどフォローは難しいのですが、水を扱う池や流れとなるとフォローする者の感性が重要になってくる。物理的に水は漏らしてはいけなし、見た目も自然でなくてはいけません。水景につきものの州浜など、傾斜がおかしいと小石の石積になり、とうてい州浜とは思えなくなります。そして、最も重要で、最後まで続くフォローは樹木の手入れにあると思います。名園と称される京都をはじめ各地の庭も、ほとんどが手入れが安易で、本来の庭の姿とは思えない。その点、三玲さんの庭は樹木が少なく、形として扱っている、その形の継承も楽に思いますが、森先生の庭はそういうわけにはいきません。あくまで自然でなくてはいけなし、かといって自然に任せるわけにもいきません。それだけに、その庭の良さがわかった者でなければ、庭の手入れは難しい。慣習的に安易にやっ

（了）



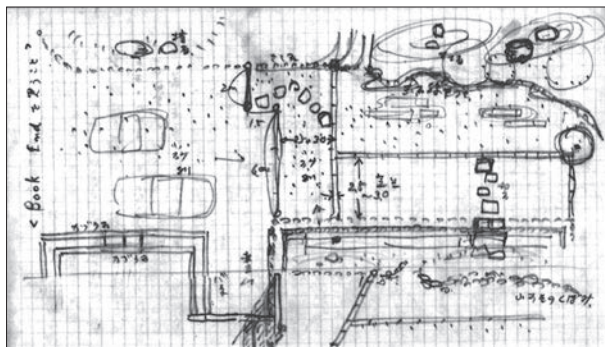
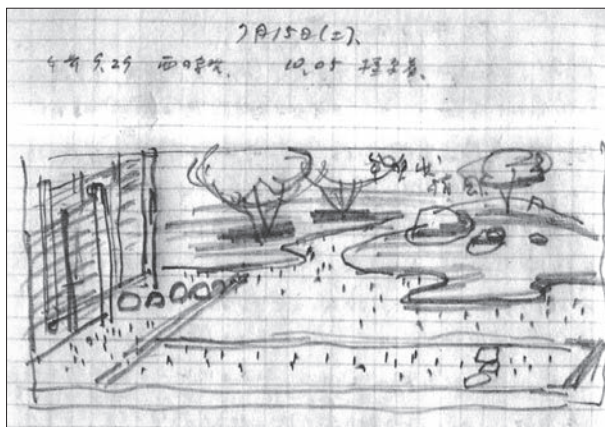
場所：奈良県橿原市、榎原神宮文華殿／日時：2017年10月26日

「極端に石を少なくして、あるポイントだけに力強く据えるところは、森先生らしい」

化財に指定されたこの建物の周囲に新しい庭をつくりましたが、しばらくは荒廃していたので、2016年に牧岡さんが復元整備をされました。その時はどんな資料を参考にされましたか。

牧岡：じつは、復元整備工事を始める前、森先生の旧宅を整理していたときに段ボール箱に入っていたたくさんの手帳の中から、1967年3月10日から7月20日までの作庭記が見つかりました。その中に榎原神宮の文華殿庭園のスケッチがありましたので、それをもとに復元しました。それがなければ、とてもできなかったことですね。

しかし、50年の間でいろんな方がこの庭に手を加えたので、どういうふうにも復元すればいいかというのが一番の悩みでしたね。庭はその時その時に変わってきたものですし、改修した方々の思いも入っているでしょう。突然、森先生のスケッチが出てきたからといって、これまでの変遷を全部消してしまうというわけにもいきませんしね。そのへんが特に難しかったです。でも、幸い、いわゆる骨格というか、アウトラインは変わっていなかったたので、宮司さんに相談しながら進めていったんです。



森蘊による榎原神宮文華殿庭園のスケッチ（『榎原神宮文華殿庭園 復元整備の概要』より）



牧岡 一生（まきおか かずお）

1945年、福井県に生まれる。造園家、庭師。1970年に近畿大学を卒業し、1975年より12年間、作業部隊の一人として森蘊に師事。1980年に森蘊と小山潔とともにドイツに渡り、フランクフルトのバルメンガルテンの日本庭園展に参加して以来、ドイツ、イタリア、フィンランドなどヨーロッパと日本で庭づくりを行なう。庭舎MAKIOKA代表。国指定名勝の依水園や法華寺庭園の維持管理など、奈良を中心に活躍している。

●1967年に旧柳本藩の表向御殿が榎原神宮の境内に移築され、文華殿に改名されました。1973年に、森先生は重要文



現在の榎原神宮文華殿



牧岡…森先生のスケッチには庭全体が描かれていないので、この園路は最初からあったかどうかわかりません。でも、飛石が園路まで繋がっていますので、園路はあったのではないかと、私は思いますね。森先生は回遊しながら見る庭をよくつくられましたね。

中央には大きな景石が据えてありますね。もともとはその周りに笹が生えていましたが、石を隠してしまうので、杉苔にしました。このあたりで生えてい

測量をしたうえで、森先生のスケッチを参考にしながら修復の計画を立てましたが、工事を始めた2か月後ぐらいに、神宮さんのほうに残っていた絵はがき写真が見つかったんです。ちょうど庭のほうから建物を見るような写真でした。そこには中央の石組、建物付近の飛石、そして縁石の雲形模様が綺麗に写っていました。その写真が森先生のスケッチとびつたりあっていたので、本当に安心しましたね。森先生のスケッチが最終的な図面だったかどうかはわからなかったですからね。でも、絵はがき写真が出てきたものですから、スケッチどおりに進めても大丈夫ということがわかりました。

まずは木の剪定をしました。ここはカシやシイの木が多に多いですね。ちよつと奥まったらスギなどもあります。森先生はおそらく、これらの木を間引きながら庭をつくったのでしょうね。しかし、どれも大きくなりすぎて、枝も混み合っていましたので、本当に暗かったです。暗いですから、苔もよく育たないですね。まずは、大きく枝を透かして、光が入るようにしました。また、高所作業車を使って、高さも少し下げました。全体の作業でいうと、木の剪

る地苔を持つてきてもよかったですけど、草の根や種も混じってしまうので、新しい苔を使ったほうがいいかなと思いました。それも宮司さんに相談しましたね。とにかく、全体的に石を極端に少なくして、あるポイントだけに力強く据えるというところは、森先生らしいなと感じました。もちろん、景石自体はまったくさわっていません。

●カシやシイの木の下は全面苔になっていますが、建物の南面だけは芝生ですね。

牧岡…そうですね。森先生は苔と芝生をよく使い分けておられましたね。その間の砂利道は神武天皇さんが東征された道筋を表現しているのではないのでしょうか。

苔と芝生の使い方にしても、直線的な飛石の配置も桂離宮の意匠を連想させるところが多いですね。ただ、桂の飛石は中心軸に沿って並んでいるんですけど、この場合、森先生は側面に沿って揃えました。とはいえ、あまりにも揃えて並べるのも何となく気持ち悪いし、歩きにくいので、途中の2つの石だけがちよつとはみ出ています。

手前の雲形模様も森先生のデザインです。私に関わった

定は3分の1ぐらいでしょうか。おかげで苔が本当に綺麗になりました。夏の暑さも引いたので、今は特に綺麗ですね。

●この庭園は建物に座って観賞することもできれば、園路を歩きながら観賞することもできますね。



竣工当時の絵はがき写真 [牧岡 2016 11頁]



作庭家

牧岡 一生(2)——森蘊庭園研究室(旧宅)

場所：奈良市、森蘊庭園研究室(旧宅) / 日時：2017年10月26日

「万人の拍手はいらない、 理解する少数の拍手でいいんだ」

●ここは森先生の旧宅で、現在は牧岡さんが管理されていますね。本当に綺麗に残っていますが、旧宅とその庭の話をする前に、牧岡さんが森先生と一緒にドイツに行かれたことについてお聞きしたいです。『日本庭園史話』『森1981』という本の中でその時の話が簡単に紹介されていますが、もう少し詳しく聞かせていただけますか。

牧岡…森先生と出会ったのは1975年です。私は30歳でしたが、先生は70歳ですから、一緒に仕事できる機会が少なかったのですね。地割をつくるとき、石を組むとき、植栽を植えるとき……。森先生はその時その時にしか来られない。ポイントだけおさえて、あとはいつもどおりにやってください、と言って私たちに任せていただきました。

と思いますね。

●牧岡さんがこの庭を復元されてから、2年以上経ちましたが、維持管理はいかがでしょうか。

牧岡…一番手間がかかるのは草引きですね。光を入れると苔もよくなるけど、草もどんどん生えてきますね。秋から春にかけては大丈夫ですが、春から夏の終わりまでがたいへんです。自然に見えても、じつは非常に手間がかかっています。芝生のほうは野芝を使っていますのであまり伸びないですね。

これまで、森先生の庭を管理しながら少しずつもの姿に戻すことはありましたが、全面的に復元整備をやるのは初めてでした。とにかく、写真が出てきたときにドキドキしました。スケッチどおりで本当によかったです。(了)

引用文献

牧岡 一生(監)(2016)『橿原神宮文華殿庭園 復元整備の概要』森蘊庭園研究室

●森先生は古代の庭園を復元整備されていましたが、まさか自分がつくった庭が復元されるとは思っていなかったでしょうね。きっと喜んでおられるでしょう。復元で大きく変わったところはありますか。

牧岡…後から追加された景石や飛石を抜いたり、またバラバラになっていた飛石を並べなおしましたが、南側はおおよその骨格がよく残っていました。ただ、先生の図面には東側の流れが書かれていません。写真でも確認できませんでしたので、後から付け加えた可能性が高いですね。今回は河原に見えるように張り付けなおしました。西門に向かう延段もスケッチにはなかったのですが、薬師寺の八幡院前の石の使い方とよく似ていますので、森先生が指導した

ただ、1980年に先生と小山（潔）さんと一緒にドイツに行ったことがあります。二人分の予算しかなかったので、私は実費で手伝いに行ったのですが、結果的に、1か月間も先生と一緒に行動し、仕事もできました。フランクフルトのバルメンガルテンという植物園で日本庭園展をすることになっていて、奈良時代から明治までの日本庭園を紹介しました。小さな屋内展示場の中で、時代ごとの庭をコの字型に並べました。庭を立体的に見せるために、後ろの壁には大きなパネル写真を貼って、その手前に流れの護岸なり、石組なりをつくりました。森先生はその設計をずいぶん苦勞されたと思います。場所もそうですが、材料も違いますしね。それでも、とてもいい反響だったんです。

その時、ドイツの担当者はイルムトゥラウト・シャルシュミット・リクターさんでした。当時、一年の半分を日本、もう半分をドイツで過ごされていた方です。私はその時に初めて会いましたが、先生は前からのつき合いだったそうです。数年前に日本庭園の研究がしたいというので、先生のところに來たらしい。その後、イルムトゥラウトさんに誘われて、ドイツ、スイス、イタリアなどで実践セミナー

で、あとはほとんどさわっていません。日々の手入れで植物を透かしたり、また大きくなりすぎたら、少し縮めるぐらいですね。今は道ができて、家も立ち並んでいるんですけど、昔は東側に田んぼが広がっていたので、ちょうど縁側から薬師寺の東塔が見えていました。家から東塔が見えるんだと、森先生がいつも自慢していたんですね（笑）。そういうこともあったから、ここにはわざわざ何かをつくる必要はなかったのでしょうね。

もともと、お家の南側に手すりの縁側がありました。森先生は桂離宮が大好きでしたから、月見台をイメージしていたのではないかと思いますね。その後に濡れ縁ができたようですが、私がこの家の管理を引き受けたときは床がだいぶ傷んでいたんで、ここ全体を一つの板の間に改造しました。その結果、庭が大きく見えるようになりました。

とにかく、いつも部屋から見ていて飽きてこないというか、自然が景色をつくってくれるみたいな感じですね。雨が降ったときの景色、雪が降ったときの景色、風が木の葉っぱを揺さぶるときの景色……。森先生は自然がいろいろと演出してくれるような庭を期待していたんじゃないかと思

をすることになりました。だいたい2日間で、初日の午前中だけ歴史的なことを簡単にやって、それからは実習。セミナーはいつも園芸学校で行なわれていたので道具類はありました。その延長でヨーロッパでも庭をつくることになりました。日本では、奈良商業高校の中庭や転害門の近くの菊池邸など、森先生の作庭を手伝っていました。

●森蘊の旧宅は息子の森史夫^{ちかお}先生が設計し、庭園は森先生が自らつくりました。いわゆる親子合作になるわけですが、これが森先生の理想的な住まいと言ってもいいでしょうが。

牧岡…そうですね、森先生はつくり上げたものがあまり好みではなかったのですね。たとえば、この庭の主役は中央に見えるエンジュの木です。いわゆるシンボルツリーですね。ここは芝生と花壇だけで、灯籠とか特に目立つものはないでしょう。エンジュの下にある石は、先生が亡くなられたときに据えた歌碑です。苔が生えてきたのであまり見えませんが、「蘊々^{うん}開花^{かい} 槐^{えんじゅ}の下」と刻んであります。

最近、エンジュの木の後ろに駐車スペースをつくっただ



森蘊庭園研究室（旧宅）の庭（マレス撮影、2018年）

いますね。ただ、何も知らないで見に来た人にこの庭の感想を聞いてみたら、「何もなかった」と答えると思います（笑）。簡単そうに見えても、じつはなかなか難しいんですよ。

●森先生は歴史家としてはよく知られていますが、じつは
たくさん庭もつくりました。森先生の庭づくりの特徴
は何ですか。

牧岡…先生はまず地形を重視していました。それから石組、そして植栽。庭をつくるときに、まずはスケッチを見せていただいて、それから先輩と一緒に全体の地割をつくりました。そこで先生に来ていただいて、OKが出たら地形をつくります。地形が終わったら、今度は石組、それから植栽ですね。森先生はポイントだけ押さえて、あとは私たちが仕上げていました。

久留米市に仕事に行ったとき、先生はミーティングで皆に言ったんです。石は地中に埋まっていたものが風雨にさらされて、頭を出してきた、というふうになればいい、と。森先生は野筋（のすじ）というか、山の麓のどかな風景が好きだったようです。だから、ドーンと石を立てるのは好まなかった

か教えていただけませんでしたので、当時は物足りないようなところもありましたが、考えさせられましたね。飛石は目の見えない人でも歩けるように打ちなさい、とかね。とにかく、先生のお話はどれも新鮮でした。私がそれまでに経験した植木屋さんの庭づくりとは全然違っていましたからね。だって、大きな石や大きな木を持ち込んだほうがいいお金になりますよ（笑）。そういう意味で、森先生も村岡正先生も金銭感覚がほとんどなかったといえます（笑）。トラック一台分の土はいくらなのか、それもわかっていなかったから。庭仕事で生活しようと思うと、そういうことも知らないといけないのですけどね。

●森先生の庭はほとんど知られていませんが、いつか評価
されるときがくると思われませんか。

牧岡…先生は研究者の肩書きのほうがすごいでしょう。それに、「万人の拍手はいらない、理解する少数の拍手でいいんだ」とよく言われていましたが、まさにそのようになりましたね。研究者としてスタートしたので、作家として認めてもらおうとも思っていなかったのではないのでしょうか。

たんですね。『作庭記』の中で「石を立てる」という表現があるけど、基本的には立てるのではなく、横に据えるんだと念押しに書いてありますよね〔森 1986 48頁〕。だから、先生もよほどのことではないと立石は使いませんね。

植物に関しては、飛んできた種が自然に芽生えてきたように植えない、とおっしゃっていました。だから、先生はいつも2、3メートルの小さな木を植えて、庭は7、8年後に完成する、と。そんなことをミーティングでおっしゃっていましたね。木の剪定も、マツはマツらしく、カシはカシらしく、モミジはモミジらしく、と。お手本は山の木でした。ほら、森先生の庭に刈り込みはほとんどないでしょう？

平安時代の庭園では大きくなった木は元から切って、植え替えていたらしいですね。剪定なんかはしていませんでした。だから、先生もできたての庭に小松をたくさん植えていました。しかし、そのままになると松林になってしまいますから、ある程度大きくなったら抜いたほうがいいですね。もちろん、松林が必要な場所もありますが、そうでないところでは移植したり、切ったりします。いつも部分的にし

2018年12月14日で森先生が亡くなられて30年になります。先生が書き残した本がたくさんありますので、皆さんがそのメッセージを理解して、引き継いでいくかもしれません。職人に伝わるかどうかはわかりませんね。だから、先生の息のかかった人たちが、やっぱりそれをいっから思い出しながら口伝していくしかないかなと思うんですよ。管理する人も施主も、森先生の作庭意図をちゃんと飲み込んでいないと、あとから木を植え込んだり、灯籠や石を加えたりするんですよ。物足りないと思われるかもしれません。そこに森先生の庭の良さがあると思います。無駄がないというか。極論で言うと、森先生の庭は空間芸術というか、空間アートというか、そういうものに近いですね。

（了）

引用文献

森 纈（1981）『日本庭園史話』日本放送出版協会
森 纈（1986）『作庭記』の世界——平安朝の庭園美——NHK
出版



場所：奈良市、東大寺龍藏院／日時：2013年5月17日

「春日野の自然がそのまま 庭につながっているよう」

とになったんです。この座敷は、近畿財務局の管理下にあった元興福寺一乗院の建物を払い下げてもらって、昭和29（1954）年に移築したものです。しかし、庭はしばらく放置していました。

私の父がこの住職だったのですが、森蘊先生と同年でして、たいへん仲が良かったのです。その頃、奈良文化財研究所の庁舎はまだ春日野にあったのですが、いつの頃からか研究所と東大寺の野球チームができて、野球の親善試合をするようになりました（笑）。私の父は下手だったんですが、野球が好きで、また森先生も野球が大好きだったんですね。そうしているうちにすっかり仲良くなりました。

森先生は龍藏院の庭をなんとかしようかと言われたんですが、お金がないと父が説明しました。それなら、お金をかけずに考えてみようと言った森先生が言ってくださって、この庭を設計していただきました。

庭をつくる前に、先生ご夫妻が私と両親を修学院離宮だとか、円通寺だとか、あちこちに案内してくださいました。桂離宮は別のときに調査に同行させてもらったかと思いま



橋本聖圓（はしもと・しょうえん）

1935年、奈良市に生まれる。華嚴宗の僧侶。元龍藏院住職。龍藏院庭園の作庭の際に森蘊に出会い、一緒に庭づくりや調査などをした経験もある。著書に『東大寺と華嚴の世界』（春秋社、2003年）などがある。

●森先生が龍藏院のお庭をつくったきっかけを教えてください。

橋本…龍藏院は明治時代、100年ほど前に取り壊された子院の一つなんです。終戦後には一棟のみすばらしい建物が一つあったきりで、あとは竹藪でしたが、東大寺から予算をもらって、再建するこ

すが、それらの伝統的な庭の真似をするのではなく、その良さを取り入れようと説明してくださいました。

父も私もあまりつくり物めいたものは好きではなかった。植物を丸くしたり、四角に刈り込んだりすることはあまり好まないのですが、それはちょうど森先生の好みと合致していましたので、話が早かったです。

●庭の工事はどのように行なわれましたか。

橋本…当時、私は大阪の市立大学の文学部にいて、哲学をやろうと思っていました。その時はカントやヘーゲルなどを読んでいました。しかし、論理学よりも美と芸術の問題に興味がありました。ちょうど卒業論文を書いていた頃のことですが、森先生と庭師さんは石一つを据えるにも喧嘩をしていました。庭師さんは石をなるべく大きくそびえるように、目立つように据えたいとおっしゃっていましたが、森先生は春日山の奥山にあるように、大きな石の頭だけがちょっと地面から出てくるようにしたい、とおっしゃっていました。しかし、庭師さんはそれではもったいない、石が死んでしまうという意見でしたので、話し合いがつかな

いのです。そうしたら、森先生が「おい、美学者来てくれ」と呼んでくださって、私は先生と一緒に庭師を説得しました。

庭師さんと森先生の意見は合わなかったのですが、私の父と森先生のそういう感覚はぴったり合ったので、父はたいへん喜びました。庭師さんは頑固だったのですが、とてもいい人だったんですよ。やっぱり、庭師さんは習ったとおりにしたいですもんね。もともと師匠さんから教わったテクニクというか、理念みたいなものをきっちり身につけてこられただけに、森先生のおっしゃることが理解しにくかったんでしょうね。それに森先生と組んで一緒に仕事されるのは初めてだったようです。

●橋本住職は作庭中にたくさんの写真撮られたようですが、特別な目的はありましたか。記録を残すためでしたか。

橋本…私は高校生の時から写真が好きになって、寺の行事や公園の鹿などを写していたのですが、森先生が庭をつくってくださったのは、4年半貯金をしてニコンS2とい

うカメラを手に入れたばかりの頃で、格好の被写体が目の前にあるものですから、撮らずにはいられなかったのです。学術資料になるなどと思ったわけではなく、ただ手当たり次第にシャッターを押していただけのことです。我が家の記録になるというくらいの意識はあったかもしれませんが。

●ところでどこに礎石が見えますが、庭石はどこから来ましたか。

橋本…石はほとんど元興寺からいただきました。森先生は門の脇に積み上げた石を利用して、修学院離宮にある流れの雰囲気を実現してくださいました。まず滝のあたりの工事から始まったんですが、そのためによい石を選んで使ってもらったんです。しかし、池のあたりになると良い石がなくなりました！特に池の立石なんかは、私は気に入らなかったのです。天龍寺の池にあるような石があったら良いのにと森先生に言ったら「君、あんな石は百年探しても見つからないよ！」と笑われてしまいました(笑)。

お金がなかったものですから、庭屋さんから買った石は

十個もなかったと思います。今、塀の南側に駐車場があるんですが、かつては町の人たちの家庭菜園になっていたのを、昭和40年前後に東大寺に返してくださいだったので、当時寺内にあった東大寺学園の第二運動場にすることになりました、真ん中に転がっていた大きな不恰な石を取り除く

うとしたところ、裏側に造り出しがあることがわかったのです。宝蔵院の門前など、近くに食堂の礎石がいくつかありますので、それも食堂の礎石だろうということになったのですが、寺務所では龍蔵院に移すことを許してくれたので、塀越しの足場をつくって庭に入れ、森先生の指図どおり、土手に据えました。やはり大部分を埋めて、造り出しのあるところが少しだけ現われるようにしてあるのが、いかにも森先生らしい作風を表わしていると思います。それから木は大半が東大寺の境内にあったものをもらって移植したんです。もともと竹藪だったと言いましたが、塀沿いにあるヒノキやカシの木などはその当時からあったものです。

ところが、東大寺で庭をつくっているらしいという噂が町で拡がりますと、石灯籠や五葉松などを持ってきてくだ

さる方もありました。ありがたい話なので断れないのですが、ここで石灯籠を立てても合わないですから、結局裏庭に立てたりしたんです。くださった方にちょっと悪いんですが、もらったものを全部並べると俗っぽくなってしまくと森先生がおっしゃっていました。

●作庭当初、眺望はありましたか。

橋本…今は見えないのですが、東側の宝蔵院に茅葺き屋根の茶室が建っています。森先生はそういうものを取り入れるように心がけていらっしゃいました。見え隠れするぐらいがちょうどいい。春日野の自然がそのまま庭につながっているようにしたいとおっしゃっていました。庭という閉鎖的な空間だけで成り立つようなものではなく、周りのもの、奈良の自然の山につながるようにしたいというお考えだったのですね。

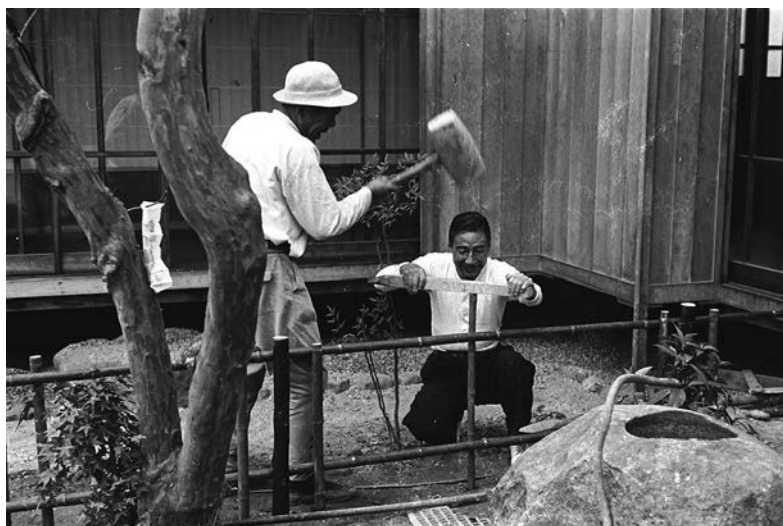
●庭がつくられてから、後に大きく変わったところはありませんか。

橋本…最初、新しくつくった土塀が目立っていましたので、



東大寺龍蔵院庭園の作庭風景（橋本住職撮影、1957年頃）





東大寺龍蔵院庭園で作業する森蘊（右）（橋本住職撮影、1957年頃）

森先生はそれを隠すのに植物の植え方をだいぶ苦労されたんです。今は木が茂ってきたから、目立たなくなってきました。座敷と池の間の平らなところは、苔を植えたいところですが、陽がよく当たりますので、先生は無理だろうとおっしゃって高麗芝を張ってくださいました。20年ばかり前から、苔が広がるように家内が手を尽くしているのですが、長い間庭木の選定など庭の管理を引き受けてもらっている庭舎牧岡の牧岡一生さんが、一部に白砂を敷いてくださいました。牧岡さんは、玄関先の築山の周りにも砂を敷いたり、長い石を敷いたりして、一部を手直ししてくださいました。

築山のカイの木は、私が岡山の就実大学に講演に行きましたときに、閑谷学校や田中美術館の庭でカイの木を見て気品のある美しさに感動したという話をしましたところ、学園の事務長さんが岡山県の農業試験場で育てられていた苗木を送ってくださいました。5本のうち、紅葉が一番美しかったのを築山に植えました。裏庭に植えた4本のほうがどんどん大きくなっていますが、紅葉は一向に映え

ないのです。築山のも美しく遅く育ってほしいのですが、なかなか思いどおりにはいきません(笑)。カイの木は、孔子さまがお好きだったそうで、儒教では学問奨励の象徴として尊重されてきたと聞いています。

それから、もう一つ造園当初から変わったのは、2つの滝に水が来なくなつたことです。もともとは近くの山間の小川から水を引いていたのですが、環境の変化で水をとることができなくなつたのです。当初の計画では、井戸を掘るか、水道の水を使うかなどという案もあったのですが、来客のときにバルブを開けて水を流すのは、まるで博覧会のように嫌だと父が言いまして、自然のせせらぎを導くという案に落ち着いたのです。それが昭和50年代の初め頃に水を落とすことができなくなつてしまつたのです。小川のサラサラと水が流れ始めたときは本当に嬉しかったし、池にも鯉が泳いでいて、良い感じでした。それが全部干上がってしまったのですから、森先生もたいへんがっかりしておられました。

先生は水がなくてもなんとかなるだろう、一つ考えてみようとおっしゃって、池にはとりあえず栗石を入れておく

ように指示されました。ところが、本格的な改造ができないまま時間が過ぎて、先生が亡くなりました。今では、大雨のときに池に水がいつぱいに溜まることであつて、ほんのしばらくですが、昔の姿を偲ばせてくれます。

●庭をつくった後、森先生との交流がありましたか。

橋本…大学に入ってから、私はよく研究所に遊びに行きました。研究員でもなんでもなかったんですが、広沢池や大徳寺大仙院や修学院離宮など、森先生の調査に参加しました。その時は牛川喜幸さんが助手でした。私は助手の助手で、写真機を持ってくつついて行きました。一緒に行きますと、桂離宮でも、修学院離宮でも普段人が入れないところまで入って写真も撮れますから、贅沢な経験をさせていただきました。測量の技術も知識もないのですが、私なりに手伝いました。測量のポールを持って何時間も立つのは辛かったですけれども、楽しい面もあつて、しょっちゅうお供しました。非常に得難い体験をさせてもらったと思います。

筒井寛秀さん（元東大寺長老）や私は、絶えず研究所に

出入りをしていましたので、研究者仲間と同様に扱ってもらえるようになりました。當麻寺や唐招提寺の調査にも参加したのですが、往復のバスの中や、昼食のときなどに交わされる会話を聴いていてますと、特に学問的な話ではなくても、やはり一般の世間話や噂話などとは違うところがあって、何か心に残るものがありました。大学院では仏教美術、特に彫刻史を専攻していたのですが、彫刻史や絵画史の研究室よりも、森先生のところに行くことのほうが多かったのです。庭園史の指導を受けたというよりも、先生のお人柄、研究に没頭されているお姿に惹かれて、ついに行ったような感じですが、それでも大事なことを教わったと思っています。

時々懐かしく思い出しますのは、測量の帰りの先生のお宅で、牛川さんと一緒にすき焼きをご馳走になったことです。私の家では、鍋に入れたものをすぐ掻き混ぜてしまうのですが、先生のところでは、肉や葱、しらたきなどが、それぞれあるべきところにほどよく配されて、箱庭のように整っているのです。「さあ、やってください」と言ってくださっても、一寸箸を出しかねるほどでした(笑)。

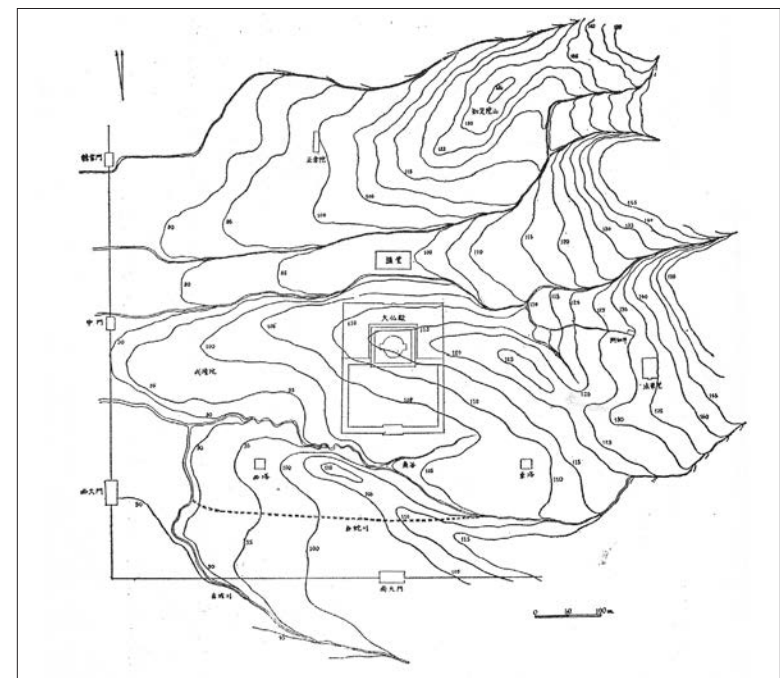
先生のお陰で、牛川さんや写真家の恒成一訓さんと親しくさせてもらったのも、ありがたいことでした。

森先生は牛川さんと一緒に、今の東大寺境内の地形を測量されたのですが、非常に精細な実測図(原図の等高線は1メートル単位)ができて、建築史の先生がびっくりされたほどでした。それに基づいて、大伽藍造営以前の自然地形の復元図を発表されました。

それから30年ばかり経った頃に、大仏殿の西南の隅のあたりで、発掘調査があつて、西に向かつて流れていた川の底が、柵とともに検出されたことがあつたのです。その地形が自然地形の復元図のとおりであることが実証されました。

大仏殿中門の前から講堂や僧坊のあたりにかけての平坦な土地が、山を削り谷を埋めて造成されたものであることをつきとめられたことも、寺院史や建築史の側からも認められていて、森先生のご功績が、庭園史を超えたところにも遺っているように思います。

それにしても、当時の奈良文化財研究所は、規模も小さく、必要な設備も整ってはいなかったのですが、いろんな



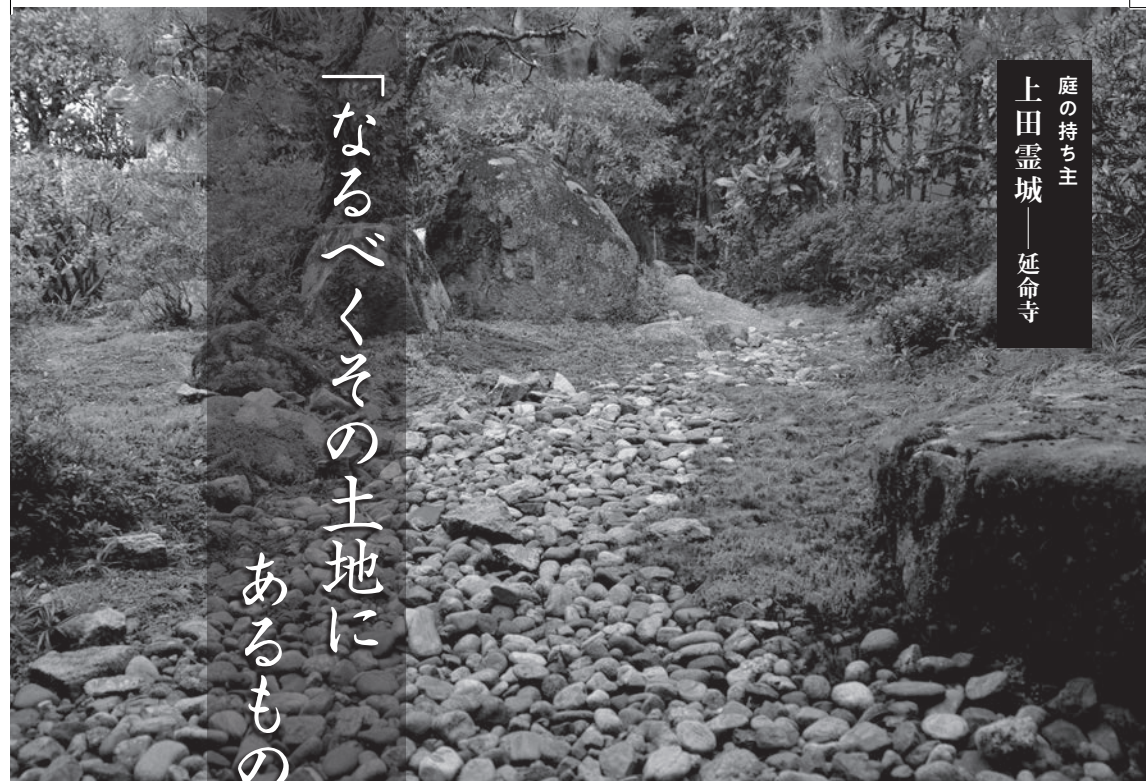
森蘊による東大寺旧境内地形の推定復元図(等高線5メートル間隔)[森 1971 157頁]

分野の研究者がおいでで、それぞれの研究を自由に進めておられて、和気藹々の雰囲気がありました。野球の親善試合ができるほどですから、時間的にも余裕があつて、寺内の人たちは、皆、研究所や博物館の人たちと、親密にしていました。あのようなゆとりも、今から思うと大事なことだったという気がいたします。

(了)

引用文献

森蘊(1971)『奈良を測る』 学生社



場所：大阪府河内長野市、延命寺／日時：2012年11月9日

「なるべくその土地にあるもので」

上田 霊城（うえだ・れいじょう）
1928年に生まれる。1938年より、紀三井寺にて左竹信光師に従い得度。1951年に高野山大学仏教学科卒業後、河内長野市大師寺住職に就任。1953年より同市延命寺住職に就任し、現在にいたる。平成4年度第30回密教学芸賞授賞。



●延命寺の庭はいつ頃につくられましたか。

上田…森先生が一番最初につくられたのは本堂の北側の庭です。円通寺のような枯山水ですね。1967年頃だったでしょう。当時とまったく変わっていません。

しかし、その2年後の1969年に本堂が燃えてしまったんです。また焼けたらいかんのではじめは鉄筋コンクリートにしてはしかったのですが、そのうちに考えなおして、やはり木造でお願いしました。

今建っている本堂を設計したのは、大岡実先生という古建築の保存修理で有名な先生です。その新しい本堂に合わせて、森先生が西の庭を整備しました。最初は流れの庭でしたが、1973年に本堂の工事が終わってから、森先生が池に改造しました。

●今は枯れているようですが、もともと池には水がありましたか。

上田…はじめは水があったんですよ。山からの水を引いていました。水道がなかった時代のことですから、お寺でも山の水を使っていました。いつからかはつきり覚えていませんが、ある時期に水源が枯れてしまいました。お寺では水道になりましたが、池の管理はたいへんでしたので枯山水にしました。この庭を手入れされている庭師、古川三盛さんが砂利を敷きました。今は雨が降ったら、水がそこに

流れて排水路にはなりますが、水はもう溜まりませんね。もともとは鯉も泳いでいたんですが、池が浅くてイタチがよく食べにきていましたね。

●1969年の火事で境内は大きく変わりましたか。

上田…境内は昔とずいぶん変わりましたね。建物の配置も変わりました。じつは、戦争中に一度燃えてしまったんです。今の建物はその後につくられたものです。もともとは文化財になるような建物がありましたが、全部焼けてしまったんです。私がまだ小学校に通っていた頃のことです。その頃は庭なんかありませんでした。

たとえば、今は庫裡の南側に庭がありますね。あそこはもともと広場でした。サクラとソテツなどがあって、子供たちが遊ぶような広い場所でした。村の人もそこで盆踊りなどをしていました。しかし、だんだんと参詣人が多くなつて、そこで弁当を食べるのですね。拝観料をとっていませんので、何をしてもいいと思われるんでしょうけれども、こちらとしては困りますね。そこで、庭にしようと思って、森先生にお願いしました。



延命寺庭園作庭（奈良文化財研究所蔵）



その時、徳村造園が石を持ってきました。森先生が「大きいな」と言われたことは今でも覚えています。結局、森先生はその石を深く埋めました。上はあまり出さない。下の部分のほうが大きい。先生はなるべくその土地にあるもので庭をつくるように心がけていたようですが、徳村造園がこのような石を持ってきたので使わざるをえなかったわけです。

●森先生の第一印象を聞かせていただけますか。

上田…森先生が一番最初に延命寺に來られたのは、夏の暑い日でした。その時はご機嫌の悪い顔をして、ムツとしていました。当時はここまで出前が來なかつたので、申しわけありませんでしたが、こちらで用意した食事を出しました。しかし、先生はご飯を済ましたら、すっかりご機嫌になりました。その時は本当に素直な人だなと思いました。仕事をされるときも、森先生はベラベラお話をしませんでした。しかし、縁側から立ち上がるときに手をこすって「楽しかった!」と、小さな声でつぶやいていました。

大岡先生などは東京から来ていましたのでお泊まりに

なつたんですが、森先生は泊まつたことはありません。來てもいつもその日のおうちに帰りになつた。自分で車を運転しないので徳村さんと一緒に移動していました。

●庭ができてから、森先生が管理などで來ることはありませんか。

上田…たしか3、4年してからまた來られたんです。その時、「時間経つて庭もよくなつてきましたね」と言いかけたら、「それは違いますよ」と先生が答えました。つくつたときが一番いいんだ、と。庭ができたときには木は小さかったです。もちろん、剪定していましたが、どんどん大きくなつていきますね。時間が経つと庭にもしっとり感が出てくる。さびるといいですかね。それがいいと思つていましたが、先生はつくつたときが一番いいんだ、と。つくつたときは設計どおりですから。

たとえば、渡り廊下の近くに綺麗なケヤキがありました。もう大きくなりすぎて切つてしまいましたが、ここにまだ根っこがあります。先生が観心寺からここまで歩いてきたときにケヤキが綺麗でしたので、ここにも植えたそうです。



延命寺庭園作庭（奈良文化財研究所蔵）

しかし、ケヤキはすぐに大きくなりますので、どうしてもいいかと聞いたら、また植えたらいいんですよと先生が言いました。こんなに大きくなったらあかんと言っていました。そういう人でした。よいと思ったものを植えますね。

自然の形を尊重しているから、一般の観光客は庭が手入れされていることに気がつきませんね。普通は形をつくってしまえますから。私もそういう庭に慣れてから、丸く刈られた植木を見ると本当に息苦しくなります。

●現在、庭の手入れをされている古川三盛さんはもともと、森先生のもとで庭園をつくっていました。いつからこの庭を手入れされていますか。

上田…古川さんは本当に最近です。最近といっても、10年以上も前のことです。古川さんは観心寺の手入れをされていたんです。向こうで古川さんの話を聞きました。

その頃、この庭の手入れは地元の植木屋さんに頼んでいましたが、せっかく森先生につくっていただいた庭なのに、公園の手入れみたいに機械で全部刈り込んでいました。はさみで剪定はしないのですね。それで観心寺に古川さんという腕のいい庭師がいるということで、うちも頼みました。それからずっと来てくれています。

古川さんは丁寧に手入れしてくれます。時々、この庭は手入れされていますかと聞く人もいます。古川さんは木の

●森先生の他の庭はご覧になったことがありますか。

上田…森先生は京都の法金剛院庭園を復元されましたね。あの庭はいいですね。あそこはもともと仁和寺系統です。仁和寺門跡のお墓がそこにありますが、今は唐招提寺の律宗になりました。今のご住職、川井戒本^{かいはん}さんも私の知っている人です。唐招提寺にも行かれていた人です。森先生は唐招提寺でも庭をつくりましたね。

だんだんと記憶力がなくなっていますので、このようなことしか言えませんが、森先生の庭についてちゃんとした記録はありませんね。残していないとやはり、後の人は写真などで見ても、その魅力はわからないだろうな。

（了）



場所：奈良市、岩井邸／日時：2012年11月7日



岩井浅二（いわい・あさひ）
1931年、奈良県生まれ。1958
年奈良県立医学大学卒、整形外科医。
岩井整形外科医院長。

「40年間もこの庭を 毎日見ているわけですが、 飽きませんね」

●岩井さんのご自宅はモダンなお家ですね。いつ頃にできましたか。

岩井…昔は、古い木造の家が門の近くまであったんですね。当時は小さい石とマキの木などが点々としていた狭い庭もありました。

しかし、私は庭がつくりたかったので古い家を裏の広い畑に移動させました。家を解体せずに、建ったままですつと移動させました。二階建ての家でしたが、瓦もガラスも何も割れずにできてびっくりしましたね。

そして、昭和44（1969）年に大成建設に新しい家を建ててもらいました。その時、鉄筋コンクリートの建築が流行っていたんですね。この柱なんか、打ちっぱなしなんです。今の奈良県庁と同じ頃にできました。森先生に庭をつくってもらったのはその1年後の昭和45年ですね。

●森先生にお庭の設計を依頼したきっかけは何ですか。

岩井…私は整形外科医をしています。昭和40年頃に奈良市役所の近くに田んぼを買って、整形外科病院を建てました。それからしばらくしたら、森先生が指を怪我されて来

られたんです（昭和42年10月29日朝）「森 1973 201頁」。森先生のご自宅は西ノ京にあったのですが、職人と一緒に庭仕事をしていたときに石を落として指を挟んだんです。それで骨がぶれて入院されました。その時はそんな偉い先生だとは知らなかったんですね。当時は庭園文化研究所の所長でしたかな。それでおつきあいが始まりましたが、私は先生の話を聞いて、庭をつくってほしいという気になりました。

●どのような庭を期待していましたか。

岩井…私は大きな石のほうがいいと思って、生駒の山の麓まで買いに行ったんです。5つほどの大きな石をトラックで運んでもらったんです。土塀をつくれば、大きな石を持ち込むことができると思って、先に買い取ったわけです。それから森先生に設計をお願いしました。

私のような素人は大きな石のほうがいいと思います。しかし、森先生にしてみれば、このような大きな石を先に持ち込まれたら、設計もしにくいし、邪魔だったと思うんですね。家は鉄筋の建物ですし、森先生は困られたと思いま



岩井邸庭園（マレス撮影、2013年）

すけれども、なんとか設計してくださって、石を深く据えました。

高い石だったものですから、もっと出してくれませんかと言ったら、森先生は「すべてを出したら、この石はこれだけだとわかるけれども、こうして深く据えれば、氷山の一角みたいに存在感がある。あまり表に出さないほうがいいんだ」と答えました。

こうして庭は森先生の設計で、京都から徳村造園が毎日来てくれて、つくりました。工事中は森先生がずっと監督に来ておられました。私は毎日、庭ができていくのを楽しんで見えていました。

●庭の味方はどのように変わりましたか。

岩井…その頃、学園前にどんどん新しい家が建てられ、庭もつくられました。私は庭に興味がありましたから、そこでどんな木を植え、どういう庭をつくるのか、いろいろと見学に行っていました。そうしたら、土塀の角にごついマキの木があったり、マツの木があったりして、枝振りはこれでもかというほど自慢をしているような感じでした。そ

んな木が多かったです。当時は立派な木だなと思っていてんですけれども、森先生に庭を設計してもらって見方が変わりました。

森先生の庭の木はさらりと、自然の枝振りですね。わざとらしいものはないですからね。「おれを見る」という木がないんですね。ごく自然な感じの庭ですね。

その頃に、私は森先生が研究しておられた大乘院庭園をはじめ、桂離宮や修学院離宮も見に行きました。金閣寺や銀閣寺とはちよつと違いますね。やはり修学院離宮のような自然な感じがいいですね。また、平泉の毛越寺^{もつうじ}まで行きました。それまで毛越寺の存在すら知りませんでしたけれども、森先生が修復に関わっていたということをお聞きしたので、いつぱい拝観しておこうと思いました。それはうちの庭ができてからです。

●工事中、森先生はどのようなところにこだわっていましたか。

岩井…たとえば、玄関先の飛石がありますね。職人が石を担いでいるのに、森先生はうんと言わない。首を横に振ら

れる。しかし、私のような素人が見ていると、それは1センチぐらい動かすだけなんです。今度は、先生が首を縦に振られるけれど、私から見たらさつきとほとんど変わらないのではないかと思うわけです。職人が重い石を持っているのですから、早くうんと言ってやればいいと私は思っていました（笑）。

また設計図に等高線を描くなんて知らなかったのです。今の庭はその等高線どおりに盛り土してあるんです。そして石の配置、樹木の配置、細かいところにもこだわっていました。モミジやマツなどの樹木の場合は直径何センチというところまで書いてありました。

●庭ができた後、維持管理などで森先生が見に来ることはありましたか。

岩井…庭ができてから何回か来ていただきました。また、森先生の庭ということで、見に来られた方もいましたね。最初は徳村さんがずっと面倒を見てくださって、その後は牧岡一生さんが2、3年来てくれたかな。それから古川三盛さんが手入れをしてくださっています。古川さんに

なってから10年以上経ちますね。せっかいい庭をつくってもらったから、ずっと森先生のお弟子さんに管理をお願いしています。庭は手入れが大事なんですね。

葉っぱが落ちる時期だけ、シルバーセンターへお願いして、月に2、3回来ていただいているんです。私だけでは手が回りませんから。お陰さまで庭はいつも綺麗です。

庭は手間もかかりますし、お金もかかります。息子たちも若い頃に「なぜ庭にあんなお金をかけて、人に手間をかけるんだ？」と、庭のよさがわからなかったんですね。しかし、今となつてはいいなと言ってくれています。

この庭ができて40年ぐらい経ちますが、木が大きくなっているだけでほとんど変わっていません。苔は自然に石に生えてきたぐらい。ところどころ、苔が芝生に占領されてきているけれども、まだ綺麗に生えています。

●どの季節の庭が一番好きですか。

岩井…新緑はちょっと賑やかすぎます。やっぱり秋はいいですね。今ちょうどモミジも綺麗になってきました。また冬の枯れた庭もいいです。ウメとかモミジとか、皆葉っぱ

が落ちて、綺麗な枝振りが見えてくるんです。特に森先生は庭で枝を伸ばしますからね。ぶつぶつ切る人もいますが、私は石畳を門まで歩いていくときに頭に枝が触るぐらいが好きなんです。

森先生は設計をするときにそういうことも考えておられるのでしょね。ここにはこの石を据えて、あそこにはこの木を植えるということを。とにかく、わざとらしさがなくて、さつと広がっている空間が好きなんです。

だから、40年もこの庭を毎日見ているわけですが、飽きませんね。どちらかといえば、この家を建て替えたいんです。ただ、簡単に替えられるものではありませんのですね。これだけは大失敗だ。でも、その頃私は30歳ぐらいで、鉄筋コンクリートも流行っていたのでこれを作ってしましました。今なら木造の、入母屋の家がつくりたいです。この庭も木造建築によく似合うと思います。

●家の南側に、表とはまた違う雰囲気の池庭がありますね。

岩井…ここには井戸が2つあります。昔の庭にも浅い、さらさらとした小さい池がありました。だから森先生は子供

のためのスペースに、池と芝生にしたらどうかと言われました。それで池をつくって、鯉を飼いはじめました。立派な鯉が20匹おったんですが、今は1匹しかおらんようになって。しかし、これは日常生活の庭です。ここはやはり表の庭がメインです。この部屋のソファに座って、季節ごとに移ろう庭を見ていると、本当に飽きませんね。

（了）

引用文献

森 繿（1973）『庭ひとすじ』 学生社



場所：奈良市、若原邸／日時：2013年5月14日

「この庭は 山の匂いがするんです」

●森先生との出会いを聞かせていただけますでしょうか。

若原（昌）…唐招提寺の徳田明本みょうほんさんに紹介していただきました。徳田明本さんというのは『律宗概論』を書かれた僧侶ですが、お庭のことなら森先生に頼みなさいと言われました。しかし、国宝級の庭に携わっておられる先生のことです



若原昌子（わかばら・まさこ）

大阪府出身。元興寺・中宮寺信徒総代。

若原邦弘（わかばら・くにひろ）

奈良県出身。（株）奈良保健衛生社代表取締役。

ら、どんな請求書が来るかわかりませんね。怖くてやめようかと思ったりもしましたが、唐招提寺のご紹介ですし、主人も大胆なところがあったから、お願いすることになりました。そうしたら、先生の設計料が安くてびっくりしました。「この方は純粋な学者だな」と思いました。本当に驚きました。それからたいへん親しくなりました。

昭和50年のことです。森先生は徳村さんという造園屋さんをご指名されて、うちの庭をつくっていただきました。

●作庭中のエピソード、もしくは特別に印象に残ったことはありますか。

若原（昌）…奥に石がちょっとだけ見えますけど、じつはかなり大きい石なのです。しかし、先っぽしか見えません。「こんな大きい石なのに、なぜ見せないのですか」と森先生に質問したのです。それはやっぱり下に深く埋めたほうが重量感が出るんですよと、先生はおっしゃいました。この庭に関して私が質問したのはそれだけでした。

庭ができてからのことですが、森先生が時たまおいでになった際に「奥さん、このお庭はどう？」と聞かれました。

そんなまろやかなお方でした。「私は何もわからないんですけど、表でこれだけ車を通るのに、夜に来客を送り出すと、山の匂いがするんです」。それが私のびっくりしたところです。これだけ奥行きが浅い庭なのにさすがやな、と思いました。どういう仕組みなのかよくわかりませんけれども、先生もこの奥行きのなさをすごく気にしながら設計されたのは事実です。できたときに図面はくださらなかったと思いますけど、スケッチを見せていただきました。本当に静かな、優しい感じの方でしたね。良い方を紹介してもらって本当にありがたいと思っています。

●その後の維持管理はどのようにされてきましたか。

若原（昌）…やっぱり、立派な方に庭をつくってもらったから、こうやって今も手入れが続いています。代が替わるとガーデニングの庭にしてしまうことが多いのですが、なんとかして代々長く維持してほしいなと思います。

若原（邦）…子供の頃はこぶし大の石を一つひとつ洗わされて本当に辛かったですね（笑）。

若原（昌）…今はシルバーセンターの方に1週間に1回来

森蘊の生涯——年表

【第4部】



若原邸庭園（マレス撮影、2013年）



島田市智満寺でスケッチする森蘊
(1981年10月9日)

海軍時代の森蘊（1945年頃）

若かりし頃、
野球をする森蘊

でもらっています。掃除だけですが、その方はこの庭が好きになって、いつも綺麗にしてください。手入れは年に2回、森先生のもとで働いていた牧岡一生さんをお願いしています。

お陰で今日は息子にもこの話ができます。彼の記憶と私の記憶は違いますから。彼は石を洗った記憶しかないのです。まあ、なにせ来客が多かったので家族は常に掃除をさせられていたんです。

（了）

西暦(和暦)	年齢	出来事・職歴・著書など	作庭・調査・整備など
1905年 (明治38年)	0歳	・8月8日、東京府立川村(現・東京都立川市)に生まれる。森慎一郎と多津代(たつよ)の六男。慎一郎は坂戸神社(現・千葉県袖ヶ浦市坂戸市場)の次男で、東京府立第二中学校長(現・東京都立立川高等学校)や東京高等師範学校長(現・筑波大学)などを歴任。 ・長男秀は、大正6年東京帝国大学工科電気科卒業後、宮城中学校長、金沢師範学校長、東京府立第二中学校長、富山中学校長、東京高等師範学校長などを歴任。 ・二男喬は、東京帝国大学法科在学中に外交官試験に合格。のちフランス、イギリス、ハンガリー、ブラジル、タイ国大使を歴任。退官後は弁護士になった。 ・三男禎は、東京帝国大学の機械工学科卒業後、日立製作所に入社。のち多賀高等工業学校教諭となった。 ・四男榮は、東京帝国大学法科卒業、三井鉱山に入社し、三井化学の社長になった。 ・五男實は、海軍大学卒業、海軍大佐。 ・長女、志げ。	作庭・調査・整備など
1918年 (大正7年)	13歳	・3月31日、青柳小学校を卒業(現・文京区立青柳小学校、東京都文京区大塚)。	
1923年 (大正12年)	18歳	・3月31日、東京高等師範学校付属中学校を卒業(現・筑波大学附属中学校、東京都文京区大塚)。	
1928年 (昭和3年)	23歳	・3月31日、浦和高等学校理科乙類を卒業(現・埼玉県立浦和高等学校農学部、埼玉県さいたま市浦和区領家)。	
1929年 (昭和4年)	24歳	・3月、大阪市旭区森小路に住んでいた三番目の兄(森禎)を訪れ、初めての関西旅行。平等院、法界寺、醍醐寺、天龍寺、金閣寺、銀閣寺等を見学し、深い感銘を受ける。 ・4月、東京帝国大学農学部農学科に入学。指導教官は丹羽鼎三。林学部の田村剛の造園学も受講。	
1930年 (昭和5年)	25歳	・夏に関西旅行。京都では桂離宮や修学院離宮、奈良周辺では東大寺、興福寺をはじめ、一乗院跡、大乘院跡、知足院跡、内山永久寺跡、円城寺、浄瑠璃寺、また岐阜県多治見市の永保寺などの庭園遺構を見学。 ・春から、田村剛の紹介で東京帝国大学工学部建築学科、藤島亥治郎の日本建築史の講義を聴講。その影響で平泉を訪れ、毛越寺庭園跡を見学。東京帝国	
1931年 (昭和6年)	26歳	大学工学部建築学科の前田松韻研究室にも出入りするようになる。秋から翌年をはじめ、鎌倉の永福寺跡にて発掘調査に参加。	
1932年 (昭和7年)	27歳	・3月31日、東京帝国大学農学部農学科を卒業。卒業論文のテーマは「鎌倉の庭と夢窓疎石の作風」。 ・同大学院に入学。指導教官は田村剛となった。 ・日本建築学会に入会。 ・5月1日、父慎一郎が亡くなる。	作庭・小坂順造氏別荘(東京都) 作庭・名取和作氏別荘(東京都) 作庭・森喬別荘(東京都) 作庭・森栄邸(東京都)
1933年 (昭和8年)	28歳	・5月25日、内務省衛生局事務取扱、企画課に就職(現・厚生労働省)。 ・論文「毛越寺に於ける藤原時代造園遺跡の研究」造園研究8 ・論文「日光国立公園地域内電柱架設に就いて」国立公園5(7)	
1934年 (昭和9年)	29歳	・4月30日、東京帝国大学大学院を中退。田村剛の造園学のほかに、造林学の中村賢一と地質学の佐伯秀章の講義を受けた。論文は「平安鎌倉時代庭園遺跡の研究」というテーマで提出する予定であった。 ・論文「永福寺に於ける鎌倉時代前期造園遺跡の研究」造園研究13 ・論文「国立公園と謡曲の名所」国立公園6(2)	
1935年 (昭和10年)	30歳	・論文「奥日光の温泉」登山とはいきんぐ1 ・論文「車窓に見る東北の山々」登山とはいきんぐ1(4)	
1936年 (昭和11年)	31歳	・肥田(ひだ)はるこ(1917年3月30日-2012年4月24日)と結婚する。	
1937年 (昭和12年)	32歳	・論文「本邦国立公園に於ける原野風景地に就いて」造園雑誌4(1) ・論文「室町時代の住宅庭園」造園研究21 ・論文「平泉無量光院の造園遺跡の研究」造園研究23 ・論文「家庭に於ける果樹園芸」公衆衛生55(3)	
1938 (昭和13年)	33歳	・長男、史夫が生まれる。 ・1月2日、正月休暇を利用して、京都の王朝時代の庭園遺蹟を訪ねる。 ・1月11日、厚生省(現・厚生労働省)体力局事務取扱。厚生技手、体力局施設課勤務。 ・春、大岡美と福山敏男の推薦で「建築史研究会」に入会。 ・論文「京都に残る平安朝の庭園遺跡を訪ねて」庭園20(3) ・論文「山水野形図通伝の造園家に就いて」造園研究24	作庭・石坂修一氏邸庭園(目黒区) 作庭・住友吉左衛門氏別荘庭園(那須塩原市)

1943年 (昭和18年)	38歳	・6月28日、東京市技師となり、公園部技術課に勤務。 ・論文「井の頭自然文化園について」建築雑誌18(1)	
1942年 (昭和17年)	37歳	・論文「東福寺の庭園」建築史4(1) ・論文「金地院の新方丈・有樂齋數奇屋」建築史4(1) ・論文「金閣の造営年代」建築史4(1) ・追悼文「足立先生と日本庭園」建築史4(2) ・論文「小堀遠州と江戸の庭園」新風土記3(1) ・論文「庭奉行としての小堀江守」国宝5(1) ・論文「日本庭園の源流とその形態について」建築史4(3) ・論文「年中行事絵巻と東三条殿庭園」国宝5(7) ・論文「桂御別業之記について」建築史4(5) ・論文「善阿弥の作庭」国宝5(9) ・論文「江戸時代初期建築庭園界と小堀遠州」朗10	
1941年 (昭和16年)	36歳	目で文部省から学術奨励研究費を受け、桂離宮の研究を開始。 ・論文「鹿苑寺の金閣と庭園」建築史3(1) ・論文「銀沙灘と仙草壇」建築史3(1) ・論文「小堀遠州と彼をめぐる造園家」庭園と風光23(2) ・論文「金地院の庭園」建築史3(2) ・論文「大仙院庭園の作者」建築史3(2) ・論文「小堀遠州の造庭」建築史3(3) ・論文「にぎは草と桂離宮庭園論争」建築史3(3) ・論文「金地院茶室の建築年代及作者」建築史3(3) ・論文「高陽院造庭工事管見」庭園と風光23(6) ・論文「室町時代に於ける西芳寺庭園の修理」建築史3(4) ・論文「高陽院の造庭工事について」建築史3(4) ・論文「大神神社と室の八島」庭園と風光23(7) ・論文「下野に室町時代の古園を訪ねて」庭園23(7) ・論文「獨逸の造園家——ベルマン・マッテルン氏」庭園23(12) ・論文「泉殿・釣殿の研究(3) 釣殿について」宝雲27 ・論文「桂離宮論争と管見」造園研究36 ・論文「桂御別業に関する一考察」建築史3(5) ・論文「慈照寺庭園は宮城豊盛の改築に非ず」を読む」建築史3(5) ・論文「遍照心院の庭園」建築史3(5)	
1940年 (昭和15年)	35歳	・9月26日、東京市技師となり、体力局施設課に勤務。 ・「江戸時代初期の建築と庭園の関係について、特に桂離宮について」という題 ・共著「新講大日本史」(日本庭園史) 雄山閣 ・註校 横井時冬著「日本庭園発達史」創元社 ・論文「桂離宮御庭の造営年代」建築史2(1) ・論文「善阿彌初期の作庭」建築史2(2) ・論文「慶長以前の三宝院庭園」建築史2(2) ・論文「泉殿・釣殿の研究(1) 泉殿について」宝雲25 ・論文「武田屋形図と信玄の庭訓」庭園と風光23(4) ・論文「慈照寺庭園の作者に関する疑」建築史2(3) ・論文「泉殿・釣殿の研究(2) 泉殿について」宝雲26 ・小評「山田博士の作庭記解説を読む」建築史2(4) ・論文「前栽秘抄の研究」建築史2(5) ・論文「益之集蔵の作庭」建築史2(5) ・小評「京都市編」京都の庭園」建築史2(5) ・論文「山水井野形図の研究」造園研究34 ・論文「二代目善阿弥」建築史2(6) ・論文「慈照寺造庭に関する一考察」画説 ・論文「日本庭園の真価」観光8(2)	
1939年 (昭和14年)	34歳	・論文「平等院庭園考」建築学会論文集9 ・論文「鳥羽殿庭園考」造園雑誌5(2) ・論文「神社に残る平安鎌倉時代庭園遺跡に就いて」神社協会雑誌34(7) ・論文「枯山水について」宝雲23 ・論文「前栽に就いて」造園研究27 ・論文「法金剛院の庭園について(上)(下)」建築史1(1)(2) ・論文「夢窓国師の作庭」造形芸術10 ・論文「平安時代前期庭園に関する研究」建築学会論文集13 ・論文「平安・鎌倉時代の造園技術」建築学会論文集14 ・論文「室町時代に於ける「前栽秘抄」の影響」建築史1(5) ・論文「龍安寺庭園の研究」画説33 ・論文「金閣と法水院」国宝2(10) ・論文「平安朝の庭園」造形芸術15 ・論文「鎌倉時代宮苑に関する研究」造園雑誌6(3)	

1953年 (昭和28年)	48歳	・はること離婚する。 ・村岡正が奈良国立文化財研究所建造物研究室の臨時筆生になる。 ・3月17日、奈良県文化財専門審議会の専門委員になる。 ・共著『日本美術全集』（建築庭園編）東都文化出版	調査・修学院離宮（京都市） 改造・今西清兵衛露地（奈良市）
1952年 (昭和27年)	47歳	・4月16日、奈良文化財研究所に建造物研究室長として勤務。「京都御所・離宮の研究」を開始。 ・論文「桂離宮古図について」建築史研究8 ・論文「鎌倉の石像物と庭園遺蹟」日本歴史52 ・論文「鎌倉の古建築」日本歴史45（2） ・論文「龍安寺の庭・慈照寺の庭」淡交52 ・論文「山村圓照寺と修学院離宮」大和文章6 ・論文「東本願寺別業涉成園について」大和文華8	
1951年 (昭和26年)	46歳	・11月1日、東京工業大学に非常勤講師（庭園学）として勤務。 ・著書『桂離宮』創元社 ・著書『桂離宮と修学院離宮』岩波書店 ・論文「桂離宮古書院について」建築史研究3 ・論文「日本庭園の象徴美について」仏教芸術11 ・論文「修学院離宮の構造と意匠」茶道雑誌16（6） ・論文「茶庭の創造精神」茶道月報4（6） ・論文「小堀遠州の作庭と興福院庭園」大和文華3 ・論文「郵便切手と文化財」日本歴史32（1） ・論文「オヴァール教会堂復旧募金切手」日本歴史34（3） ・エッセイ「茶庭考（5）」美術新聞25	
1950年 (昭和25年)	45歳	・著書『日本の庭園』河原書店 ・共著『これからの庭園』『住宅と家具』主婦之友社 ・共著『衣食住の話』印刷庁 ・論文「小堀遠州の造庭と興福院庭園」大和文華3 ・論文「初期桂離宮に於ける智仁親王の作意」美術史2 ・エッセイ「名園の保存」観光（30） ・エッセイ「茶庭考（1）」美術新聞21 ・エッセイ「茶庭考（2）」美術新聞22 ・エッセイ「茶庭考（3）」美術新聞23 ・エッセイ「茶庭考（4）」美術新聞24 ・9月15日、国立博物館保存部建造物課に勤務。 ・著書『美しい庭園——鑑賞と造庭』創元社	
1949年 (昭和24年)	44歳	・6月1日、文部技官となる。 ・著書『ぼくらの住居』東京堂出版 ・解説「桂離宮の庭園」三彩 ・論文「構想と表現について——桂離宮庭園の場合」新建築24（7） ・エッセイ「二原監督問題を米国流に裁けば」読売週刊スポーツニュース（4月）	
1948年 (昭和23年)	43歳	・4月1日、国立博物館の調査員となり、保存修理課に勤務。 ・著書『住居の歴史』白馬書房	
1947年 (昭和22年)	42歳	・5月31日、東京植木株式会社に勤務（研究部長）。8月1日より東京国立博物館の技官となり、保存修理課兼事業課に勤務（文化財保護委員会、文化庁の前身）。	
1946年 (昭和21年)	41歳	・5月30日、復員。6月15日より東京都立農事試験場に勤務。	
1945年 (昭和20年)	40歳	・海軍技師として、ボルネオ民政部に派遣される。高等官六等。 ・著書『平安時代庭園の研究』桑名文星堂 ・共著『日本建築聚英6』（建築庭園編）日本文化中央連盟	
1944年 (昭和19年)	39歳	・論文「浄瑠璃寺の建築と庭園」建築史6（3） ・論文「称名寺の建築と庭園」建築史6（4） ・1月4日、東京都井の頭恩賜公園自然文化園長。7月1日、正七位。 ・7月8日、兄森實がマリアナ群島に出勤中に戦死（43歳）。 ・著書『日本庭園の伝統』——條書房 ・共著『Architecture and Garden』Nippon Bunka Chuo Renmei ・論文「南禅寺方丈庭園の造営年代及作者」建築史5（4） ・論文「日本庭園に於ける橋梁について」建築史5（5）	

1954年 (昭和29年)	49歳	・共著「生活の歴史・ぼくたちの研究室」さ・え・ら書房 ・論文「初期桂離宮の意匠」大和文華10 ・論文「円城寺の建築と庭園」大和文華11 ・エッセイ「寸庭めぐり——はじめに」淡交7(1) ・エッセイ「寸庭めぐり——大橋理祐邸を訪ねる」淡交7(2) ・エッセイ「寸庭めぐり——角屋を訪ねて」淡交7(4) ・エッセイ「寸庭めぐり——桑名邸を訪ねて」淡交7(5) ・エッセイ「寸庭めぐり——稲畑邸を訪ねて」淡交7(6) ・エッセイ「寸庭めぐり——涼しい中庭の泉」淡交7(8) ・エッセイ「寸庭めぐり——羽田邸を訪ねて」淡交7(9) ・エッセイ「寸庭めぐり——大橋邸を訪ねて」淡交7(12)	- 調査・法華寺庭園(奈良市) - 調査・円成寺庭園(奈良市) - 調査・大神神社境内(桜井市) - 整備／作庭・唐招提寺本坊客殿庭園(奈良市)
1955年 (昭和30年)	50歳	・著書「桂離宮の研究」東都文化出版 ・著書「修学院離宮」創元社 ・共書「日本美術全集第6巻 建築庭園篇」東都文化出版 ・共書「円通寺記」大悲山円通寺 ・共著「角屋の庭園」「角屋」彰国社 ・論文「文化史論叢——修学院離宮造営に利用された建物と地形について——修学院離宮の研究(補遺)」奈良国立文化財研究所学報第3冊 ・論文「日本庭園について」建築と社会36(7) ・エッセイ「庭園の美」淡交9(6)	- 整備・大神神社境内(桜井市) - 調査・桂離宮(京都市) - 調査・大和郡山城(大和郡山市) - 調査・大乗院庭園(奈良市) - 調査・浄瑠璃寺(木津川市)
1956年 (昭和31年)	51歳	・4月1日、横浜国立大学に非常勤講師として勤務。 ・天理市史編纂協力。 ・著書「新版桂離宮」創元社	- 調査・山科南殿(京都市) - 調査・西芳寺(京都市)
1957年 (昭和32年)	52歳	・共著「グローバルと日本文化」彰国社 ・論文「東山時代の庭園文化について」国学院雑誌57(5) ・エッセイ「見どころ勘どころ」淡交10(4) ・エッセイ「秋の修学院離宮」朝日新聞京都版 ・エッセイ「秋の庭」毎日新聞	- 調査・京都御所(京都市) - 調査・竜王山城跡(天理市) - 調査・内山永久寺跡(天理市) - 調査・法金剛院跡(京都市) - 調査・本泉寺庭園(金沢市) - 調査・湯殿跡庭園跡(福井市) - 調査・諏訪館跡庭園跡(福井市) - 調査・南陽寺庭園跡(福井市) - 調査・妙心寺退蔵院庭園(京都市) - 調査・慈照寺庭園(京都市) - 調査・福田寺庭園(米原市) - 調査・願行寺庭園(吉野郡下市町) - 作庭・東大寺竜蔵院庭園(奈良市)
1958年 (昭和33年)	53歳	・春に日本経済新聞社後援で大阪市高島屋で行なわれた日本庭園展を指導。 ・著書「日本の燈籠」(アサヒ写真ブック)朝日新聞社 ・共著「にわ・玉川こども百科77」玉川大学出版部編 誠文堂新光社 ・エッセイ「昭和の作庭記(その一)」角2 ・エッセイ「昭和の作庭記(その二)」角3 ・エッセイ「仕事とラジオ」東京新聞 ・エッセイ「自然物の即興曲」毎日新聞	- 調査・鳥羽殿遺跡(京都市) - 調査・旧秀隣寺庭園(高島市) - 調査・北畠国司館跡庭園(津市) - 調査・東大寺境内(一部東大寺より補助金(奈良市)) - 調査・大徳寺孤蓬庵庭園(京都市) - 調査・南禅寺本坊(京都市) - 調査・南禅寺金地院(京都市) - 調査・高野山天徳院(伊都郡高野町) - 作庭・法華寺「犬の庭」(奈良市法) - 作庭・大神神社「大美和神苑」(桜井市)
1959年 (昭和34年)	54歳	・常見きよこ(1916年2月2日-2007年5月9日)と再婚する。 ・著書「中世庭園文化史」奈良国立文化財研究所学報第6冊 ・論文「昭和32年度庭園遺跡調査概要」奈良国立文化財研究所年報 ・論文「中世興福寺の住坊」仏教芸術40 ・エッセイ「敷石の美」婦人之友53(6)	- 調査・水無瀬離宮跡(三島郡島本町) - 調査・伝桜井御所跡(三島郡島本町) - 調査・大寺旧境内(奈良市) - 調査・正倉院境内、四聖坊庭園(奈良市) - 調査・南宗寺庭園(堺市)

[illegible]

1975年 (昭和50年)	70歳	・退官直後に法金剛院、和歌山城紅葉深庭園の復元整備を依頼される。 ・平泉文化史館の依頼で毛越寺庭園復元模型を製作。 ・小山潔と一緒に自宅の庭の一部を改造している時に、左手中指を骨折。岩井整形外科医院の岩井浅二氏が治療した。 ・著書『小堀遠州』（人物叢書140）吉川弘文館 ・著書『桂離宮』集英社 ・共著『庭園』『図説日本文化史大系』小学館 ・共著『地形から観察した春日山の文化』奈良地理学会 ・論文「結界の立地的考察」南都仏教20 ・論文「東大寺山堺四至図について」奈良国立文化財研究所 ・エッセイ「設計のための庭園史研究（体系農業百科辞典の筈）」『体系農業百科事典 第7巻』造園農政調査委員会 ・座談会「建築と造園の対話」ひろば39	- 作庭・檀原神宮文華殿（檀原市） - 改造・大神神社神苑庭園（桜井市） - 作庭・栗山亮作氏邸庭園（五条市） - 改造・自宅の庭（奈良市） - 作庭・中野秀太郎邸庭園（吹田市） - 作庭・延命寺本堂北庭（河内長野市） - 作庭・紀三井寺庫裡庭園（和歌山市）
1968年 (昭和43年)	63歳	・6月1日、庭園文化研究所を設立し、所長となる。次長は村岡正。 ・7月1日、奈良国立文化財研究所の調査員となる。 ・報告書「伝来寺庭園調査報告書」中津江村教育委員会 ・共著『日本文化としての庭園』誠文堂新光社 ・共著『大徳寺の庭園・茶室』秘宝II ・共著『京都の明治文化財（建築・庭園・史跡）（財）京都府文化財保護基金 ・共著『日本美術全史』美術出版社 ・論文「法華寺庭園と付近の地形」大和文化研究13（10）（11）	- 作庭・桜井寺庭園（五条市） - 作庭・延命寺本堂西庭（河内長野市） - 作庭・豊明山荘／古川善次郎別邸庭園（豊明市） - 改造・大神神社神苑（桜井市） - 作庭・多賀神社東庭（一部）（大上郡多賀町）
1969年 (昭和44年)	64歳	・3月6日、日本万国博覧協会日本庭園委員会の委員になる。 ・著書『庭園とその建物』日本の美術34 ・論文「結果図による称名寺の復元的考察」大和文化研究14（10） ・報告書「和歌山公園紅葉深庭園」常復元調査報告書」庭園文化研究所	- 移転・唐招提寺東室十六羅漢石庭（奈良市） - 作庭・石田嘉一郎庭園（奈良市） - 作庭・矢田寺大門坊露地（大和郡山市） - 作庭・郡山城跡市民文化会館庭園（大和郡山市） - 作庭・中村英之助邸露地（御所市） - 作庭・和久伝旅館庭園（中郡峰山町） - 作庭・海眼寺庭園（福知山市）
1970年 (昭和45年)	65歳	・3月24日、日本造園学会賞を受賞。『桂離宮他日本庭園史に関する一連の研究』 4月1日、滋賀県文化財保護審議会の委員になる。同日、奈良市史編集審議会の専門員になる。 ・著書『住宅庭園・茶室空間とデザイン』誠文堂新光社 ・共著『桂・修学院離宮』大原写真工業社	- 整備・法金剛院庭園（京都市） - 作庭・岩井浅二郎庭園（奈良市） - 作庭・福山医院（奈良市） - 作庭・高宮勝邸庭園（天理市） - 作庭・出口邸庭園（天理市）
1971年 (昭和46年)	66歳	・共著『写真集 修学院離宮』毎日新聞社 ・共著『写真集 桂離宮』毎日新聞社 ・共著『古代・中世の庭園序説』新版考古学講座6 有史文化（上）雄山閣出版 ・論文「奈良茶人系譜・松屋久重・長閑堂・小堀遠州」大和文化研究	作庭・日本万国博覧会日本政府館内の枯山水的禅庭（吹田市）
1972年 (昭和47年)	67歳	・4月1日、千葉大学に非常勤講師として勤務。 ・著書『奈良を測る』学生社 ・共著『法金剛院について』法金剛院 清風会 ・報告書「伊豆葎山願成就院発掘調査概報」葎山町教育委員会 ・エッセイ「廃園を訪ねて」自然と文化6	- 整備・西本願寺滴翠園（京都市） - 作庭・九品寺十徳園（御所市） - 作庭・マックスファクター滋賀工場庭園（栗太郡栗東町）
1973年 (昭和48年)	68歳	・4月1日、史跡白水阿弥陀堂の境域復元整備委員会の委員になる。 ・春、京都大学名誉教授岡崎文彬の案内でイタリア、ドイツ、フランス、イギリスの各国を見学。 ・著書『桂離宮』日本の美術79 ・共著『吉野町史』（吉野町の庭園）吉野町役場 ・共著『やすらぎ——わたしの好きな散歩道』（浄瑠璃寺の庭園）朝日新聞社 ・論文「竜安寺の庭園について」禅文化64 ・報告書「旧大乗院庭園調査報告書」（財）観光資源保護財団 ・エッセイ「浄瑠璃寺の庭園」朝日新聞社	- 作庭・講御堂寺庭園（五条市） - 作庭・粉河寺本坊庭園（那賀郡粉河町） - 作庭・毛越寺庫裡庭園（西磐井郡平泉町）
1974年 (昭和49年)	69歳	・4月1日、和歌山県文化財保護審議会の委員になる。 ・スペイン、ギリシア、エジプトの遺跡を見学。 ・著書『庭ひとすじ』学生社 ・共著『奈良市水道五十年史』奈良市水道局 ・論文「室町時代の庭園」月刊文化財117 ・報告書「史跡 和歌山城紅葉深庭園復元整備事業報告書」庭園文化研究所	- 整備・和歌山城紅葉深庭園（和歌山市） - 整備・東福寺即宗院庭園（京都市） - 作庭・九品寺西園三十三番観音霊場庭園（御所市） - 改造・延命寺本堂西庭（河内長野市）
1975年 (昭和50年)	70歳	・11月1日、毎日出版文化賞を受賞。 ・著書『小堀遠州』創元社 ・著書『日本の庭園』集英社 ・共著『奈良市史』奈良市 ・共著『鳥羽山城の庭園遺構』『歴史読本』角川書店 ・エッセイ「切手収集と私」ポスト11（4） ・4月11日、桂離宮整備懇話会の委員になる。11月3日、勲三等瑞宝章を受賞。 ・ロシア、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク、オーストリアの遺跡を見学。	- 作庭・寺崎泰彦邸庭園（阿部野区北島） - 作庭・法華寺慶久庵露地（奈良市）

1976年 (昭和51年)	71歳	・西イツ出身のイルムトラウト・シャルシュミット・リヒター氏と日本で出会う。 ・著書「庭園の旅」芸艸堂 ・著書「修学院離宮」日本の美術 112 ・共著「京都御所 仙洞御所」(御所離宮の庭1) 世界文化社 ・共著「桂離宮」(御所離宮の庭2) 世界文化社 ・共著「修学院離宮」(御所離宮の庭3) 世界文化社	庭 松尾寺本坊北庭(大和郡山市)
1977年 (昭和52年)	72歳	・共著「香山堂跡と忍辱山円城寺」「新薬師寺、白毫寺・円城寺・大和古寺大観4付録Ⅱ」岩波書店 ・報告書「名勝 円城寺庭園環境整備事業報告書」忍辱山円城寺 ・報告書「名勝 浄瑠璃寺庭園環境整備事業報告書」浄瑠璃寺	整備・東福寺即宗院庭園(京都市) 庭・若原正善邸庭園(奈良市) 庭・創世苑庭園(現・ホテルマリターレ創世)(久留米)
1978年 (昭和53年)	73歳	・報告書「昭和52年度柳生陣屋跡発掘調査報告書」庭園文化研究所 ・報告書「鈴木屋敷庭園整備報告書」和歌山県教育委員会	整備・白水阿弥陀堂庭園(いわき市) 整備／庭・正暦寺福寿院庭園(奈良市) 整備／庭・柳生陣屋跡(奈良市) 整備・天理教彦根教会庭園(彦根市) 庭・大久保昭教邸庭園(彦根錦市町) 庭・今西啓邸庭園(橿原市) 庭・田中司邸庭園(河内長野市)
1979年 (昭和54年)	74歳	・共著「続・私の座右銘東京人」育英出版社 ・共著「桜井市史(文化財・庭園)」桜井市役所 ・共著「JAPANESE GARDENS」William Morrow and Company Inc. ・共著「Le jardin Japonais」Office du Livre ・報告書「特別史跡 毛越寺跡附鎮守の社跡・観自在王院跡整備報告書」平泉町教育委員会 ・報告書「江馬氏城館跡発掘調査概報」神岡町教育委員会	整備・観自在王院庭園(西磐井郡平泉町) 庭・奈良商業高校前庭(奈良市) 庭・浅川浩邸庭園(奈良市) 庭・纈織謙治邸庭園(磐井郡平泉町) 庭・高野山持明院庭園(伊那郡高野町) 庭・小野屋庭園(現・ホテルパレンス小野屋)(朝倉郡杷木町)
1980年 (昭和55年)	75歳	・6月26日から小山茂と牧岡一生と一緒にドイツへ行く。7月10日から開催されるフランクフルト市のバルメンガルテン植物園で日本庭園展を設計・指導。各時代、各様式の小庭園をつくる。イルムトラウト・シャルシュミット・リヒター氏が企画。 ・共著「忍辱山円城寺の庭」「真珠の小箱」角川書店 ・共著「公家武將の庭」太陽・家と庭シリーズ1 ・共著「枯山水の庭」太陽・家と庭シリーズ2 ・共著「浄土の庭」太陽・家と庭シリーズ3 ・共著「数寄屋の庭」太陽・家と庭シリーズ4	庭・延命寺玄関前庭(河内長野市) 整備・毛越寺庭園(1988年まで)(西磐井郡平泉町) 庭・毛越寺塔頭薬王院庭園(磐井郡平泉町) 庭・三本松公園日本庭園(久留米市) 庭・通玄寺庭園(城崎郡香住町)
1981年 (昭和56年)	76歳	・4月1日、特別名勝毛越寺庭園整備委員会の委員になる。 ・著書「日本庭園史話」(NHKブックスカラー版15) 日本放送出版協会 ・報告書「昭和55年度特別名勝 毛越寺庭園発掘調査報告書(第一次調査、第二次調査)」平泉町教育委員会 ・エッセイ「吉祥会25周年を迎えて」吉祥6	整備・普門寺庭園(高槻市) 整備・薬師寺地藏堂庭園(奈良市) 庭・薬師寺写経堂前庭(奈良市) 庭・菊屋嘉十郎邸庭園(萩市) 庭・安楽寺庭園(那賀郡金城町)
1982年 (昭和57年)	77歳	・3月19日、京都市文化財保護審議会の委員になる。 ・10月1日、名勝旧大乗院庭園保護管理委員会の委員になる。 ・11月、中国旅行。 ・共著「歴史のなかの都市」(対談集) 日本放送出版会	庭・普門寺方丈西庭(高槻市) 庭・和歌山市城二の丸庭園(和歌山市) 庭・奈良商業高校中庭(奈良市)
1983年 (昭和58年)	78歳	・和歌山市文化賞を受賞。 ・10月、韓国旅行。 ・論文「建築と庭園の結びつきを求めて(わが建築青春期)」「建築雑誌98(1211) エッセイ「私の古い切手と消印の疑問」郵便35(2) エッセイ「浄土を描き続けた半世紀」」「青少年へ贈る言葉 わが人生論千葉編(上)」かんば資金	庭・福山嘉和邸庭園(奈良市) 庭・西福寺岐阜支坊庭園(岐阜市) 庭・菊池久武邸庭園(奈良市)
1984年 (昭和59年)	79歳	・著書「日本史小百科・庭園(19)」近藤出版社 ・共著「無一物」(辻村泰園師とのおつきあい) 元興寺 ・エッセイ「失われた名園を偲ぶ」日本ナショナルトラスト報10 ・エッセイ「庭園の見かた・搜しかた」日本ナショナルトラスト報11	庭・普門寺方丈前庭(高槻市)
1985年 (昭和60年)	80歳	・論文「仙洞御所」(小堀遠州の人となりと作風) 毎日グラフ別冊	庭・法華寺東室庭園(奈良市) 庭・薬師寺八幡院(奈良市)

1986年 (昭和61年)	81歳	・著書『作庭記』の世界——平安朝の庭園美』（NHKブックスカラー版27） 日本放送出版協会 ・エッセイ「私の薬師寺」薬師寺	作庭・紫式部公園（武生市）
1987年 (昭和62年)	82歳	・上原敬二賞を受賞。 ・エッセイ「永井家御茶屋「玄禄」の改築とその庭」住宅建築142 ・解説「豊橋市永井家に庭園を作る」住宅建築142	
1988年 (昭和63年)	83歳	・12月14日10時48分、急性腎不全のため天理市天理よろづ相談所にて逝去。享年83歳。	

参考文献

- 尼崎博正・白幡洋三郎・飛田範夫（1986）『還暦記念 村岡正著作目録』京都大学農学部造園学研究室
 小山潔の本出版発起人会（編）（1986）『庭師歷程—小山潔の human forest』小山潔の本出版発起人会
 高橋知奈津 本報告書 47-74頁
 田中栄治（2016）『庭園研究者・造園家森蘊と建築家谷口吉郎——昭和前半期における建築家と造園家の交流』『神戸山手大学紀要』第18号 59-87頁
 森蘊（1971）『奈良を測る』学生社
 森蘊（1973）『庭ひとすじ』学生社
 森蘊（1981）『日本庭園史話』日本放送出版協会
 徳村造園（1985）『徳村造園事業経歴書』京都庭匠植清
 森蘊門下生一同（1989）『故 森蘊先生著述作品目録（稿）』庭園文化研究所

あとがき

森蘊について研究しようと思って、まず訪れたのは国際日本文化研究センターの白幡洋三郎教授であった。1994年に出版された『江戸の大名庭園——饗宴のための装置』（INAX 1994年 12頁）という本の中で、重森三玲は「庭園史界の在野の大御所」であるのに対して森蘊は「学界の大御所」であると、明確に位置づけたのは白幡先生であったからだ。しかし、森蘊について研究したいなら、国際日本文化研究センターよりも奈良文化財研究所（以降、奈文研）のほうがふさわしい場所だと言われた。森蘊が残した資料が奈文研に保管されているということは、その時に初めて知った。具体的にどういうものがあるのか、その中身や状態などもよくわからなかったが、森が出版した書物以外に「資料」のようなものが存在しているとは脳裏をかすめもしなかったので衝撃的な話であった。結局、白幡先生のもとで研究するという私の願いは叶わなかったが、好奇心が刺激され、ますます探りたくなるテーマとなった。

その調子で私は奈文研という国立文化財機構の扉を叩きに行った。しかし、森蘊の資料はまだ整理中で閲覧できる状態ではなかった。ましてや、当時研究機関や教育機関に所属していなかった私の手では、届くはずもなかった。

当時の文化遺産部の小野健吉部長、遺跡整備研究室の平澤毅室長と青木達司研究員、文化的景観研究室の清水重敦室長らと相談しながら、策をめぐらした。そして、2012年秋から1年間、国際交流基金日本研究フェローシップというポストドク奨学金の支援を得て、遺跡整備研究室の客員研究員として受け入れてもらった。これでようやく、宝

物庫の鍵が手に入り、森蘊研究の本格的なスタートをきることができた。

さて、1年という短い研究期間で何ができたのか。とりあえず、奈文研に保管されている膨大な資料を渉猟すると同時に、現地調査を進めることにした。客員研究員としての私の生活は、森蘊の資料が保管されていた図化室で一人閉じこもるか、東北の平泉から九州の久留米まで、森の指導によって復元整備された歴史的な庭園や新しくつくられた庭園を探し求める毎日であった。本の虫か、庭の虫のような生活。この報告書に掲載している資料の多くはその間に発掘したものであり、また2012、13年に撮影した写真が多いのもそのためである。

現地調査をするときは庭園の写真だけではなく、できるだけ多くの証言を記録することにした。最初から企画していたことではなかったが、森の記憶を伝える人がたくさんいるということに気がついたからには、彼らの言葉を残さずにはいられなかった。ご家族をはじめ、研究者、作庭家、施主など、それぞれの立場から森蘊の業績とその人柄を語っていただいた。時には熱く、時には懐かしく、時には懐疑的に……。とにかく、彼らの言葉は生き生きとした森蘊像を垣間見せてくれた。その間に蓄積した知識も、築いた信頼関係も、その後に展開した研究の基盤となった。

2014年には大乘院庭園文化館で「奈良の庭と森蘊の業績」というタイトルで展示パネルと講演をしたり、また『日本庭園学会誌』『野村美術館紀要』『連携研究「自然と文化」研究連絡誌』などのような学術雑誌でも論文を発表したりした。しかし、発表をする媒体もテーマも異なっていたので、成果自体に統一感がなかった。自分の中ではすべてが大きなパズルの一部であっても、全体像はまだ見えていなかった。

そうこうしているうちに、2016年8月より奈文研の文化遺産部アソシエイトフェローとして採用され、そして2017年からは「森蘊の業績と日本庭園史の作成——歴史的庭園のデータベース作成」という課題名（課題番号17K18447）で日本学術振興会の科学研究助成事業（学術研究助成基金助成金）若手研究Bを受けた。この科

研費は3年間もあるので、これまでの研究をまとめて、何らかのかたちにはできないかと思った。集大成といえど大げさではあるが、できるところまでやってみようと思った。結局、「多岐にわたる」森の業績を一つにまとめることができず、さまざまな媒体で研究成果を発表することになったが、ようやく全体像を描くことができた。

まずは、2019年3月28日に奈文研で保管されている資料の整理が一段落して、「森蘊 旧蔵資料」の目録が研究所のホームページで公開された。手書きや青焼きの図面、スケッチ、レベルブック、原稿、書簡、メモ、写真、ネガ、冊子、雑誌など、数も多ければ内容もまた多種多様である。整理の便宜上、「図面」「原稿」「写真」「ほか」と4種別に分類し、合計で994項目を数える。その内容の詳細に関してはさらなる調査や研究、またデジタル化も必要であるが、今後の日本庭園研究史、人物史のための貴重な参考資料になると思われる。

次は記録映像の制作である。森のもとで働いた庭師のインタビューを撮影することにした。この映像の第一の目的はなんと言っても、森の業績に光を当てて、再考するきっかけをつくること。それから、4名の庭師（徳村盛市氏、山中功氏、古川三盛氏、牧岡一生氏）の肉声、表情や振る舞い、また現場の雰囲気など、紙媒体では表現できないライブ感を伝えることであった。記憶の記録と伝承の新たな試みとも言おうか。できあがったのは『昭和の作庭記——蘊の足跡を辿る』という57分の記録映像で、2019年7月20日の文化財庭園保存技術者協議会総会・研修会で初めて上映し、また10月6日に大乘院庭園文化館でも上映会を行なった。今後いろいろなところで上映会を企画するなど、教材として活用する予定である。無論、57分の映像で紹介できるのはインタビューのほんの一部にすぎないので物足りなさは否めないが、全文はこの報告書に収録した。

記録映像と同時に、ホームページも作成した。そこには森に関する情報と記録映像の一部も公開している。誰でもが無料でいつでも検索できるために、見やすく、わかりやすく森の業績を紹介している。今後の研究成果もそのホー

ムページに掲載しながら、充実させていく予定である。

2019年12月10日には東京大学の海野聡准教授が編集した『文化遺産と〈復元学〉』（吉川弘文館）が出版された。その中で、筆者は第二部第五章「歴史的な庭園の復元——森蘊の「復原的研究」を通して」を綴った。「復原的考察」「復原的研究」「復原整備」など、森の研究に通底する「復原」の概念を明らかにすると同時に、現在の日本庭園史研究の成り立ちを分析することになった。森の作庭活動と作風に関しても論文を書いたが、それは2020年出版予定の『奈良市における庭園の総合的調査』（奈文研）に掲載される。その中では、森が奈良でつくった主な庭を紹介しながら、その作庭の理念と理想を探っている。

さらに、2018年9月28日から10月1日まで米国ポートランドで開催された欧米日本庭園協会主催の国際シンポジウム「Japan's Gift to the World: Japanese Gardens as Global Phenomenon」に参加し、英語で研究成果を発表した。その内容に基づいた論文を、2019年発行の*The Journal of the North American Japanese Garden Association*, No.6に寄稿した。本報告書はこの科研費の最後の研究成果である。この中で、異なった観点から森蘊の業績を紹介している。また、可能なかぎり諸資料にあたって詳細な年表を作成してみた。しかし、これで森蘊に関する研究は完結したわけではない。現在は、京都産業大学のギャラリーと奈文研で図面、スケッチ、原稿などを中心に森の業績を紹介するような展示を企画しており、また次の論文を書くための資料も集めている最中。言い換えれば、これで行うべく森蘊研究の土台を築くことができたのだ。これからはさらに深く探っていきたいと思う。

京都 2019年12月23日

マレス・エマニユエル